

新しい風俗文化雑誌

風俗草紙

風俗草紙

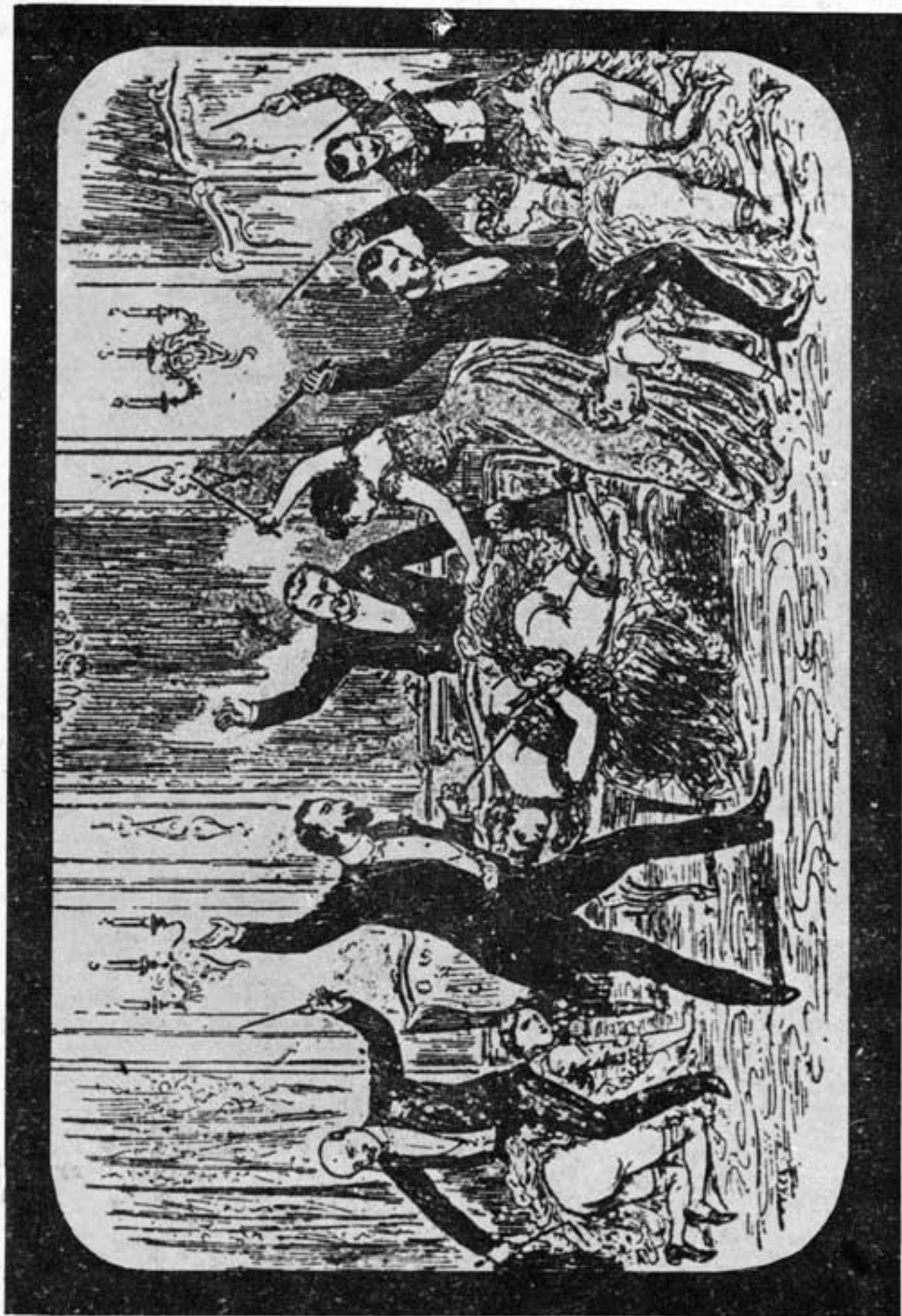
創刊号昭和二十九年一月一日発行
第二号昭和二十九年七月十一日発行
第三号昭和二十九年九月十九日発行

2

2

定価 百円





賢打ちパーティー

「サア、今夜はこいつらをウンと可愛がつてやつて下さい！」主人の命令一下、い、加減酔つぱらつてウズウズしていた好色な客達は、我がちに娘たちに飛びかかり、容謝なく美しいドレスの裾をまくり上げる。今宵一夜、賢打ちの遊びに供せられた白人奴隷の娘たちは雨と降りそぐ鞭の下で、悲鳴をあげ、呻きつづけるのだ。

◇後記◇

愈々年が改まりました。新春。本年も社の総意を結集して『風俗草紙』の躍進に努力致します。何卒倍旧の御愛顧をお願い申し上げます。

女性を虐なみたいというサチストの願望・愛する女に思いきり虐められたというマゾヒストの夢、女の下着の中に埋まつて眠りたいフエチストの欲望、その他もろもろのマニヤ諸兄の願望は、年の移り変りなどには関係

なく、無限に鬱勃と胸中に燃え続けること、思います。本誌が、そうした皆様方の心の親友となり、悦楽の泉であることは、既に御承知のこと、思いますが、本年は一層秘材の投入と一流執筆陣の御協力によつて、完璧を期す覚悟であります。何卒御刮目下さいませ。本号から官能派の巨将、龍胆寺雄氏の連載「蟲妖の虹」が愈々はじまりました。全文にみなぎるエロチズムとマニヤツクな香気は、必ずや読者の御満足を得ること、存じます。御愛読を乞います。

本誌が誇るレギュラー執筆陣も益々筆力旺盛で、喜多玲子氏は新しい悦虐の構図と描写法の開拓に野心満々。中川彩子氏もアツと読者が息を呑むような秘画を三月号に発表するべく、既に完成されました。日夏、岩堀、松井、鬼山、鞭岡、藤井、園村、その他の諸先生方も同様であります。繰返し一九五四年度の「風俗草紙」の発展を誓つて、読者各位の御支援を切にお願い申し上げます。

(編集部 氏家 記)

社 告

承らくお待たせ致しましたが『秘蔵版・風俗草紙』は愈々十二月下旬発売となりました。現代一流の執筆陣による変態妖美の圧巻であり、秘蔵版の名に恥じぬ、断然たる豪華誌であります。部数僅少に付お早めにお求め下さいますようお願い申し上げます。御投書・御連絡御送金、その他すべて左記にお願い致します。

東京都千代田区神田猿樂町一ノ三

株式
会社

日本 特集 出版社

電話・神田(25)五九八二

風俗草紙

第二巻 第二号
毎月一回一日発行
定価 百円

昭和二十八年一月二十五日 印刷
昭和二十九年二月一日 発行

編集人 氏 家 富 良
発行人 野 村 佳 秀

印刷所 内海印刷株式会社
東京都文京区戸崎町十二番地

発行所 株式 日本 特集 出版社

東京都千代田区神田猿樂町一ノ三
電話 神田(25)五九八二
振替 東京 二四二五一番

美
し
き
犬

中
川
彩
子
画



姫

君

受

縛

本誌特寫々眞



無惨に引んめくられた絢爛の衣裳、眼にしみるような柔肌が投げ出されて……出て来るは淫蕩の悪僧か、嗜虐の瘦浪人か……



美しい姫君がいたぶられる嗜虐の極致
 ……柔らかな素肌にギリギリと喰い込
 む縄……じつと見上げる哀願と怨みの
 こもつたまなざしが、男の胸に新たな
 炎をカツと燃え上らせる……



「アゝ、許してたも……」紅唇を洩れる悲痛な叫び……ブツクリと
顔を出す乙女の胸のふくらみ。露はな脚にもヒシヒシと無情な縄が
絞んで……そのなまめかしさ、その哀れさ……緊縛の最高の美がこ
ゝに現出する……

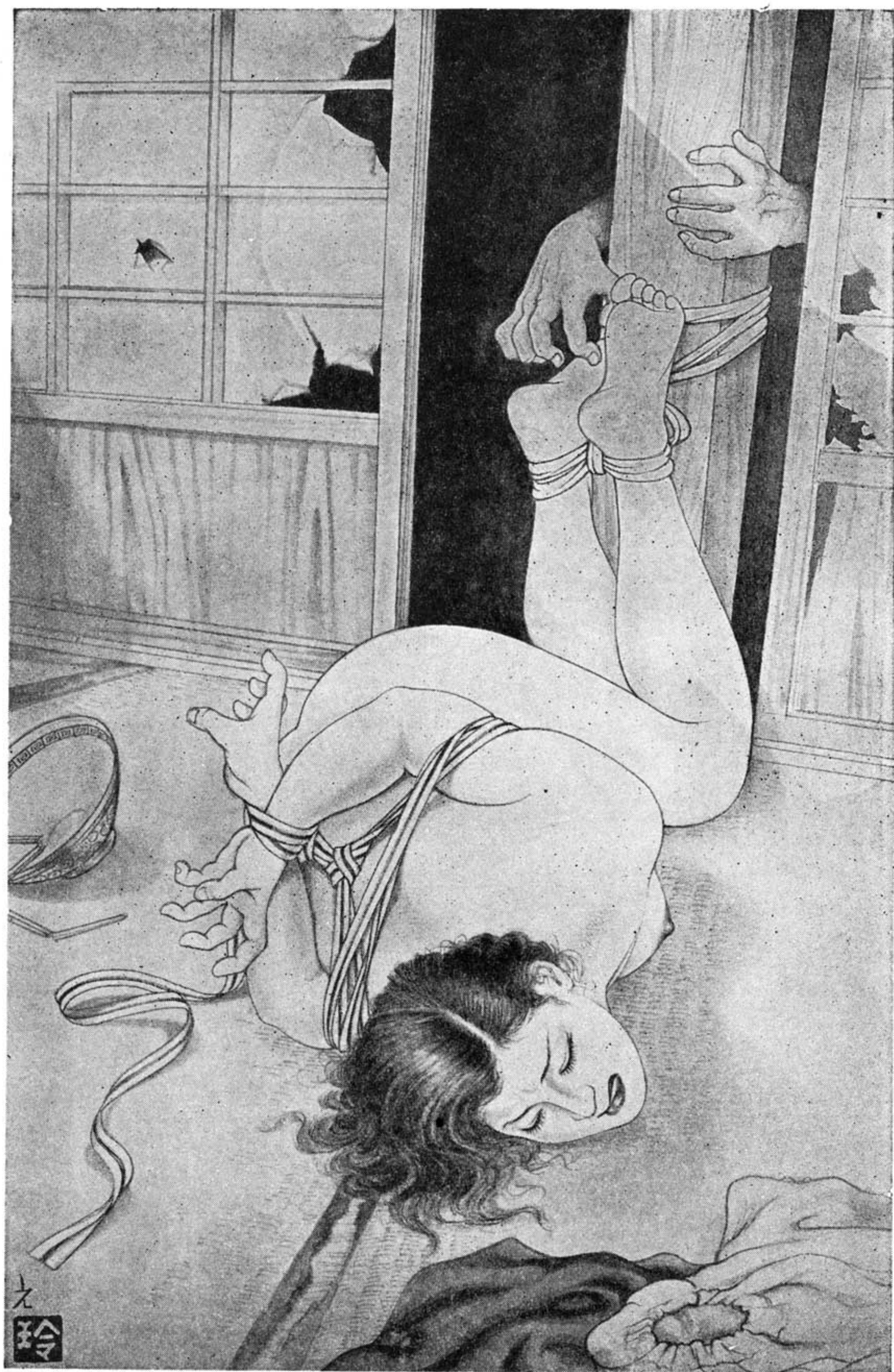


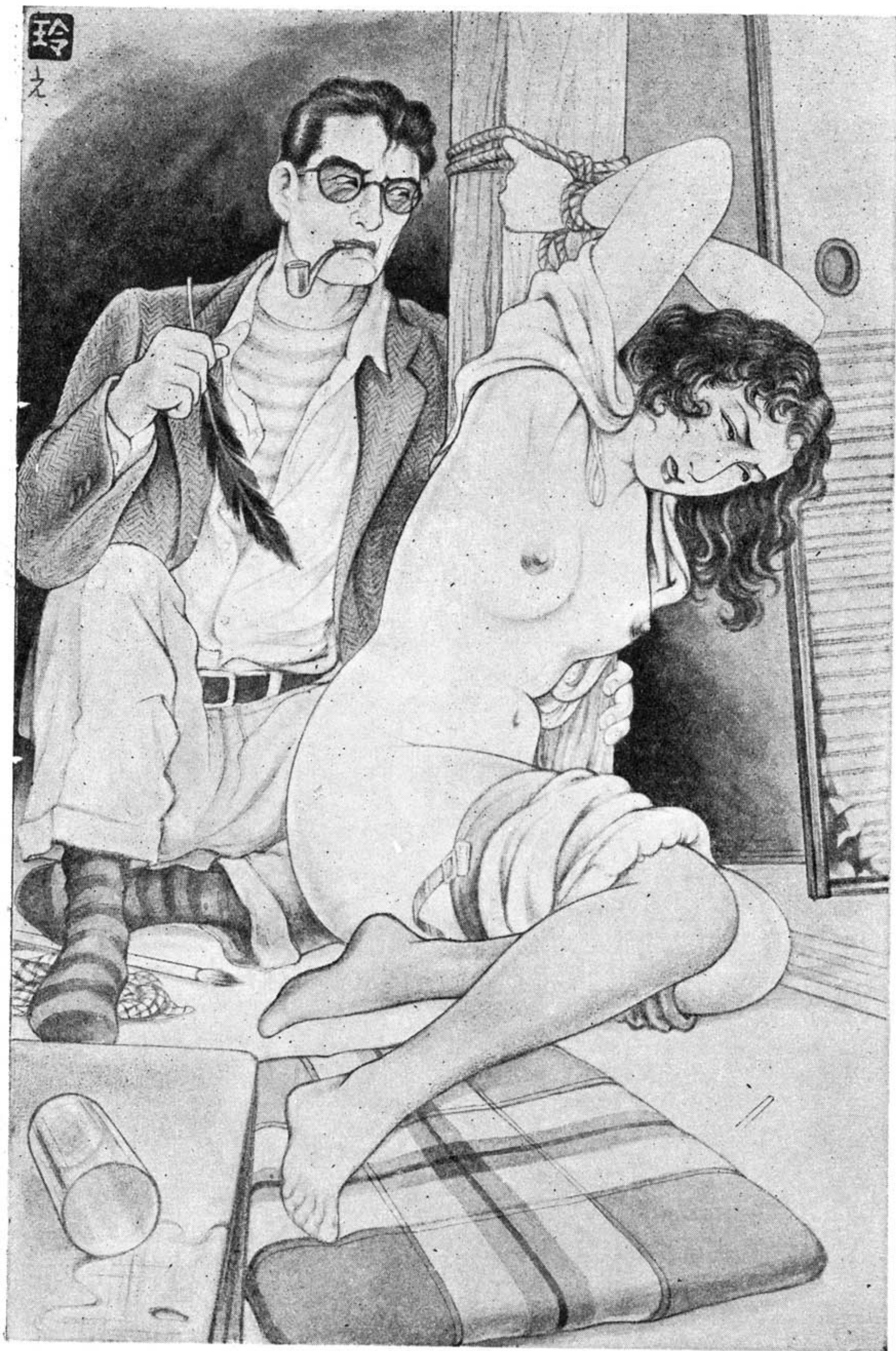
嗜虐の魔手は飽くところがない。引据えて……吊つて……最後に
……アガこうと、悶えようと、この大太鼓はビクともしないのだ。

悦 操り責め
上巻

え・は・夏・玲子







美貌の餌食

「お嬢さん騒い
でも無駄だよ」ワナワナ
とふるえる美貌の小雀。必死にあ
らがう処女の体臭がやわやわと室内に漂う。



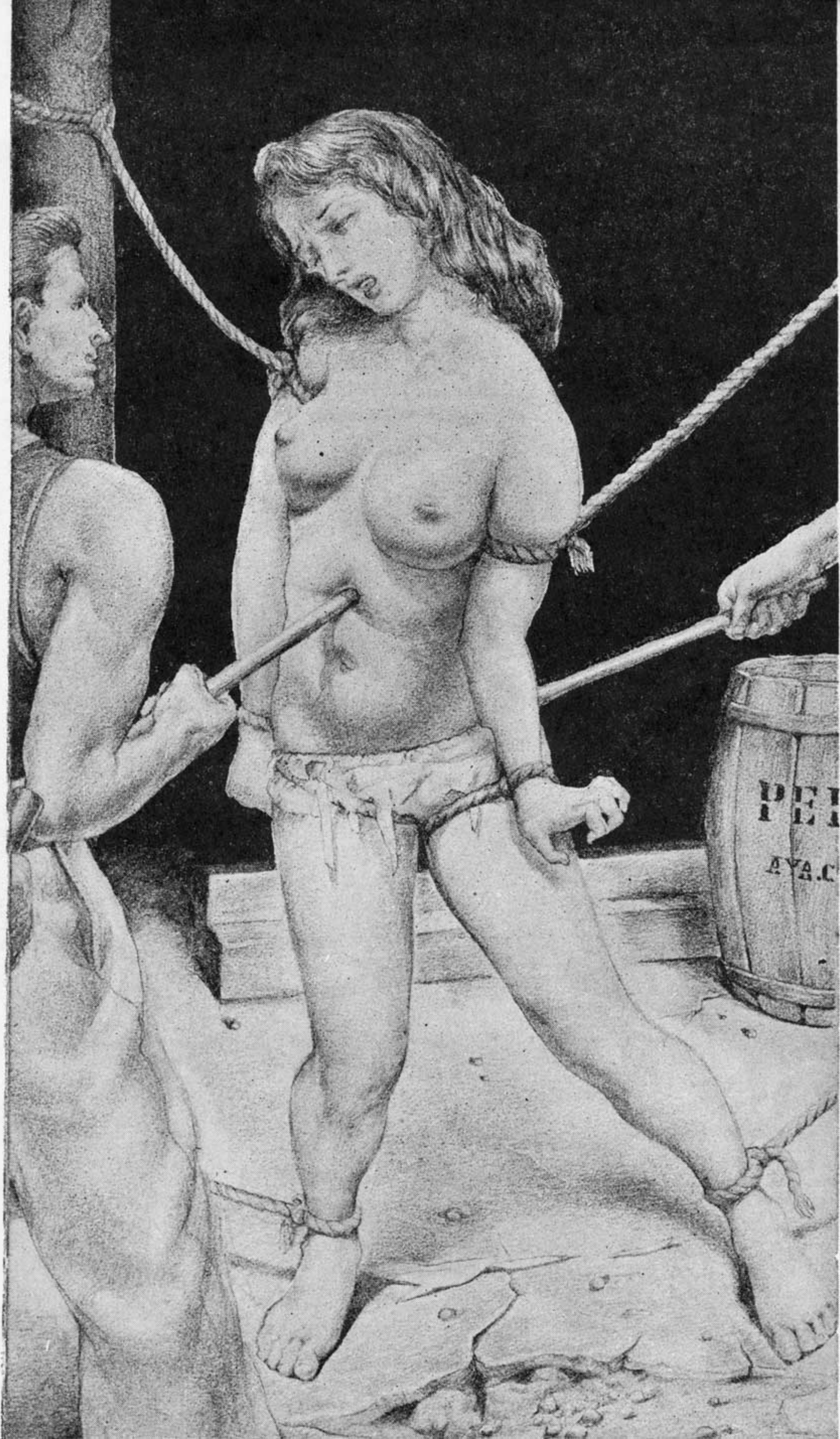
小田明男画

やわ肌に落ちる蠟燭の滴。塩水を飲まされて
宙吊りのブランコに揺られて、今は気
もたえだえな哀れな処女……

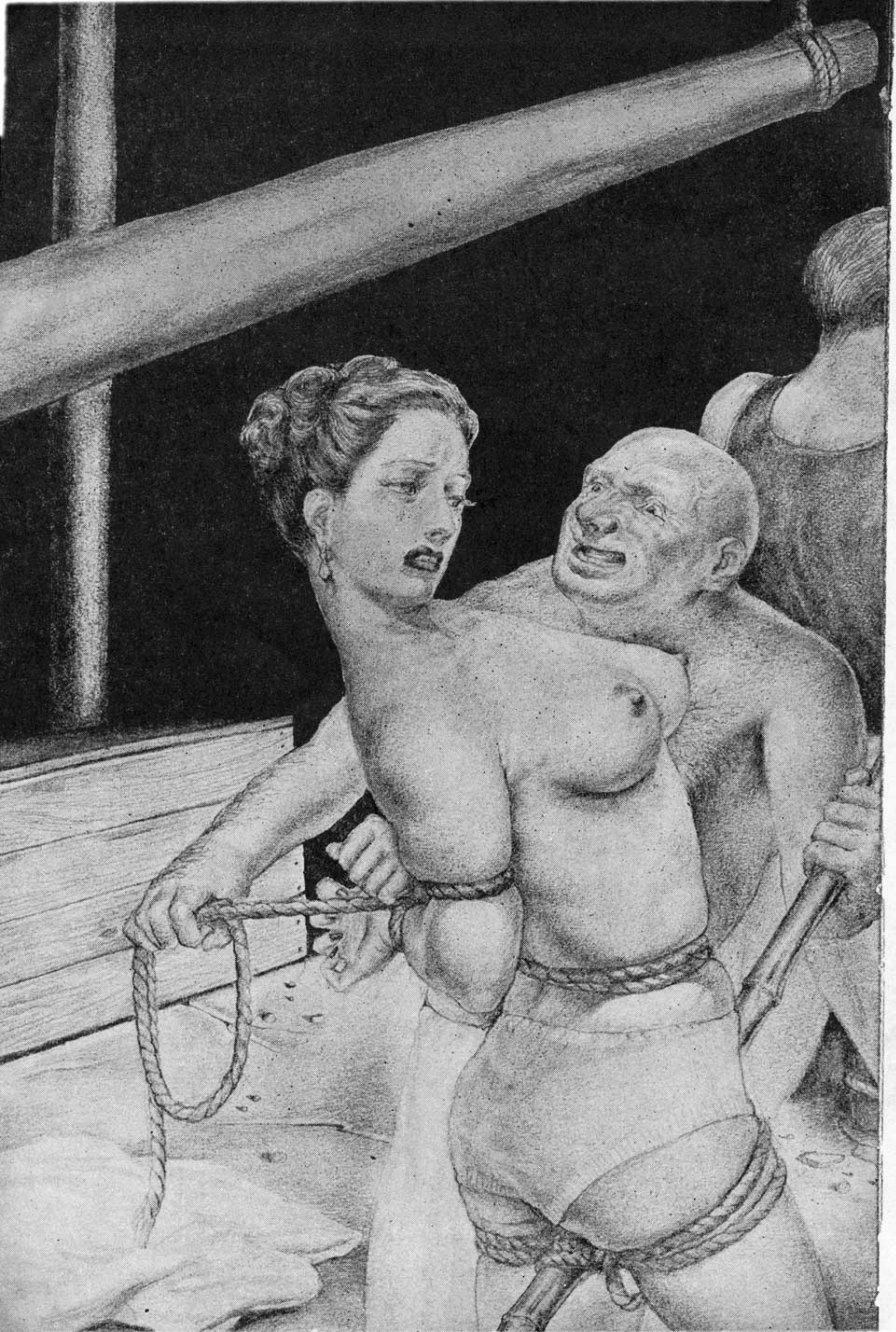


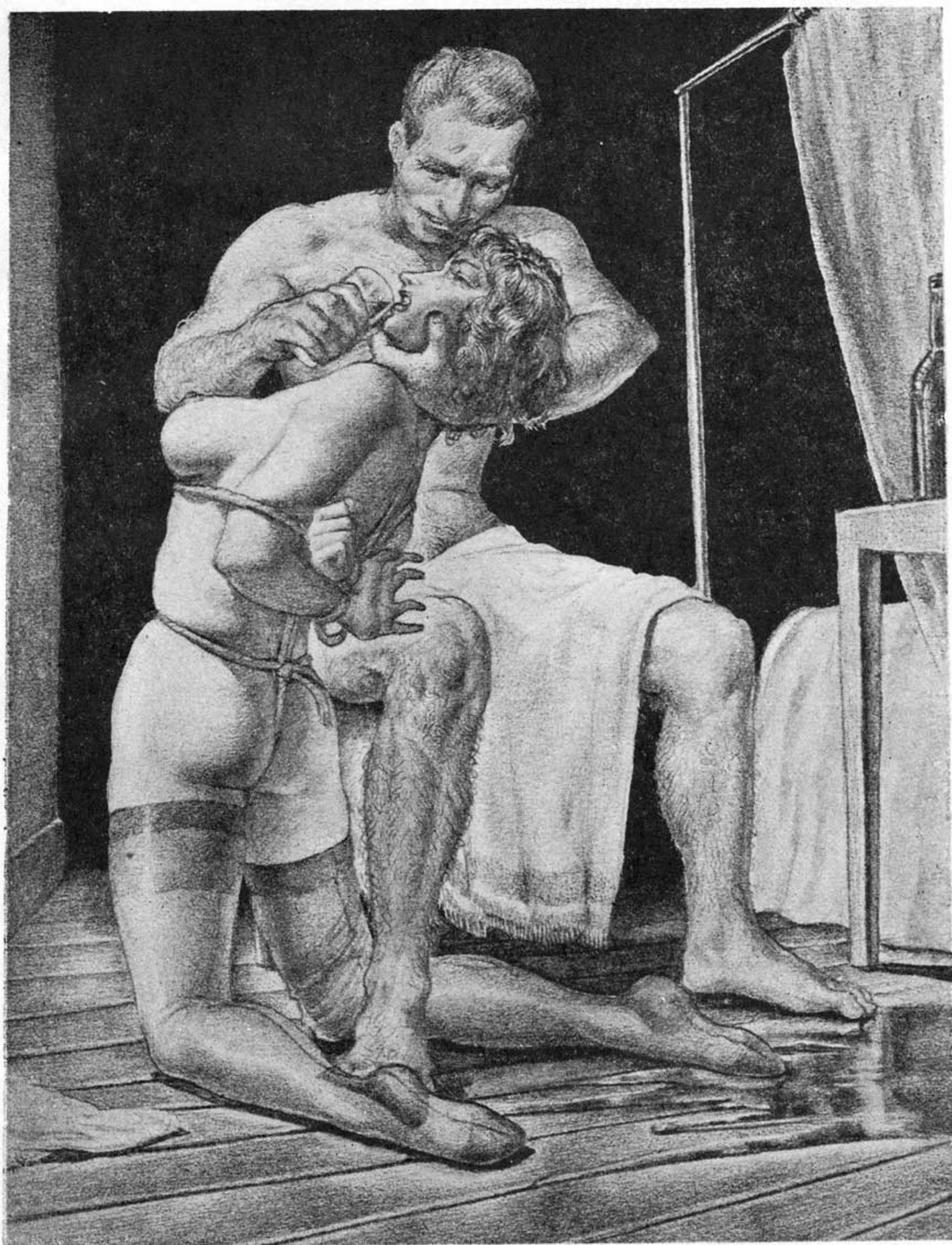
地下室の鬼ども

中川彩子
妖美画集



「ウフフ、どうだ、もう少し強く締めようかね、別嬪さん？」赤鬼の
ような毛むくじやらの小男が憎々しげにいう。「く、苦しい……」
鉄棒が処女の柔かい腹にぐいぐいと遠慮なく食いこんでゆくのだ……





悪 臭 の 酒 「フフハハ、呑め、サア、美味い酒を呑むんだ！」無理にこじあけられた唇に注ぎ込まれた液体！ 「アツ・ウツ・ウツ・や・やめて…」彼女が必死にあがくのも無理はない、それは酒ではなかったのだ。異様な臭気がムツと匂って、それは明らかに……彼女の頬を屈辱とマゾ的快感の涙がホロホロと伝わる……

口	絵
(五色刷) 美しき犬……………中川彩子画	
悦虐 操り責め……………喜多玲子画	
姫君受縛……………本誌特写々真	
美貌の餌食……………小田明男画	
野獣の責め……………中川彩子妖美画集	

新連載 官能小説 **蠱妖の虹**……………**龍膽寺雄**
官能妖艶派の巨匠・龍胆寺氏が特に本誌に書き下すアブノーマル性愛小説の第一回ノ

妄執の愉悅 (手記集)

妊婦漁り……………当麻慧郎 68
乳房マニヤ……………霜川穰一 82
靴を漬す!……………敷部宏次 122
汚れたパンティ……………北辻一郎 168

マソヒズム「アマゾン」の牝豹……………鬼山絢策 72
ストオリィ 魔……………高月大三 82

第三部 腎部聖夜……………鞭岡麻冬 34

同性愛変痴崇物症……………高橋鉄 94

サチズム 続・処女をいたぶる……………鬼頭浩一郎 156
情痴犯罪にみるグロテスク三谷祥介 162

責め体験記

腹なぶり……………竹内圭一郎 114
風呂責め綺談……………波銅鋭郎 154
歪んだ思春期(陰微な快楽)……………赤田弘 187

マニヤの責め絵放浪記……………長岡変一郎 58

玲子十二ヶ月画集 梅……………喜多玲子 110

レスポス通信 (女性だけの秘密な愛のサロン)……………園村恵子 148

そとみあ通信 (そとみあの秘密な交歓室)……………藤井晃 137

読者交歓室 (読者が語り合う新設サロン)…………… 134

サチズム 妖伝……………島本春雄 114

二個の秘鏡をめぐる争闘する奇怪な群像! 凄絶なサチズムと愛慾が渦巻く時代伝奇!

連載読切 汚された白鳥……………日夏由紀夫 150

小説 奇妙な情熱……………三宅一朗 126

アブ・官能小説 淫雨熄まず(第二回)……………松井頼子 44

表紙 私吉 樹 目次絵 浜田 稔





風俗草紙異常風俗大鳥瞰書愈々出来!

堂々B5判

360頁の大冊!

表紙十二色刷

超豪華八色刷折込口絵

アート口絵百頁の異常風

俗の大鳥瞰秘蔵決定版!

秘蔵版

風俗草紙

豪華責め絵十二人集

灼熱の絶賛・怒涛の拍手を浴びる
「風俗草紙」が平凡な刺戟に飽きた現代の猟奇家に贈る豪華絢爛の秘蔵版! ムツと鼻をつくヨニの臭気にも似た変態性慾の異臭! 魂を痺らせる地獄絵と秘文字の交響楽! 数百枚の秘画と現代最高執筆陣に編まれた稀有の圧巻!

中川彩子 野崎耕作
神保朋世 由岐葵
清水三重 北原環
伊藤晴雨 浜田稔
三谷一馬 古庄英生
喜多玲子 八木静男
悦唐大写真集
東西マゾヒズム美術館集
秘められた名画集
男性緊縛ヌード集

本誌愛読者を完全に魅了する記事満載!!

内容概要

堂々発売中

定価500円送料50円



変態辞典

伊藤野栄 晴雨三
鹿火屋一彦
座談会
変態風俗
縦横談
式場隆三郎
矢野目源一
原比露志
三味線
豊吉

変態奇書物語 斎藤昌三
異常愛記 高橋鉄三
レスボス耽美稿 龍膽寺雄
変質法医学 金子準二
国周描く女の責場 伊藤晴雨
嗜虐女性列伝 藤沢衛彦
悦虐の女百態 喜多玲子
変態嗜虐各種技巧 坂ノ上言夫
性技巧としてのサチ 武野藤介
鞭打ちの歴史 平野威馬雄
芸談「私刑」拷問「考」 正岡容

特異変態性慾の病態と実例

色情犯罪に現れたサチ 三谷祥介
嗜虐マニアの手記・十人の女を縛った経験・女を咬る縛り・鞭打体験
男性マソの心理・性慾分析
理想の女性・慾情の技術

現代春本に登場する変態
変態川柳漫稿
吉田機司

マソ女性の八つのタイプ 日夏由紀夫
東西マソ文学ダイジェスト 三宅一朗
慾情するフェチストたち 宮内二三夫

ミソの閨房に於ける生態 鹿火屋一彦

外国人の男色 橋本真人

ソドミア風土記 関西東 藤井晃
レスボス・テクニク 園村恵子

同性愛艶本めぐり 原比露志

レスボスの愛にのたうつ女人群像

岩堀光 大槻久良二
高月大三郎 林譲二
比企狂一郎 宗方綾子
岡和馬 吹岡清一郎
志摩雪夫 深田徹
菊山進 原純子
黒須芳男 香川扇次郎
三森四郎 有馬千鶴子
赤沢澄子 木島浩平
黒丸慶二 那加道郎
須川夏枝 油井啓二
真下光二 国方万里子

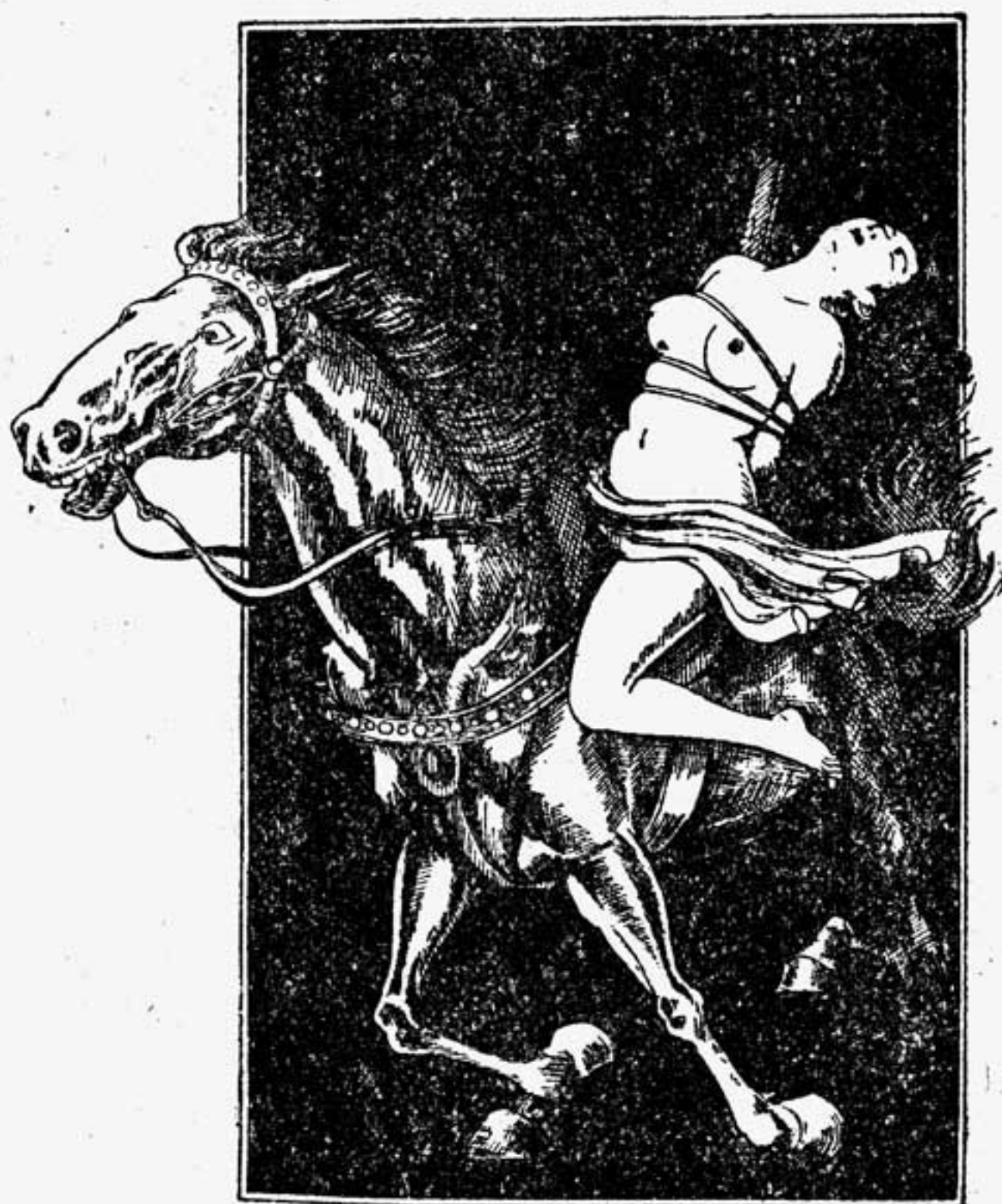
部数本誌の未入手漏れの危険
あり速刻書店又は本社へ

東京都千代田区神田猿樂町一ノ三
株式 日本特集出版社

書店へ!! 速刻本誌添附の申込書で 入手漏れなきよう速刻本誌添附の申込書で 絶対不可能 再増刷

風 俗 草 紙

現代人の新しい趣味雑誌



二 月 号



新連載
アスノマル
官能小説

中
虫
血
妖

の

虹

龍
膽
寺
雄

矢風光二画



屍體陳列の畫廊

多治見雅彦は友人の千鳥左右吉が、人形師五太衛門から、彼の製作品の人形を陳列する画廊にとりつけるのだという絵硝子の意匠を頼まれたという話をきいた時、その老人形師と一度会つて、話をかわしてみたいという強い興味を動かした。

その絵硝子というのは、今度新築を思い立つたその画廊の天井に、採光用に張るのだというかなり大がかりのものだが、その図柄の注文がヘンなもので、屍体解剖の、それも女の性器を中心としたなるべく写実的な内臓図だというのかわつてゐるが、その画廊に陳列する彼の製作品が、残らず女の屍体をモデルにした石の彫刻だとい

名作『不死鳥』『淫蕩の市』で、騒然たる話題を投げた、官能派の驍將

龍膽寺氏が、特に本誌の爲に情熱をこめて書き下す野心的長篇小説！

獨特の麗筆に醸されるエロチズムとアブノーマルな妖氣！ 乞御愛讀！

うので、変態好奇家の多治見雅彦は、いたく心そゝられるものを覚えたのだ。

人形師五太衛門といつても、たゞそれだけではちよつと人の心に思い浮かばない存在かもしれない。

本名は蛭ヶ島五太衛門だが、実は三宅雪峰の雅号で、初期の文展時代に、朝倉文雄や山崎朝雲らと互して、当時の日本の彫塑界に、一方の覇をとなえていた存在だつたといわれ、記憶を呼びさますひともあるう。

今でも時折、知名な美術品所蔵家のコレクションの中などに、当時の雪峰の作品を見受けることがあるが、今にしてみると、どちらかというと彼の作品は、余韻のない極端な写実主義からイヤ味を感じることが多く、芸術的にそれほど価値高いものとは思えない。

要するに彼は、彫刻家としては邪道を踏んで、世に埋れたのだろが、人形師五太衛門となつてからは、かえつて徹底したその写実主義が技術の中に巧みに生かされて、もつぱら名匠の名をほしいままにするに到つた。

もつとも、これから述べるような理由から、この名匠を識り、その名を口にするものは、世間にいたつて少なく、ほんの一部の好事家の間に、彼はもてはやされているにすぎないのだが。

彼はもう久しいこと、リョウマチスで足腰が不自由なので、上大崎の高台にある彼の工房に籠つたまゝ、この頃ではほとんど街に姿を見せないが、彫刻家として名声を馳せていた昔、自分で馬車を駆つて、コーヒーを飲みに銀座へ毎日通つたなどという挿話は、新聞の派手な話題として伝えられたりしたものだ。

五太衛門は元來が彫刻家だから、人形師といつても、膠や鋸屑や胡粉でコネあげるあの日本風の泥人形作りではない。わざわざ南支那の奥地や、セイロンや、はるばるイタリーのカララなどから取寄せた特殊な蠟石や大理石を使い、こまかく鑿で毛彫して精巧に着色し、その上、驚くべきことには、絹のような石綿^{アスベスト}を加工した毛髪で髪から睫毛、あらゆる体毛、生毛のたぐいまで一本々々ほんもののように皮膚に植えて、どう見ても生きているそのまゝの人間をこしらえる。

もつとも、その製作品のすべてが、こんな入念なものとはばかり限らないし、第一、五体そろつた完全なもののはめつたにない。たいていは顔半分の浮彫^{レリーフ}だとか、肩と乳房のついた片手とか、片眼つきの胴とか、完全な片脚だけ、といったヘンなからだの部分品で、ごく稀に全身のがある程度だ。たいてい若い女の裸体だが、いずれにせよ、そのむつちりした肉付のあんばい、皮下脂肪を透かして鱗色に光つているスベスベした肌理の感触、部分によつてはあの濡れた粘膜の艶、そういつたものなどは、まるであたかも体温を放射している感じで、じかに肌に手を触れて、しんまでしみ透るような、あの石の冷氣を実感するまでは、これが石彫の人形だとは誰にも信じられないほどだった。

それにして、こういう製作品を、彼は誰に頼まれてつくり、最

後にどこへ引取られて行つて、誰のもとに所蔵されてしまうのか、一切そんなことがわからないというのも奇怪だが、噂によると、彼は紀州の方にはかりしれないほどの山林を持つているものもちだというから、あるいはこんな仕事も、彼のたゞの道楽にすぎないので、それらの製作品は存外どこへも散らばらずに、彼自身の手元に所蔵されているのではあるまいか、というような見方もある。

そんなことが、今度の画廊建築の話と、すぐに結びつけて考えられるワケだが、それにしても、その画廊に陳列されるのが、千鳥左右吉の話によると、残らず女の屍体をモデルにした人形であり、画廊の天井の明り窓にとりつける絵硝子の意匠^{デザイン}まで、屍体解剖の、しかも女の性器を中心とした内臓図が注文だというのは、一体どういう意図なのだろう。

恐らくこのことは、彼が持つている人間の秘密と、何か聯関あることにちがいないのだが、彼の芸術が、睫毛や生毛のたぐいまで、一本々々ほんもののように植えつけるといわれるほどの、いわゆる俗悪きわまる徹底した写真主義^{リアリズム}であるだけに、この女の屍体の人形ということは、妙に多治見雅彦の心を揺さぶるのだった。

「そうですネ、では、あなたを僕の親友の絵描き仲間ということにしましょう、裸体画専門の絵描きということにネ。」

多治見雅彦に強要されて、シブシブ彼を五太衛門のところへ連れてゆくことを承諾した千鳥左右吉がいつた。

「そして、絵硝子の意匠^{デザイン}に協力してくれているのだという触れ込みで、あなたを五太衛門老人に紹介しましょう。そのつもりで調子合わせて下さい。」

それから彼は、奇怪な老人形師五太衛門について、こんな打ち開

け話をしてきかせた。

「何しろあの年まで独身を通して、結婚どころか、あの奇怪な風車と性癖では、恐らく戀愛を一度したこともないにちがいないんです。もつとも、老人にいわせるところなんですヨ、どんなに美しくつても、生きた人間の娘は、色んな穢らしい生理的な分泌物を出す。汗だとかお小（せう）便だとか何だとか。……ところが人形となると、たゞ花のようにさつぱりと潔くつて美しいだけだ！ 僕はたつた一ぺん、引受けた仕事の都合で、老人のつくりかけの人形を、仕事場で見たことがあるんですけれどネ。驚いたことには、等身大の若い女の裸像を、支那蠟石の大きな塊りの中から彫り出しているんだけれど、まだ荒ら削りのまゝでどこも未完成なのに、たゞ一箇所完成しているのは、下腹部にあたるところで、もう着色までして磨きをかけ、アソコの粘膜の髪の一つ一つが肉色にヌラヌラ濡れて、まるでほんもの、そつくりなんです。……どうも、あの人形製作の動機というのは、よほど変態的ですヨ。」

夜の鬼氣

こわれたモンクリートのかけらを踏んだり、消え残りの凍てた雪の中へ轍を乗り入れたりしながら、自動車は、ゆるやかな傾斜をS字型にのぼつて行つた。

「こゝです。」

そういつて、千鳥左右吉が車をとめたのは、陰気な、古ボケた旧式木造洋館の前だった。

それはいゝが、頭の上に露（ベ）台（こゝ）をいたゞいた玄関の正面は、分厚い

樫の扉で堅くいかめしく閉ざされて、内がわから板でも叩きつけたのか、風雨にさらされて罅割れた木目のこつちがわまで、釘の先が岩壘に抜け出て、それが牙のように曲つてキラキラ光つていた。

その上、いかにもこゝからは出入りマカリならぬという風に、白ペンキを塗つた太い刷毛の痕が、斜に荒ら荒らしく十字を描いているのが、くつきりと薄闇に浮いて見えた。

玄関前に輪をとめた自動車のヘッドライトが、最初に闇に描き出したのが、この正面の扉の記号だったので、ちよつとばかり象徴的な見方をすれば、何だか今後の多治見雅彦の最初の五太衛門訪問は、頭（かしら）初（はじ）から鼻の先でピシヤリと扉を閉ざされてしまった、といった感じだった。

「どこからはいるんだ？」

踏床（ふみど）からおりて、オーヴァの襟を立てながら、後ろを振り向くと、ヘッドライトを消して、彼に続いて運転台から降りた千鳥左右吉が急に灯りが消えたあとの、網膜が麻痺したような闇の中を、存外案内識つている足どりで、先に立つて歩きながら、

「その階段をのぼるんです。」

そう答えて、不意に手の中を明るくしてライターを擦り、風に揺らぐ焰へ、くわえたタバコを屈めて火をつけると、

「足元用心して下さい、けんのんな階段ですから……」

なるほど、頭の上の露（ベ）台（こゝ）から横に、怪しくこわれた木の階段が、地面へ匍（は）い（は）り（て）いた。

「へー、風変りな出入り口だな。」

「いつかの暴風雨で、正面の玄関の扉が飛んじまつたんです。」

そういうと、千鳥左右吉は冷いやりとネバリつくようなしなやか

な指で、多治見雅彦の手をとつて、
「こつちがわがいです、僕のおとについてらつしやい。」

階段へ足をかけてのぼりかけた千鳥左右吉の、女のような小柄な形ちの美しい横顔を黒い影絵にして、丘のあなたは遙かに明るかつた。大崎から五反田辺へかけての街々の夜の灯りの反映が、雪の夜に立ちこめた凍てた蒸発気を、大きく血紅色に彩つて、その底に、牙え牙えとしたネオンの五彩が、明滅する寶石の地図をちりばめていた。

街！

けれど、この丘はまた何と暗く淋しいのだろう。

黒い空虚な風が、丘の傾斜のそここゝに白く消え残っている凍てた雪のおもてを吹き、建物をとりまく古い椎か何かの梢を、塊り塊りに分けて黒くザワめかせて、それがまるで、城の背後をまもる崩れかけた塙壁か何かのようだった。

これで、空のどこかに赤く薄れた満月でもかゝつて、最でも陰気に啼いていてみたまえ、まさにこゝは、お伽噺の魔法使いの住いになるではないか。
「危ないですヨ。」



グラグラする勾欄、はしの方が腐つて缺けている階段。

やつとたどりついた露台がまた、二人の重量にやつと堪えて、メキメキ揺すぶれる危なつかしさだ。

が、それより何より多治見雅彦を驚かしたのは、空からの隴ろな光の反映の中に描き出された露台の上の、奇怪な風景だった。

この狭い木造の露台の上には、床いっぱい隙間なく詰つて墓場のように、何かの像が据えてある。

みんな木彫だが、等身大で、瘦せコケて、ありつたけ大きく醜怪に口を開けたり、見えないものをさゝえるように両の拳をウンと空へあげたり、そうかと思うと、地べたに屈んで瘦せコケた膝頭の間へ顔を挟んでいるのが、驢馬のように耳が長かつたり、ろくな面構えのヤツはない。何十というこれらの本彫が、四五坪の露台に身動きも出来ずひしめきあつて並んで、木目に鱗がはいつたり、鼻が缺けたり、何のことはない、地獄極楽の生人形がひとからげに、古道具屋の店の隅に、埃といつしよに積まれているようなもので、それが高い露台の上に、空から吹きおろす夜風に吹かれてかすかに揺らぎ、擦れた笛のような低い怪しい音を、それぞれ立てているのだつた。

「何だいこいつらは。」
「これですか。」

千鳥左右吉は木彫の怪物の頭を撫でながら、
「鳥獸怪像ではないんですか、れいの、パリのノートルダムにあるのを模造した……」

ひとりごとのように答えて、先に立つて、像を邪怪に片寄せ片寄せ間を抜けて、堅く閉ざされた正面の扉の前に立つと、彼は上から錘をつけてたれている鰐口の紐のようなもの



を手にして、力いっぱいそれを引つ張つた。

心なしかどこか建物の奥の遠いところで、カランカランと振鈴の音が聞えたような気がしたが、それつきり何の音沙汰もなしで、吹きつる夜風に椎の森がザワめき、ぐるりの不気味な木像が、低い乾いた口笛のような音を立てるだけだつた。

「誰もいないんじゃないか。」

「いえ、いますヨ」千鳥左右吉は口にくわえたタバコを先を赤くするのをしばらくやめて、ジツと耳をすましたが「あゝ、来ましたヨ。」

まさに、乾いた小さな足音が、コツ、コツ、コツと扉の内がわに近ずいて、やがて、痰のからんだような陰気なせきばらいをすると、掛金がガチャリと重たく中で鳴つて、握柄が廻れるようにギーッと内がわへ凹んだ。

仄かに灯りがさし、霜つぽい髪と鬚髯に覆われた古びた木彫のような年寄の顔が、その間から覗いた。

眼窩の濃い蔭に皺んだ眼を光らせ、傲岸な鷲鼻に

脂照りを見せて、さびのある太い声できいた。

「どなた？」

「千鳥です。」

「チドリ？……あゝ、千鳥君か。」

つぶやきかけた老人の眼が、多治見雅彦の方へウロン臭げに移つた時、すかさず千鳥左右吉は彼を紹介していった。

「こちらはせんだつてお話した友人の多治見君です。夜分に伺つて失礼ですけど、……れいの絵硝子の意匠の下絵が出来たもんですから、お眼にかけようと思ひまして。」

そして、つけ加えた。

「多治見君にも色々手伝つて貰つたもんですから。……多治見君は絵を描かれるんです。」

「はじめてお眼にかゝります、多治見です。」

そういつて多治見雅彦が会釈するのを、老人は意地わるげな眼でジロジロ見ると、傲岸な鼻でたまつてうなずき、そのまゝ、背を屈めて、影のようにクルリと踵を廻して、一と言、

「来たまえ。」

老人の筋がからんで骨立つた岩壘な手には、青銅の唐草に包まれた古風な蘭燈が、鎖で吊されていた。それが風に揺さぶれると、明りと影の斑らがみんなの顔やからだにクルクルと廻るのだつたが、それよりも多治見雅彦が驚いたのは、その蘭燈の灯りで照らされた例の怪物の像だつた。

残らず全身緑青色に、真つ蒼に塗られ、見る限り総毛立つような緑一式の中に、カッとひらいた口の中だけが、血を塗つたように無気味に真つ赤ではないか！

蘭燈をさげた老人は、蜘蛛のように腰を屈めたまゝ、さつさと先に立つて、内がわへ階段をおりて行つた。

そのあとに続きながら、多治見雅彦は千鳥左右吉の耳に口を寄せてきた。

「アレが、蛭ヶ島五太衛門……三宅雪峰かね。」

「そうです。」

友人も小声で、

「気むずかしやでネ、初対面の人間には、とりわけ気むずかしいんだけど、……でも、今夜は機嫌がわるくない方ですよ。」

『男 色 通 鑑』

変態好奇家の多治見雅彦の身边には、彼の体臭を好んでむらがり寄るかのように、種々雑多な風変りな人間が集つていたが、千鳥左右吉もその中の一人だつた。

もつとも、千鳥左右吉と多治見雅彦の関係は、これは他の場合とちがつて、わりに旧くもあれば、複雑な意味ももつていた。

多治見雅彦の亡つた父親は、京浜間の某地に壯大な伽藍と古い由緒を誇る佛教某宗門の長老だつたが、晩年にそれをやめてから、同派に属する某宗教大学の学長をしている間に妾を持つて、その妾に生ませたのが雅彦だつた。

雅彦は間もなく父親のもとへ引き取られて、異母きようだいといつしよに育つたが、それらの異母きようだいらは、結局いずれも寺院関係の方に身を落ちつけ、雅彦だけが異端の道をたどつて、歴史から社会、哲学、心理という風に、学問遍歴をしているうちに、い

つしか巷の変態好奇家に身を持ち崩してしまつた。

父の妾だつた母親が、築地の方の大きなある料亭の娘だつた関係などもあつて、その死後少なからぬ遺産をゆずられて継ぎ、金銭に何不自由なかつたことなども、手堅い人生コースから横道へそれて、身を持ち崩す原因となつたのだらうが、雅彦自身にいわせると、それもこれも万事親ゆずりの『血』のせいで、責任はすべて遺伝が背負うべきだというのが、亡つた父親の行状の中に、何かそんな根拠があるのを感じている氣配だつた。

彼をとりまく有象無象——色んな巷の耽奇家、術学者、偏執狂、偏倚蒐集家、変質者、こういつたたぐいのものは、畢竟、彼の浪費生活を中心として、それに惹かれて、自然とぐるりに寄り集つたのだらうが、どちらかというところ、千鳥左右吉などは、その中では例外の部に属していた。

千鳥左右吉はある時、多治見雅彦がある好色獵奇雑誌に、『男色通鑑』といういさゝか術学的な通俗論説を書いて発表した時、それを読んで大いに共鳴し、自分自身が生きた一個の資料だから、一つ取上げて研究して貰いたいといつて、いきなり訪ねて来たのがきつかけで識り合い、それ以来、同じ趣味を介して打ち解けて、その世界に耽溺する仲となつた間柄で、その頃多治見雅彦はまだ独身だつたし、千鳥左右吉は美術学生だつた。

この二人の関係は、どちらも結婚生活をしている現在にまで続いているのだが、双方の妻君同志がまたこの関係と結びついてこぐらかり合つていたので、その怪奇にして複雑をきわめた交錯は、それだけですでに数章を割くに足るので、その話はさしあたりあと廻しにしよう。

千鳥左右吉は兄が本所の方で硝子工場を経営していたので、一つはその意志もあり、硝子工芸美術の方へ進んで、今ではいづいその方面に声価を持つていた。激しい個性をもつたその作品は、固定的な愛好者の間にもてはやされ、高い評価を受けていた。

彼が五太衛門とちかずきになつたのも、その関係からで、彼の技倆に惚れ込んだ五太衛門は、人形にちりばめる特殊な眼球の製作を彼に依頼し、昨今では彼の製作品でないといふ使用しないというくらい、彼を信用していた。

たしかに彼は、硝子を弄くることが好きだつたが、そのほかにもう一つ、それに没頭して蕩醉出来る別な世界があつて、その世界で、多治見雅彦と強くつながるものを持つていた。

彼は、一と塊りの硝子から、彼の美しい幻想のまゝに、精巧無比な工芸美術品を生み出すように、指先の柔軟で精妙な指紋の肌理と鋭敏繊細な触感で、人間のからだ——原始的で素朴な『性』の感覚のなかから、思いもかけない、驚くような絢爛かな色彩の刺戟とあらゆる強弱の変化が微妙に交錯する激しい蕩醉を織り出して、相手と自分を夢幻の世界に引き込む奇怪な魔術を心得ていた。

要するに千鳥左右吉は、こちらの世界でも一個の天才だつた。

それは硝子細工とちがつて、そのことを識つてゐるのは、彼自身と多治見雅彦のからだだけだつた。そしてそれが、彼ら二人を結びつける強い愛情となつていた。

人形の秘密

五太衛門老人のあとについて、階段をおりきつたところで、右が

わの重たい扉を押すと、不意に、巨大な闇の塊りが圧倒的な濃さでそこを領している大広間の一角に、彼らは立つていた。

何かしら濕っぽい敷物がひろがつている暗い床に、石のかげらのようなものが足元わるく夥しく転がり、鑿や鉄槌がのつている台や丸い木の腰掛や、浮織りの緞子がところどころほころびている豪華な肘付椅子などが、乱雑に配置されている真ん中に、大きな革張の傘をかぶった燭台型のスタンドが立つて、けれど灯りは消えていた。

五太衛門老人の手から鎖でさがった青銅の蘭燈の、唐草模様の隙を漏れる光の斑らが、水底のようにクルクル足元に廻っているその一箇所へ眼をやつて、思わず多治見雅彦はハッとして息をのんだ。

これはまた何と！

そのこの床へ、無雑作にのべた巨大な金毛熊の、金色にフサフサ輝く毛皮の上に、——この、息も凍るような火の気のない二月の夜の寒気に、十六七と見える女の子が一人、肉付のたわやかな華奢な裸かに一絲もまわず、薄ッす

らと紅がかつた乳色の

肌をムキ出して

横たわつて

いるで

はな



いか。

しかも、正確に仰向けた胴体をいくら虹のように反らし加減に、両手を肘から曲げて仰向けた頭の下にかい、むつちりと堅く肥つて一種の量感をかんじさせる両の腿を、グツと左右にひらいて、かたかたの脚は軽く膝を立て、かたかたの脚は長く投げ出して、この、あられもない姿態にいさゝかの羞恥も見せない風で、手首を枕につかつて正しく仰向けた顔に、明るく蘭燈の灯りを受けているではないか！

その容貌の、凄くほど冴えた美しさがまた、多治見雅彦の心を撃つた。

どこかまだ童女の面影をもつたキリッとした頬の輪廓に、いくらかおしやくれ型の可愛い、頤の突起が、真珠色に光る肌理の底に華奢な静脈の蒼さを仄々と透かせ、そこへ、長くのびた髪が栗色に波打つてくねっているさまが、何かこうゾツとするような感じだった。

心持ち白つぱけた血色を透かした唇の薄い粘膜の間か

ら、何か不思議に清潔な鉱物のように、白い歯な

みの一部が覗いていたが、そこにチラチラ動

いている蘭燈の光を見ているうちに、ふ

ツと多治見雅彦は気がついた。

大きく見ひらいて仰向いている腫

が、長い美しい睫毛の下で、微動

だにしない。

腫は明暗の蕩漾をたゞえて、淋

しい湖水のように深く澄み、

そこ
に浮い
ている表
情は、無心と
虚無以外のなに
ものでもなかった。

屍骸だ！

が、屍骸にしては、あられもな

い恰好に裸かで投げ出した手脚の、あたゝか

い血行をものがたる淡い薔薇色は、一体なんだろう。

何かの理由で、一時假死の状態にでもおちいつているのだろうか。

それにしても、この裸かのぐるりに飛び散っている蠟石のかけらの乱雑さ。――



「さ
ア、こ
ちらへお
かけ。」

五太衛門老人は
彼の驚きなどは委

細無頓着に、さびた陰

気な声でそういつて、千鳥左

右吉と多治見雅彦にありあわせの椅

子をすゝめると、手に吊るしていた蘭燈を床に置

き、自分も粗末な木の丸椅子に、脚をギイギイきしめかけてかけた。

千鳥左右吉が多治見雅彦の膝を指でついて、小声でいった。

「れいの人形ですヨ、あれが。」

「……。」

Koju

なるほど！

そうか。こゝで多治見雅彦は歎息して、改めて、乏しい灯影のあなた、金毛熊ゴールドベアの上に寒々と裸かで寝そべっている女の子の方を見るのだった。

迂濶でいたが、これで納得いつた。

いくら何でも、この二月の夜の息も白々と凝る寒気の中に、しかも、見たところ火の気もないこの部屋の闇に、一絲まとわない裸かで、女の子が一人寝そべっているなんて！

「電熱器のフューズを飛ばしたもんだから、灯りがつかん。」

五太衛門老人はひとりごとのようにつぶやくと、節くれ立つて罅割れた大きな手のひらで、息が凝ったのか水漬みずはがたれたのかキラキラと雫が光る口髭の辺を、クシャ／＼と押し揉んでから、柚子の皮のようにツブツブのある鳶色の倨傲きようごうな鼻を、蘭燈の光の上につき出して、ジロジロと多治見雅彦を見ていつた。

「火の気がないので寒い。爐でも焚こうかな。」

それにはこたえず、多治見雅彦はさつき絵描きだと千鳥左右吉に紹介された手前、口をはさんでいた。人形を指さして、

「失礼ですが、……あれにはモデルがあるのですか。」

ウム。五太衛門老人は頷くと、不機嫌に顰めた眉を彼に向けて、

「モデルはもつと美しいのだが、……モデルに負けたナ。」

「むろん、生きているモデルなのでしようナ。」

オッホッホッホ！

意外にも老人は、機嫌のいい、けれどヘンに空虚な乾いた声を立てて笑うと、濃いたい眉の蔭の窪んだ眼窩に、不意に光をともしたように眼の表情を生き生きさせ、心なしか、乾いて憔悴して色蒼ざ

めた頬に、一種の血色さえ浮かべていつた。

「生きている人間の美しさというのには、色々不純な混ぜものがあるからナ。地位やら富やらから来る美しさ、君がたが智性と呼んでいる……何というか、精神的な美しさ、笑ったり悲しんだり慍いたりする場合の、表情の動きにもなう美しさ、それから化粧や衣裳や装身具。……こういうものが残らずなくなつてしまつたあとに、たとえば屍骸に残っているのが、本当の美しさだが、この美しさを、生きているモデルからとらえるのは、なかなか難しいことデナ。」

そういつて、しばらくゴホンゴホンとせき入つてから、皺んだ手のひらで涙を拭いて、また続けた。

「もつとも、屍骸にはまた、屍骸独特の美しさが現れるものでナ。いつてみれば、意志と感情をなくしたものの美しさというか、全身の関節という関節が一切抵抗をやめて、どんなことをされてもされるまゝになつていゝるあの冷たい柔軟な底なしに素直な美しさ、……あの素晴らしい美しさを、生きているモデルからつかむくらいむずかしいことはないナ。とりわけそれを、堅い石で表現しようというのだから。」

五太衛門老人の言葉の中にだんだん籠つて来る怪しい熱っぽいものに、知らず識らず多治見雅彦は圧倒されるのだった。老人は昂奮するとせき入るらしく、しきりにゴホンゴホンと背中まで痙攣させ「そのモデルの娘も、毎日二時間ほどずつ、本当に屍体になつたつもりで、絶対無抵抗に、こちらの自由になるという約束で、モデルになつたのじゃが、どうしても意に満たんもんじやから、しまいの頃には無理やり麻酔薬を注射して麻酔させといて、モデルにしたような仕末デナ。」

「モデルは、……処女だったのですか。」

思わずたずねると、老人は晦澁な眼で多治見雅彦を見て、
「と思うがナ。もつとも、この頃わしは疑問をいだいとるんじやが、
たとえば、同性愛というようなものもある。女と女の間で行うこと
なら、どんなことをし合つても、それによつて処女は失われん、と
いうような定義でもあればナ。」

「そんな経験を、このモデルの娘は持つていたのですか。」

「いやいや、この娘は御覽の通り年もまだゆかんし、深窓に育つた
娘で、純粹に処女にちがいないがナ。」

どうやら老人の口振りによると、この金毛熊ゴールドベアの毛皮の上に寝そべ
つている裸かの女の子の人形も、屍骸を表現しようとしたのにちが
いないが、それにしては、むつちり膨れた乳房の辺や、下腹部や、
脚先などに感じられる、どこか食欲とつながるものがある美しい薄
紅色の、仄々とした体温がかげろうのように燃え立つてゐるのは、
一体どういふものだろう。

そこで多治見雅彦はきいてみた。

「すると、当然体温なども？」

すると、これにはこともなげに五太衛門老人は答えた。

「それは、光線の関係だけだから、何でもなナ。だから、千鳥君
に頼んだだけの画廊エタンドグラスの絵硝子の場合も、基調の色を水色にするよう
に注文したワケでナ。……そのその人形も、薄青いスクリーンを
灯りにかければ、体温は消えて、屍体特有の底冷えする、あの意志
のない冷たさになる。その方がグッと美しいナ。そうだ、どこかそ
の辺に、青いセロハン紙があつたナ。」

そういつて、思い出したように老人は、椅子から立つて、腰を曲

げてせき入りながら、部屋の向うの、何かガラクタが置いてあるら
しい暗い隅の方へ、セロハン紙をさがしに、一個の影法師のように
遠ざかつて行つた。

だまつてそれを見送つていた千鳥は、ふと思いついたように、床
に置いてあつた唐草の蘭燈ランタンを、鎖をたぐつて吊りあげて、一つは灯
りが遠く部屋の向うの方まで届くように、一つはそれでもう一度よ
く人形を照らして見ようとするかのように、椅子から腰を浮かせて、
クルクルと唐草模様の影絵が廻る蘭燈を、仰向いて寝ている人形の
こちらへ向けてあられもない恰好にグッと左右にひろげている色の
白い腿の間へ、低く明るく吊りさげた。

「……？」

千鳥左右吉の好奇に充ちた眼が、異様に妖しい美しい光を帯びて、
何かチラと閃光のような合図を、多治見雅彦に送つたので、思わず
彼も椅子から立つて、二三步近寄つて、蘭燈の光に明るく照らされ
た部分へ眼をやつてみた。

生毛うぶひげが四五本申しわけばかり黒く色付いて、柔らかく渦巻いてい
る下腹部の傾斜に、薔薇のツボミを押しつぶしたような粘膜の襞が
可愛いらしく小さくたままつていて、ヘンに年寄つたように皺んで
いる。その部分の精巧きわまる蠟石の彫刻が、ほんとうに濡れて艶
々光つてゐるので、眼を寄せてジッとそこを見ると、その下へ敷い
た金毛熊ゴールドベアの毛皮の深々とした金色の毛並みへ、微かに白く濁つた透
明な雫がたれて、粘つたように毛が濡れ、プーンとそこから立ちの
ぼるあの栗の花に似た仄かな男の生理の臭い。――

多治見雅彦は思わず顔をあげて、千鳥左右吉と眼を見合わせた。

(以下次号)

第三部 腎部マニヤ

腎部聖夜

私はローソクに火をつけた。パチ／＼と言う音と共に焰が大きくなり、聖火は點ぜられた。やがて、焰がロウを溶かし始める。彼女が身動きすると、熱い溶液がタラ／＼と根本まで流れ落ち、彼女の身に、つるつると固まつて行く……

鞭岡麻冬

小田明男画



第四章 白い祭壇（承前）

私の目の前に惜しげもなく近づいて来た、芳子の熱れ切った腎部。私は何時もの事であるが、やはりその美事な妖しいポリウムに思わず生睡を飲むのである。内部にねつとりと重い脂肪を沈ませ、表面をミルクで磨いたようにまぶしく威圧する尻。そしてそれは又何と大きく、むっちりとしている事だろう。



「ね

え、鹽岡

先生。なんだ

か、ここが燃えてるみ

たいなんですの。ちよつ

と触つて」

と彼女は微笑みかける。私は新しい情欲が
胸の奥から、たぎり出してくるのを覚えた。

私は人指ゆびで、彼女のむき出しの尻を、く

も知れないよ。」

と言うと、ぴしやつと平手で尻の円みを叩

くと、元気づいて起き上った。

「君は、今夜の事、

と突き乍ら

つくつ

A.K

のぞき見してたんでしよう。よ

し、よし、今夜の僕は、少し、ねぼつこいか

私は、押入れから、一つの円椅子を持ち
出して一糸もまともな芳子の前に置い
た。

「さあ、先づこの刑量測定器で、今夜
のあなたの罪科の量を計るんだ」

彼女は眼だけは異様に輝やかさせ乍
ら、観念したように、こつくりうなづ
く。この円椅子と云うのは、事務所
なんかによくある、木で作られた腰か
ける所に藤が張つてある普通の円椅子で
ある。唯違う所と云えば、尻が当る藤の

所が全部はぎとつて、ぽつかりと穴があ
いている。ここ迄書けば読者には、そうか
と御想像つく事と思う。この椅子にまぶしい
様な裸体の彼女を腰かけさせるのだ。彼女の
お尻は、ぽつかりとあいた椅子の中に、丁度
ぴつたりとおさまつた。私は細紐を取り出し
て彼女の両手を背中に廻し、椅子の背と一緒
に縛りつける。胴も又縛つておく。最後に、
両足首をひらかせて椅子の脚に夫々紐で固定
した。彼女の両足は丁度九十度位に開かれた
まま閉ぢる事も出来ない。この仕事をやつて



しようと、私は、椅子の下に丁度彼女の足の
間から首が入るようにして、仰向けに寝転ん
だ。そして机の上のスタンドを畳の上に置く
何と云う恥しい恰好であろう。彼女のお尻は
椅子の腰かけの所から、円くむつちりと、何

のおおう所もなく明らさまにむき出しに見え
る。一廻り大きな目の円椅子ではあるが、彼女
の尻は、その中に入りきれず、木のワタにき
つちりとはさまれて、一層ふつくらとした量
感を示している。明るい電燈が、そのデリケ

するのだ。私はやおら彼女の白い尻の円い所
に頬づりした。それから、今度は熱い舌を出
して、初めはゆつくり、そして思い切り大胆
にこの柔らかく熟れてとろけそうなお尻の表
面をなめ始めたのである。私に取つては、こ



A.H

トな二つの半円や、くつ
きりと円を分けている溝を
浮き上らせている。私はニ
ヤニヤしながら、このすば
らしい肉の円体をゆつくり
と眺めた。
「そんなに、見つめたら厭
ですわ」
と彼女はせつなさうに、
しかも反撥するように訴え
る。
「ぢや、ぼつぼつ始めよう
か」

そう言つて、私は座布団
を二枚ひきよせ、二枚を二
つに折り重ねて頭の下にか
けた。椅子の脚は適当に短
か目に切つてあるので、私
が枕をすると、丁度彼女の
ヒップすれすれに顔が接近

の舌の感触は、何をさしおいても、すばらしく美味しい味覚なのである。と同時に、彼女にとつては、たまらなく気味の悪いくすぐりなのだ。私は両手で椅子の脚をしつかり持ち顔を自由に動かして、ペロペロとあます所なくなめ続けた。

「ああ、いやつ、よして……」

と彼女は、ヒップを上に浮かそうとするが、胴と両手は椅子の背にしつかりと縛られているのでどうすることも出来ずに、ただ軀をわづかに、前後左右に、むちむちとびくつかせるだけである。これだけの事であれば、何も刑量測定にはならない。どうして罪科を計るのかと云えば、私がなめるのは、ある一部をのぞいてお尻の表面全部なのだ。即ち何もおおいのない尻が、円く、下にむき出しになっているので、アームスはもちろんのこと、すべてがむき出しになっている。だが私は彼女が触れて欲しいと思う個所には一舌も触れないのである。そのすぐ周辺までは、熱い舌でねつとりとなめる。が、そこには少しもふれない。私のこの行為が続けられて行くと、彼

女は次第に興奮してくる、今も、もうたまらなさそうに

「ああつ、ああつ、いや」

とうめいて身もだえする。そして、彼女の軀は汗で、じつとりと濡れて来る。その汗は次第に量を増しべつとりと軀中に光つて来る。この汗の湧き出る量が即ち罪科の量なのだ。甘ずっぱい、チーズのような香りが、室内の温気にとけて、ただよう。私は右手で思い切り、お尻の円い所をつねりあげ乍ら起き上つた。

「五分も経過しないうちに、ひどい汗じやないか。今夜の君の罪は、今迄で一番ひどいものになるぞ」

と、言葉つきも、がらりと変えて彼女に宣告した。

彼女の顔は上気し、なまめかしい唇を半開きにして大きく息をついている。その度に、胸一杯に、たわわにふくらんでいる両の乳房が上下に動く。私は彼女の半ばうつとりとしたこの様子を見ているうちに、急にサディステイクな狂暴性がこみ上げて来た。

「こいつ、いい気になりやがつて」

と言うと同時に、ぴし、ぴしと頬つぺたをなぐりつけた。教師タイプの悪い癖が、こんな場合にも出るのである。これが彼女への責めの口火になった。

「覚悟はいいな、今夜はみつちり仕かえししてやる」

私は机の横に下げている雑布（これも、掃除したまま洗っていない）を手に取ると、まだじつとり汗に濡れたままの彼女の軀を拭いて、そのまま彼女の口をひき開けて押し込んだ。その上に細紐を掛け、手拭で後頭部にきつちりとしめつけた。彼女は、うろううと言いつつ乍らさけようとしたが自由を奪われている身体だし、私の荒仕事を避ける暇もない。それから私は、彼女の縛を解き、私の考案した責を行つた。それは私の座り机を壁の前に立て彼女をこの机をへだてて壁に向わせ、机によつて身体が二つ折りにされるように、上半身を壁との間に押し込むと同時に両手を逆ねねおちり上げて壁に吊した紐に夫々縛りつける。彼女は上半身を折りまげられ、逆手を取られ



て、身動きも出来なくなる。そうしておいて、両脚を左右に開かせて、夫々の机の足に紐を通して結びつける。すると、この明るい六畳の壁に向つて、いけにえになつた、真白い大きなヒップだけが、立体的に私の目の前に浮び出るのだ。私は獲物を捉えた蜘蛛のように残忍な喜びを感じる。

私は用意して置いた責道具を一つづつ取り出す。最初は針と灸責め。私が作つた針板、これは四角い洗濯石鹼の一面だけに、木綿針を逆さに二十本程植えつけたものである。この針板を、彼女のまるく盛り上つたヒップの上にのせる。そうしておいて、もぐさをもう一方のまるいヒップの上に据えて、火をつけるのだ。もぐさは紫色のうすい煙を上げて、柔らかい火の玉になつてゆく、一つが消える頃別のもぐさに火を移す。これはなま身の軀にとつて耐え難い苦痛である。彼女はさる轡をはめられているので声が出ないのだが、「うつつうつつ」

とうめいて軀をよじろうと身もたえする。するとその度に針板に重みがついて、はち切れそう、すべすべしたヒップの肉を二十本の針が、チクチクと突きさすのだ。円いヒップは絶え間なく、うごめく、もつと早く動け

まだこたえないのか、この図太い軀め！ 私の心は限りない残忍さに、めらめらと燃え上つて来た。あちこちに思うまま、もぐさを点在させて、一つづつ火を点じてゆく。と同時に、針板である石鹼の上に、ポマードの瓶や煙草のケースを積み重ねるのだ。すると重みが加わつて、遂に彼女の真白い全円のなめらかなお尻の皮膚にぶつりと赤い小さい血が滲む。私は、これを見ると、全身の欲情が一時に狂い立つて来るのだ。

彼女は壁と机の間に頭を低くはさまれているので何も見る事が出来ない。次はどこを責められるか分らずに、額になま汗を出すのである。私は小気味よく笑い乍ら、時折、前に廻つて、彼女の顔をのぞき込ながら、「ええ、どうだい、少しは痛いって感じますかね。うつとりとして居られますかね」と毒舌を吐く、

「うーっ、うーっ、ぐーっ」

彼女は何か言っているのだが聞えない。しかし、苦悩の表情は、マリリンモンローの顔をも台なしにしている。私度も一度、後に廻つて、責めようとした時、どうしたはづみか彼女の右脚の紐が外れて自由になつた。苦しみのあまり、もがいて足をばたつかせた。運

悪く、私の腹をその片足がけつた。彼女の軀の上の祭器はぼろぼろと下に転げ落ちた。私は激怒し乍ら

「よくも、暴れたな。罪人が暴れると重罪だよし、こらしめてやる」

と厳しくきめつけ乍ら、ズボンの革バンドを外した。バンドをはずされたズボンは下に落ちる。私はそれを邪魔つ氣に脱ぎ捨て、パンツ一枚の身軽な姿になると、ねらいを定めて、むくむくと白く波打つて、うごめいている臀部に向つて、ぴしーり、ぴしりとバンドの鞭を振つた。バンドは蛇のように、一打ち毎に、ぺたり、ぺたりと、からみつくようにヒップの表面にまつわりつく。彼女は自由な片足で精一杯に防衛しようとするが、盲めつぽうだし、宙をけるばかりである。その上、逆手に吊り上げられた両手の痛みが増して来て遂には片足を動かす元氣もなくなる。鞭打たれた軀には、赤いミミズ張れが三条四条つく。

私は勿論、滅多打ちをするのでなく、芸術家がカンバスに筆を下す時のように狙いを定めて、一つづつの確に打つのだ。それも、私の大事な軀が傷でめちやめちやにならないよう、毒舌を交え乍ら適当に打つて行く。しか

しながら、この責めを行つてゐる時の誇らしい勝利感と、尊敬し、憧れ、切なく愛し求めている大事なすばらしいヒップを支配し、ふみにちると云う汚辱感は何と、得難いアブノーマルの感覚であらうか。この時の私には、地位も体面も欲得もない、全くの陶醉境なのである。が、鞭打ちは、すぐやめた。私はこの誇張的な大時代的な責めは、そう好きではない。又傷もつき易い。私の好むのは、ねちねちした責めである。興奮と、感能の刺激で適度の疲れを覚えたので、小休止をする為、ピースを一本吸いつけた。そして、彼女のさる鬱も解いてやつた。苦痛にもだえる声が聞きたくなつたのだ。

「ああ、もうどんなお仕置でも受けます、そんな御奉仕でも致します。せんせ、この手をほどいて、折れそうなんです」

声が出るようになると、彼女は、年甲斐もなく泣声をあげて、私に訴える。私には、別の喜びが湧き上つて来た。私より年上の、この女が、しかも母親が、この有様はどうだろう。なまめかしくも又あまりに露骨な人肉の

奴隷だ。私は先を急いだ。

「さ、もう一息だ、僕にはまだ責め足りないし、君は、苦しみ足りない筈だ」

「いいえ、もう、本当に苦しいの。どうかやめて、もう死にそう……」

「ま、そう悲鳴を上げなくとも、君は、僕の夢を破りに部屋に入つて来たつて事を忘れちゃ困るよ」

私は益々情欲の高ぶりを感じた。私の身内には、狂つた感情が満々とみなぎり、今にも爆発しそうになつてゐる。この最後の発火を私は急ぎたくなつたのだ。彼女の躰は今、無惨に、責め跡がにじみ、真白いすべすべしたミルクの肌が、にじんだ血や、ミミズ張れでうすぎたない。が一面に脂汗が浮いたような光沢が出て、そのむつちりした円みは一層刺戟的である。

「お祈りをして貰おうかね、私の奴隷さん」

私は、ローソクを二本持ち出した。この祭壇に火を上げるのだ。直径二樞位ある、白いローソクを……、アームスに、その一本を、××××××××××。ローソクは真直に天井に

向つて立つてゐる。ただ彼女が身動きする度に、ぐらぐらとゆれる。私はこのローソクに火をつけた。パチパチと言う音と共に焰が大きくなり、聖火は点ぜられた。やがて、焰がロウを溶かし初める。彼女が身動きすると、熱い溶液がタラタラと根本まで流れ落ち彼女の躰に、つるつると固まつて行く。それは美しい情景だ。

「ひつ、ひつ、熱い。あああ、やめて、やめて」

と思わず彼女の声が高くなる。

「しつ、階下のお子さんが目覚めるよ」

私は冷淡に言い放つ、

「いえ、もう、あつ——」

と後は言葉にならない。私は、もう一本にも火を点じ、焰でロウを溶かしてから、彼女の躰の上の思いがけない所に、タラタラと落とす。その度に彼女が身もだえする。ロウは、熱く溶け乍ら、彼女のヒップのあちらこちらに、小さい階段を築く。私は、この異状な責めに、感能は全く飽満状態に達した。やにわに手に持ったローソクを吹き消し、彼女の手



の縛めを解くと、机に折れ重なったままの彼女を机ごと、少しづつ壁から引離し、私が頭の方に入れるようにし、私は彼女の顔を両手でつかみ、ぐつと仰向けにさせる。そうしていかにも男心を唆るようにプツクリと豊満な彼女の唇を、氣狂いのように咬み吸うのだ。

第五章 開 花

学校で、私は相変らずおとなしい教師として何の破綻もなく生活を続けている。学期末の考査も済み、あと二、三日で冬の休暇に入る。街はXマスの為に騒々しい。学校での懲罰以来、A子は、私の下宿に三日置きには、学習に通つて来ている。私の用意周到な教化の影響で、今ではA子も、次第にアブノーマルな性癖を強くし初めた。命令されると恥ぢらい勝ちにはあるが、スカートを脱ぎ、パンティを私にとられると、湯に入ってきたばかりの輝やくようにふくいとしたりヒップを私の布団の上に投げ出した。私はこの清純な未知なる腎部に対して日毎に魅せられて行つて狂おしいばかりに、情欲が燃え立つて行つた。しかし、さすがにA子に対しては、美しさを私のようなアブ的性癖の為に犯してはいけないと云う自制がぬけきれず、貞操を犯す



こともなかつたし、又芳子と一緒にやるような、激しい惑溺の責め遊びまでには、まだ時間的に早すぎるのだつた。今の所は、やさしい蕾を一日一日育てるような状況だつた。しかし乍ら、時とすると、このおとなしいA子が、私のこのような期待を飛び越えて、思いがけない積極性を示す事があつた。花は、最初の太陽が与えられた後は、ひとりでに育つのであらうか。

或る夜それはXマスの二三日前であつた。

割に暖かい日で天気もよかつたし、街は、何か陽気に湧き立っていた。A子は、Xマスケーキのお土産など持つてやつてきた。部屋に入つて来たA子を見て、私は、うーんとうなつた。今迄一度もなかつた和服姿である。えんじ色の着物と黒っぽい帯が妙に大人ぽく、見違えるような色気に溢れていた。

「先生、そんなに、じつと見てたら厭だわ」

「うん。あんまり変つて見えるので驚いてる所さ」

「わたくし、どう見えました？」

「うん、何時もより、ずい分大人っぽく見え

るんだね。それに君は着物の方が似合いはしないかい。びつくりする程美しくなつた」
「まあ、先生のお上手。やだわ。私恥しくなつちやつた」

「まあ坐り給え。お家ではいつも着てるの」

私は久しぶりに新鮮な気持が湧いて、会話も弾んで来るのだつた。

「ええ、母が着物が好きなんです。正月が近いから、先生の所にも一度は着て行けつて、聞かないですよ」

「だんぜん、気に入つたよ。一寸立つて向うを向いてごらん」

私は、彼女の姿を見なくなつたので、そう言つた。彼女は素直に立ち上つて、くるりと背中を見せた。腰のくびれから、ずつと足もとまで落ちている、しやつきりした着物の感じ、スカートと違つて、身体全体をおおいつ

くした着物と云う衣服。かくそうとしているので、余計それと分る、あの大きい臀部のふくよかなまるみ、それは、今迄に忘れられていた新鮮な妖しい魅力だつた。

「全く、すばらしい」

私は思わず嘆息が出た。と次の瞬間には、一何時もの異状癖に一層油を注がれた情欲が、むくむくと胸一杯にあふれて来て、次第に我慢が出来なくなつて来た。

「さあ、先生に、君のその姿をお供えするんだ」

彼女は、一瞬身を固くしたが、暗示にかかつた被告のように、ゆつくりとうつ伏せに寝た。私はスタンドのシェードを桃色に変えてから、丁度手術医がするように、彼女の左横に坐ると、大事な物を取り出すように、着物の裾に手をかけると、思い切り上半身の方



連載・アブノーマル官能小説

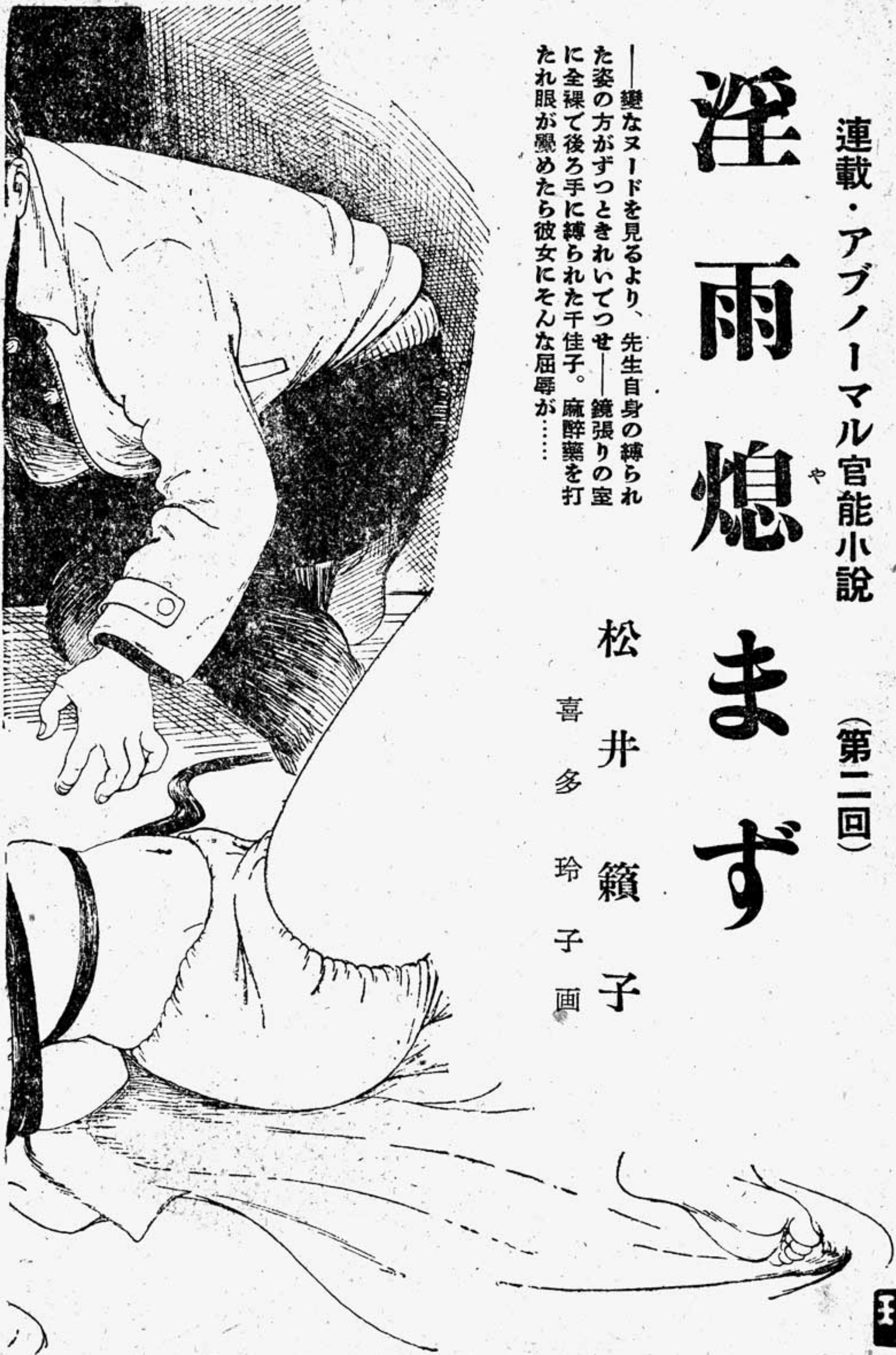
(第二回)

淫雨熄やまず

松井 籟子

喜多 玲子 画

——變なヌードを見るより、先生自身の縛られた姿の方がずつときれいてつせ——鏡張りの室に全裸で後ろ手に縛られた千佳子。麻酔薬を打たれ眼が覺めたら彼女にそんな屈辱が……



てあいた。

「あんた、どこ行つてたん？ お父つさん入院したで」

「え？」

ユキは家へ入りかけた足を引っこめて、声の方へ振向いた。

「あんたの留守に又血イ吐いてな。頂度あの何たらしい学生はんほら、ユキちゃんの好きな、丈の高い男まえの人や、あの人が来てはつて、すぐ病院へつれて行つた方がええやろつて……」

「そうですか、どうも有難う」

ユキは父の入院というような危急の時に、

「ユキちゃんの好きな……」という言葉に背中がポツと熱くなる

のを自分

自身恥じた。

小崎義一が来てく

れたらしい。ユキとは

同じ学生だが、香月春夫

のような派手な男ではない。

勉強とアルバイトに身をすりへら

している眞面目な、貧しい学生だつた。

ユキの父の入院は、今朝から医者にするめ

られていたことで、その爲の金の入り用だつたの

だが、アトリエでの思いがけない仕儀になつたのだ。

「おお寒……」

と、隣家のおばさんは首をすくめると、

「ぢやあ、何ぞことがあつたら起してや」

ガタピシと格子戸をしめてしまった。

ユキは暗い家へ手さぐりで上ると、電燈をひねつた。裸の電球が
體えたような匂いの中で、ブラブラとゆれた。その真下へ、ペタン



と座ると、ユキはしめつぽく冷たい疊に、体の中の血も水も、吸いとられて行くように茫然として動かなかった。

入院したという父の容態も気になつたがそれはただ、彼女の体の精力を疊へ吸いとらせる重しのように、ユキの頭を圧したただけで、萎えた体は横にすることとさえ大儀だつた。

疊についた手にふと目がいくと、手首にぼたん色の痕が残つていた。昔の罪人が手首にいれずみされたのと同じような輪になつてゐる痕を、ユキはいたましく見た。

ユキは靜かにそれをなでた。自分で自分をいとはしむように、靜かにさすつた。それから這うようにして火鉢の上のやかんに手をのぼすと、火がいてあつたのか、なまぬるい。ユキは又這うようにして、なげ出してあつたハンドバックをとると、ハンケチを出した。台所へ洗面器をとりに行く氣力もなかつたのだ。やかんのお湯でハンケチをしめらせると、セーターを首まで持ち上げてスリッパの間から乳房を出した。乳首のさきがまだ赤いまゝだつた。

ユキは濡れたハンケチで乳首をふく。乳房を押さえる自分の手が、ぞつとする程冷

たくて、乳房の上に細い泡粒がひろがつた。肌の色が寒々と乾いて、赤い乳首はもう美しいよりは無氣味だつた。

しかし、ユキがハンケチで赤い絵具をぬぐおうとすると、乳首のさきから体の中心へ電流のようなものが走つて通つた。自分の手で自分の乳首へさわつても、女の体は別の生きもののように、敏感に何か得体の知れない電流を走らせるものらしい。ハンケチが血をふいたように赤くなつた。

「ユキちゃん、帰えつてゐるのかい？」

戸口から小崎義一が入つて来た。

ユキははつとしてセーターを下げ、ハンケチをぬれたまゝハンドバックにつゝこんだ。

「どうしたの？ 熱でもあるんぢやない？」

小崎はユキの顔を見て言つた。

体をふれ合わなくても、心と心がむすびついていれば、夫婦のように相手の体の小さな異常も氣がつくのだろうか。

しかし小崎の顔を見ると、ユキの萎えたような体にも、新しい血が湧き出すのか、ユキの腫が輝いた。けれど次の瞬間にはその腫を再び曇らせて、

「父さんは？」

と、小崎に近く座り直した。

「今、靜かに寝てゐるから、僕、一寸帰えつて来たんだ。君の留守に入院させてしまったけれど、金は何とかするから、心配しなくてもいいよ」

死ぬか生きるかという人間の生命よりも、金の才覚がさきに頭へくるのも、貧しい者同志だけが知つてゐる感情の動きだつた。

「それより君、とても顔色悪いよ。どこへ行つてたの？ 働きすぎたんぢやないかい？」

「大丈夫、一寸疲れてるけど……。いいアルバイトがあつて……」

言いかけてユキは言葉を切つた。

金は貰つて来た。しかし、どう今日のことを小崎に告げられるだろう。

香月春夫に責められても、身におぼえのない盗難は説明の言葉がなかつた。くすぐられたり、抓られたり、縛られた体を玩具にされて、目をあけることも出来ない程の苦痛にただ縄と鎖が自分の体を無理に支えているにまかせて、くづれ伏すことも出来ず立つていた。その間、どの位の時間がたつたのか、成つてしまつたのか、失心してしまつていたのか、やつと縄をとかれて、目の前にモデル料だという金を出されても、ユキは考える力さえなくなつたように、ぼんやりしていた。

「先生にはほんまに君が知らんらしいとい
うといたわ」

香月春夫は平然と言つて、千佳子から貰
つて来たという金をさし出したのだ。

「又たのまれたら来なあかんで。ほら、二
千円もくれよつた。君を疑うていえへん証
拠や、僕、うまいこというといたさかい」

そういう香月に
「いりません」

と、ユキはその金をたたきつけたかつた。

しかし、二千円という金はユキには大金
だつた。だまつてもらうより仕方がない。

理由もなく差しめられた男の手から「有
難う」と、その金を受取ることは、ユキに
とつて、肉体に加えられる呵責より一層苦
しかつた。

ユキはふるえる手で、それを受取つて帰
えつて来たのだ。

今、小崎義一にそのことを言つたら、小
崎は何というだろう。自分を輕蔑しやしな
いだろか。

処女を守るばかりが女の誇ではないはづ
だ。香月に裸体を見られ、縄目にかゝつて
苛められたことは、処女を破られた以上に
ユキの誇を傷つけられたことにはならない

だろうか。その誇を傷つけた男の手から、金

を受けとつて帰えつてくるなんて……。ユキ
は自分で自分に唾を吐いてやりたい程自分が
憎らしい。父でさえきつと「そんな金でお

るより死んだ方がいい」というかもしれない。
しかし金はいふのだ。どうしてもいるの
だ。父を見殺しには出来ないのだ。自分とは

もなく、病氣の父に薬どころか、食物さえ与
えられずにいられるだろうか。そしてそれに
はどうしてもいる金だつた。

「ユキちゃん、おじさんは僕が見ているから
一眠りするといひよ。君が寝こんだら大変ぢ
やないか」

やさしく言つてくれる小崎に

「すみません」

ユキは一と言言つた。

詮索好きの女だつたら、どうしておそくな
つたとか、どんなアルバイトがあつたのだと
か、いろいろ聞くだろう。ユキが疲れている
のを見て、うるさいことは何にも言わず、い
たわつてくれる男の広い愛情がユキには嬉し
く思われた。

「義一さん」

「なに？」

「ううん、何でもないの」

他人行儀な感謝の言葉を言つてみても、ユ
キの心は伝えられない。

「ユキちゃん」

今度は義一が呼びかけた。

「なあに？」

あがりかまちに腰かけている小崎と、そば
に座っているユキの間の僅かな空気が、ふつ
と朝日の昇る前するとき色の雲のような色に染
つて流れた。と、思う瞬間、小崎は自分の影
におびえるように立上つた。

「元氣出すんだよ。ぢやあ、又あした」

そう言うなり、そそくさと、外へとび出し
て行つた。

二

「どこへ行くねん？」

千佳子はさつきから、もう何べん目かの問
いを又口にした。

「僕が此処や言うところまで、何でだまつて
ついて来られへんのかいな」

そう答えたのは香月春夫だつた。今日は学
生服ではなく、えんじ色をしたジャンパーに
派手な格子縞のマフラを衿もとからのぞかし
ている。

「そやかて、春ちゃんにまかせといひら、何処

へ引っぱつて行かれるかわからへんもん」
「まさか先生の命もらおうとは言えんさかい安心してや」

二人を乗せた電車は京都へ向つて走つていた。

「ほんまにヌードの撮影会があるんの？」

千佳子は今日、香月春夫に誘われて、ヌード撮影会に参加するということで、写真機をぶらさげて来たのだが、写真よりスケッチしたいのが望みだった。

「うたがい深いお人やな。今日のヌードは同じヌードでも一寸違ふさかい、会場も郊外の鉱泉旅館ということになつてゐるんでつせ。もうじきや」

「けど、縛られた女のヌードなんて、私みたいな女が見に行つてもいいのかいな」

「まあ、だまつて僕にまかしとき」

香月春夫は千佳子の家族の一員の様に遠慮なしに出入りしているが、その親しきにくらべると、千佳子は香月春夫という男のことを何にも知らないと言つてもよかつた。調法で便利で一人何役もやつてくれる春夫を、千佳子は弟のように春ちゃん、春ちゃんといふと気軽に使つていたが、千佳子に譲次という愛人のあるのを知らない人は

香月春夫を千佳子の若いつばめだと思つてゐる人もある。

最初は学校新聞に随筆を書いてくれと頼みに来たのだが、それからどうして「春ちゃん」などとよぶ程親しくなつてしまつたのか、千佳子自身よりわからない。此の頃千佳子が女の責めの絵で苦勞しているのを知つて、どこから聞いてきたのか、今日責めのヌードの撮影会があるから、絵の参考にしたらいいと誘つてくれたのだ。

やがて電車を京都の手前でおりると香月の案内した旅館は当節流行の温泉マークはついているが、わりに堂々とした構えの旅館だった。

香月は女中に何か言つて、物慣れた様子で千佳子を促して二階へ通つた。

六疊程の座敷で、あげ放した障子の外は縁側の手すりごしに、広々とした風景がひろがつていた。昔、天皇が狩をする場所にしていたとか禁野の名があり、銀色に光つた川がぬぎすてた帯の様にくねくねと、低い丘陵つづきの野にまがつてみえた。

温泉マークに一寸厭な気がした千佳子も案内田舎の旅館らしい風景に、ほつと気持が和んだ。

「撮影会は夜六時からやということだつせ。それまで一杯のみはりまつか、それとも、お風呂へ入つて丹前に着かえはつたらどないです？」

香月春夫は言つたら時計を見ると、陽が半分傾いてゐると思つたが、まだ三時だった。撮影会が夜からだということに、千佳子は一瞬疑問をいだいたが、香月と二人で旅館へ上り、かたくなつてゐるように思われるのも續だった。譲次という人のあることも知つてゐる香月春夫が、撮影会を口実に、自分に野心を持つてつれて来たとも考えられない。それなら中年の自分を相手にしなくても、同じ年頃の若い女はいくらでもあるだろう。しかし、千佳子は撮影会のことを、自分から女中にたしかめようとはしなかつた。それがただのヌードではないということに、何となく恥しさを感じてゐたのだ。

彼女は香月を無視するように風呂へ入つて丹前に着かえてビールでもものもうと思つた。あんたなんか気にしてはいないわよと、行動でしめしてやりたかつた。と思うことさえ、すでに香月にこたわつてゐるようで、チンピラな学生を相手に、意識の底では普通の男と同じ警戒心を感じる自分が、自分でおかし



つた。

アベック向きらしい構造の風呂へひとり
でつかつて、讓次とくればよかつたと思ひ

ながら丹前に着かえて部屋へ戻ると、香月は
卓の上へ注射器とアンプルをちらかしてい

「先生、一本打ちまひよか」
「あんだ、ポン中毒なの？」
千佳子が驚いて聞くと

「ハハハハ」

と、香月は大きく笑つ

て

「先生もひつかかつた。
これヒロポンに見えまっ
か？ 違うんでつせ。こ
うして腕まくつて、みん
なの前で打つてみせてや
るんですわ。するとみん
なヒロポンやと思うらし
い。一種の流行やさかい
僕まねしているだけや。
これはビタミンのような
もんでつせ」

「ほんま？」

「僕、そんなにすごう見
えるかいな。先生にまで
そう思われるなんて愉快
やな。女学生なんかヒロ
ポン打っている思うと、
何となし、恐いものみた
いに興味持つらしいでん

な

千佳子は又癪にさわつた。

にせのヒロポンを、すごいわねと感心するチンピラ女学生と一緒にされたと思うと癪なのだ。

「春ちやんのはニセか知らんけど、うちなんか前にはよう打つたわ。仕事かたてこむと、ポンでも打たなあかんわ」

こつちの方が先輩だという顔をする。

「よう癖にならんへんかつたでんな。ビタミンはいいでつせ。一寸打つてあげましょ」

「いいわよ、今日は……」

「やつぱりこわいのかいな」

「そんなことあらへん」

千佳子は香月の方へ腕を出した。

チクツと針の痛みが感じられた。その痛みが千佳子の腕からスーッと消えていくのと同じように、千佳子の意識は彼女の体から消えるようになっていつてしまったのだつた。

三

どの位時がたつたろう。

千佳子はふつと気がついた。体を動かさうとしたが、なにかしら体に痛みを感じ

るだけで動かない。

最初に千佳子が思つたのは、自分が急病になつて、手術でもされようとしているのではないかということだつた。二三日前に見たばかりの外国映画の一シーンが頭に残つていたせいだらう。手も足も革のベルトでしつかり寝合へ縛りつけられて、鋭いメスが腹をすうつと切つていく情景が、自分の身におこりつつあるのだと想像した。

千佳子がそう思つたのも無理はない。手術の時に素裸にされるように、千佳子は着物をぬがされていたのだ。体が動かないと思つたは、手も足も縛られていたからだ。

はつと思つてまわりを見廻すと、白い裸体に絆々と縄をかけられた女が、隣に寝ている。その女の方でも千佳子を見た。しかしその顔は、手拭でしつかりと猿ぐつわをされていて、ただ形のいい鼻を、見ひらいた目がけげんそうに彼女を見ているのだ。その瞳も夢からさめきらないようにとろんと濁つていた。

「あつ！」

あやうく声を立てようとして、千佳子は自分の口が同じように猿ぐつわをはめられているのに気がついた。驚いて上体を起そうとし

たが、足首が縛られているので、肩を少し布團から浮かしただけで終つた。ただ、隣の女も同じように肩をうかし、後手にくくつた縄が二の腕にまでくびれる程にかかつている痛々しい姿を、千佳子に見せた。

と、千佳子の足の方に当る所から、猿ぐつわをはめられた女の顔が、髪を額に乱して、うつろな目で此方を見ている。その女の咽喉に首輪の様にかゝつた縄が、真正面から見ると苦しげだつた。

「あつ！」

と千佳子が身を悶えたと、隣の女も、向うの女も同じように身を悶える。

千佳子にやつとそれ等の女達が自分自身の鏡にうつつた像であることに気がついた。

彼女は後手に縛られた手のさきを、布団についで、足首を縛られているが自由な体をやつと起すことが出来た。見ると、頭の方にも又ひとり女の像がふえている。前に後に横に千佳子は自分にかけられた縄が、ある所は十文字にある所は菱形に、どんなに自分をしめつけているか、自分の目ではつきり見た。頂度腰ばりの襖のように、三方の羽目の下の方だけぐるつと鏡がはめこんであるのだ。他の一方は唐紙がしまつてゐる。唐紙の向うがど

うなっているのが、彼女はわからなかつた。今、千佳子のいる部屋は、部屋というより押入にふとんを敷いた位のせまさだつた。それが鏡になつて、倍の広さになる。頭と足と両側にはめらんだ鏡は、鏡の映像を鏡がうつし、無限大に広がりそうだが、スタンドの灯はそこまでとどかない。ただぼんやりと、荷物のような女の裸身をうつしているだけだ。

唐紙があいた。

「春ちゃん！」

叫ぼうとしたが声が出ない。

「目が覚めはりましたか？」

香月が言いながら、中へ入つて唐紙をしまった。その僅かなあけたで、唐紙の向うはさつきの座敷らしいとわかつた。では押入の様に思つた襖の奥に、こうした寢室の設備があつたのか。

香月が近づいてくるのを、いさるようにしてさけようとしたが、やつと一寸か二寸身をすらせることが出来たぐらいだつた。

「もつとよく見せてあげましょう」

香月はスタンドをいつたん消して、明るい電球にとりかえた。

千佳子はまぶしそうに目をまたたいたが

自分の異常な姿が、はつきりと自分の目にうつてくると、身のおき所もないような、屈辱と羞恥にさいなまれた。

「變なヌード見るよりは、先生自身の縛られた姿の方がずっときれいでつせ」

香月は言う。

しかし、どうしてそんな姿をまじまじと鏡の中にとらえられるだろう。

いつたい香月ははじめからこうした企みをいだいて、千佳子を誘い、ビタミンといつて麻酔薬の注射をするまで、たくみにおぜん立てをしたのだろうか。

「もつとよう見はつたらどないです？ 折角みせてあげるようにしたのやから……」

香月は平然という。怒りでぶるぶるふるえる程、千佳子は香月春夫に腹が立つた。しかし、手足の自由をうばわれ、口に猿ぐつわをはめられては、目でにらんでみても、はじめられない。そんな姿を香月に見られているというだけでも、胸がどきどきして、怒りとも羞恥とも、言いようのない感情がたかまつてくる。

「何で見はらしまへんねん。ほら、よう見えまつしやろ」

香月は千佳子の頭をつかんで、ぐいと鏡の方へ向けた。彼女はいやでも自分の顔を、そしてみじめな姿を、鏡の中に見なければならなかつた。

「よく見られるように、目をあけといてあげまひよか」

香月は言う、千佳子の上瞼を眉の方へおしあげて、絆創膏をぴつたりと貼つた。眉がかくれて、歌舞伎の女形がお化粧をしている時の、代物のような変な顔になつた。

千佳子はそんなおかしい顔にされたということにさえ、氣持が波立つた。それも一種の辱しめをうけているのと変りがない。

それなのに、香月はその上、片手で千佳子の顔を鏡に向け、片手を前にまわして、胸や腹を撫でまわした。乳首をいじつたかと思うと、みぞおちから腹の方へ手をさげていく。「ううっ！」

と、千佳子は身をよじつたが、荷物のように縄で固定されている体は、香月の思いどおりにされるより道がなかつた。そして、身を悶える自分を、自分の目で見ていなければならぬのだ。

「こんな面白いことしてみとうなつたのも、先生が悪いんでつせ。責めの絵を画くなんて僕を刺戟するからや。僕はこんなことしてみ

たい気持を押さえていたのに、齊田ユキを縛つたりしてみせはるから悪いのでつせ。もう我慢出来んようになってしまった。先生が悪いのや。どうや、こうしていじめてやる。どうや」

香月はいいながら、自分の膝の下にしっかりと千佳子の腿を押さえ、後手に結んである千佳子の腕を、上へ上へと押しあげた。手を無理やり背中の上へ、うなじへ届く程に押し上げられれば、自然、顔は前かきみに下を向く。それを片手で髪の毛をひっぱつて下へ向かさずまともに鏡へ向ける。あけ放したまゝになつてゐる千佳子の目はまばたきも出来ず、涙が出そうで出なくてヒリヒリと痛んだ。それでも自分の苦悶を自分で見つめていなければならなかつた。手と首が一つになる程につかまされると、胸がそつて、乳房がまともに鏡に向く。それを香月は自分の体をすりよせてこすつた。無理にあげられている手の痛みと、腫の痛さとは別に、こすられる胸もとが呻めき声



をのどへおしあげた。

「ああッ、ううッ！」

と、千佳子は呻いた。

鞭打たれたり、焰で焼かれるようなひどい責めではないのに、千佳子の体はじつとりと汗にぬれた。

「いい気持でつしやる。どないです？ お隣でもやつてまつせ」

言われてはじめて、千佳子の耳に、鏡の羽目を透して、低い呻めき声が聞えてきた。しかし、それは苦痛に呻めく声に似ていたが、そうではなかつた。

並んだ部屋の両側が同じ様な構造の寢室になつてゐるらしく、鏡がはめこんであつても羽目は薄い。隣の寢室の息づかいが聞えてくるのだ。

千佳子は苦痛に呻めきながら、隣の呻めき声がだんだんに高くなつてくると、自分の体の奥でも、漣立つような血の波立ちを感じて来た。そして、自分の肉体に加えられている苦痛が苦痛なのか快感なのかわからないような



な気持になつていつてしまったのだ。
香月はそれまで計算にいられたのだろうか。

しかし今、千佳子にはそんなことを考える余裕はない。鏡をへだてて、顔も知らない二人の女体から、一方は苦痛に、一方は歡喜にせまい部屋がむせかえるような体臭を流して女のいのちの火がめらめらと燃え立つてゐるのだつた。

四

「しばらくひとりで、縛られた姿をよう研究しておいなはれ。僕はこれからお風呂や。そのうち、もつとおもろくなつてきまつせ」

香月春夫は千佳子の耳に口をつける程小聲でいうと、横座りに座つてゐる千佳子の腿へも縄をかけて、這い出すことも出来ないようにした。そして唐紙をしめて出て行つてしまつた。

小さな電気ストーブがついていたが、唐紙の間からのすき間風が、裸の体をそうけ立たせた。千佳子はその寒さより、手や足の痛さの方が苦しく、それをこらえているのがやつとだつた。

しーんとした部屋に隣のささやきが、手にとるように聞えてくる。

「あんた、ほんとに眞木千佳子と別れられる？」



玲

え

女の声が言つた。

千佳子は思いがけなく自分の名を言われ、耳を針のさきのようにとがらした。

「さあ、どうだろう？」

わざとからかうような男の声だつた。

——讓次！——

千佳子の血が瞬間逆に流れた。

「またひとをじらす。もつといじめられたいの？」

「どつちが……」

「いいわよ、本当にいじめてやるから……。さあ、この紐で縛つちやおう」

「……」

「素直ね、千佳子にもこんなことさせるんでしよう」

「させやしないよ」

「私だけ？」

「そうさ」

「嬉しい！」

聞くまいと思つても聞えてくる隣の痴態……。千佳

子は肉体に加えられる苦痛など、ものの数ではないと思える程だつた。耳を被うにも手は動かない。その場を去るにも足をゆわえている縄をときようもない。

「こうしてあんたを縛つた時だけ、私のものにしたような気がするのよ。さもないければ、眞木千佳子のものなのか、私のものなのかわからないもの」

「おとなしく縛られているんぢやないか、文句いうことないよ」

「ぢやあ、私のものだつてしるしに此処へキスマークをつけところ」

「だめだよ、そんな……」

「千佳子に見つかりと困るんでしよう？ 憎らしい！」

「あつ、痛い！」

「もつと痛くしてやる」

「あつ、ばか、ううっ！」

「どう？ 千佳子が恐い？」

「恐くはないさ、銭湯へ行つてきまりが悪いぢやないか」

「フフ、……。棚にぶつけたつて言えばいいわ」

「ぢやあ肩だけにしとけよ」

「ううん、胸にも、お腹にも、ここにも……」

「そこは……。ううーッ！ よせよ、ううーッ。だめ、もう、だめだよ……。ううーッ！」男の荒い息づかいに、何をされているのか千佳子は見ないでもよくわかった。女のなすがままに讓次が身を横たえて、千佳子の目の前に浮かび上ってくる。

彼に自分以外のおんながあつたとは……。そして、ことあるうに、自分の目の前の羽目一重で、彼が自分を裏切っているのだ。

——ああ！——

わめいても、呻いても、千佳子の声は猿ぐつわに吸われてしまふ。そして、憎悪と怨みに羽目をも透るような強い視線で隣を見れば、そこにうつし出されている自分の縛られた姿がいやでも目に入るのだ。こんな呵責があるだろうか。

「此処、お隣と部屋つづきなのでしよう？ そんな大きな声出すなら、ハンケチを口の中へ押しこんぢやうわよ」

「どうせ君のとりこだもの、何とでもしたらいぢやないか」

「フフ、可愛いわ。どうしていいかわからない位……」

讓次は女のするまゝになつてゐる。おとなしく縛られている讓次のさまを思うと、千佳子はたまらなかつた。ああ、このいましめがなかつたら……。

千佳子は縄をほどこうと、身をもむようにしたが、手や足がよけいに痛くなるだけだつた。

それにしても、相手の女は誰なのだろう。向うでは眞木千佳子を知つてゐるらしい。その千佳子が羽目一つ此方で、裸にされて縛られてゐると知つたら、女はどんなに思うだろう。女の勝利感は倍増すに違ひない。まして千佳子に聞かせながら、千佳子の愛人を自分のものにしてゐると知つたら……。

ああ、そんなことは知らせられない。讓次をうばつた女に、それ以上の優越感を味わせるなんて、どうして出来るだろう。此処に自分のいることを、讓次にも相手の女にも今日知られてならないだ。靜かにだまつていなければ……。

しかし、千佳子は今、帰えることも、どうすることも出来ないのだ。香月が来て縄をといてくれなければ、どう動きようもないのだ。

一分一分が針のむしろにいるよりまだつら

い。羽目越しに聞える二人の声は、千佳子の裸身に針をさす。

体中に二人の手でかわるがわるに針をつき立てられるのと同じだつた。そして、その針は皮膚の正面だけではなく、内臓までつかみ出して、めつたやたらに刺しまくるのに似てゐた。肌にぐい入つてゐる縄目の痛さの方が、まだしのぎよいとさえ思う。いつそ、隣の声の聞えない程、打つて打つて打ちすえてくれる方がいい。自分の肉体に加えられる苦痛にのたうち廻る方が、この精神的な責苦より、どれほどらくだろう。

やがて唐紙がすうつとあいた。

香月春夫が飄軽な顔をのぞかせていた。

悪魔というと、人は暗い陰惨なものを想像するだろうが、現代の悪魔は香月春夫の様な明るい軽躁な感じの中にも棲息してゐるらしい。

そして、靜かな自然の中の孤独さより、賑やかな都会の、騒音の中の孤独の方が、やりきれない程深いように、香月春夫にひそむ悪魔は根深く、たくましく、その毒素をふりまいていこうとしているのだつた。

(以下次号)

責め繪放浪記

それは先づ日本髪 of 女であること。いわゆる純情可憐娘型の美人で、縛り方は、絶対に“後手”であること。物語りとマツチした場面には、私は無上の……

長岡 変 一 郎

牧 裕 一 郎 画

(一)

人それぞれの持つ、過去の思ひ出というものは、案外楽しいものである。——たとえばそれが善き事であれ、悪しき事の過去であつても……

私は、勇気を振るつて、この告白記のペンを執る。——というのがソレ、過去に於ける己が、アブノーマルな思ひ出が、恥しくもあり又何となく、楽しくもあるからである。

× × × × ×

私——という人間の異常性は、幼少にして既に芽生えていた。尤もそれは、後になつて、左様自己判断したのであつて、素より幼少の頃にそんな自覚のあろう筈はない。

従つて幼少期の事は省略させて貰つて、話の始まりを、少年期としたい。

私は大正十四年の春に、大阪九條の高等小学校を卒業すると、直ちに谷町洋服問屋街の、露路裏にある洋裁工場に、職見習として住込んだ。

何せその頃の奉公人の世界は、今どきの若い人には、凡そ理解して貰へ相にもない程のいわゆる封建性であつた。——兄弟子達から



は意地悪されるし、子守。掃除。洗濯。飯焚き何もかもやらされた。一人前の職人になる爲には、この辛い辛棒をし通さなければ……そう思つて、その頃の徒弟達は蔭では、ポロポロ涙をコボし乍ら、齒を喰ひ縛つたものだった。

家庭では、一人児として、豊かでない生活の中ではあつたが、存外甘やかされて育つて来た、どちらかと言へば、線病的な私は、この苦しみの最中に、体内に潜在していたのであろうところの異常性が、秘密の楽しみを求めて頭角を現はし始めた。

——美しい女の後手に縛られた……そんな場面の、雑誌や小説本の、口絵挿画に、何となく性的魅力を感じるのであつた。

(二)

御承知の方もあろうが大正の末期頃の小説本や雑誌読物の内容中には、可成多くの「婦女誘拐」やお家騒動に因んでの「美女折檻」の場面があつた。だが物語りの割

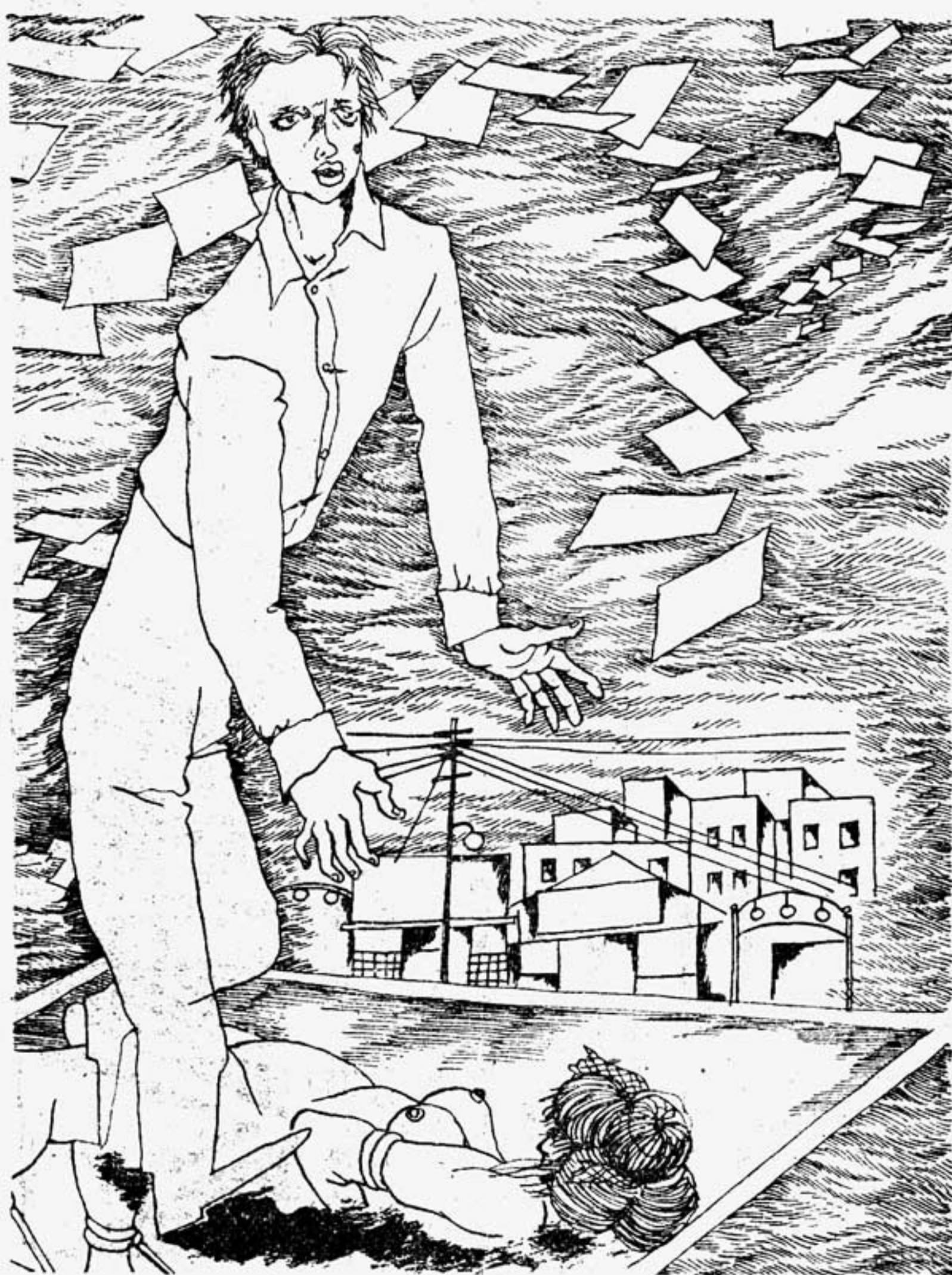
に、挿画は少く、殊に「美女の縛り絵」を探すとすると、中々骨が折れて、容易な事ではなかつた。——それに、その頃の私には、第一、資力や暇がなかつたので、後に口惜しがつたが当時出版されたいらしい専門文献例えば変態資料等には手の出せる筈もなく、主家に

在れば、明輩達の手前もあり、さりとて此の秘密な楽しみの欲求は、日に増し募るばかりで、どうにも閉口した。

何だか、ご大層な言い方に聴えたかも知れないけれども、其の実——なアに未だホンの、その時分は「初步のアブノーマル」であつたに過ぎないので話はこのからである。

——私に、オナニの悪癖を教へたのは、兄弟子の中で、最も意地悪な、そして又早熟でもあつた「良やん」と呼ばれて居た男であつた。

オナニを覚えてか



らの、私のアブノーマルな欲求は、又一段と飛躍した。

私は、さきに、美女の縛り絵（これからは「責絵」と一口に言はして貰おう）に、性的魅力を感じる

——と云つたけれども、それは未

だ真実に「性」に目覚めての事ではなく、その証拠？には、たとえばその頃発行されていた少年雑誌「日本少年」や「少年世界」に連載されていた読物中での、勤皇党に味方する正義の美少年が、幕府方に囚はれて、縛り上げられて虐く扱はれて居る、そんな場面でも、結構満足出来て、——つまり其れ迄の私の求める対象は、なるべく「女」……でなければ「美少年か美青年」でも、良かつた訳であつたのが、それが、オナニーを覚えてからは、今度は絶対に「美女」を対象としてゐなければ、承知出来なくなつたのである。

その上、私の欲求は、次第に七六ツかしい要求をする様になつて、まるで恋人を選ぶかの様に、縛られた女の容貌にも「好き嫌い」が生じ、又、縛り縄の掛け方にも、撰り好み

をする様になつた。

(三)

こうして、私の欲求にピッタリ当筈のもの——と云へば、それは先づ「日本髪の子」である事。被縛者が年増や毒婦型で無い、いわゆる「純情可憐娘型の美人」である事。縛り方が絶対「後手」である事。縄目は「乳房を縛る程度の高胸に、ガツチリ三巻以上」してある事。等々。無論、絵だけではなく、物語りとマッチした場面のそれが、私には無上の恍惚境であつた。

容貌に就ては、中々面倒で、誌上では一寸得心の行く様に述べ難いが、大体のところを紹介すると、——丸顔よりも比較的「面長」の方を好み（と云つても、あんまり長いのは

嫌いで、往年の映画女優酒井米子等は、嫌の部である）又、頬ブクレの顔（同じく往年の松浦築枝の様な……）にも魅力を感じるのであつて——で結局。では、どんな顔が好か？と云う事を、往年の映画女優の容貌を拜借して（女優さんには、まことに失礼）二三述べてみると、先づ私に執つて「好」の部の一番古い馴染の人は、何と云つても「森静子」であつた。「花井蘭子」や「飯塚敏子」も好であつたし「松浦築枝」も絶対嫌い……という程でもなく、同じ頬ブクレの顔でも、「大倉千代子」は大好きであつた。（この辺の心理が、筆では、私には現はせない）

諸——責め絵の対象に、映画女優さんを引つ張り出した責任上、これからの私は大衆文学に現はれた「責め」と、映画に現はれた「責め場」について、無論文献的ではなく私



嫌いで、往年の映画女優酒井米子等は、嫌の部である）又、頬ブク



自身の体験告白として稿を進めて行き度い
——。

話が少々後戻りする。

「良ちやん」にオナニーを教へ込まれた頃から世上には大衆文学が汎濫し出した。——大衆文学全集が刊行された、昭和の参年の頃には、私も、もう雑役小僧ではなく、兄弟子顔で本職に専念出来る身分になり、従つて幾分の資力（一ヶ月五円）にも恵まれたので、本職の洋裁習得に精出す傍ら僅かな暇を見つけては、賣め場面のある読物を漁り求めた。

(四)

大衆文学全集を、入手した事は勿論であつた。

この全集本の中で、私の異常欲求を満足させて呉れるに足りる、読物とその場面のマツチした挿画に接する機会の比較的多かつたのは、かの前田曙山作「燃ゆる渦巻」や、大佛次郎作「鞍馬天狐余燼」等であり、両者の挿画は共に、井川洗崖画伯の筆であつたと記憶して居る。

又、賣め場面の挿画が無いのが、残念で堪らなかつたが、文章のみの賣め場なら、同じく大衆文学全集（続）に、生田蝶介作の三部

編の一節「妖説天草丸」があつて、文中園江という娘が、他にも誘惑して来た女と共に蟬丸というサヂストに全裸で責め虐まれる場面は、私をして遂に射精に至らしめた。（附、妖説天草丸のみ單行本としたのも入手したが、これにも、その挿画が無かつた——思うに、当時……女を裸体にして縛り上げた絵はなる可く画かなかつたのであろう？）

私は、こうした「地獄絵」と「地獄物語り」を求めては、なけなしの財布の底をハタク事が屢々であつた。——無論、成可く時代物をと希つたが、次々と新しい場面を求めるの余り、遂には現代物であらうと、又、西洋物であらうと、事——女の賣場の現はれる読物なら、片っぱしから読みまくつた。

「犯罪科学」や「犯罪公論」或は「怪奇クラブ」等々。当時の刊行雑誌を書籍店内で、パツ／＼と簡単にめくつて見て、「こいつはキツト、あの場面があるナ……」との第六感が働いたら、私は胸をワク／＼させて、その本を買求めた。——月刊雑誌を、余り永く立読みされる事に書籍店主が嫌がるし、当時の私は、未だまだ人前で、そういう本を何時迄も弄くる勇氣も無かつたので……。

その結果時には、折角胸をはづませて買つ

て来た雑誌や小説本だが、主家に歸つて内容を熟読してみると——「なアーんだ」と失望する様な事にも、度々出会した。

そんな時、私はその本を、直ちに古本屋に叩き売つて了はねば、気が済まなかつたのであつた。

私は、然し不覚にもこの当時まだ自分がサヂストであるとも、又マゾヒストであるとも、自覚し得なかつた。

何故？……なら……私は又、その頃、遊廓に上つて遊び通常な方法による異性との肉体交渉にも、何等缺陷を自分の軀に感じなかつたからで——但し、異性との情交の際に、責めの場面を想起する事に依つて完全な「アクメ」に到達する事が、早いという事は認めていた。

(五)

父が、九條の自宅で病死して、同時に家が没落した。

四十の坂を越した母には、何等自活力がなく、仕方がないので、京阪沿線枚方にあつた親戚に預けて、毎月幾ばくかの小遣いを、滯す事になつた。

そうになると、私の懷具合が、急に悪くなつ

て来て、是迄の様に何やかやの読物を、漁る事は自由でも入手する事が、難しくなつた。

遊廓に登樓する事は猶更出来ないで、自然

——性の衝動は、倒錯一辺倒に奔流するしか無くなつた。

賣め絵を対象として、オナニーもやつた。

然し、絵や物語り丈では、何かしら物足りなくて、もつと現実的な刺戟が、欲しくなつて、その結果が、私は映画の中に、最もこの欲望を満たせて呉れるシーンの現はれるのを期待する様になつて、それからの毎月二回の公休日には、大阪市内を駆けずり廻つての、賣場のある時代映画を上映している館を見つけては、これに入場し観覧した。

当時の映画は、無声時代であり、大衆文学を映画化した演し物が多かったので、私には「うつつつけ」であつた。

即ち、——読物中では「女の賣め場」があつて、これの挿画が無く、失望していたものも——それが映画となつた場合のそれには、原作以上の素晴らしい「賣め場」が見られたり殊に、映画では実際人物が動くので、絵を見

るのとは又違つた「現実的な刺戟」が求められるので、爾来——私は、賣め絵と、賣め映画の両道を追う様になつた。

その頃の映画界は、松竹。マキノ。帝キネ東亞。日活。等に各社競映で、その上映館は大大阪の南北東西。どちらの盛り場へ行つても、一通りは立ち竝んでいた。

九條新道から、茨住吉境内にかけての、西大阪歡樂街。南は、道頓堀千日前から新世界方面に大きく枝を拡げていたし、東は玉造日の出道界限がソレ。北は、天神橋以北即ち十丁目筋に点在して、これが北大阪歡樂街であつた。

私が映画館の前に立つて、先づ爲すべき事は、それ等上映館の表に掲示してある、上映中映画のスクリーンを眺める事であつた。

スクリーンの中に、自分の好む「女の縛られて居る場面」——それがあつたら、一も二もなく入場するが、無かつたら、他の社のものを演つて居る上映館の表に、行つてみる。

ところで、私がこの自己の持つ妙ちきりんな性癖の爲に、狼狽へてキリキリ舞する時が

ある。——それは次の様な場合であつた。

(六)

上映中のものや、或は次週上映予告のスクリーンを、華々しく上映館の表に、飾る様になつたのは、かの時代劇の立廻りに際し、拍子木で、ガチャガチャと板の間や、マナ板を叩いて調子をとつていたのを、和洋管絃合奏に切り換え、同時に、それ迄、新派とか旧劇とか云つていたのを、現代劇。時代劇と呼び改められる様になつた頃からだつたと、是又記憶して居る。

話が少し横道へ外れていた。

私は映画館の前に立つて、スクリーンを念入りに見て廻る。

一つの館で、それらしいものが見当らなければ、他社のものを上映している館に行く。

——盛り場の館は、大抵近くに寄り集つて居るので、各社別の上映館の前を、一ト互り見て廻るのも、そう時間は掛らない。が、——

若しこの東西南北何れか一方の盛り場の、各社のどの映画中にも私の求める賣め場のスチ





ールが見当らなかつた時。——又これとは反対に、私の求める場面のそれを二社或は三社の異なる映画館のスチールに、それぞれ見出した時。……このどちらの場合にも、私は妙に狼狽へたのだから、全く今惟うと笑へぬ喜劇という外はない。

何故——そんなに狼狽へなければ、ならな

かつたかという、これにはチャンとした理由がある。(当時の私のこの気持は、アブ同好の諸兄になら、幾分理解して貰へるかも知れぬ事を期待して、私は猶この稿を続けて行き度い。)

何せ、その頃の映画は、今どきの様に一日四回も五回もやらなかつたのである。

大人三十銭。小人半額のこの時代でも、三本立或は大サービス四本立の館さえあつて——普通の日は大抵一日二回。日曜祭日等数日丈が三回上映されるのが、決まりであつた。

——現代劇。洋劇。最後に、時代劇。とこの三つが、十五銭なり三十銭で見られるのだから、全く現今の銭取り一方式な、映画会社は昔の事を思い出してみるとよい。

又、話が少し横道へ外れた。恐縮々々。

その時代。大阪地方の洋服仕立職の休日は毎月朔日、十六日。か又は、第一第三日曜日の二通りで、俱に一ヶ月二回に決つていて——私は、ズットその前者で過して来たものだつた。

封建的(近代の様に基準法等ありません)なその時代の当主は、この二回の公休日でも時々強制的に、取り消して終う事さえあるし——それに休日と決つても、肝腎の小遣銭を渡して貰へるのが、大抵晝食後であつたから……で結局、晝飯を主家で済してからでないと自由な時間を得て遊びに出る事が、出来ないのも同然で、私の場合は殊更にアブの欲求目指して盛り場に飛出したのだから、その時間たるや、正に貴重この上なしであつた。

たとえば帝キネ映画の時代劇スチールにそ

れが見当らなければ、すぐ近接の日活なり、マキノなり、其の他の映画のスチールを見て廻る。ところで、一つの盛り場の、どの映画にも、責め場面のスチールが見当らなければ、私は又しても他の盛り場の何れかへ移動して、その欲求に叶う場面のあるスチールを求めて、彷徨うのである。

(七)

さうなると、時間を浪費して、さて肝腎の気に入ったスチールを見付けてその館に入場つても、タツタ今自分の欲する場面は済んで了った後で、次の時間迄待つても、さて現れた場面はと見れば、案外予想に反して失望したまゝ折角の一日が終つて了う事もあるからだ。(盛り場の映画館も必ずしも一流館ばかりではなく、二流館三流館があつて、その中には、前週或は前々週——否、もつと古いのを上映しているところもある事は、今も昔も変りはない。)

では又、責めの場面のスチールが、二社以上各々異なる場面が出ていて鉢合つたとして

その場合なら、何も狼狽へる必要はないではないか。……そうなれば撰り取り観取りで、むしろ欣喜雀躍……の筈だが……と、こいつは一寸、アブ諸兄も苦い顔をされるかも知れないが、これにも訳が大有り名古屋である。というのは——映画ファンなら、克く御承知の筈で、彼のスチールという物は、必ずしも、上映々画の実際場面の、分身だとは……つまり、スチールにあつたからといつて、その場面が必ず有るとは云えない。即ち宣伝用として特写したものが往々にして見受けられるであらう——。

尤も、スチールは、映画の部分的な場面紹介の役を果すのが目的だから、スチールに無い場面が、実際映画に現はれるのは、これはむしろ当然としても、前者の場合は、露骨に云へば「お客騙し」である。

私が、欣ばねばならぬところを、あんまり嬉しくて、却つて不安を感じ狼狽するのも(勿論それは私がアブなるが故ではあるが)この「お客騙し」に引つ掛る事を懸念するからである(何度も引つ掛つた)

スチールに満足して飛び込んで、期待通りの場面が現はれれば、それでこの一日は、私に執つては「最良の日」となるのであるが、若し前記の宣伝用お客騙しのスチールと知らずに飛び込んで、そこで実際映画に、それが現はれて来なかつた場合——同じ日に又他社の映画の上映館に入場つて、どうでも自分のその欲求(恥し乍ら私は責め場面の映画によつて、オナニーを行つた)を満そう爲には、先にも言つた、当時の興行が、三本立であつたり、又、二本立なら相当長尺物で、しかも晝夜二回しかやらぬのだから、マゴくすると、時間的にズレて了つて、入場料の使ひ損——おまけに、他の館に入場り度くても、もうその時は興業街は、みんな閉場て了つて、この場合も前者の場合と結果は同じ——つまり「虻蜂取らず」の一日に終るのであつて、私は、こうした憂目?に何度も出会した結果が、遂にはせめて……の懊惱を紛らはす爲——責め場面のスチールを、窃盗しようと思つた事さえあつた。

(未完)





|| 妄執の愉悅 ||

妊婦漁り

……それが前後三回に及んだ。その度に嫂の腹部はセリ出して、ソツと撫てゝ見ると、皮膚は最大限度に緊張している。又その時の掌の感觸がなんとも言えないのだ。

當麻慧郎

濱田稔畫

三年前の七月のことだ。

僕は店の用で近所まで来たから、ちよつと兄の家によつた。玄関が開かなかつたから、横手の木戸から庭に廻つた。庭と云つてもホンの五、六坪で、すぐ座敷の縁側になつてゐる。その座敷のスダレの蔭に誰か寝てゐた。

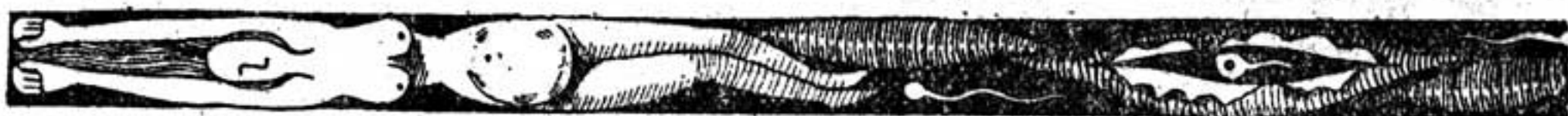
それが嫂だつた。

「嫂さん！」と呼んだが、起きない。兄貴の家だから遠慮もない。僕はそ



のま
ムヅカ
く座敷に上
つた。上つてから、

嫂を起す
つもりだつた
のだ。
ところが、起そうと
して、ハツと思つた。嫂は洗濯か何



かの後でひどく疲れていたらしく、グッスリと寝込んでいます。それが腰巻一枚の、あられもない格好なのだ。上から浴衣を羽織っていたらしいが暑さと寝乱れで、殆ど裸にはかゝっていない。

いくら見慣れた嫂とは云つても、それはまったくひどい寝相だった。まだ若い僕は、思わず顔を赤くしてしまつた。腰巻の前が割れて、白い太腿が見える。いや、それどころか……僕は見ていられなくつて、視線をそらしたが、やはり、又見てしまつた。

そんなに近々と僕が立っているのに、嫂はまだ眼が覚めない。やはり身重なので、よほど退儀だったのだろう。九月の始め頃出産の予定だと聞いていた。だから、よくは判らないが、その頃はもう八ヶ月か、九ヶ月だったのではないかと思う。

腰巻一枚の腹部がコンモリと、緊張した曲線を描いている。まったくの太鼓腹だ。僕はそれまでに、嫂の腹部を、それほど注意して見たこと

はなかつたのだ。しかし、そうして近々と眺めると、まったく妊婦の腹と云うものは、ヘンなものだった。殊にそんな風に、仰向きに寝ている妊婦を見るのは始めてだったし、異様に刺戟的なのだ。

上半身にはこれも力一杯張つた双の乳房がまるで胸部を圧するようだ。それから、櫻桃^{さくらもも}ほどにも大きな乳首が、無気味なほど黒々と突出している。その乳房の下の辺りから、腹部はゆるやかなカーブを見せて、力一杯に漲つた隆起が、再び同じカーブで下腹部に達している。

僕は驚きと、好奇心から、ツクムと嫂の寝姿を眺めた。始めは子供のような驚きだった。しかし、当時既に二十四歳の僕は、当然その膨脹した腹部から、その原因として、兄夫婦の夜の営みを聯想せずにはいられなかつた。

その時、僕はまだ女を知らなかつた。本や絵や、友人たちの話で、夫婦関係の何ものかを知つてはいたものゝ、本質的には完全な童貞だった。しかし、その嫂の、男女の情事とそのまゝ表現しているような、しかもひどく寝乱れた姿を見ると、気持が乱れずにはいなかつたのだ。

その時、眠っている嫂が、ゴロリと寝返えりをうつた。それまでねじり合つていた両足がホドケて、ますます挑発的な、とてもたまらない恰好になつた。私は思わず、ゴクリと生唾をのみ込んだ。今の今、妊娠の原因となつたことを想像していた僕は、頭がカァーッとなつて、もうそれから先のことは夢中だった。

とにかく、数分後、でやつと嫂は薄目をあけた。しかし、もう、どうなるものでもない。それに、後日、嫂自身が囁いたところによると、嫂は寝返りを打つ以前から、僕が寝姿を見ているのに、気がついていたらわけで、寝がえりをうつたのも、僕を挑発させるためだったのだ。

そんなことゝは知らないから、僕は夢中だった。そして、生れて始めて知つた快楽に、気が狂いそうだった。実際、それは全身から火が吹くような思いだった。僕はその後で、すっかり取り乱して泣いたりしたが、嫂は面白そうに僕をからかつたのだ。

その時のことが忘れられず、僕は兄の留守を見計つては、嫂の許を訪れた。それが前後三回に及んだ。その度に嫂の腹部はセ



リ出して来て、ソツと撫で、見ると、皮膚の最大限度に緊張している。又その時の掌の感触がなんとも云えないのだ。

その不思議な昂奮、刺戟感が、僕の罪悪感を麻痺させて、僕は人目を忍びながら、臨月の嫂と逢いびきを重ねずにはいられたのだ。こんな僕の異常趣味を知るや知らずや嫂は僕のどんな要求も決して拒まず始めての時のように、かえつて薄笑いしながら、若い僕を擲擲した。

最後に嫂に逢つてから一週間目に、家から電話がかゝつて来て、僕は嫂が出産したことを知った。その時はひどく自責の念にかられて、僕は狼狽した。どうしてか、嫂に逢うのが怖いような気持ちもしたのだ。しかし、勇気を出して見舞に行つて見ると、初産にしてはひどく大きいと云う女の赤ン坊が傍に寝ていて、嫂はひどく面変わりして見えた。

今までの嫂とはすっかり変つて見えた。今迄の何か鈍いカゲつたような、もの憂い表情はなくなつて、僕

の知らない、他人のように澄ましている。それが白々しくて、少しも親しめない感じだった。

その時は、他の家族が居るセイだろうと思ひ、又暫くして、兄の留守に訪れて見たが、その感じはやはり同じだった。多情な嫂は、「やつと産んじやつて、セイくしたわ」と云つて、以前のように僕を誘つたが、どうしてか、僕には反応が起らなかった。

あれほど膨脹していた腹部が、ペッチャンコになつてゐる。それを見たゞけで、僕は何かガツカリした。何度眺めて見ても、もの足りないのだ、嫂の生々した表情も、全身の活動的な様子も、僕は氣に喰わなかった。ちつとも刺戟がないのだ。

僕はなにか索漠とした気持ちで、嫂の手をふり切るようにして、歸つてしまった。それか



らは、嫂一人の時には、一度も近よらないようになつてしまつたのだ。

その頃までは、道でも妊婦など氣にしたこともなかつたのに、急にそれが氣になつて仕方がないのだ。妊娠している女性が眼について、僕は思わずシゲく眺め、前から見たり、すぐ後をつけて歩いたりした。妊婦特有の青白くむくんだ肌や、肩で呼吸をする様子を見ると、とてもそゝられた。

嫂の肉体を知つて以来、僕はひどく放縱になつていたので、一度は公休日に、思い切つて商売女の処を訪れたこともあつた。しかし、思うように僕は満足出来なかつた。すぐ僕の傍に横になつてゐる女の、扁平な、ペッチャンコの腹に手をふれたゞけで、水をかけられたように、僕の情欲は消えてしまふのだ。

何とかして、遊んでやろうと努力したが、そして、相手の女も割合に素直な人で、いろく協力してくれたけれど、結局徒勞だったのだ。

この事件は、ひどく僕の自信を失くし、大変なことになつたと心配した。不能者になつたのではないかと、一人で煩悶した。あれこれと、本も読んで見



たりしたが、僕のようなケースは、何処にも見当たらないのだ。

嫂でなければ駄目なのか、とも思つたが、その

嫂に対しても、出産後

には何の誘惑も感じな

かつたのだから、やは

り僕は妊婦に対して、

異常に偏執した想いを

抱くようになったこと

が判つた。それに、自

分でそんな風に自己分

析して、妊婦に対する異

常性欲を自覚すると、よ

いに症状が悪くなつて来た。

「妊婦でなければ駄目」と云う先

入観に支配されて、普通の女性に対

しては、殊更によそ／＼しくなつて

しまう。又反対に妊娠している女性

に出逢うと「この女なら……」と云

う観念にとらわれるから、その感情

を押えるのに、とても苦勞しなければ

ならない。まったく、妊婦、それ

も臨月近い、大きな腹をかゝえた女

を見ると、苦しいほどの興奮を覚え



だ。

だが、困つたことには、何しろ相

手が現在妊娠しているくらい

だから、殆ど人妻なのだ。

人妻相手の遊びだから、非

常に危険性が多い。しか

し、商売女の妊婦と云う奴

は、捜す方が無理なのだ。

だが、なんとかして、飽く

ほど妊婦に接して見たいと

悲願した僕は、それから煙

草銭も節約して、その悲願

のために備えた。友人との御

茶代もキリツメて、貯金を積立

てたのだ。こうして、半年間と云

うものは、来るべき快樂の日を夢

見ながら、缺乏のうちに過した。

その間に、僕は慎重に考慮した上で、あ

る爺さんに、僕の変つた希望を打明けたの

だ。その爺さんは僕がよく行く汚たない屋

台のうどん屋で、近くの××の貧民窟に住

んでいる。この親爺は僕の告白を聞いて、

ひどく呆れたようだったが、金になること

だからすぐ呑込んで、

「ようがす。いや、あんたさんだけに限つ

る。その衝

動を抑制するのは、並大抵のことではない。

こんなギリ／＼の欲望から、僕の妊婦漁り

が始つた。僕はある大商店で事務をやつてい

るが、日中はよく銀行や取引先に出かけるし、

夜分は比較的自由な時間がある。それを利用

して、僕は自分の片よつた肉欲を処理するの



たことじやない。よくあり勝ちのことです」

と、御世辞を云いながら、引受けてくれた。

それから僕は店で事務をとりながら、今日か明日かと、爺さんからのよい知らせが来るのを待った。またたく、二、三日は仕事も上の空だつたのだ。

第一回目の知らせがあつた。僕は土曜日の晩七時に、変装のつもりで眼鏡をかけて、××の爺さんの家に出かけた。打合せ通り爺さんは仕事に出かけて留守だが、歯欠け婆さんが万事取り仕切ってくれた。僕が行った時、もうその薄汚く傾いた二階に、女は来ていたのだ。

僕より十ほども歳上で、指も節くれ立ち、臍付もゴツ／＼と骨ばつた女だつた。普通の人ならこんな世帯賃した女を見る



と、すっかり興奮めして性欲なん

イキナリその女の、セリ出た腹部が眼について、臍中がカッと熱してくるのだ。やはりもう十月になろうと云うような、大きな腹が、木綿の着物の下でユツタリと息づいているのだ。待望の、妊婦の肌だつた。僕は自制を忘れ、まるで野犬のようだつた。大きな腹の、緊張し切った感觸が、再び甦えつたのだ。女は牛のように鈍重で、素直だつた。

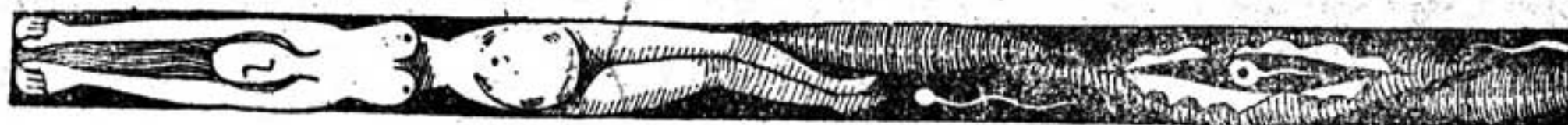
爺さんと僕との契約では、一回に付本人に七百元、爺さんに周旋料として三百円と云うことになつていたが、女に聞いて見ると、親爺は中間搾取をやり、二百円もピンハネして、女には五百円しか渡してないと云う。

それでも、産み月近くなつて、日雇にも出られなくなつた女は、「一晩に二、三時間家を明けるだけで、日雇の二日分に近い日当になるから……」

と、結構喜んでゐる。

そんな話を聞くと、さすがに気がトガメたが、それでも妊婦に対する僕の情熱には変りはないのだ。僕は毎週土曜日の晩に、この爺さんの家で、女に逢つた。

ぞけン 飛んで仕舞うの だろうが、僕は、そんなことは眼中になかつた。



貧乏世帯の内儀さんで、金で買われた女は、その紙幣ゆえに、至極柔順だつた。裸にすると、日やけした顔の割には色白で、肉付の逞しい裸体が現われる。その女を立たせて横から突き出した腹を眺めたり、寝かせて、上から見下したりする。そのハチキレそうな太鼓腹は、何度撫でて、飽かないのだ。そうしていると、この妊娠の原因となつた、この女と、その夫との営みが必然的に頭に来て僕はしつこく、それを女に聞き訊した。

始めのうち女は、「阿呆らしいことを……」と、云い澁つたが、その夜の報酬を一枚増額することを約束すると、口重い様子ながら、ポツリポツリと、夫との、夜の情事を語つた。その朴訥な描写が、ひどく僕のひねくれた欲望を満足させてくれるのだ。

この女とは四度逢つたが、その後は女の出産で、当然取引は中止された。だが、欲深の親爺は、すぐ代りの女を見つけ出してくれた。二回目

は瘦せた色黒の女で、割合にハッキリした性格だつたが、腋臭がひどくつて、これには驚いた。しかし、

「普通はそれほどでもないんですが、どう云うものか、妊娠すると、臭いがとてもキツくなつて……」

と、女がすまなさそうに弁解するのを聞くと、僕にはかえつて面白くさえなつた。

それから又、妊娠すると、かえつて性欲が昂じると云う話も聞いた。平常の時よりも、ずつと快感が大きいと云うのだ。しかし、夫の方は臨月近くなると、興味索漠となるのか、一向に欲望を示さないと云う。

「それは、あんたの躰をいたわつて、自然遠慮するのだろうか？」

と、云うと、女は、

「そんなことはない、遠慮などする人か……その証拠には、お産がすめば、十日と待てないで、乱暴なことを仕かけてくる始末だからね」

と云つて、さもく珍しそうに、僕の顔を見る。まったく、それではこの女の夫と僕では、正反対と云うわけだ。僕が、ずい分変り者に見えるらしいのだ。

この女たちは、皆その亭主に内密か、或は

その暗黙の了解を得て、金のために、僕の異常嗜好のために躰を売っているのだ。しかし、僕には少しも罪悪感はなく、その女たちと、前記のように他愛ない話をするところが、無上にたのしかつた。

僕の思いのまゝに出来る。妊婦の肉体。それだけで夢中だつた。薄汚くシミだらけのその一室きりの二階で、僕はこうして、幾夜こんな女たちと、不思議な夢を結んだことだろう……。

この時期の女たちは、皆そんな風で生活に追はれていたから、身装も貧しかった。素晴らしい美人にも、無論ぶつからなかつた。たゞ商売女とちがつて、素人か、素人に近い女たちだつたので、大抵感覚が敏感だつた。二時間も彼女達と部屋に居ると、僕はタツプリ満足した。

今でも目をつむると、赤茶つけた畳の上に、ゴロンと大きな腹を隆起させて、横たわつた女の姿が浮んで来る。僕にとつてはそれは少しもグロではない。いや、グロなるがゆえに、愛着を感じるのか？

こんな僕の生活は、かなり永く続いた。その後、未だ随分面白い話があるが、また詳しく書くことにする。

豹

テッド・メイスンはG・Iではないが、駐留軍の仕事をして居るドイツ系のアメリカ人だった。

栗色の髪が形よくウェーヴし、ドイツ人によくある極端に眼窩のひつこんだ、それと対照的に鼻が根元から高く尖つて居たが、愛嬌のある茶色がかつた青い眼がくる／＼と動い



て全体から得た感じは美男子の部類に入る方だった。

彼は月給があがつたと言つて喜んで居た。そのお祝いに「アマゾン」へ行つて飲もうと言ふのだ。

「アマゾン」と言うバーは、外から見るとヒソソリとして居て、クリーム色の灯が僅かに舗道にこぼれて居るだけだが、ドアを押して中に入ると、ムツと溢れるばかりの暖気にむせ返るような女の体臭と、酒の香と、この店特有の匂いがミックスして全身におそいかかり何か異国の酒場へでも入つたような雰囲気を感じるのだった。

たしかに此処は熱帯のアマゾン、中に棲むあやしき女性達は、ア

続・醒まされたマゾ…… 完結篇

「アマゾン」の牝

私は俯伏せになつたまま、れん子の足の甲へ顔をのせて、彼女のつぎの命令を待った。途端にれん子の足が亂暴にあがり、私は仰向けにひっくり返された。——彼女は私の顔の直ぐ前に立ちはだかつた

鬼山 絢 策

中 川 彩 子 画

マゾンの魔境に息づく妖精なのだ、この扉を排して入ってくる男共の肉を咬い、骨を舐やぶるために網を張つて待ち受けて居て、ハッシシの妖気を吹つかけて、身も心も痲痺させてしまふ、恐ろしい泥沼のような魔所！。それを意識しつゝ此の魔境の魅力に惹きつけられて我から吸い寄せられて行く哀れな羚羊カモシカのような男達。

自分もその一人だと思ひながら、既にハッシシの妖気にあてられて居るのか、この扉の前に立つと吸い込まれるように中へ入つてしまふのだつた。今夜もテッドの大きな身体の後が続いて入つた。

れん子は「妾は「アマゾンの女豹」よ」と言つ

て居たが、今夜も二匹の羚羊が訪れたのを見ると、奥から露はな両腕をひろげて飛出して來た。

「まあ！テッデイ！」

彼女は私にば見向きもせず、真直ぐにテッドにとびついた。彼の方が肉づきも豊かで、その肉の味もおいしいのであろう。

テッドは太い両手でれん子を抱きあげて接吻の雨を浴せた。そして傍のソファへ我から下になつて身を投げかけた。れん子はその上に折重なり、

「こないだ来るつて言つてどうして來なかつたの。サターデイ！。土曜日サターデイの夜よ。」

「ゴメンナサイ。ビジネス。ダメデシタ。」

私は反対側のソファへションボリと腰かけた。

テッドはれん子の首筋へキスし、下になつたままれん子をずりあげてふつくらとより上つた乳房の上へ唇をおしあてた。

その時始めてれん子は私の方を向いて、

「あら、あんたも一緒だつたの」

と始めて私の存在を意識した。私はテーブルに來たはる子と言う三十もかなりすぎた女にウキスキーを頼んだ。

はる子がウキスキーのグラスを持つてくるとテッドは寝たままで指を一本出した。「角壇のまゝ一本持つて來い」と言う意味なのだ。

れん子はウキスキーのグラスをもつて、テッドの上に重なつたまま飲ませてやつた。れん子は私の方を向いて

「慌しいつて英語で何て言うの？」

「ビジ」

「ビジネス、ビジ？」

れん子とテッドの話は英語と日本語の單語のやりとりだつた。終戦後のアメリカ人は日本人と話す場合に、あまり日本語を使はない。相当日本語を知つて居るアメリカ人でも、相手が英語が分らうと分るまいと英語で喋つて来る。相手に理解を必要とする以外は総て英語だ。反対に日本人は、出来るだけ英語で喋べろうとする。少し位違つて居るなど自覺しても心臓で得々と喋つて居る。然しアメリカ人は終戦後の日本人の多くが英語を話せるようになつたと思つて英語で話しかけてくるのではないのだ。その真意が分らずに、話しかけられた日本人は自分が英語を話せるものと見込みをつけられたと思つて、名譽のつもりで喋つて居る。哀れな日本人！

テッドなども日本人に対して殆んど英語で話して居る。勿論初対面の日本人にだ。それなのに「アマゾン」では、れん子に対しては、自分の下手な日本語を苦心して喋つて居る。二人の会話の内容は幼稚なもので傍で聞いて居られない。

時には非常に露骨な、下品な單語がとび出す。れん子は面白がつてゲラ／＼笑う。私は専ら二人の通訳を仰せつかつて居るだけだ。テッドと一緒に来るのではなかつたと後悔

「バカ！ 金のたかのこと言つてるんじゃないやないつて言つてるじゃないか。テッドの持物は和製と違うんだからね、舶来なんだよ。」

言葉は、いくら無知なれん子でも酔つて居なかつたら口をついて出なかつたろう。彼女は趣味嗜好が「舶来」讃美者だつたが、それが今露骨に地金を出して来たのだつた。

私は怨めしうにれん子の白い裸身をみつめて居た。

「テッドと一緒にでよけりや連れてつてやるわよ。ハ、ハ、ハ、ハ。」

れん子はテッドに抱かれたまま笑いながら言つたが、その眼は、私の瞳の奥迄、刺すように光つて居た。

「それでもいいよ。」

ああ！、私は何と言う返事をしてしまったんだろう。

テッドと一緒に行けば、私がどう言う様な位置に立たされるかそれは火をみるよりも瞭らかなことなのだ。「セカンドマン」の位置ならよいが、そうではない、れん子。テッド。私はどうしても「三枚目」だ。ピエロにされるのだ。玩具にされるのだ。れん子の眼がそれを語つて居る。

だが私は承知してしまつた。私の心の中の別の私が、私の考へる暇も與へずに、私の首を縦に振らしてしまつたのだ。

そしてその瞬間から私は「別の私」に支配

されてしまつた。

「ねえテッド、ユーメタイクオクムラ、ウィズユー？（おくむらをいつしよにつれていてもいいでしょう？）」

「ウムフム、OK！」

テッドは私の顔を見てニヤリと笑つた。彼はまだれん子の気持を知らないのだ。一緒に遊ぶ位のつもりで居るらしい。

「じゃ連れてつてやるわ。その代り今夜はお供の役だよ。」

「ウン……。」

もう私はれん子の口から出る言葉が命令のように感じて居た先刻迄の意地で張り合つた勇氣はれん子の身体から発する酷しい情熱のために溶ろかされてしまつた。

「今夜は二人の隷属だ！……」

「別の私」迄、その命令して居るのだ。然も「別の私」は、その期待にゾク／＼と喜んで居る。私の勇氣が死力を絞つて最後の反撥を試みようとして、

「おいれん子、テッドばかりくつついて居ないで、僕の方にも来てくれよ。」

と言はせた。

「お供がぜいたく言うんじやないよ。これでも抱いてな。」

れん子はテーブルの上へ、裸の脚をドスンとのつけて、私に突きつけた。

私の最後の「勇氣」も脚をのせられたテーブルのように、素直になつてしまつた。

二

れん子は店に「カンバン」迄居ずに、テッドと私と三人で出た。こんなことは店の方から言へば法度であろうが、そう言う我が儘を振る舞へるれん子は、店で確かに実力のある女なのに違いない。

ホテルは例に依つて澁谷の、この前行つたところだつた。

「あの、お部屋一つでよろしいんですか？」女中が奇妙な三人連れに、はかりかねて尋ねた。

「ウン、一つでいいのよ。」いつもの部屋ね。れん子は自分の家へ歸つて来たように、ゾク／＼と上つて行つた。

「バスへ入りましょう。奥村は待つてね。」

れん子は二人の男の前で乱暴にドレスもパンティもかなぐり捨てて裸になると、まづ先にバスルームへとび込んで行つた。

「エクスギエズミー」

テッドは笑いながら裸体になつた。胸から

毛むくちやらな、厚い肉の板が出た。ヴィクターマチュアのように逞ましい上半身だった。そして彼も私の方を向いてその全裸を見た。

臍の所迄下から毛が這い上つて来て居た。今更ながら外人の身体が獣のように見えた。

私はひとり部屋に取り残されて、身の置場に困った。

「キヤアー」と言うれん子の嬌声が浴室から洩れてくる。

れん子とテッドは一体どんな風にしてバスへ入つてゐるんだろう。この前の私の時のようにして入つて居るのだろうか。そしてあのれん子独特の「洗顔法」をテッドに対しても行うであらうか。

私の頭の中は浴室の二人の姿があれこれとフラッシュバックのように映った。

身を灼くような嫉妬……その中に私は言おうようなき快感のうずきを知った。

私の足はいつしか猫のように音をぬすんで浴室の方へ向いて居た。

バスルームはすり硝子一枚で距てられて居た。私はその前迄行つて中の様子をうかがつた。

パチャ／＼と湯のハネル音がして居る。そ

れに混つて接吻の音が聞える。

「ウフ、、、」

れん子とき／＼含み笑いを洩らす。

「キスミイ！」

れん子の声。キスの音。

「もう一度！」

ブル、、、ウと奇妙なキスの音。一体ど

こへキスさせて居るのだろうか。ボチャ／＼と湯の音がする。彼女はどこかへキスさせながら、湯を使つて居るらしい。

「キヤアー。こわい！」

れん子の声が吊るしあげられたように天井の方から聞えた。テッドがあゝの逞ましい双腕で、れん子を天井の辺まで差し上げたのだらう。

二人共、バスへ入る音がした。

「ホワットアバーツオクムラ（おくむらをどうするつもりだ）」

「フ、、、。マイスレイヴー（あたしのドレイヴ）」

「スレイヴ？」

「ユウ、ラバー。オクムラ、スレイヴ。いいでしょ。」

「ハ、、、、、。」

テッドは愉快そうに笑つて居る

急にパチャ／＼と湯の激しくハネル音がした。

「アハ、、、、、。」

とれん子の息をはづませて笑う声。

パチャリと湯の音がして「フーッ」とテッドの激しい息使いの音がした。

「アパツッゲツツドラウン（おぼれそうだ。）」

と今度はドターンと物凄い音がした。浴槽からあがる拍子にテッドがひっくり返つたらしい。

「アハ、、、、、。」

パチャリと湯をはねかえしてれん子が出したようだ。

「アハ、、、、、。」

二人は何か格闘でも始めたらしく、れん子のハア／＼と荒い呼吸が無言のうちに続いた「スキイズイング！……（くるしい）」

「降参か。フ、、、。参つたか。もつと舐めろ！舐めやがれ」

早口にれん子の罵声が響く。テッドには意味は分らないだろう。私は自分がれん子に折檻されて居るように錯覚して、昂奮した。

と、突然ツカ／＼と硝子戸の所へ向うから歩み寄つて来てガラリと戸を開けた。

私は逃げる暇もなかった。れん子がタオル



も持た
ずに全
裸で立っ
て居た。タイ
ルの上にはテッ
ドの大きな身体が仰
向けに転がつて居た。
「フ、フ、フ。そこで何し
てたのさ。」
テッドはひっくり返ったまゝ首
をねち向けて私を見た。両脚をぶざまに
ひらいたまん中に、彼の大きな身体に相応し

た××
×××し
て居た。

「妾達の様子を覗こうとしてたんだね。」

れん子は笑いながら右手にモーションをつ
けてピチャリッと私の頬に平手打ちをく
れた。笑つて顔と反比例してそれ

は女とは思へぬ強い痛さだった。

私はヨロ／＼とよろけて硝子
戸に肩をぶつつける程だった

「お仕置は後でしてやる。お

前もお湯にお入り、早く入れ。

三十分間入るんだよ。その間出て

来ちやいけないよ。」

テッドが尻をさすり／＼起きて来た。

私の眼の前を獣の吐の如く、何一つ隠

そうともせず、寧ろ見せびらかすように

して通り抜けた。

私はれん子の見て居る前で裸になった。

浴室に入ろうとした時、後かられん子の脚

が上つて背骨の下の所を思いきり蹴とばされ

た。私はつんのめつて危ふく浴槽に頭をぶつ

つけそうになった。

「妾が呼ぶまで入つてゐるんだよ。黙つて出て

来たら承知しないから。」

ガラ／＼ピシヤリ！と硝子が激しく閉めら

れた。

三

バスの中の湯は白く濁つて居た。二人が散々垢を流したあとだ。私は流して入れ替えようと思ひ、湯の中に右手を突込んで栓を探した。湯が私の顔近くに来ると、プーンとれん子の体臭が鼻をついて来た。私は流すのを止めて、そのまゝ中に入つた。

お湯は私の全身を暖かく包んでくれた。

（お湯だけだ、私に暖かくしてくれるのは……）

（これからどんな仕置が待つて居るのだろう。ノンビリするのは今のうちだ。）

私は湯に首迄浸つて眼を閉じた。

（湯から上つてすぐ歸つてしまおうか……）

とも考へて見た。部署は違ふが同じキャンプに働らくテッドに私の恥かしい奴隷の姿を見せるのは、辛かつた。

だがここで歸つてしまつたら、れん子はもう私を相手にしなくなるだろう。

（あんな無知な低級な女をどうして思い切れないのだ。）

それにひきかえて妙子は純情で、真底から私を愛してくれて居る。もう二度も妙子からの電話を断つて居るではないか。妙子に対し

て恥かしいと思はないか。）

（いや俺は、妙子を決して捨てはしない。結局は妙子と結婚するつもりで居るんだ。その時はれん子との間をキツパリ清算する。それでいいじゃないか。一緒になつてからも関係するよりも、その以前に或る程度堪能しておいた方が、罪が軽いじゃないか。）

私の心の中では、又二人の私が議論し始めた。

（れん子がどんなことをするか。これも体験の一つだ。女のサジストは得難いものだと言ふ。まだれん子の総べてを知り盡したのではないからのでから、彼女のなすがまゝになつて見るのも面白いじゃないか）

私の性向にはマゾが潜んで居ることは事実だが、まだこの頃は半ば好奇心も手伝つて居たようである。

私は浴槽から出て全身をよく洗い、もう一度湯に浸つて、タオルで身体を試く頃になつても、まだ向うの部屋から声が掛らなかつた。

随分悠々やつたつもりだつた。もう三十分は経つて居るだろう。外人は長いと聞いて居たが、斯うも長くかかるのだろうか。イヤれん子が私を焦らすために長びかして居るのかも知れない。

私は寒くなつて又バスに浸つた。さめた湯に熱いのを捻つて出すと、肩や背中から、暖たまつて行つた。

「もういいのよ。いつまで入つてゐるのさア。」その時れん子の声がして、ガラリと戸が開いた。タオルのパヂヤマを着て居た。

私は急いで湯からあがり、身体を拭くのもそこ／＼にして浴室を出ると、パンツを穿こうとした。

「そんなものいいから、パヂヤマを着なさい」パヂヤマを着て脱ぎ捨てられた洋服類を抱へて部屋へ戻つて見ると、テッドはベットで向うを向いて寝て居た。

「フ、ン、嫉けた？」

私は黙つて苦笑した。

「この間の痕はすっかり治つたようね。今夜つけてやるわ。いいだろ？」

部屋の中はポーツとする程暖房が利いて居た。

「そこに四ツン這いにおなり！」

苛酷な女王の第一の命令が下つた。

私は黙つて部屋のまん中に両手をついた。奴隷の宣誓をするんだよ。今夜は此の間より些つと荒いよ。途中でどんなことがあつても音をあげるんじゃないよ。妾のどんな命令

も忠実にきくんだよ。いいか。分つたか！」
グイッと首に体重が加はつた。私は無言でうなづいて見せた。

「よし！お前は奴隷であることを忘れてはいけないよ。」

れん子の体重がスツと軽くなつたと思うと私の頭を跨ぎ越して、前に立つた。私は恐れ／＼れん子を見上げて、顔色をうかがつた。れん子は私をま上から見下し、その眼は妖しくギラ／＼と光つて居た。だがそうしたれん子の表情には、毒婦のような凄味があり、はだけた裾から太腿の上迄露出した肉体は発情した牝獣を思はせた。

彼女はベットの蔭から乗馬用の鞭を取り出して来た。店を出るときどこに隠して持つて来たのか気がつかなくつた。

れん子は鞭の先で私の鼻の頭を小突いた。

「この鞭をよく見ておき！」

と鞭の恐さを威嚇するような態度だつた。「パジャマをお脱ぎ！前よりもつと美事な痕をつけてやる！」

私がモジ／＼して居ると、れん子の手が襟にかかつて、グイと私の背中を露はにした。

ピシーリッ、

と第一声を加へられた。それは確かに前の

皮バンドよりも応へた。ジーンと頭へひどく苦痛と快感！

あとは乱打の嵐だつた。

この前は氣を失つてしまふ程だつたが、今夜はそれよりもひどい打撃であるにかかはらず、私はうめきもだえながらも、意識を失うようなことはなかつた。だが苦痛のあまり私は座位から段々平伏した形となり、果ては俯伏せに逢つてしまつた。

一しきり叩くと、れん子は鞭を止めて、私の伏して居る顔の下に足の甲を突込んで顔を起した。

「前よりいくらか強くなつたね。段々馴れるよ。でもまだこれで加減してやつてるんだよ。ほんとに馴れたら妾の思い通りに叩いてやる。サ、奴隷の接吻を与へてやる。」

私は俯伏せになつたまま、れん子の足の甲へ顔をのせてれん子の次の命令を待つた。

途端にれん子の足が乱暴にあがり、私に仰むけにひっくり返された。息が止る程背中が痛い。

れん子はパジャマの裾を無頼漢のように片手で捲つて、私の顔の直ぐ傍に足をひらいて立はだかつて居た。

その眼は鬱忍そうに私を見据えて居た。私

はベットの方を見た。いつの間にかテッドは腹這いになつてベットから私の方を見て居た。

れん子はテッドの方を見てニコツと笑つた。

「少しは昂奮した？」

テッドと私の視線が合つた。彼の眼に輕蔑の色はなかつたが、私は曾つて体験したことのない屈辱と羞恥を浴びた。

れん子は私の胸の上に股をひろげて跨がつ

愛 読 者 通 信

私はW大学生。廿二歳、五尺四寸弱、十四貫、ニツクネームは虞美人、これは中学時代顔が青白いので、隣りのお姉様が頬紅をぬつてくれたが、いつしか級友にしれてつけられました。運動部に籍をおきましたが、もつぱら上級生の稚児用に入部した様なものでした。

私の希望は幼少より、美しい御婦人の小姓となつて仕へる事でした。特に年配の肥満した御婦人に魅力を感じます。どうか、召使つて下さい。

(東京 虞美人)



た、背中が痛い。

「痛いだろう、背中が」

「ウン！」

「この前、お前が気を失つてゐる時に、どんな時にどんなことをしたか、今夜は、お前に知らせてやるよ。」

「ウオツチュミン（なんと云つてゐるんだ。）」

テッドがベットから吠えるように叫んだ。

「今妾の言つたことをテッドに知らしておやり！」

私は羞恥と屈辱に顔がほてつた。

「サ、早く喋れ！」

仕方がない。私はかすれた声で英訳した。

「奴隷の接吻というものがどんなものか味はせてやる。……サ、喋れ！」

私が英語で喋ると、直ぐ次から次へと

れん子は私に嘲罵を浴せた。終には此処に書けぬような露骨な言葉を口に出した。そして、それをテッドの見て居る前で悠々と実行に移した。

彼女は太股まで汗でネット／＼に濡れて居た。

「アハ、。これがお前の一番たのしいときなんだよ。お前に御褒美をやつてゐる時なんだよ。でも妾の御機嫌をとることを忘れたら又鞭で叩いてやるよ。サ、英語で言い。」

れん子は尻を浮かして私の顔をさも気持よさそうに見下して居る。喋べる自由を与へられた私は、我が唇で自分を羞める言葉を吐かねばならなかつた。

その時ベッドのテッドがまた吠えた。

「ゼツツ、イナフ（もういい。そのぐらいいしろ。）」

「アハ、。これが一番利くのだ。」お前にもテッドにもね。」

テッドが次に何を要求して居るのかは明らかだ。れん子は又私の唇を塞ぎ、暫らくして立上ると、笑いながらテッドの方に歩いて行つた。

私は身体を起す力もなかつた。

「此方を見るんだよ。」

れん子の命令がとんだ。

見まいとしても、眼はそれに触れた。

彼等も私を見下して居る。

れん子の方が上だつた。れん子は始終私の方を見下して居た。

二人は殊更に昂奮したような歡喜のゼスチユアを見せつけた。

一くぎりついた所でれん子は又ベットから下り立つて来て私し胸へ裸の脚をかけて、力一ぱい踏みつけた。

「ウーッ！」

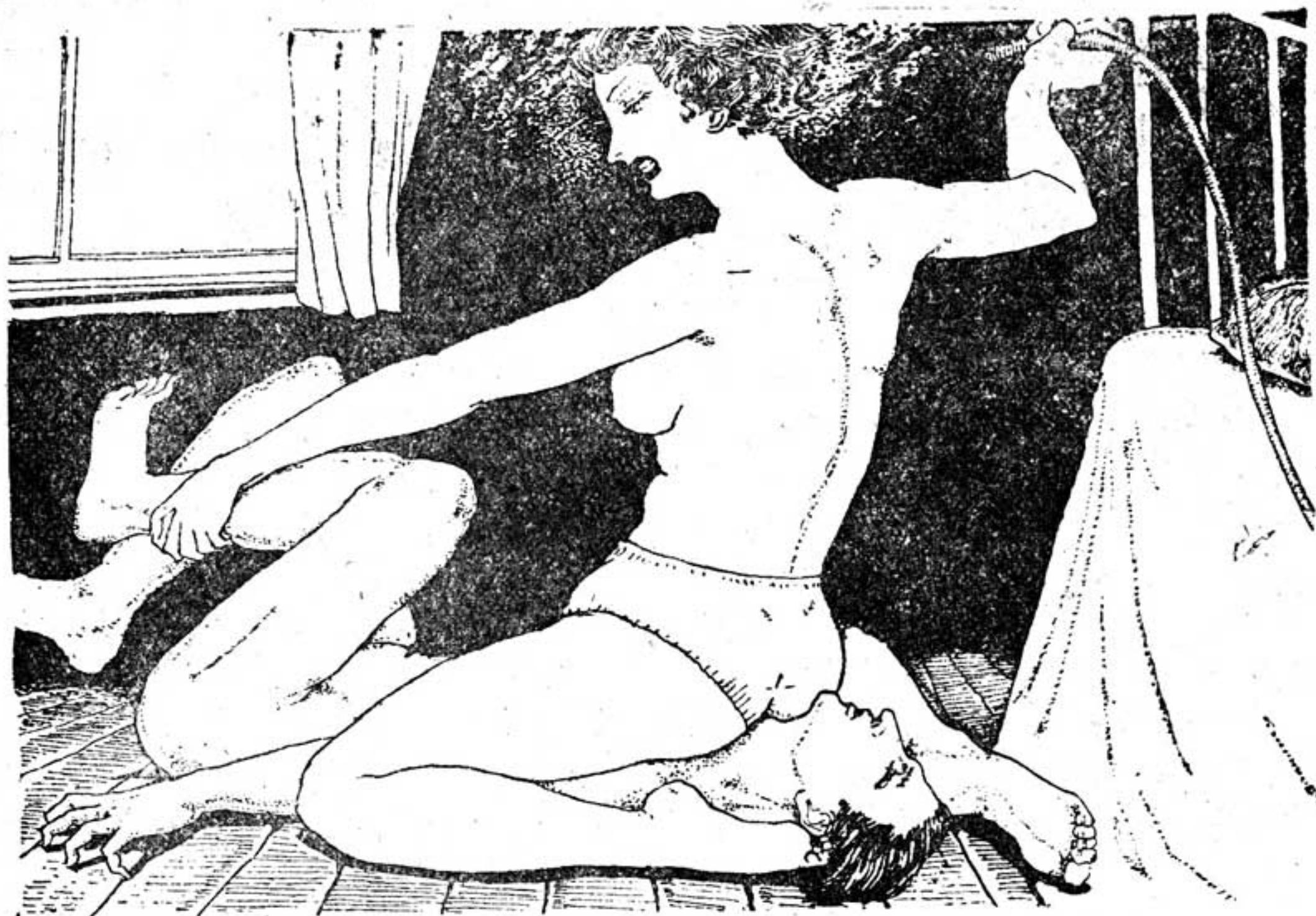
と私は悲鳴をあげた。

「意久地なし、もう遅いんだよ。よそこに聞えたらみつともないじゃないか。」

と言いながら、又も強く踏みつける。傍に落ちて居る鞭を拾つて、チョン／＼と私の××××を突つついた。私の××××は水道の鐵管が破裂したように、その僅かな刺戟で、××××××××××。私自身こんな状態を見るのは始めてだつた。

れん子は鞭でその不逞なしろものをピシリと打つた。

「私」は直ぐ消氣てしまつた。



れん子は笑いながら、又私の顔の上に濡れた肉体をかぶせて来た。

私はウンザリして居たが隋性で前と同じ行爲を繰返さねばならなかった。

だが口の中に流れ込んでくる液体には身震いする程イヤな匂いがあつた。それは栗の花の匂いで、私はこの匂いだけでも嫌悪を感じた。

私はれん子が一寸腰を浮かした隙を見て、顔を横にして、床の上にプツと吐いた。

「此の野郎！」
れん子が怒つて、鞭をとり上げ、私の胸を乱打した。

「あぁッ。」
私は両手で胸をおさへて居るうちに、又その苦痛の中に愉しさを見出した。

「バカヤロ！」
れん子の××××薔薇の門がその時美しく見えた。
れん子はまたも私の上への

しかかつて、顔中ベタ／＼になる迄×××。私は苦しい息の詰まるような屈辱のうちにまたエレクトし、ひじように複雑な、錯綜した苦痛、快感屈辱痙攣状態のうちに満足し夢うつつのうちにいつしか眠つてしまった――。

冷静になつて考へて見ると馬鹿らしいことばかりだつた。私のこの告白を読まれた読者諸君は、マゾヒストの心を臆気ながらも理解はしてくれるだろうが、自らこんな屈辱や苦痛までを敢えて受ける気持は起らないだろう。

マゾヒストはよく貴婦人に憬れると言う。だが私は牝獣のような下品で野性的な女にひきつけられる。れん子の馬鹿さ加減が分つて居て、その無智に却つて魅力を感じるのだ。

だが私は妙子と結婚する意志は変らない。そうしたら、れん子との関係はキツパリ断るつもりだ。

でも一たんよび醒まされたマゾの官能は、いっどこで頭を擡げるか分らない。私にはそれを抑へる自信がない。

(終)

ア
ストオリー
ブ

魔

(じようま)

魔



盲目の悪魔は襦袢の腋から手をいれ、胸を……腰を……そして……私はその度毎に、どうしようもない戦慄を感じながら、必死に呻き聲を上げまいとこらえていました。……

高 月 大 三

喜 多 玲 子 画

一

「オイ、姐ちゃん、さつさと歩かんかい」

その男は、私の肩をつつかんばかりに、せき立てながら、人混みの中をかきわけるようにしてあるき出しました。

ふとふり返つて見ますと 私たちが今出て来た露路の入口に、変に間伸びのした顔のあの家の主人と、もういい年だと思われるのにえり首のあたりまで白いものを塗りつけている頬骨の尖ったおかみさんと、いやらしい笑いを頬に

浮べて私たちを見送っていました。

私の二の腕を着物の上から太い手がギョツと握つて歩いて此の男に、私は何処に連れて行かれるのか全然判らなかつたのです。その上、知らない街の西東の方角さえ見当もつかないのです。あとで考えて見ると、その時、いつそのこと大きな声を出して逃げてしまえば、あのような淫らがましいおそろしい目にあわなくても済んだことでしょうが、ただ、その時の私は、身内からつき上げて来るような不安におののきながら、まるで魂を抜き取られた人間のように、男の横にびつたりと喰つついて足を運んでいたのです。

「なア。おとなしう、此の人と一緒に行くのやで、下手なことしたら、身の爲にならんで……」
「そやそや、おかみさんの云う通りやぞ、悪いようにはせえへんのや」

先刻安白粉のおかみさんと、その男にかわるがわるそう云つたようなことを言われて、おどおどしながらうなずいていた私が、ドキンとしたのは、男が汚らしいジャンパーのポケットから不相応にピカリと光つたジャックナイフを取り出したからでした。何処かを指先で押すとパチンと不気味な音を立てて鋭利な刃先が生き物のように起きてきて、男の骨太な掌の中に握られたそれは、私の乳房のあたりに狙いを向けているのです。



「オッサン、これ、よう切れるぜ」
男は私の方は見ずに、傍だ鼻毛を抜いているその家の主人に話しかけていました。しかしそれは、私に対する一種のおどかしだつた

のです。あのいやらしい悪魔のところに、私を連れてゆく役目を背負つていた此の男が私の逃亡をおそれて、それとなく凄んでみせたのでしたが、私はただもうそれだけで、背すじのあたりが肌寒くなつていましたし思考力さえも失つていました。

だから、男に腕を取られて歩るきながらも、底の知れない不安に心はおののいているのに、私の足だけは意志とは別に男の云いなりに歩るいていました。

両親に早く死に別れた私が、世話になつている叔母夫婦のしつこくすすめる縁談に嫌気がさして、岡山の街を出て来たのは、たつた数日前のことだつたのですが、何か夢のような希望を抱いて来た此の大阪と云う都会は、身寄りも頼りもない私の様な家出娘をおいそれとは受け入れてくれなかつたのです。

天王寺公園のベンチに腰を降して考え近んでいる時、言葉をかけたのが、あの頬骨の尖つたおかみさんでした。何処に行くとう云あてもなかつたので、言われるままに不安な一夜を、そのおかみさんの家で明かすと、此の男が私を迎えに来たのです。いい家に家政婦に世話してあげよう、此の人に話をしてあるから。と云うのでしたけれど、ポケットにジャックナイフを忍ばせている此の男の雰囲気のうちにも、そして此の街の特種な臭いの空気にも、私の心を安心させる何物をもありませんでした。

そのあたりが、林美美子の小説「めし」で有名なジャンジャン横丁だと云うことは、その時の私は知らなかったのです。ただ、織るような人混みと、油の臭いと、いろいろの看板と、パチンコの騒音と、そう云つたものが思考力を失つた私のうつろな眼と耳とに一度に飛び込んで来ていたことだけは憶えているのですが……。

ガードをくぐる前に交番がありました。

男は私の腕をことさらに強く握つて引きよせ、口笛を吹きながら平気な顔で歩るいてゆくのでした。それは、どうかすると仲の良い男女の姿に見えたかも知れません。しかし、男の吹く流行歌の口笛は、私に言葉のない威圧を感じさせていましたし、不気味な此の男の雰囲気、気の弱い私を交番の巡査の前に立ち止らせる余裕など少しもあたえませんでした。

そして私は、男の呼びとめたタクシーに追込まれるように乗せられてしまったのです。



何とかして此の家から出てしまわなければいけない、

それは、暗い陰気な部屋でした。

唐紙を隔てた隣室から、此の家の主人らしい濁つた声と、私を連れて来た男の声とがボソボソと入れ混じつて聞えてくるのです。

私は、しめつたような畳の上に、氣の抜けた人のように坐つて、それでも一生懸命に男達の話を聞こうとしていました。

何処をどう走っているのか判らない自動車の中でも、何とかして逃げ出そうと思つた私でしたけれど、不安に戸まどつているうちにいやも応もなく此の家に連れ込まれていたのです。

男達の話は全部は聞きとれないものの、二万円だとか、家出娘だとか、肌がどうか、それは何か変にいやらしい空氣を感じさせる内容で、決して家政婦を世話する時のような用談とは受け取れないのでした。

私は、今に何かいやな事が起るような氣がして泣きたいような氣持になつていました。

そう思つてそつと音のしない様に立ち上つた時、隣室で、下卑な笑い声が急にしたのです。そして、

「……じゃあ、とにかく旦那、品物にさわつて見て貰らつてからのことに……」

そんなことを云いながら、あの男が立ち上つた様子がしました。

男が云つた言葉の意味がどう云うことなのか、唐紙が開かれるまで、私には判らなかつたのですが、私はその男の云うさわれる品物だつたのです。

中腰になつて身を固くしている私の前に唐紙がガラリと開いて、ジャックナイフの男が入つて来ました。

「さあ、姐ちゃん、此処の御主人にお目見得するのやで、へへへへ」

そう云つて、邪険に手を取ろうとする男の向うに、開かれた唐紙の間から隣りの部屋がチラと見えて、其処に坐つてゐる男の姿が、一瞬の間に私の網膜に強い印象を与えたのです。真つ黒な眼鏡をかけたこの家の主人は、私たちとは全然別な方を向き、じつと小首をかしげるようにして影のように坐つてゐるのです。

ずるずると男に手を取られたまま、私はそ



の部屋に引き
づり込まれて
しまったので
したが、異様
な妖気に似た
ものが立ちこ
める此の家の
主人にはどう
しても近寄る
気持になれな
かったので
す。

「お願いで
す。帰して下
さい」

「帰る？ 何
処に帰るつも
りや、今晚か
ら姐ちゃん
は此処で寝さ
して貰うんや
でそら、御主人
に挨拶せんか
い？」

いきなり突

き飛ばされて黒眼鏡の男の前に転がった私の
肩に、ヌメヌメとなめくじのような手が十本
の指を開けてさぐり寄つて来ました。

「ああッ！」

はね起きようとする私は、強い力に抱きす
くめられて顔を俯せたまま畳の上に押しつけ
られ、ゼイゼイという気味の悪い呼吸の音を
全身の毛穴を総毛立てながら聞いていなければ
ならなかつたのです。

肩を、背を、腰を、そろそろと這い廻る吸
盤を持ったようなその生温い掌のいやらしい
感触がどれほどぞつとするものだったかは、
本当にこのような目に逢つて見ないことには
決して判るものではないでしょう。

「旦那。二万円、高いことおまへんやろ？」

そんなことを云うジャックナイフの男。

「フス、フフツツ。着物の上から判らんぜ
え。前には旨いことだまされたよつてなア」
地の底からでも聞えて来るかと思われるば
かりの不気味な声がそう応えるのです。

「へッへ。旦那はいつもそんなこと云うて、
ちやんと判つてゐるくせに……」

私は二人の男達のこのような淫らな会話を
耳を覆いたい気持で聞いていました。

「い、いやですッ。もう許して下さいッ」

どちらかの男の手が、帯にかかった時私は必死になつて身を起していました。しかし、立ち上つていやらしい手を振り切ろうとする眼の前に、チカリと光る冷たい刃物の輝き。

「姐ちやん。これ、よう切れるやで……」

血の凍るような怖ろしさのなかで、私の手足は抵抗することを忘れ果てたまま、帯を解かれてゆくのです。

下着の上から、あのいまわしい吸盤を持つたような悪魔の手が私のからだを撫でまわします。咽喉の奥でゼイゼイと鳴る気味の悪い呼吸の音と、時折、ふふふと含み笑う声を聞きながら、私は眼をとじ、身体を固くして畳の上を這い、のたうつのでした。

盲目の悪魔は襦袢の腋から手を入れて、胸を……腰……そして……。私はその度毎に、どうしようもない戦慄を感じながら、必死に呻き声を上げまいとこらえていました。

「手入らずやな……ふふふ」

「旦那。へっへっ、二万円は高いことおまへんやろ？」

「うむ、まあ……な」

「へっへ。話はつきまじしたぜ、これで天王寺のおぼはんにもいい返事が持つて帰れるといふもんや……。そしたら女はいつもの部屋へ

連れて行つといてよろしいな？」

「ふ、ふふふふ。ふふふふ」

男の問いには答えず、盲目の悪魔はさも嬉しそうに笑っているのです。それは此の男の満足した時に洩らす承諾の表現だったかも知れません。何と云う怖ろしい、恥知らずな世界だったことでしょうか。私の哀願も、必死の抵抗も、助けを呼ぶ声も、そのようなものは此の男達の前には何の意味もなさなかつたのでした。いいえ、却つて私のそんな態度こそ、此の淫らな悪魔たちを嬉ばせるのです。

無我夢中で私は廊下に面した襖の方に突進しようと思いました。どうにかして此の男達の手から逃れたいと思う気持は、私に最後の力を振りしぼらせていたのです。それがたとえどのような結果に終つたとしても、私はそうせずには居られませんでした。

ジャックナイフの男と私との争いを、盲目の悪魔は元のところに坐つたまま、じつと傍観しているのです。小首を斜めに曲げ、眼鏡をかけた眼はあらぬ方を向いているのですが、全身を耳にして、二人のあらそう姿を思い描き舌なめずりをしていたのかも知れません……。

三

私はハアハアと喘ぎながら突俯してしました。両の手は後に捻じ上げられて縛られてしまつていたし、身にまとつてゐるものはたった一枚きりのズロースだけなのです。

もう、こうなつては、どんなにもがいて見たところでどうにもならないのでした。私の両手は胸に廻わされた細引できつちり後に押えられて、男がどのような悪戯をしかけて来ても、それを振いのける役目は出来なくされているのです。

「お、お願いです。どんなことでもしますから、縄だけはほめて下さい……」

私は、そう云つて哀願しました。

こんな姿でいることがどれほど女としてたまらないことであるか、私は身をもつて感じています。どうかされるにしても、このような浅ましい恰好のままでは辛棒が出来なかつたのです。ただ、それから逃れる爲に私に許される努力は哀願することしかなかつたのでした。

「いつもの部屋」と男達が云つた此の窓の無い壁ばかりの部屋に私はあのジャックナイフの男の連れ込まれてしまつていました。

「へっへっへ。縄をほどいたら、また引つ掻くつもりやろ」

男は頬や首すじに残した爪のあとを、顔をしかめて撫でながら、卑しい眼付きでじろじろとこちらを眺めて笑いましたが、その眼はあの男の手のように私のからだを所きらわず撫で廻しているかのようにでした。

「これも、ついでや、旦那はその方がええのやからなア……」

腰のものにかかる手。

かつと全身が火になつて、その次に私は蒼白になつていました。ああ、何処まで此の男たちは……。

「ゆ、ゆるして、それだけは、ゆるし……」

口惜しさ、いやらしさ、それにもまして気が狂いそうな女の羞恥！。懸命に哀願の声をふりしぼつて身を海老のように前かがみに曲げる私の腰から、たつた一枚のそれはずるずると……。

背中の上で男の聞くに耐えないようなからかいの言葉が吐かれていく頃には、私はもう一絲もまとはぬからだを二つに曲げて、じつとしていました。無駄と知りながらも、どうかして手を前に出して、胸を、腰を覆いたいと願う私のもたえは、それがどうしても駄目

だと判つた時、しぼり出すような泣き声となつて唇から洩れました。

意地の悪い悪戯をされるのではないかと思つて身を縮める私には手を触れず、此の男がおとなしく部屋を出て行つたのは意外でした。けれど、それはただ、一瞬の間の安堵感でしかなかつたのでした。男が出て行く時、私の足首に結びつけた鈴は何を意味するのでしょうか。

ああ、あの吸盤を持つたような指が音もなく私の肌に慕い寄つて来るのです！

私がいくら此の部屋の中を逃げ廻つても、あの盲目の悪魔に私の所在が判るように、その爲の足首の鈴なのです。

……。

「ひえッ！」

私は叫び声を挙げて、ビクツと身体を起しました。此の部屋の隅にあるたつた一つの扉がガタリと音を立てて開いたからなのです。そろりそろり。手さぐりで部屋に入つてくる黒眼鏡！

私は血も凍るばかりの思いで、からだを震わせて居ました。もう動くことは出来ないのです、ちよつとでも動くと足首の鈴が音を立てて、めくらの悪魔に私の位置を知らせるこ

とになるからでした。

悪魔は口のあたりに、ニタリニタリとうすら笑いを浮べて手さぐりでカチリと内側か扉に錠を下しました。

今にも口から外に飛び出しそうになる叫び声を必死に噛み殺している私の追いつめられた気持はどんな言葉で説明したらいいのでしょうか！

黒眼鏡は両手を前にさし出し、指を抜げて空間を撫でるように歩一歩部屋の中央にあるき出していました。じーつと耳を澄ますようにしているのは、押し殺している私のかすかな息使いさえも聞き逃すまいとしているのに違いありません。

「ウフフ。うふふふふふ。ひひひひひ」

ぞーつとするようないやらしい笑い！

ドキドキ、ドキドキ、激しく私の乳房の下では心臓が悲鳴を上げているのです。この音がこのまま止まつてくれればいいとさえ私は思いました。

「……ホラ！ 聞える。聞えるぞオ、おまえの可愛い息使いが！ ウフフフフ」

そんなことを云う悪魔の地の底からの声。事実、私は居ても立つても居られない気持でハアハアと息づいて居たのかも知れませ

ん。私の肩も胸もねちねちとした汗にぬれて大きく浪打っていました。

「……………」

近寄つて来るあのいやらしい指先から逃れる爲に後手のまま立ち上つた私は部屋の隅に身を退きました。

チリチリ、チャランチャラン。チャラン。

ああ、何と云う呪わしい鈴の音なのか。

「フヒヒヒヒヒ。手入らずめ、逃げるがい、フッフ、ヒッヒッヒ」

黒眼鏡は、足の鈴の音をたよりに盲目とも思えぬ素早さで近寄つて来るのです。それは奇妙な、そして気が狂いそうになる鬼ごっこでした。八畳ほどの此の部屋を私は必死になつて逃げ廻りました、若し一度でも捕まつたが最後あの手がそして指が……………。それを考えると死にもの狂いなのです、しかし後手に縛られている上に素つ裸体、そして足につけられている鈴！。意地の悪いハンディキャップは此の鬼ごっこの最後まで勘定に入れた責め苦なのでしょう。まして私を縛っている細引は三メートルも縄尻を引きづっているではありませんか！



「……………ああ——ッ」

何度となくその縄尻をふまれそうになつてその度毎に私は腰を大きく振りました、誰かがこれを見ているとしたら、とてもこのように脚を抜けられもない恰好で動き廻われなかつたかも知れません。

ある瞬間など、腕の下をかいぐつた時、臀部にあのニチャニチャ脂っこい指先が、ぞろりと触れたり、壁に追いつめられて乳房を押さえられたり……………。

私の力はもう限界にきていました。ハアッハアッと呼び呼吸、今にも心臓が破れるかと

思われるばかりの苦しさ、そしてガクガクと震える膝頭は立つていられないほど疲れきっているのです。

「ウフフ。ウフフ」

ぐいぐいと縄を引かれる気配を感じてハッとした私が、壁から身を退こうとしたのですが、それはもう駄目でした。盲目の悪魔はいつの間にかしつかりと縄尻をとらえ、それを手許にたぐり寄せているのです。

「あッ、あーッ」

私は引かれながら本能的に悲鳴を挙げ、もがき続けましたが、縛られている悲しさ、縄尻を持たれてしまえばどうすることも出来ないのです。引き倒された私の背を悪魔は押しつけて、そのままバタバタもがく脚に手さぐりで蜘蛛のように縄をからみつけるのでした。

四

吸い着くような生温い掌が、気の狂いそうな寒気のする感觸を私の肌に浸み込ませながら這い廻つて、それを避ける自由を持たない私はただその度毎に悲鳴をあげるばかりでした。じわじわと触られる部分は、何度も何度も鳥

膚立ち、するする撫でられるところは私の意志とは別にピリピリと戦慄しました。

何と云ういやらしい手！

爬虫類の這い廻るような不気味な感触。

何を叫んでいるのか自分でも判らない私の悲痛な声は、此の吸盤を持ったような指の動きを止めることには何の効果もないのです。

「ふふふふ。うふふふふふ」

盲目の悪魔は咽喉の奥で断えず嬉しそうな笑い声を立てながら、顔を壁の方に向けむけ手先の感触だけで私のからだを廻り続けていました。悪魔！

そうです、此奴は悪魔なのです。そのような言葉がたとえ此の世になかったとしても、その時、悶え、呻きながら芋虫のように転がっていた私の気の狂いそうな脳裡に浮んだのはこの言葉でした。

どれほどの時間だったか、私は苦悶しつつ、精も根もつき果てて気を失ってゆきました。黒眼鏡の男があゝの入口から静に出て行くのを夢のように感じながら……

泥のような疲労の中に落ち込んでいた私に



は時間の観念などある筈がありません。ただムズムズとした皮膚に残る吸盤の感触は、いつまでもいつまでも、アザのように肌にしみてついていて、それをどうしようもなかった気味悪さだけが記憶の全部でした。

手も足も背中の中うしろに寄せられて、一緒に縛られてしまっている苦しさは、口にも筆にも現わすことが出来ないものです。どろどろとした泥沼の中からふと気を取りもどすと私は此の部屋の入口が、また開く気配を感じ

ました。
ギギ……

ああ、たつた今、悪魔は帰って行つたように思われるのに、また来たのです。それとも私が気を失っているうちに、長い時間が過ぎていたのでしょうか。

私は必死に眼を閉じて、身体を固くしていました。前にもました戦慄は私の全身の毛穴をゾーッと音のするほどかき立てて、きつと誰かがそれを見たとしたら、あの鳥肉屋の店先に下つている羽根をむしられた鳥の膚を想像したかも知れません。

ジメジメした壘をふんで近付く足音を悪夢のように聞きながら、私はたとえ少しでも身を守ろうとするように、痺れ切った指先を空間に向つて拡張無意識に動かしていました。

「ああ……あッ」

生温い手が、肩を、背を、腰を……

その気味悪さ！

眼を必死に閉じて耐えている私は、ふとその時不思議なことに気がつきました。

この手には、あゝのいやらしい吸盤のような

感触がない！。あのおぞましい悪魔の眼が感じられない！。

これは、叔父が私の叔母の留守中に私を抱きしめて云い寄つた時に膚に感じたのと同じ種類の感触なのでした。

私は先刻とは違つた触れ方に、いやらしいとは別にこの手でからだを燃え上らされてゆくを感じました。心では必死に嫌気を感じながら……。

ハッとして頭をねじむけ、私は悪魔を見ました。ああ、それはあの黒眼鏡ではなかつたのです。

「へへへ、姐ちゃん。気が付いたようやな。俺はお前が欲しかつたのや……、殺つて……殺つてしもうたぜ……あいつは」

そう云う男の気遣いのような眼の色は、もう常のものではなかつたのです。

「……あいつから、お前を取りあげてやつたのや……」

そう云う男のジャンパーのポケットから部厚い札束が、いくつも疊の上に落ちてハタハタと音を立てるのです。

疊の上に突き立てられた血みどろの、あのジャックナイフが眼に入つたとき、私は灰色の虹の中に再び氣を失つてゆきました。

愛讀者 通信

マゾヒストの夢

私は御主人の奴隷——私の御主人は太つて髭の濃い頭の禿げた眼の鋭い残忍な人、いつもゆつたりとした乗馬ズボンに黒革のぴつたりとした乗馬長靴、踵には銀色に輝く鋭い拍車、手にはいつも、牛革の鞭、それは短かい乗馬鞭だつたり、細身の馭車鞭だつたり、太いなめし革の荷車鞭だつたり、或は長い革紐を細く編んだ奴隷商人の持つ鞭を抱え、ポケットには手錠、足枷、鎖を入れて、馬を調教し、奴隷を売買する人です。私はそこに買はれて、いつも責められ、苦しんでゐるのです。

御主人が帰つて来られると、私は膝まづいて長靴に着いた泥、埃を舌で綺麗になめとるのです。そしてそれが一寸でも汚れを残せば、靴の胴からしなやかな鞭を御主人は取出してピシリと一発くらはせられます。鋭い拍車は私の太腿を蹴上げます。そして恐しい調教、私の首には太い犬の首輪、それには長い鎖が付いて御主人はその一端を持つと私にいろいろな芸を仕込むの

です。

逆立ち、とんぼ返り、長い調教鞭はやり損ふその度に、鋭い音を立てて、私の胴体に巻きつくのです。首枷にはさまれ、手足は鎖に繋がれて、臀をうしろに突出して、身動一つ出来ない恰好で、細く柔く革ひもを太く編んだ長い奴隷懲戒用の鞭で臀から血が流れる迄折檻されるのです。然し私は心の底から御主人を愛してゐるのです。

右記の様な幻想に悩む当年二十五歳の男、身長五尺五寸強、体重十三貫五百やせては居りますが、容貌は女性的でも普通以上と自惚れて居ります。私の右イメーヂにぴつたりする年齢四十乃至五十歳身長五尺三寸以下、体重十五貫以上のがつちりした肥満型の髭も濃き紳士で、乗馬或は軍隊生活で馬の経験のある方へ理想は調馬師をやつて居られる方の奴隷となつて右記の様な待遇を受け度く、福岡縣、熊本縣在住の興味を有して責めて見たいと思はれる方は是故御一報下さい。万難を排して参上致すつもりで御座居ます。

(福岡すれいぶ生)

風俗草紙賞設定！

二十萬圓懸賞原稿大募集！

……特異風俗誌の檜舞臺に野心的アブ作家の登場を期待する！

賞金

一席 文藝賞・研究論文賞
(風俗草紙賞)

各 五萬圓 二名

二席 同各 貳萬圓 二名

三席 〃 壹萬圓 三名

佳作 〃 五千圓 六名

規定

参照の上、何卒奮つて応募下さるようお願い致します。

一、内容は本誌にふさわしい、アブノーマルな題材であれば如何なる形式にても可。但し応募者各位の便宜の爲、第一部、文芸賞第二部、研究論文賞と区別す。

第一部 文藝賞

(小説、手記、告白、体験レポート、読物等すべてを含む)

第二部 研究論文賞

(アブノーマル性風俗、心理の研究、批評、エッセイ等を含む)

本誌は戦後の特異な風俗誌として發刊以來絶賛を博して参りましたが、今回『風俗草紙賞』を設定、本誌の内容にふさわしい新しい分野の開拓に情熱を燃やす方々の、新鮮な力作、傑作を広く募集致します。次の規定を御

一、枚数は四百字詰五十枚迄

一、必ず未発表作品たること

一、締切、昭和二十九年二月十日

一、発表、本誌五月号誌上

一、入選作品の版權は本社が保有する

一、原稿返戻は乞御容謝

一、送り先、東京都千代田区神田猿樂町一の

三 日本特集出版社編集部 懸賞原稿係

宛 封筒に、必ず各部懸賞原稿と朱書の事

詮衡委員(敬称略)

第一部 日 夏 由 紀 夫

松 井 籟 子

龍 膽 寺 雄

第二部 高 橋 鐵

妄執の愉悅

乳房マニヤ

ムツチリと脂の乗った乳房がこたえられない。こんな奴は、色が白い女に多くて、ウツスラと青い静脈が透いて見える。こんなオツパイに出遭うと、もう慾も得もない、タコのように吸ひつき……

霜川 穰 一

小田 明 男 画

私のように女の乳が好き連中は、ずい分多いと思う。男なら、見事な乳を見たことがある奴なら、好きになるのは当然だ。

だから、私は平気で、よく酒の席などで、オツパイの話を持出すことがある。そんな時苦々しそくに、下品な奴だと云うような顔をする奴だつたら、そんな奴は男ではないに違ひがない。しかし今迄に別段そんな反応を示す者に出逢つたことはないのだ。やはり、我々男性は、女の乳が好きのように、駄が出来上っているのだろう。

どんな生真面な顔をしていても、男なら誰でも、内心では女の乳や臀が好きに決つていゝる。だから、酔つて私がいろいろオツパイ談義を始めると、誰でも喜んで相好をくずしてニヤニヤしている。

しかし、確かに皆好きには違ひないが、やはり其処は程度の差がある。好きな割合が人によつて違ふのだ。私は人並以上に、底抜けに好きだと云うわけだ。

私はある町で商業を営んでいるが、この町の芸者たちは、



「〇〇の旦那はしようもないわ。顔さえ見たら、乳吸わせてんか、乳吸わせてんか云うていけずばかりしやはる」

と云つてゐる。それでも、別段私は排斥されるわけでもないし、私の座敷に芸者が来ないと云うこともない。

つまり、乳房狂だと云つても、とりわけ怨まれてゐるわけでもないのだ。だから私は、女の方でも、決して男の乳房好きが嫌なわけではなくて、それどころか、そんな風に乳を男にさわられたり、いろいろなぶられること

が好きなのであろうと思つてゐる。
いや、たしかに女は、乳を礼讃されるこ
が、いいのだ。だから、男の方も乳が好き、
女の方もそれが悪い気持でないのだから、遠
慮することはない。「造化の神様から与えら
れたたのしみを味うのだから、大イバリだ」

と云うのが、私の主義だ。
私が芸者に「吸わせてんか……」と云うの
は事実だが、それは先づ女の反応を見てたの
しむためで、やはり私にも女房も子供もある
から人前でそんな失態を演じることはない。
芸者の場合、さわることは、宴会の席でもす

る。
着物の上からでも、大体可か、否か判るか
ら、いゝなと思う妓がいたら、後から抱くよ
うにして、袖口から手を入れる。
「キヤア、いやらし、止めとくなはれ……」
と云つて騒ぐが、これは他人への見栄や、
髪や着付がこわされることを嫌がるの
だ。だから、この点さえ注意してやれ
ば「嫌や嫌や」云ひながらも、こちら
の思うまゝになる。

触れた時にカアツとするほど熱くて
握りしめると、掌からはみ出すほど大
きく、こんもり盛り上つてゐるのがい
い。乳房がちよつとも暖かくなつて、
生ぬるいなど云うのは、阿呆らしく
て願下げだ。大きいのはいくら大きく
てもいゝようなものだが、面積がだゞ
つ広くて隆起が香ばしくないのがある
皿を伏せたようなもので、これもいけ
ない。

やはり、丁度寺の法事で使うような
大ぶりのお椀を伏せたような格好のが
極上品だ。歳で云えば、二十から二十
二、三までの、ムツチリと脂の乗つた
乳房がこたえられない。こんな奴は、



色が白い女に多くてウツストラと青い静脈が透いて見える。こんなオツパイに出逢うと、もう欲も得もない。是が非でも、タコのように吸ひつきたくなるばかりだ。

一口に乳房と云うが女によつて千差万別なのだ。まず第一に一人づゝ位置が違う。これはなんと云つても上つきがいゝ。下つきはいけない。乳房の上つきは野蛮人だと云う人もある。世界一だと云うバリー島の土人の女が胸の上の方に二つの乳が、ドツカリと坐りこんでいるそうだ。

私は野蛮だろうと、何だろうと、乳は上つきに限ると思つてゐる。バリー島の女だつて乳房では世界一だと識者が云つてゐるのだから、やはり上つきがいゝのは、衆目の見るところだろう。

位置に次で、その角度だ。折角上つきでも垂れてゐるのでは仕方がない。半球形で、やゝ左右に張るように力が漲つてゐるのを好しとする。肉が薄いのでは話にならない。又、大きさは云うだけ野暮、たつぷりの方がいゝに決つてゐる。しかし、あんまりデツカクテグロテスクな感じのするようでも困る。

私は上京した時、オツパイガールの名で有名になつた某ストリップを一見したが、あ

れは胸部とつり合ひがとれないからグロだ。ブルン／＼揺れて緊張感が薄いし、色も感心しなかつた。大きいばかりで、案外に色気が足りず、私は期待はづれで、ガツカリしたものだ。

それから、何より困るのは、左右不均衡な乳房。左と右と、乳房の大きさが非常に違う女がいる。注意して見れば、誰れでも多少は大きさ、形が違うのが普通だが、授乳した女にはよく左右に甚だしい相違があるものだ。私が一見したことがある子持の娼婦は、右は殆ど少女のようだが、左の乳だけは、ちよつとしたハンドバックほどにも大きい。こんなに奇形染みたのにぶつがると、さすがの私も熱がさめる。

それでも結構話を聞いたり、さわつたり、写真を撮つたりしたものだが、ちよつと、女の乳と云う観念からは遠い。

それから、女の乳の美しさを決定するには実や大きさや形ではなく、あの小さな乳首だと云うことを、私は考へてゐる。素人は案外乳首を問題にしないが、折角の乳も、乳首の色や形で、台なしになることが多いからだ。

私の考へによると、乳首は絶対に上を向いていなければいけない。その位置も中心から

やゝ上部。これがコンモリした乳房の力を、この一点に集めて、凝結した生命力の美しさを、見事に表明する。

乳首の下つきは下。又乳首が小さすぎて、くぼんだもの、反対に大きすぎるもの。飛出したもの。形が長く変形したもの。色が著しく黒ずんだもの、これ等はすべて不可。それから、この乳首のまわりの、色素が附着した部分、この輪が大きすぎるのは品がなく、小にすぎれば色素がない。

色の話が出たからついでに書くが、この乳首やその周囲の色は、女が妊娠すれば非常に濃くなる。殊に臨月近くなると、ちよつと正視出来ないほど黒くなる。人から聞いたことによると、これは赤ん坊が生れて、授乳の際に赤ん坊に乳首を傷つけられないように、この粘膜を強くする作用が自然に働いて、色素が附するのだそうだ。

ところが、この黒ずんだ乳首が、とてもたまらない、と云う男がいる。だから、この男は妊娠した女ばかり追ひ廻してゐる。まったく可笑しい奴だ。私はこんなに黒ずんだ乳首は、いゝ氣持がしない。やはりほんのり紅色の方が、数等いゝのだ。

だが、私の知つてゐる女で、妊娠でなくと

も、毎月、月経の前後だけ、乳房が黒ずむのがある。毎月だから、不思議なものだ。これなど、どんな原因でそうなるのか、私にはとても判らない。それから、妊娠して黒くなつても、授乳がすむと、色が元に戻る筈だが黒くなりつ放なしと云う、変つた女もいる。まつたく、女の乳はやゝこしく出来ているものだ。

とにかく、子供を産んだ女の乳は、どんなに変化が見えないつもりでも、私にはすぐ分る。私はなにしろオッパイ学の大家を以て、自他共に許しているのだから、ごまかさねはしないのだ。

いくら女が始めるはシエを切つても、いろいろ具体的に例をあげて反論すると、大抵その内には女が自分でも笑ひ出して、

「且はん、いけずやなあ、どうしてそないに詳しいんやろ。ほんまに好かんわあ」と、白状する。



好かんと言はれても私は一向に差支ない。平気なものだ。神様から授つた女のオッパイを、我々男が鑑賞し、讚美しなければ、宝の

又は高級娼婦が多い。最近同好の若い人から「あんた、商売女ばかりやつたらつまらん。近頃の若い素人の娘はんがえゝのや。まるでピチピチムチムチしとるで」と、忠告された。それはたしかにそうだろう。しかし、この人も近頃の芸妓と云うものを知らないのだ。

最近の若い妓と来たら、三味線もよう弾かんくせして乳だけはもの凄く発達している。昔風になで肩の柳腰と云うスタイルの妓は、殆ど居ない。若い妓の殆どが、その辺のお嬢さんのように、ムッチリ体格がいゝ。商売女と素人女の乳の相違なんぞ、なくなつて来たのではないかと私は考える。とても健康そのものだ。

だから、乳房の発育もとてもいゝ。素晴らしい。お座敷着の胸がムツチリ盛上つている。私の懇意な

老妓はこの点について、

「まあえらいオッパイが大きうて、着付も何も、恰好つかしまへん。あてらの若い盛りに、胸がえらいふくらんだら恥しうて、恥か

もち腐れのようなものではないか。それに、どだい女の方でも、そうされるのが好きなのだから……」

私は商売柄、又年輩柄、相手の女は芸妓、

しうて、晒の半反もキツチリ巻いたもんどすがな。今の人はあんたはん、大けな上に、乳パットたら何たら云うもんまで、入れてはる人がおます。どう云う気どすやらなあ」

私は若い妓たちに賛成だ。パットを入れるのは困るが、女性が乳房を誇るようになったのはいい。

そんなわけで、商売女にも素晴らしい乳房の持主がいる。が、私も満更素人を知らぬわけではない。二十七歳で独身の和裁の師匠をしている女と、温泉に行つたことがある。

この女のオッパイは変つてゐる。全然丸くない。お椀を伏せた恰好とはまるで違う。強ひて云うなら、西洋梨のスタイルだ。上つきだが、全体が更に上部に盛上るようになってしかも乳首が非常に大きく、乳首と、その周囲約直径四、五センチばかりが、グイと突出している。二重になつてゐる。まるで重ね餅と云うところだ。

こんなのは始めてだつたから、私は大いに昂奮した。美しくはないのだが、何かとてもそゝるものを持つてゐる。こゝろみに突き出した乳首にふれると、女は非常にくすぐつたがる。感覚が鋭敏なこと、驚くばかりだつた。私は興に乗つて、これをさんさんなぶつた。

女は身を柔んで、果ては眼を呆り上げる。此処が女の泣き所だつたのだ。

だが、乳が泣き所と云う女は非常に多いのだ。大抵の女が大かれ少かれ、乳の愛撫で有頂天になる。房事の際でも、女の乳に一度も触れない男もいるらしいが、なんと云う阿呆なことだ。まるで宝の山に入つて、空手で帰るようなものだ。

乳の愛撫は結局は舌に限る。舌と歯だ。あゝる女は、男の方も昂奮してゐるのだから、ハッハッと喘いで、熱い息吹きが乳房にかゝる。それがこたえられないと白状した。可愛いものだ。

誰でもしてゐることだろうが、吸引がいゝと云う女もゐる。これを嫌悪する女は、ちよつと考えられない。大抵が、

「嫌や、嫌や云うたら……」

と云ひながら、果てはしつかり男の頭を抱えて、眼をつぶる。まつたくオッパイはデリケートに出来てゐると、私は感心するのだ。

そんなに鋭敏な場所のくせに、これが又少々乱暴なことをやつても、割に女が痛がらない。ちよつと消えないような齒形をつけても、そう女から叱られることはない。私が愚考するに、本来乳房は女が、他に対して与えるも

のだ。この原理は相手が赤ん坊でも、髭の男でも変りないのだろう。

乳に対する愛撫は、撫でる、つかむ、押すこねる、叩く、舐める、吸う、噛む、刺す、等々あるが、これはみんな、こちらからのサービスだ。ところが先方から、その乳房で反対にサービスして貰う方法がある。いわゆる乳間だが、これが我々のようなオッパイ、マニアにとつては、正に極地だ。

これは経験のない女ではまずい。私自身で両の乳房を操作することもあるが、これでは零用気が半減する。やはり女のこまやかな愛情と技巧でサービスされるがいゝ。これが出るのは年増女に多い。

九州南部に旅行した時、友人の紹介で、偶然にこの素晴らしい快楽を味つた。三十ばかりの女だが、器量は大きいたことはなかつた。しかし、その二つの乳房のボリュームは、私を完全に圧倒したものだ。本人もこれが好きなのだからその技巧の拔群は云うまでもない。この場合の態度をよく人から質問される。だが、この方法だつて幾通りもある。厳密に云えば種類が相当あることになる。

普通はコールドクリームなどを、乳房の間に塗るのだが、この女はなにか特種な油を使

用していた。何かと聞いても、笑つて答えない。油のようなものだつたかと思う。

私にとつては、元より普通の房事より数等いゝが、それでも、この時には女の乳房、体質による。胸の薄い女では駄目。うんと胸が厚く、大きな乳房、そして熱い体温が必要なのだ。それから技巧だ。

そんなわけだから「山窩」の女はこの条件にピッタリする。私は商売でよく山奥に木を見に行く。だから時折山窩の女を見ることがあるのだ。

彼女たちは上背はあまりないが、ガッチリ肉がしまつて、見事な軀をしている。その乳房の立派なこと、みんな云ひ合せたように、大きなオツパイがデんと坐っている。柄に似合はずともふつり合ひなほど大きい。

私はこの女たちを見る度に、その乳房での房事を空想する。少々垂乳なもの、この際に限り、かえつていゝものだから、柔軟に動くのだ。あのポリウムで情熱的に操作してくれたら、どんなにいゝだろうと思うと、居ても立つても居られない。

しかし、さすがの私も、山窩の女には、今だに手出しが出来ない。彼等のしきたりを知っているから、とても怖くて冗談一つ云えないのだ。かえつて何も知らぬ都会の若い人などが、たまたま山窩の女に出逢ひ、悪ふざけしては、半殺しの目に会っている。

現在でも、山に木を見に行く時には、この女たちに逢ひはせぬかと、たのしみにして出掛ける。彼女たちは、冬でない限りセブリでは腰巻一つで、上半身は裸体だから、嫌でもその豊かな乳房が眼に入るのだ。

こんな女に比べると、私の家内は女ではない。若いうちから病身で、發育不全完気味の上に、三度つゞけて流産したから、三十前から胸はまるで板だ。まつたく実も蓋もない話だ。つまらぬから、もう十年近くも性関係は行はない。家内もその方がいゝようだ。

このように、私は乳房の鑑賞、愛撫なしでは、関係が行えないのだ。どんなに美しい女でも駄目。マニアのマニアたる、ゆえんである。私は幸に商売の方も巧くいっているし、その内に早目に息子に店を任せて、気楽な身分になつたら、余生を好きな乳房探訪で暮そうと思う。理想と云えば、せめて百人の娘を一堂に集めて、その二百の乳房に埋れて見たいと思うが、世の賢人から見れば、馬鹿々々しい愚者の夢と鑒をかうことだろう。

だがその十分の一、十人で二十の乳房なら私の財力で出来ぬこともないと、私は真剣に考えている。例えば八畳の部屋に十人の裸体の娘を踊らせる。殆ど部屋中互にぶつかり合ひ、触れ合つて、乳房はゆれ動くだろう。

私はこの部屋の真中に坐っている。甘い脂粉の香と若く健康な乳房の躍動は、私を夢の国に誘う。娘たちは誇らかに胸を張りながらたゞ一人の男性たる、私の周囲にひしめき合う。二十の乳房が群がりながら、私に迫ってくるのだ。

私はその花の蕾を、一つ一つ口にふくむ。咬む。悲鳴。吐息。そして嬌声。私はやがて彼女たちに、一列に並んで床の上に寝るように命令する。ピタリと、十人の白い裸体が、まるで橋のように並ぶ。そして二十の乳房が息づきながら待っている。

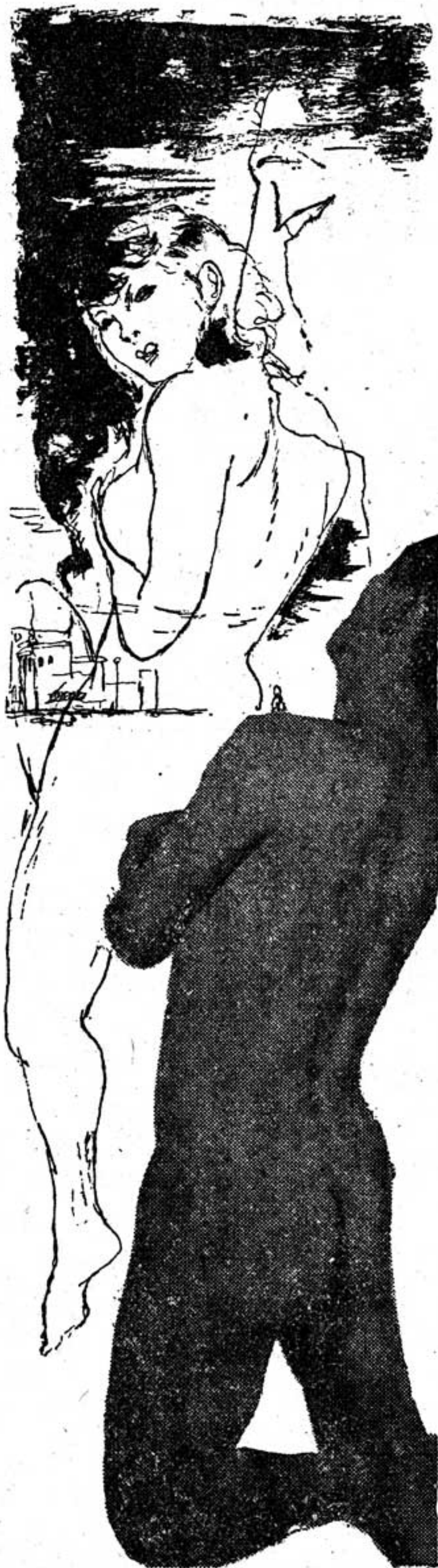
私はその女の橋の上を、転ろがつてゆくのだ。暖い人橋の、豊かなポイントの上に丁度顔があたるように、転ろがつてゆく。

近い将来に、是非これを決行しなければならぬと、私は悲願しながら、その時私は、あまりの嬉しさ、快楽に、腹上死ならぬ、乳房上死をするのではあるまいかと、今から心配しているのである。

(第二回)

シ ズ ム
物 症

- 1 おことわりの言葉——世界注視の中で
- 2 外人の毛と巨根



- 3 長髪 of 視感觸感
- 4 佛像のペニス
- 5 まだ包莖の少年愛
- 6 しなびた老爺のアクメ
- 7 風景への狂愛

(1) おことわりの言葉——世界注視
の中で

先日、UPとニッポンタイムズで私の性科学体系を世界中の新聞へ紹介したところ、その中に同性愛者数千名の赤裸々な手記が私の許に蒐集されている事実も記されていた。

すると、海外諸国から、驚嘆して、それを「死蔵」しないで学界へ公開してくれという意味のお手紙が殺到して来た。中には「ニッポン・トーキョー・ドクター・テツ・タカハシ」という宛名の手紙も少なくなく、全通従業員諸君にも随分御迷惑をかけたことと思う。

しかし、そんなのが皆無事に私の手許へ届いたのだから……近來のお役所仕事で感心した唯一つのことである。WAH AHA!

その反響の中でも、アメリカでは、例のキンゼイ博士が、「男性篇」と「女性篇」の他に、「変態篇」(「常態と変態の観念」及び「同

全く、同性愛の哀歎の深刻で広いことは、驚かざるを得ない。

——「幾人か集つて話合おう」と呼び掛ければ、遙々九州北海道の涯からでも馳せ参じて来られる人が多い。毎日毎日の日記を（匿名のまゝ）送つて来る方もあるし、部厚いノートや便箋・原稿用紙に綿々と悩みを綴つて来る人も珍しくはない。その他各地から私の学会へ辿つて来られる青年や老人や……。

それなのに私はよほど特別な事情でない限り一々御返事もしていないことをお詫びしなければならない。この大きな問題に対して、私一人では、お逢いすることと読むことだけで精一杯だからである。

今まで、通計五人の助手を使つて、この龐大な手記の山を整理しようと企てたこともある。ところが、なんと、驚くべし。それらを読んで行くうちに皆、変な氣持になつてしまふのだつた。そして投げてしまふのだつた。

同性愛の世界というものはそれほど異妖に甘美であり、そこに住む人々は、それほど複雑怪奇な精神構造をもっているのである。その一例として、今月は、同性愛に妙なフェチズムが加わっている場合を二三、検討してみよう。異常な対象だけにこだわっている同性々慾を——。

(2) 外人の毛と巨根

あの苛酷な世界戦争に捲き込まれ、そして敗戦に伴なう国際色。そのためであらう。特に外国人だけを狂愛する同性愛のタイプが少くない。

一体、外国人のどこがいゝのか？ 手記の中から幾つか実例を引用してみよう。

A 或る青年声楽家の場合——「幼時、十歳位の時と記憶しますが、ギリシャ神話の口絵で、ジグフリードの美しい裸体に不思議な魅惑を感じ、オナニーをおぼえました。私は、全く無邪氣に、男性的な肉体、男性的資質等に魅せられ、以後、私の性的幻覚の中には、常に、若くたくましい男性——それも外国人の場合が多いのです——が君臨しました。しかし、十八歳頃迄は、実際の肉体的関係など夢にも思つた事はありませんでした。（女性は今日に至るまで水のような感じしか持てません）

彼の手記は続く……。

「十八歳の頃、戦時中の事で、浴場で、ドイツ人の美しい青年に出会つた事があり、その時、彼の褐色の毛深い肉体と、発達の著しい象徴に、異常なショックを感じました。彼に強く抱きしめられたらどんなだらうと思ひ、以後しばらくは、彼の事が忘れられぬ存在になりました。」

B 或る泌尿科医。（彼は満洲に育ち、同性の性器に魅せられていたので、将来、泌尿器科か花柳病科の医者になろうと決心し、現在に至つたと云われる。）——「次第に対象を外人だけに限るようになり、夏休みなどロシア人の集る海岸へ行つて彼等の裸体に興奮し、海の中で masturbation を行いました。」

「終戦後、引揚げて来てから益々そのケイコウが甚しくなり、何とかして外人と交際したいと思ひ、色々考えましたが、良い考えが浮

陰微な快樂の告白

歪んだ思春期

赤田 弘



メリヤス織のパンティだった、その白い真ん中に、うすい何かのシミがついているのを見ると、僕の興奮は絶頂にした。

1

僕は、自分のした、あのいまわしい秘密を一生自分の胸のなかにそつと、ひめておくつもりだった。だれにも人には云わない決心だった自分の異状な性癖を告白することは、死ぬよりも辛い恥かしい事だったんです。

でも、御誌をみて、多くの人たちが、真険な告白や、異状な体験を語つてゐられるのをみて、僕も、自分のした事を胸に疊んでおくことが出来なくなりました。だから、ザンゲのような気持で、僕の「青春」の告白をします。

これをよんで馬鹿な奴だと笑う大人のひとや、まア氣味が悪いと眉をひそめる女のひとが居ることでしょう。でも僕は、全部話してしまうつもりです。

五年前。――まだ、終戦のごたごたが、おさまつていない頃だった、その頃、僕は、ある町の高等学校へ通っていた。

十七になつていたが、その頃から、僕は、自分の異状な性癖が頭をもたげてくるのを、おさえようが無くなつていた。学校の行きかえりに街をあるく。――その街で見かける若い、美しい女の姿に、僕の熱っぽい瞳が、吸いよせられるのだ。歩いたびに、ふと腿が、スカートを破かんばかりに、はり切り、その存在を明らかに示すタイトなスカート。ふと腿がきゅつ、

おりしながらこのスカートのぞきにあ
けつた。プラットホームに立つていて、
上品できれいな、若い、ハチ切れそうな

お嬢さんが、何も知らないで、手すりにもた
れると、僕は、心のなかで、「待つていらつ
しやい。今、僕が、のぞいてあげますから」

と、わざと、露悪的なことを云つて、階段
を降りて、のぞいたものだ。そういうお嬢さ
んはレースつきのズロースなんかしていた。

学校は、共学だったので、僕は、学校でも
あらゆる機会をとらえて女の子のそういう姿
態を盗み見た。校庭で、バレーボールなんか
しているのを、わきで見ながら、その子たち
が、体操シャツとブルーマの間にちらつと、
あける瞬間を待つていた。飛びあがつて、ポ
ールを打つときなどに、その白い、目にしみ
るようなお腹を見せてくれるのだ。可愛い、
おへそが見えたときなんか、僕は、倒れそう
な位興奮した。

そのうちに、僕は、段々、もつと強い刺戟
をのぞむようになってきた。勉強も手につか
ず、たゞ女のことばかり一日中考えていた。
女の柔らかい、シットリした皮膚にさわりた
かった。それが出来ないなら、せめて、女の
下着だけでも、さわりたいかった。それにうつ

つた匂いや、汚れをかきたかった。

僕の家近所に、進駐軍にとられたお邸が
あつて、その裏庭に行くと、いつも、きらび
やかな洗濯ものが、低いところに、紐でつる
されてあるのを僕は知つていた。日本の家庭
の洗濯ものは、色が地味だが、その家の、
さすがに外人の家庭のだけあつて、物すごく
派手だった。奥さんや、メイドさんの下着も
干してあつたが、白ばかりぢやなく、黄色や
ピンクや水色や、それにレースがついたり、
ナイロンのすき通るのがあつたり、ほんとに
お菓子みたいにきれいな下着だった。

そのズロースなんか見ると、あゝ、これが
外人の若い奥さんの、柔らかい、しつとりし
た、腰にぴつちりと、まつわつて、歩くたび
に、股の間で、こすれる布なのかと思うと、
たまらなかつた。……なにしろ進駐軍は、こ
わいので、出来るだけ、がまんしていたけど
ある夜、干し忘れたのを見ると、僕は、カキ



根をこえて行つて、紐から、そ
の、可愛い、柔らかい布を外し
て、ぬすんでしまった。外のく
らがりのなかで、僕は、それを
顔に当てた。でも、それは、案
に相違して、石鹼の匂いと、
日向臭いような匂いがするばかりで思つたほ
ど、外人の奥さんの匂いがしなかつた。女の
一番大事なものをぬすんだと云う、よろこび
はあつたけれど、洗濯しない女のを、今
度は、ぬすんで見たいという欲望をおさえる
事は出来なかつた。

その機会に、案外早く来た。夏休みのある
日。僕は、松林をぬけて海岸へ行つた。
この海岸は、岩が多いので、あんまりにぎ
やかではなかつた。それでも、真夏になると
ヨシヅ張りの脱衣茶屋が十軒ほど建つ。

僕は、浴衣一枚だったから、お茶屋になぞ
はいらず、はずれの松林のなかで、浴衣をぬ
いで、くるくるつと丸めると、それを松の木
のまたに、かくしておく。それでいゝのだ。
そのときも、浴衣をぬいでいたが、ふと、
僕は、岩の向うで、若い女のひとの陽気な笑
いごえをきいた。

その笑いごえが、いかにも魅力的で、甘か

つたので、僕は好奇心を起して、その大きな岩のすその方へ、そつと、足音をしのばせて廻つて行つた。そこは、もう、断崖に近くなつていて、あまり人が行かない所なので、僕はてつきり人目をしのぶアベックが何かしているのだろうと想像したのでした。

所が、岩のかげから、こわごわのぞくと、そうではなかった。

二十二三位の、サラーリガールらしい、軀のいゝ娘が、笑いながら、スカートをぬいでいた。見ると、そばに男の服がぬいであつてその男の人は、先へ、海へ入つてゐるらしい（僕の所からは見えなかった。）

女は、スカートを、倒れそうになりながらぬぐと、今度は、ブラウスをぬぎ、シミーズをぬぎました。真夏の太陽のなかで、大きいオッパイがぶるんと、ゆすれてました。それを見ると、僕は目まいがしうだつた。若い女が、はだかになるのを見ることは、はじめてだつたから。

「イヤよ。こつち見ちや。……見たら、目がつぶれるから」

その人は海へ向つて、そう云つて笑いながら、ズロースを足から外した。カゲが、僕の眼にシミるようだつた。

毛織の海水着を手早くつけて、そのひとが海の方へかけていくのを僕は、じつと見おくり、二人が、はるかに沖の方に泳ぎ出るのを待つて、二人のぬいだ服のところへ、そつと忍びよりました。そして、そのなかから、手早く、彼女の靴下と、ズロースと、乳当てをつかんで、岩のかげにかくれ、そこではじめて息をついてそれらの品をひろげました。

あゝ、今、あのひとの、身から離れたばかりの肌着。思ひなしか、この暑さと、恋人と一緒にの興奮のために、まだジツトリとしめつてゐるような感じのやわらかい下着。一番大切なものを、外界から、保護し、人の目にふれないようにする為の、柔らかい布きれ。僕は、それに頼りし、その匂いを鼻にあてました。洗濯したものゝ違つて、生々しい女の匂いがした。甘ずっぱいような匂いと、香水の匂いがまじつていた。割合に質素な、メリヤス織のパンティだつたが、その白い真ん中に、うすい何かのシミがついてゐるのを、見たとき、僕の興奮は、絶頂にたつし、悲しいみたい、切ないみたいな気持ちにかられて僕は、その部分を口にふくみ、あぐあぐと、つばでぬらし、齒でかんで、その部分の汚れをすゝつた。

汚いなんて感じは全然しなかつた。むしろ奉仕してゐるような敬虔な感じで、自己犠牲みたいなよろこびがあつた。そして、このズロースの主に、直接接吻してゐるような気になり、我慢出来なくて、僕は、その三つの品に、軀を当てゝ、それを、けがしてしまつた……。

僕は、急に、おそろしくなり、それらを元の所へ、這つて行つて、もどすと、あとも見ないで、かけ出した。二人は、沖の方で、歓声をあげながら、水をかけ合つていた。

その水の玉が、陽に輝いて、……いかにも幸福そうに見えるのだつた。

2

それに味をしめて、その夏は、毎日、海岸へ出た。

前のような経験もしたが、その他に、茶屋の裏をうろついて、女の客達の脱衣をのぞく事も覚えました。

茶屋の裏は、急なガケになつてゐるので、人に見られる事が少ない。それを利用して、僕は、その辺をうろつきました。茶屋のひとが出てくると、僕は、あわてゝ小便をしてゐるようふりをした。



十軒のうちで、二軒ほどが、直接、裏に向
つたところに、婦人脱衣所をもつていてそこ
から、シャワーの音がきこえ、きたない水が
流れ出していた。

夏場だけの、ヨシヅ張りなので、二重に張

つてあつたが、方々にのぞける場所があつた
が、外の方が明るいので、やたらな所へは、
立てなかつた。家と家との間の、暗いところ
え、じつとうづくまつてなかをのぞくと、う
すぐらいなかに、赤い色、白いものがチラ

チラする。しばらく眼をならしていると、そ
れが、若い娘の姿にかわるのだ。

お友達と二人づれで、陽気にさわぎながら
入ってきて、キヤツキヤツとふざけながら、
たちまち、素ッ裸になつて、水着にかえて出

て行く。だれにも見られないと思
うので、大胆に股をひろげて、手を当
て、しわを直したりしました。

でも水着にかえるときはつまらな
かつた。時間がみじかく、軀もぬれ
てないので、感じが、生々しくない
のです。

水からあがつてきて、ぴつたり、
軀にまつわりついた水着を「気もち
が悪いわ」なんて云いながら、引は
がし、素ッ裸になつて、まるでニン
フのように、シャワーを全身にあび
る。水が、つるつる身体をすべつて、
落ちて行く様子を見るのは、素晴ら
しかつた。

女つて、ずいぶん永い間かゝつて
軀のしほをおとす為に、お乳のわき
に手をやつたり、またをひらいて、
ヘンな姿態をとつたりするものだと
思った。それからタオルで、軀中を

ふいて下着をつける。……その間、僕はじつとつばを呑み込みながら、虫のように、息をこらして見ていた。……その度にいつも、はげしい興奮と、けたるさにおおわれて、恥かしい事をした。

まるで、そのひとと、一緒に愛し合っているように感じながら……。

女の下着が、どんなに多くの種類があるか知ったのも、この遊びのせいだった。お腹をぎゅうぎゅうしめながら、コルセットをつける奥さんもいた。そういう人は、たいてい、東京からやつてくるひとだった。

この附近の女のひとは、下着がそまつでつまらなかつた。たまに東京からくる女のひとが入つてくると、ひろいものをしたように思つた。でも、下着がきれいでも、軀がみにくい人もあり、そまつな下着の下に、彫刻みたいな軀をかくしているひとも居た。

3

夏が、おわると、僕はまた、街の散歩をはじめたけれど、もう、あの脱衣の刺激を味わつたあとでは、それも、物足りなくなつていた。

そこで、僕は、また、あれにおとらない遊

びを発見したのだ。

学校では一月に一度、体格検査がある。場所は別棟の校舎にある衛生室で、その日は、校医が出張し、男は午前中、午後からは女の生徒が、やる事になつていた。僕は、そこに目をつけたのだ。その女生徒たちの体格検査をのぞく事が出来たらどんなにいいだろう。

衛生室のとなりは物置になつて、こわれた机や教材が、まどのない真ツくらな室のなかに雑然とつんであつた。僕は、午後になると授業はさぼつて、その物置のなかへそつと忍び込んで行つた。机のつのである奥に、一ヶ所、穴があいて、そこから明りがさし込んでいた。やぶれた戸板の向うで展開されている風景こそ、僕が、のぞんだ、あの女の子たちの体格検査だったのだ。

何人かの女の子が、僕のすぐ、そばにらんで、手にカードをもちながら、順番を待つていた。三年生らしかつた。もう女も三年になると、すつかり、お乳も大きくなり、お尻も円くなつて、大人とかわらなくなるのだ。

そんな、三年生たちが、生意気にシミーズをつけたたり、大人のパンティをつけたたりしてならんでいた。ズロース一枚で、おっぱいを手で抱えている子もいた。

身長をはかり、体重をはかり、医者の前へ出て、胸の診察をうける。そのときは、みんな、恥かしいような、しなを作つて、くすぐつたように、医者の手をよけたりする。

つぼみのようなお乳、西洋梨みたいなお乳、ナイロンのパンティをはいている子がいて、その子は先生にしかられていた。なかど、すつかり、透けてしまつていたから。……

僕は、その節穴の向うから匂つてくる、女臭さに、頭が痛くなるような感じさえ覚えながら、おわりまで、それを見つづけた。物置から出てきたときは、ふらふらだった。

——そんな僕だったが、それでも、それから一年ほどたつて、恋人が出来た。高校の同窓生で、光子という子だった。(おかしいもので、高校にいる間は、仲良くならずに、卒業してから仲良くなつた。)

ある春の一日、僕たちは、お弁当をもつて附近の山えハイキングに出掛けた。

もう、汗ばむ位の陽気で、その上、上りばかりつづいたので、シャツもズボンも、汗でびっしょりになった。

光つちやんも同様らしく、ブラウスが、ぬれて、お乳のふくらみにくつつき、うすいブラジャを通して、お乳の先が見えた。僕は

それを見るといつもの性癖が顔を出して、はげしい欲情におそわれた。でも、まだ光つちやんとは接吻した事もない仲だった。

山の中に、流れがあつて、そこを渡らなくてはならなかった。

「私、渡れないわ」

と光つちやんが、甘えて云うので、僕は光つちやんを背負った。光つちやんは、恥かしがつて、足に力を入れるので、余計、光つちやんの太いもゝの感じが、べつたり、僕のお尻につたわる。僕は、いやがる光つちやんのお尻に手をまわして、支えながら、流れを渡った。光つちやんは、恥かしがつてあばれるので僕は倒れそうな位、興奮してしまつた。それから、しばらく、登つてから、光つちやんが、急にモチモチした。もうおひるに近い頃であたりには人気はなかつた。

「どうしたの……」

「あの……でも、いや」

「どうしたの？ 云つてごらん。気分悪いの……」

「ウ、ウ笑わないでね。おしっこしたいの」

光つちやんは、真つ赤になりながら、訴えるように僕を見上げた。

「なアんだ。そこえしちやいなよ」

「だつてエ。恥かしい……」

「だれも見てやしないよ」

「あなたが、見てるぢやない？」

「向うを向いててあげるからいゝだろ」

「耳もふさいでてね。だつて……」

僕は、うしろを向いた。でも、耳はふさがなかつた。光つちやんは、道のわきに、ズロースをおろしてしやがむと、若い娘らしい、はげしい、強い音をさせて、たまつていた生理を出した。紙の音がした。

「まだ、いやよ。まだ……」

と云つている光つちやんに、僕はふり向きざま、近づいて行つて、ズロースをあげおわらないうちに、彼女を抱きしめキスをした。彼女は、そんなにさからわなかつた。生理を知られてしまつた事が、彼女の抵抗を少なくしたのだろうか。

僕たちは、そのまゝ、草むらのなかえ入つた。光つちやんのしやがんだあとには、かなりの大きさに土がぬれて、その真ん中に、白い紙が、一部ぬれて、咲いていた。

光ちやんとそんな関係になると、急に眼の前が展けたようになつて、子供じみた好奇心は薄らいだかわりに、僕の嗜好に一層しつこい、根深いものになつたようだ。サジとマゾ

の入混つた不思議な狂ほしい思いでを胸を焼きなから街をうろつくようになったのです。

愛 読 者 通 信

拜啓 小生「風俗草紙」の創刊号よりの愛読者です。

小生どちらかというと、單なるサジ的読物より、フェティズムの混つたものを殊に愛読致します。

新年号では、「便所マニヤ」「尾行日記」「読・腎部マニヤ」「浣腸器に憑かれた男」など、夢中で読みました。

小生は、自分でもよくわからないのですが、女性の靴や美しい脚、形のいゝお臀などに激しい魅力を感じるのです。少し位不美人でも以上の条件が揃つていれば満足です。スタイル雑誌などを見ても着飾つた美しいお嬢さんの脚や靴を見て、興奮してしまいます。近頃は氣に入つた女性の写真を切り抜き、蒐集はじめたのでそれが四五百枚貯まりました。

どなたか同好の方とは是非文通し、資料を交換したいと思つてます。お手紙下さい。

(東京 T K 生)

責め體驗記

腹なぶり

……やゝ水平になつたふつくらした白い腹の上に、ヘソを中心に約 15 輻位の處を、その煮立つたうどん粉のネバを、刷毛につけてサツと塗る……。

竹内圭之介

若い
女のふくよ
かなお腹。私はこ
れほど男を惹きつけ
る力の大きなもの
は、他にあるまいと、
考えている。
腹上死、お腹様、
と云うのも、その女
の腹の魅力から来た
ものだろう。私はその
白いふくよかな腹を虐
げる。私はこの女性の腹の
好きな、サチであり、同時にマゾ
でもある。



これは腹部には限らないが、女体を磨ける場合、全然動けないようにして縛るよりも幾分動けて、その当人の苦しさ、動作に現はれるようにした方が、行う者にとつても、又行はれる者にとつても、よいのではないかと、私は思っている。

まづ始めに、私の知人である、ある親爺が行つていた方法を書く。この親爺は東京の場末でパン／＼屋をやつて居り、私と同様サチだった。これは商売上からの必要からかもしれないが、ちよい／＼そんな現場を、当時中學生だった私は見たものだ。

その時、私は女に対して、何と云う酷いことをするものだろうと吃驚もしたし、又どんな惨いことをされた女も、又して貰ひたいと云うような態度であるのを見て、不思議に思つた。

これは、その親爺さんが、自分が抱える商売女が、客の種を宿したのではないかと云う心配のある時、ある目的のために行う行爲であり、私の単なる作り話ではないことを、始めに記しておく。

女は月経がおくれ、その心配を感じ出すと、その旨を親爺さんに申出る。そこで親爺さんは、その女に苦痛を与えることを予

告し、承諾したら特に設備のある室に連れてゆく。そうして、第一回にはまづ「湯炙」と云うことをやる。

女を肌襦袢一枚、腰巻一枚にして、なるたけ嚴丈な椅子に腰掛けさせる。目かくしと猿ぐつわをする。次に両手を後方下にて椅子に縛る。次に女の両足を別々に椅子の前脚に縛る。肌襦袢をハダけて両乳の下を柔かな紐で椅子に縛る。最後に腰巻の紐を解き、腰巻を、だけ、股の付根を両方の椅子に縛る。

これで準備は出来た。其処で煮立つた湯の入つたヤカンと、硝子のコップを持つて来る。そして、始めは極く少量の湯をコップに注ぎ、腹に当て、熱いナと感じる位の熱さにして、ヘソを中心にコップを横にして押し当てる。それからコップを押したまゝ、大きく早く動かす、熱さを感じなくなつたナ、と思つたら又少量熱湯を入れて、ヘソ中心に当てる。

女は腹を凹まして、苦悶の状態を腹と股であらわす。その様にして、次から次へと熱量を増し、約十分位やると、どんなに強情な者でも、又どんな寒中でも、額から汗が出てくる。始めは横にして押しつけ、熱量を多く感じさせるため、今度は強く押し乍ら、大きく

動かす。その際には最高の苦悶を與えるから一ヶ所で固定させることなく、押しつけたまゝ、内臓への感覚を等分にするため、大きく早く動かすことである。

十分位やると、ヘソを中心にコップ型に赤く変色し、ヒリ／＼する。この変色とヒリヒリは、約半日で元通りになつてしまふ。この湯炙は大體十分位が適度で、もつと苦悶を与えたければ、そのヒリ／＼したふつくらした皮膚を指でつねつてやる。

このようにすれば、大體が例の目的を達するが、二、三日経つても、女の身に變化がないようならば、効果がなかつたものとして、次の処置「腹バケ」をやる。

女を前と同様にして椅子に縛りつけ、襦袢と腰巻をハダける。そして、今度は局部の上を布で覆うてやる。準備が出来たら、うどん粉か葛粉をドロ／＼に煮上つたのを持つて来て、女の體を左手で抱くように椅子と共に斜め後に倒し、やゝ水平になつたふくらした白い腹の上に、ヘソを中心に約十五厘位の円の処を、その煮立つたうどん粉のネバを、刷毛につけてサツと塗る。ドロ／＼したものに猛烈に熱さを感じる。

それを少し間をおいて、数回繰返す。椅子

が丈夫でないと、ひどくもかくから椅子をこわす。五分位が適当で、それ前に尿を洩して了う場合があるが、その場合には中止した方がいい。椅子と共に女の体を斜め後に倒し、腹部をやゝ水平にするのだが、幾分股の方が下になる。熱いドロ／＼が局部に行かぬよう、前に書いたように、布をあてるのである。尤も、それは女の希望に任せるのもよい。

次に、もつとやつて欲しいと望む女があったら、次の行爲を加える。熱いドロ／＼のものを塗つて冷めかけたら、手早く乾いた布で、なるべく手荒く腹を拭きとり、サツと冷めたい氷袋をあてる。ヘソ中心に約一分、之も非常に苦しいことである。一分以上は病気を起すおそれがある。

これで女を自由にしてやるのだが、五、六時間以内には、女は軽い下痢症状を起し、本来の目的の方にも効力が現はれる筈だ。

それでも、まだ駄目の場合には、今度は、設備を必要とする處の「腹縛り」である。これは、素裸でなければ、効力がうすいが、瞬間的には、相当の、苦悶を感じるのである。

先づ女を丸裸かにして直立させ、男の禪

のように丁字形に縄をかける。腹の廻りは荒縄で、なるべくヘソの廻りに痛さを感じさせる方がいい。尻から局部へは、なるべく太く、柔かな、喰ひこんでも支障のないようなものを用ひる。腹の廻りはなるべく強く緊め、両手を上げたり上體を前後に折ることが出来ぬように、緊める。それから目かくしと、猿ぐつおをする。

それで女を、床から四尺位の高さの合の上につつ伏せに寝かせる。手は自由でよい。縄の禪の後の処に尻の上五尺位の丈夫な縄をつけ、台の上三尺位の処に、しつかり一端を括りつける。そして、女と話をし乍ら、スキを狙つて、その合をパツと外す。合が取られた瞬間、女はヘソの廻りを締められて、空にぶら下る。腹部に凄しい苦痛を感じる。そして、もがきながら、吊した綱につかまらうとあせる。その藻掻き苦しむ様子が、何ともいえないのである。

そこで、吊られて逆さになつたら二分位、逆さでなかつたら五分位を最高として中止する。又、食事直後と、嚴寒の候には避けた方がいい。

それが済んだら、又女を素裸のまゝ床の上に立たせ、足を固定してしまひ、後方に倒れ

てもよい様に、布団などを重ねておく。その上で、幾分荒ナワのクビレ跡のついたふくよかな股を、ヘソを中心にいぢりながら、急に掌でヘソを平に強く押す。女は足を個定されているから、ドツと後に倒れる。ヘソを押す際には拳骨はやめて、掌で素早く、強くやつて欲しい。これを二、三度繰返すと、普通なら例の方の目的を達する。

以上は知人の親爺が、その抱え女たちに対して行つた方法だが、私もそれを見たためか、自分の腹を縛り、ひそかに若い女の腹を空想し、悦に入るようになってしまったのである。

しかし、これを実地に行つたのはK子に対して行つたのが最初だつた。私は十九歳の時に、同じ会社のK子を知つたがK子は私より二つ年上で、月経も十八歳の時始めてあつたと云うような女であつた。私たちは若気の軽卒から、急速に接近して、最後の一線を越えてしまった。そして、次に妊娠の兆候が現はれたのだ。

K子はすぐに私の処に相談に來た。そこで私はK子に、

「身体の一部に苦痛を与えたいよ」と、私が見聞したことを話した。K子は承

知した。そこで、痛くて大声を出すといけ
ないからと云ひ聞かせ、猿ぐつわをはめて
了ひ両手を上げさせて柱に縛りつけた。そ
の時、両足は柱を挟んで縛り、股の処だけ
を、出したり引つこめたりする余裕を残し
て括りつけた。

私に氣付いて腹を前後に振り乍ら拒んだが、私はサツサと彼女を腰巻一枚にしてしまった。赤い襦袢の中には、盛上つた二つの乳が、私の眼を怪しく射た。

「いゝお乳をしているね」
私は大膽になつて、その乳
房をなぶつた。K子は猿ぐつ
わの中で何か叫び乍ら、ふく
かな腹とお乳を前後に動かし
的感情を昂ぶらせて來た。

白い腹、可愛いヘソ。ヘソの下、なだ



らかなふくらみ。潑刺たる太腿、順々に現はれて来たK子の秘密境××××××××××××××××××××、私はどうしたら、私のサド的感情を満足ささせられるかと、考えた。そして、K子のこんもりした二つの乳から、腿

や腹の動き、私は陶然と見惚れた。

そして、再びサド的感情が起ると、私は用意した熱湯をコップの中に半分ほど注いだ。



そして、その熱さの加減も見ず、コップを右手に持ち左手で白くふくよかな腹をなぶりながら、K子が腹をゆつたりした時を狙つて、ヘソの上にサツと横に当てた。彼女はハツと腹を凹ました。私は次の瞬間、止せばよいのに、押したまゝ、コップをグル／＼と動かし

の辺り迄を、両手で力一杯ツネリ上げた。K
子は痛がつて、腹を凹ませたり、ふくらませ
たりした。

その苦しさにのたうつ、ピチ／＼した太腿

すると、同時にK子は腹をグンと前に突き出して、何やら呻き声をあげ、ダラリと半ば膝を曲げたような恰好で意識を失った。コップの湯が、余りにも熱かつたからである。私は、今は完全に無抵抗状態になつたK子の、前向きの覆うものなき白い肉体を眺めたが、不注意に氣絶させて、苦痛を一瞬時しか興えずに終つてしまったことを悔いた。

それから、K子が無抵抗になると、サド的

それから、K子が無抵抗になると、サド的

意識が消えてゆくを感じた。私はどうすれば、彼女の意識が回復するかと案じながら、私の布団の上にK子を寝せた。ヘソの廻りは、余りの熱さのためか変色してふくれていた。

頭を手拭で冷やして、K子に水を口移しにしてやると間もなく、彼女の意識は回復した。

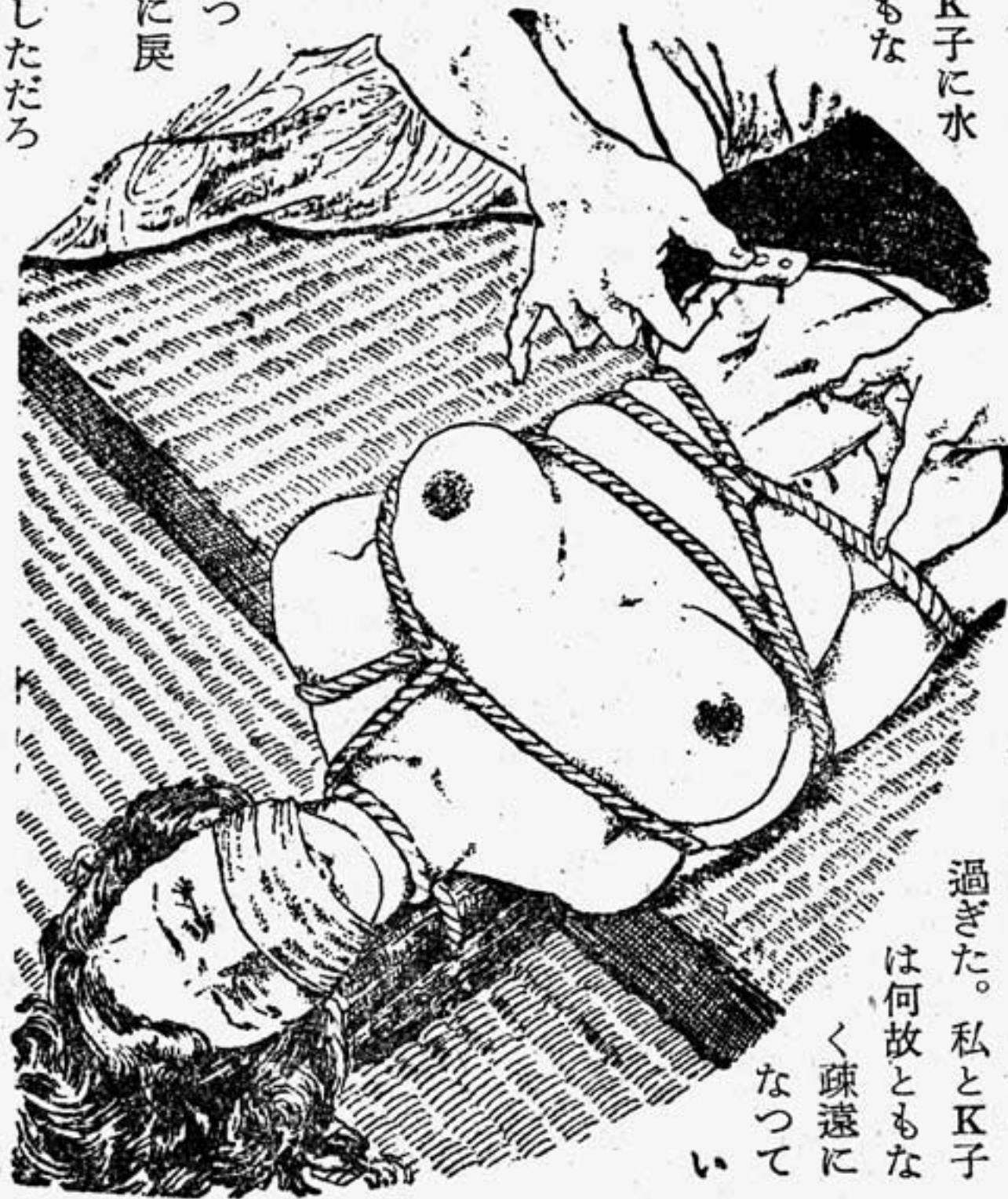
「あッ！ 痛い……」

K子は顔をしかめたが、暫くすると立ち上って私の傍を離れて、着物を着た。

お腹を気にして、痛がつていたが、私が見せると云つても、見せなかった。そのまゝ彼女は自宅に戻った。

私は例の目的の方は達したたろうかと、少し気にしていると、それから二、三日経つてから、K子は私に朗らかに云った。

「あの件、解決したわ。ずい分苦しかったけれど、效目があるわね」



私は再びK子の腹を虐げたい欲望にかられ、診て上げようと誘つたが、彼女は応じなかった。そこで私は、一人で彼女の腹のことを考え乍ら、いろ／＼空想して過した。

そんな風にして一年余り

過ぎた。私とK子

は何故ともな

く疎遠になつて

い

云うわけなのだ。

私はちよつとK子を憎いと思つたが、しかし、喜んでその件を引受けた。

その翌日の土曜日の晩に、K子は私の処に來た。私は相変らず和服姿のK子を、矢庭に押し倒し、後手に縛り裸にして、背中にK子の高さほどの丸太を入れ、首の処、ヒザの処を丸太に縛りつけ、目かくし、猿ぐつわをしてしまった。

それから、まづK子の××××……、乳を×××××。丸太で背中に腰に、動く度に痛みを受けるので、彼女はチツと動かなくなり、猿ぐつわの奥で呻いた。

私はこの様子を見ると、ムラ／＼とサド的な気分が起つて來たので、ヘソの廻りを指で強くひねり乍ら、用意していた鋭利な剃刀を右手に持ち、左手で皮膚をなるべく痛いようにキユツとつまみ上げ、右手でその白いふくよかな腹の一部を、わざとゆつくり、薄く切つていった。

K子は猿ぐつわの中で、うゝゝゝ、と呻きながら腹を凹ました。白いふくよかなヘソの廻りは、無惨に赤筋が引かれ、血が流れ始めた。サツと切れば余り痛みを感じない腹もズリ／＼切られてゆくその苦痛。白い腹に赤い

筋、流れ出る血……。苦痛を現はす太股や腹の皮、私は心中萬才を叫んだ。

それから、私は熱い湯でしぼった手拭で、一面に腹の上に溢れ出る血を拭きとった。なるべく押つけ乍ら、熱く感じるように大きく荒く拭いた。K子は腰と腹を最大限に動かし、跨がつている私を揺り、苦悶の状態を現はした。そのK子の藻掻く有様、殊に腹、ヘソの動きに、私のサジ的感情は最高潮に達した。

私は跨がつたまゝ右手で一掴みの食塩をとり、溢れ出る血に混せて腹の上を荒くこすりつけた。K子はもう動く氣力を失ひ、眞赤になつた腹だけが喘ぐように息づいている。氣絶はしなかつた。私は塩で腹部に苦痛と血止めの作用を与え乍ら、約五分間こすりまくつた。その夜はそれで彼女を自由にしてやつたが、例の目的の方は、彼女が帰宅するとすぐ効果が現はれたらしい。

それ以来、K子はサジの私の、よき好伴侶となつた。そこで私は、K子を相手に、洋服、和服の場合の縛り方、其他、さまざまのことを研究した。K子はもう完全なサジ、マゾになつて了ひ、人目を避けることだけに眞剣になつていたが、それから半年後の

ある夏の晩の二人の行爲が仇となつて、遂にK子と別れる運命が訪れた。

それは二人で行うマゾである。直径六厘、高さ十厘位のブリキの円筒を作つた。底も蓋もない、両端が肉体に喰ひ込むような、ブリキ管を作つたのである。それを私とK子が素裸になつて向き合い、ヘソ中心に当て、二人の腹部を帯で縛る。それから棒を使つて、K子の背中で、その帯を引緊めては、二人一諸にマゾの快楽を味うのだ。

私とK子の腹には、同じようにブリキが丸く喰ひ込んでゆき、等分に苦痛を与える。棒をねじると、二人共ヘソの廻りにひどい苦痛を感じて、耐え切れないようになつた。

その時、K子はよせばよいのに、私を前に押し倒した。アツと二人同時に声をあげた。K子は私と一語の前にノメツた。その瞬間、私は腹の上に血が流れるのを感じた。K子は押し潰したような悲鳴を洩らした。

私は急いで棒を元に廻し、帯を解いて、お互の腹を見た。K子の白い、丸みのある腹の、ヘソの下が半円に切れ、そこから血がダク／＼出て来た。上になつたK子の腹がそのブリキで丸く切れ、私の腹の傷は案外軽かつた。

K子の傷はなか／＼素人の私たちには癒りそうにもなかつたので、とう／＼私たちのことはK子の父に知れ、K子は会社を辞めさせられ、私から隔離する目的で、遠方の親戚に預けられてしまつたのだ。

それ以来、私はK子に逢う機会なく、淋しく過している。

愛読者通信

貴誌を創刊号から愛読し同好の友のあることを心強く感じております。

私は今年三十歳で未だ独身のものです。身長五尺五寸やせ形で容貌は十人なみ以上です、若い逞しい人を見ますととても興奮し心臓の高鳴を覚えます。受動、能動どちらでも融通がききますのですが未だ経験はありません。私の希望としては小樽近郊の方で文通又は交友出来る方で十八歳より二十七八歳位までの筋肉質の人を望みます、美貌ならば尙結構です。

どうぞお便り下さい御待ちしております。

(小樽 A・K生)

玲子十二ヶ月梅

— 其の六 —

酒くさい息が耳たぶをかすめた。

じりじりと抱きしめてくる男の腕の中に身をもがきながら、小梅は眼をとじる。いずれはこうなることを知りながら、田代から借りた金だった。恋じい人に達引くために無理をした田代への無心が、彼女のからだを縛り上げているのだ。

「……女將も承知の上で、話はちやんとしたあるんだぜ。金を返せと云うんじやあない、うんとさえ云へばいいんだ。芸者のくせに随分堅いことを云い通して、儂を袖にしていたが、他に色男があつたと判つちやあ、鼻の下を長くして金を引きずり出されていた此の田代の顔が丸つぶれさ。だから今夜はどうあつても、一声、いい音で鳴いてもらうぜ……」

帯あげで後手に縛り上げられた小梅の妖艶な姿態は、身をもがく度に色とりどりの衣紋が乱れて、今夜の爲に金を積んだよう



玲
え

な田代の好き心をかき立てずにはおかないのだ。やがて……隣室に引きずり込まれた小梅は、中年男の恋の恨みをこめた腕の下に一枚一枚衣類を剥がれていった。どれほど抵抗しても〃月の家〃のおかみまでが、田代の金縛りになつていたのである、どうてい救いの来よう筈もなかった。

恋しい人の名を狂つたように呼び続ける小梅の口に田代は猿轡をかませてしまった

「フツフツ。裸になると案外いい肉附きをしているんだな……その……」

匂うような肌の香りに鼻をうごめかせながら、勝ち誇つたように聞くにたえない毒舌を吐く田代の眼は、変態的な情慾に酔つてなめるように小梅のからだを見つめるのだ。そろそろと寄つて来るむしづの走るようなやに臭い男の体臭が、小梅の鼻腔を襲つて、ヌメヌメと這いまわる蛇の様な手が肩にかかった。

「う……う……う……」

必死に身を反らす小梅の総毛立つた膚に田代の口髭がチリチリと触れて、香ぐわしい続の肌を部厚い唇が蛭のように吸い付いて来る。

猿轡の下で呻き声をあげながら、小梅は悶えた。所きらわず吸い付いてくる責めとも愛撫ともつかない奇妙な舌と唇の感触は小梅の心に悪感を感じさせながらも、無理矢理にからだに妖しい火をつけてゆくのだ。真白い肌に点々と紅梅を散らしたようなあざをつけられながら、小梅は心とは別に吾が身がぬれてゆくのをどうすることも出来なかった。

(畫と文 喜多玲子)



妄執の愉悅 靴を漬す！

舌を駆使して、舐め、吸ひ、押しつける。そして遂にその場におかしな恰好でしやがみ込む。世の中で一番愛しい女靴を舐に押し當てて……

敷部 宏 一

瀧川 共画

西欧では、女の靴に美酒をたゝえて、ワグナの愛液にたとえて乾杯する風習があるそうである。

こんな風習があることを聞くと、私は同好の士があることを知つて非常に愉快になる。私達は常に孤独狷介だが、それは劣等感のせいであり、同じ性癖に悩む者が存在することは、大きな慰めである。だから、私が慣れぬペンを探つて、このいまわしい体験記を記すのも、一には虫ばまれた同憂の士へのひそやかな声援である。

私は現在ある司法関係の職にある。もう少し抽象的な暗示をつけ加えるなら、身を持す

ること清廉潔白、いさゝかの不正も許されぬ法の守護者の一人である。だが、この私の職業は、これから述べる異常性癖とは全然関係がない。いや、心理分析の泰斗から見ればあるのかも知れないが、私は判然とこれを割切つてゐる。つまり昼は聖者、夜の私は愚者である。

三十六才だが、妻はない。但し過去に妻帯の経験があるが、これは一ヶ月未満で解消した。原因は私の性的不能と云うことになつてゐる。

私は女性の靴に激しい憧憬を抱いている。これは遠く中学生時代からのことで、私のギ

タ・セクスアリスは、女靴によつて始まるのだ。裸の足、女性の素足には大した刺激も感じないのだが、恰好のよい靴を履いた女性を見ると、ひどく動揺する。

街を歩いていても、女性の足許にばかり視線が行つて、時に氣に入つた靴にぶつかると我を忘れて後をつけたりすることもある。そんな有様だから、婦人靴屋の前など、とても素通りは出来ない。ウインドに額を押つけて何時までも恍惚と眺めつゞけるのだ。女の靴と、それに附随する妄想から私自身を断切るのは、容易なことではない。私の結婚の失敗は、そのいゝ例だ。



私は煩悶の結果、この悲しむべき性癖を、結婚によつて解決しようとしたが、かえつて蕨蛇の結果を招いてしまった。

みじめな初夜以来、惨澹たる数日を過したが、私の肉体は意の如くならないのである。遂に一週間目、私は意を決して妻に、彼女が靴を履いたまゝ、床に入ってくれるよう懇願したが、彼女はさも馬鹿々々しそくに、言下

にそれを斥けた。

それではせめて、床の中に、私の蒐集した婦人靴を持込むことを許してくれるよう哀訴したが、それによつて妻は、私の精神状態にまで、疑惑を抱くに至つたのである。こうして私の結婚は解消された。五年前のことである。それ以来当然のことながら、私は独身生活をつゞけている。

と云つても全然性欲がないわけではない。いや、逆に鬱積した欲情は募るばかりで、ある時期に達すると、婦人靴を見たゞけで目がくらむ。だから、今に夢中で、とんでもない破廉恥な行為をするのではないかと云う、恐怖観念にさえ襲はれるのだ。

私は常人よりも、かえつて性欲が激しいのではないかと思はれる。そこで、それを抑制

して、かえつて物笑ひの種になるような行為を犯すことを防ぐために、私は娼婦の許を訪れるのである。金銭で左右することの出来る売笑婦――。彼女たちだけが、私を破滅から救ってくれる。

娼家を訪れる私を見て、朱美の朋輩たちは面白そうに、
「朱美ちゃん、ほらあんたの靴好き

な、酔狂なお客さんが来たよオ……」

と、笑止そうに呼び立てる。心ない朱美が私のことをベラベラ吹聴するらしく、どの女も滑稽そうに、私をジロジロ見るのだ。しかし、有難いことには、此処では金銭がすべてを解決してくれる。

朱美の部屋も実は畳敷なのだが、ハイカラ好きな彼女は、奥をカーテンで仕切つて、其処にベットを置いてある。ずい分古い年代ものだが、それでも、どうやらベッドとしての用を足す。第一にこれが、私にはとても都合なのだ。

近頃では万事心得ている朱美は、始めつから、ハイヒールを履いて入ってくる。そして部屋中をグルグルと歩き廻る。この時に彼女は、歩きながらガムを噛んでいたりと、歌を唱つたりすることもあるが、私はそんな点は、大して気にならないのだ。

この時、靴の色はそれほど重要ではないが靴の型は極く繊細な感じのするハイヒールに限るのだ。ローヒールのスポーツ靴などでは刺戟が弱くて、私はあまり嬉しくない。デリケートな線を見せる女靴ほど、喜びが多いのだ。殊に踵にあたる部分の曲線は、私にとつて重大な問題なのだ。此処のカーブが、デリ

ケートな美しさを誇示するものほどういふのである。

それから、靴の色は重要ではないと云つたが、これにも強いて云えば注文がある。色は真紅とか黒のキッドとか、はつきりしたものほどういふ。中間色などは駄目だ。それから案外なことに、女性たちが夏に愛用する純白のパンプスのハイヒールが、とても私を喜ばせてくれるのだ。

朱美は、彼女が持つている黒と赤とのハイヒールを交代に履いて、部屋中を歩き廻る。時には私が持参する靴を履いて貰うこともある。

私は床の上に坐り込んで、ひたすら彼女の動きを追う。茶目な朱美は、時々其処に投げ出してある、私の新調のソフトを踏んづけたり、背広の上衣を蹴飛ばしたりするが、そんな時には、ひとりでに喜悦の呻きが洩れてしまふのだ。

彼女が歩き廻ることに飽きて、ブツブツ文句を云ひ出す頃まで、たつぷり「動く女靴」に堪能すると、今度は彼女をベットに腰かけさせて接吻する。私はその時、彼女の足許を見ながら……、この場合、彼女の靴が私に見える位置でなければ接吻さえ不可能なのだ。

それから、今度は私はパンツとシャツだけの姿になつて、床の上に長く横になる。そして、朱美に私の体を踏んづけて貰うのだ。最初は背、臀部、太腿を。次いで仰向きになり胸、腹、そして……。

この時の昂奮は、まるで爆発的で、私を有頂天にする。殊に腹部、下腹部を踏まれる時の戦慄的な喜びは全身を襲つて、私は快感が苦悶か分らぬような呻き声をあげる。

「この馬鹿、なんてえ変態野郎だ。お前、それでも男かね。本当に世話がやけるつたらありやしないよ——」

朱美の唇から、退屈まぎれにそんな罵倒雑言が浴びせられるが、それはかえつて、私の快感を掻き立てるばかりなのだ。

私は体をよじりながら、私を踏みにつけている彼女の靴を必死に見る。その心よい驕慢な靴の表情……。デリケートなその動き……。

この時、まるで私は天国に遊んでいるような錯覚さえ覚える。

そして、私は、何時もは感じたことのない力が、たのしくも下腹部にみなぎつたことを知る。どんなに美しい女体の前でも、頑くなにうなだれている。それが、今、生々と生命力をとりかえしているのだ。不能症に喘ぐ私



は、こうした手段を経て、やつと人並に甦えつたのである。

充分に軀を踏まれ挑発されると、今度は大急ぎでハネ起き彼女をベツトに坐らせてからその足元にひざまづく。朱美の靴に対する接吻、と云うとまだ聞えがいが、実際には、

彼女の靴を舐め廻すのだ。

朱美の足首をかゝえ、私は敬虔な献身と、限りなき讃美をこめて、彼女の靴を愛撫する。そのツマ先から踵まで……。私はどうしても、そうやらすには居られないのだ。この行為は、ますます私の欲情をかり立てる。なんと云えぬ舌の觸感だ。

「まだなの。嫌にな

つちやうねえ。いゝ加減にしてよ、この色気狂ひ！」

朱美がジレて、足をピンピンと乱暴に動かすと、私はますます刺戟されて、しつかりと靴をかゝえこむ。

あまり足を荒く動かすと、こちらは必死に靴にかじりつくのだから、勢ひ余つて、ハイヒールがスツポリと抜けることもある。と、私は狂

気のように、顔ごと押込もうとするように、この女靴の内部に口も鼻もつゝこんでしまうのだ。

ブーンと鼻をつく、婦人靴の匂ひ。それは長い間の汗と脂がかもし出した、女靴独特のなんとも云えぬ芳香だ。この匂ひが、強ければ強いほど、私を無我の境地に誘う。だから女靴のスタイルはあくまで繊細に美しく、履き古した靴のように、足の脂がにじんだ、異臭がこもつたもののほゞいゝのだ。

これはちよつと矛盾しているが、私にとつては、抜きさしならぬ条件なのだ。足の汗や脂が革にしみこんだ匂ひは、なんとも云えない。女靴にしみこんだその匂ひ！ 私はまるで犬が好物にありついた様に、靴の内部をベチャ／＼と舐め廻す。

舌を最高度に駆使して、舐め、吸ひ、咬み押しつける。それが最高潮に達すると、私は遂にその場におかしな恰好でしやがみ込む。世の中で一番愛しい、その女靴を舐に押し当て……。十秒、二十秒、三十秒……。

やがて、私はグツタリと、崩れるように前のめりになる。その時始めて、私の耳に甲高い朱美の笑声がひゞくのだ。

それでも私は、その時久方ぶりの安息を覚

える。追ひつめられていた欲情から、やつと脱出したのだ。グツタリした虚脱感の中に、まだ放恣な快感が永く、尾をひいて残る。この時は本当に欲も得もない。赤ン坊のような気持だ。

しかし私は、その後は不思議に朱美の顔を見るのが気恥しくなつて、そゝくさと、彼女の靴の内部を拭つて後始末をし、数枚の紙幣を残して帰途につく。

「いやだねエ。まつたく。靴は使ひものにならないし、おまけに、靴を履いて歩き廻るんだから、畳も傷んでやり切れないよ」

彼女はきまつてそう云つては、一枚でも多く、私から紙幣をとりあげようとする。それを実に露骨な言動で現はすのだが、私は彼女の言分を尤もだと思つて、何時もずい分過分にチップをおくことにしている。

金で済むことならば！ まつたく、金銭を代償とする彼女たちの外に、誰がこんな私を満足させてくれるだろう。だが、他の表現をするなら、金で買はれる売笑婦にさえ、露骨に罵倒され、嘲笑される私なのだ。

こうした狂態を演じると、少くとも四、五日乃至一週間ほどは、かなり平静な生活を続けることが出来る。だが、その期間を過ぎる

と又も錯乱状態が訪れて、十日となると、眼の前で赤や黒や種々のハイヒールが、グルグルと渦を巻いて止らず、どうすればいいのかわらなくなつてしまう。

そう度々売笑婦の処に出かけるわけにも行かないし、又実際に相手が何時も朱美ばかりだと、感銘が少くなるのか、射精不能のまゝ終ることも、しばしば重なるようになった。なんとか新しい相手を、みつけないければならないと私は焦つたが、極度にこの秘密が洩れることを恐れているから、身の女性にはとても打明けられない。

或る時私は押しつぶされそうな苦悩を抱きながら、夜の銀座を歩いた。私は銀座などでは、何処と何処に靴屋があり、その中でも割と人目につかぬショウウィンドは何処、陳列の靴の、種類が最も多いのはどの店、と云う風に全部空んじている。その異常な記憶に従つて銀座を一巡したのだ。これは耐え難き欲情に襲はれた時、殆ど夢遊病的に私が行く散歩なのだ。

しかし、その時は、今見て来た沢山の婦人靴が眼の先にチラチラして、さまざま表情スタイルで、私に迫ってくる。余計に煩惱が加はるばかりで、我ながら困つたことになつ

たと思ひながら、新橋駅に向つた。

その新橋駅をグルリと廻つて、横手の薄暗いガード下まで来た時のことだ。ポツンと一人の女が立つている。云はずと知れた、この境界の夜の女だが、思はず私の視線はその女の足元にそゝがれた。美しい、最も私の好みに合つた、細身の真赤なハイヒールだつた。

私はその靴だけに眼をそゝぎながら、何気ない様子で近よつていつた。彼女の服装や容貌は、近よると、一層素晴しかつた。夜目にも鮮かな靴の色、デリケートなスタイル、私は思はずゴクリと生唾を呑みこんでいた。

「ちよつと課長さん、遊ばない？」

女はそんな御愛想を云ひながら、グイとよりそうように近よつて来る。私はそんな風に女にくつゝかれると、もう動けなくなつてしまつた。それでも視線は彼女の足元に落したまゝ黙つていた。

女はちよつと不審そうに、自分も足元を見たが、再び私の腕をとつて、

「ねえ、どうしたの、今夜おつき合ひなさいよ。スペシャルサービスOKよ」

と云う。そのサービスと云う言葉で、私はなんとなく勇氣が出て、思ひ切つて口を切つて見た。

「ねえ君、ちよつと云ひ憎いんだけど、君のその靴に、ペーゼさせてくれないか……」

女は案の定、あつけにとられて、

「なんだつて？ 何処にするつて？」

「靴だ。君のその美しい靴にだ。ちよいとでいゝんだから、たのむ！」

「なに云つてんのよお、この人は……、あんな、酔っぱらつてんの？」

「いや、ちよつとでいゝんだ。なんでもないんだ。なんでもないんだから……」

もう私は夢中になつて、押殺した声で囁きながら、グイグイと女の躰に迫ろうとした。

ガード下とは云え、新橋であることも、他にも、チラホラ人通りがあることも忘れていた。場所柄をわきまえる良識は、既に失はれてしまつていたのだ。私の頭の中は、赤い女王のようなハイヒールで占領されつくしていた。この時の女の靴の、なんとなまめかしかつたことだろう！

しかし、女の方は、この奇妙な男の、唐突な申出が理解出来る筈がなかつた。始めつから、足元ばかりを見つめていた様子と云ひ、その馬鹿々々しい要求と云ひ、てつきり私を精神異状者だと判断したのだ。

「いやだよ。あんた、キ印だね。いゝからも

う早く向うに行つてよ。嫌だつたら……」

その女の薄気味悪そうな表情を見ると、私はこの女王の靴を失うことを怖れて、一層躍起になつた。トッサに金だと思ひ、かくしから千円札を一枚引き抜いて、女の眼の前につきつけた。

「なんでもないんだ。この金上げるから……ねえ、ちよつと頼む！」

「いやだつたら、しつこいねえ、この氣狂ひは……、よしてよ、人を呼ぶよ！」

私はもう駄目だと思ひ、いきなりしやがみこんで彼女の足首に手をかけた。女はドツと倒れて、薄暗い中に、その赤い靴を履いた二本の足が跳ね上つた。その時の、夢中でなされた足と靴の動きの見事さに、私は最後の理性も失つて、必死で片方の足首をつかんで胸に抱えこみ、貧ぼるように唇をつけた。朱美の時のように、馴れてダラリと動かぬ足ではない。

女は驚いて、何か叫びながら、両足をバタバタして離れようとする。片足を両手でつかんで夢中で舐め廻している私の肩や顔を女のもう一方の靴が無茶苦茶に打つ、蹴る……。これが快感でなくてなんだろう！ あんなに素晴らしいことは、空前絶後だと、私は現

在も思っている。

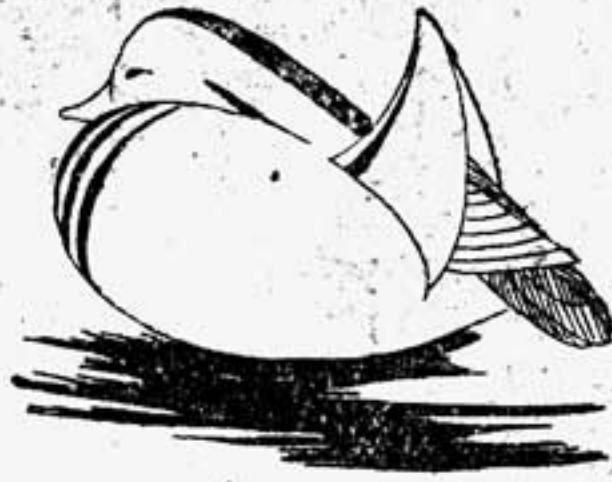
あまり女が暴れるので、靴がぬけた。その時、女の声を開きつけて、バタバタ駆けよる人影が見えたので、私はハッと気がついて、必死に逃げ出した。女の靴の片方を、しつかりと握りしめたまゝ――。

たしか「氣狂ひなのよ！」と叫ぶ女の声を知ったように思う。その時、女はまだ靴を奪はれたことに気がつかなくなつたため、単なる氣狂の仕業で止むを得ないと思つてか、あまり追はなかつたのだらうと思う。このことは私に幸した。

若しあの時、すぐ女が靴の紛失に気がついて、通行人と共に私を追跡していたら……と思うと、私は今でも冷汗を禁じ得ない。

一切は明るみに出て、私はその職にあるまじき変態痴漢として、社会から葬り去られたのに違ひないのである。それを思うと、私は慄然とする。

しかし、それと同時に、あの夜の赤い靴がもたらしてくれた昂奮と喜びが、永く私の病歴中に記憶されてゆくに違ひないことも、又深刻なのだ。



鏡

妖

傳

虫……夥しい蛆虫！ 何千……何萬……何十萬！
その一匹がコロコロと於縫の口へ。「ゲオーツ」
全身が冷汗に濡れ、吐瀉物と無數の蛆。ここは
白骨と腐屍と死人の藏の中だ……

上篇・鏡女の巻

島 本 春 雄
中 島 喜 美 画

一、鼈侍と廢屋

三條大橋の擬寶珠が雨に濡れ、常夜燈の潤んだような灯に映へていた。賀茂のせせらぎも、勦々と雨に濡れている。

そうして、その屋敷は荒れ果てていた。座敷には疊が敷いてあつたが、腐つてぶよぶよになつていたし、床も所々抜けている。

破れ腐れてぼろぼろになつた蒲団の敷いてある四疊半の部屋。ぼろつと、腐り蒲団の上で陰火が燃へる。不気味な骸骨の寝ている蒲団である。にゆつと、はみ出ている骸骨の右手は、青い錆の浮いた銅製の丸鏡を握っているのだ。

……この、底気味の悪い部屋に、女と男がいた。

男は、浪人侍であろう。長身瘦軀、月代をのぼして、鴛鴦の抜き紋のある鏡模様を白衣の一面に散らした奇妙な着物を着流している。

不健康な青い肌、薄い冷酷を思わせる唇。

「ふふふ……どうじや、もうそろそろ泥を吐いてもよからう……鴛

鴛の鏡……あの鏡翁の鴛鴦鏡をどこえやつた？ 言えつ！」

女は……？

女は部屋の隅にいた。しどけない姿である。そう、しどけない姿なればこそ、それが女と知れるのだ。

美しい——真珠の肌。統の肌といつてもよい。しかし、頭は明らかに、黒々と、ふつさりとした御小姓髷だ。傍に、藤色の大振袖、曙色ばかりの精緻な小姓袴、梨子地銀泥鞆の短か刀が、乱花を思わせるていで散らかっている。

美しい。艶麗だ。政信の描いた若衆よりもつと窈窕だ。ほんのりと薄化粧、笹色の口紅……明らかにこれは寺小姓のよそおいである。

しかし、女だった。今、下着一枚……それが、燃えるような緋鹿の子の腰のものだったし、裸の上半身には、ふつくらと固緊りの双つの乳房がある。

時折り、腐れ骸骨の蒲団の上で、ぼろつと、と隣が、陰火が、青白

く燃える。

ニヤーオ、どこか近くで、猫が、不気味に啼いた……。

小姓鬚のその美女は、後手に縛られている。

「どうだ、言わぬか。鏡翁の鴛鴦鏡はどこにある？」

「その様なもの、存じませぬものを。……お許しなされて下されませ」

ねつとりと粘膜にまといつく様な声だ。

「いいや許さぬ、泥を吐くまではな。……おい、草笛紅之巫——いやさ、本名寺西於縫、てめえ、この俺を、この嫦娥月太郎をナメていやがるんだらう。へつ、俺や鬼だぜ、見ろつ、このアマ！」

嫦娥月太郎、突然すつくと立ち上ると、無反り朱鞘の大刀を腰にぶちこんで、小姓髪半裸の妖美な於縫を肩に引つ担いだ。



ぎつし、ギッシ、ぎつし——腐れ朽ちた廊下を渡つて内庭へ出る。

草茫々——。雨は音もなく雑草を濡らし、その向うの古井戸の朽ち腐された釣瓶屋根を濡らせている。

於縫は、この釣瓶の滑車綱に、右足首を緊縛され、逆様に吊り下げられた。緋鹿の子の腰の物が、ふんわりと下へ垂れて無惨やな白蠟の、肉置ゆたかな下半身が、幽暗の中に逆様の妖美さで剥き出しとなる。たしかに彼女は女であつた。いまや、女の身のいのちの個所を隠すにすべない於縫である。

血が顔えのぼる——いや、この場合、くだると言うべきか。ともあれ、苦しいのであるう、自由な左足を、よじり、曲げ、くねらせ

……そのたびに、逆さ吊りの裸身が、ゆつさギリリ、ゆつさギリリと揺れる。

滑車の片側の綱を支えて、執念の青肌侍月太郎は、陰気に問う。

「こりや、本願寺小姓。鴛鴦鏡のありかを申せつ！」

切なく、苦しい声で、

「存、存じませぬ。ああ、し、知りませぬものを……」

「ええい、強情な。流石は、六百万信徒の眼を欺いて、女の身をもはばかりず、小姓姿の化身のまま、本願寺管領法主の夜伽を勤める程の女。しぶといのう。が……」

婦娥浪人、ニタリと笑つて、掴んでいた綱に、庭石の大きなのを括りつけた。

於縫の体重とほぼ同量……で、於縫の逆さ裸身は、不安定に宙吊りとなつてゐる。

「ふふふ……くくくく」

何かしら、嬉しくてたまらぬ様に、

肩で笑う婦娥月太郎——そぼ降る雨に濡れながら、ニャーオと啼く猫を、

「タマよ、これ珠」

と呼んだ。幽暗の中を、すつと

黒いものが魔の様に飛んで、月太郎の肩の上に、漆黒の烏猫が、一種独特のけものの臭気を拡散させる。月太郎浪人は、この烏猫を抱いて、その尾を於縫のおとがいの辺りへ、ふんわりと触れさせた。

「あつ！」

思わず叫んで身をのけぞる。それを追つて容赦もなく、頬え、腋の下へ、乳房え、下腹部え——さらさらさら、ぞろぞろ……

擦ぐつたい！ 於縫は必死に歯を喰い縛りのけ反り、よじり、くねり、

「あつ、アア、あつ、くくクク……ヒヒ……」

その反動で、滑車が、ギリギリと軋んで、彼女の身体は、下え下えと沈んで行く。

そして、激んだ、青臭い、ドロンとした古井戸の水の中へ、彼女の頭が、眼が、鼻が、口が……沈む、沈むのだ。

ゴボリ、ゴボン、

苦しまぎれに吐く息が、水を押しあげ、次の瞬間、イヤでも於縫はゴクンと臭い汚水をのんだ。

と、見て、月太郎は支えの石を、ちよんと突く。その反動で、於縫のからだは、ゆうらり、フンワリと古井戸の底から上昇して来る「おい、鴛鴦鏡は？」





「ぞ、
存じませぬ。
お、お許しなされ

て、い如何様の勤めもいといませぬ程に」

「ふふ、身共の足の裏でも舐めるか」

「は、はい、舐めまする」

「ハハハハ…俺と寝るか」いやな奴。

「ハ、はい」と、羞恥も感ぜずに――

「鴛鴦鏡は何処じや」

「存じませぬ」

「くそつ！」

そして又、於縫の身には
怖ろしい、おぞましい慄ぐ
りと水責めの責め手が……

二、鏡小町と 甜舌裸女

雨はまだ降っている。暗

い。
「ほほほほ……お前さん、

なまぬるいねえ」

不意に女の声。甘い、麥に鼻に
かかった声――しかし、何となく
邪氣にみちた奇妙な、つまり危険な種

類の声だ。

嫦娥月太郎は、はつとなつて思わず背後を
振り返った。そこに……茫々の草叢の中に――
女が立っている。

紫の頭巾。濃紫の地に斑に白鏡の模様を抜いた被布。裏緋羽二重輪子銀糸鏡の繡裾模様の着物、黒襦子に金糸鏡模様の帯、そうして口に、鴛鴦の裏彫りのある懷中鏡を、その緋房でくわえている……鏡、鏡、鏡、かがみの化け物の様な女だ。

しかし、妖しくも美しい……！

「うぬつ、鏡小町の小房！」

「ほほほ……お前さん、この鏡が見えるかえ。ほら、光るだろう、白く……青く……」

「何を言やがる。見損うねえ。てめえの鏡幻術あ先刻承知の嫦娥月太郎だ。やい、その鴛鴦の雄鏡を渡せつ！」

ふつ！ フツ、フツ、フツ！

突然、闇を縫つて、異様な、白く、鋭く、

光るもの、含み針が飛んだ。

口に含んで、急裂に、吐く息と共に飛ばす

含み針！ 危険な邪惡な兇器だ。

「あつ！」

不意を食つて、その一本が、右の眼蓋に突つ刺さる。

「不覺……！」

叫んで月太郎侍は、蜻蛉返りに反転、追討ちを避けて、雨闇の彼方へと疾風の速さで逃げていた。

「ほほほ……ホホホホ」

妖しく笑う鏡小町。於縫は既に逆さ吊りの苦痛を耐え切れず、気を失っていた。

ニヤオ、猫が、釣瓶屋根の上で陰気に啼く。どいつもこいつも化け者だ。

鏡小町は魔性の女

月のある夜にや柳の下で

鴛鴦鏡を口に咥えて

前髪若衆に呪いかけて

鏡の淫の犠牲にする……

こんな手鞠唄が、洛中洛外の女童たちに歌われ出したのは、勤皇佐幕の確執が、愈々危険な状態へと突入しつつあった安政五年戊午の年正月からであった。

事実、その手鞠唄が歌われ始める頃に前後して、洛中でも評判の美小姓が二人、神隠しにでもあつた様に煙の如く失踪している。

——あの鴛鴦の雄鏡は、汚れを知らぬ美小姓の柔肌を、あたかも男女の交りの様に、求め、吸い、愛撫するのだ……と、誠しやかに言いふらす者もあつた。

それはとも角、失踪した二人の美小姓の名は、花房紫近、草笛紅之丞——共に俗塵を知

らぬ雲上の花小姓だ。

花房紫近は東本願寺、草笛紅之丞は西本願寺の管領法主の寵愛を受ける寺小姓だ。

本願寺の勢力は強大である。

所司代、三筋岡崎五万石の本多美濃守は、

所属の五十騎の与力、百人の同心に対して嚴探の命を下した。

それから十日……草笛紅之丞は、洛中寺町の廃屋、人呼んで鏡屋敷という、その幽霊屋敷で、無惨な釣瓶責めにあつて、息も絶え絶えになつている。

草笛紅之丞は、世にも妙な女だつた。

鏡小町の小房とは一体何者？

青い死人肌の浪人侍嫦娥月太郎とは、彼も

また謎の男であるが……

そうして、鴛鴦鏡とは？

雄鏡があれば、当然雌鏡がなくてはならぬが……

その謎も、やがては解けるであろう。

「安政京波奈志」の中には、ちゃんと一部始終が綴つてあるのだからネへへへ。

於縫小姓は、奇怪な鏡小町に救われた。しかしそれは、ほんの一刻の憩に過ぎなかつたのである。

それが証拠に——、

小じんまりとした、購曳には手頃の四疊半右手に春信の「乱枕春夜懽悦」という、何ともはや物凄しい、全然発禁物の春画屏風。その横に、朱骨絹張りの有明行燈。下手に、紅綸子の燃える様な絹夜具。

於縫はこの部屋にいた、そうして鏡小町も……更に今一人、眼の覚める様な美小姓が……

美小姓は、曙色乱れ蝶の大振袖、空染め裾荒波の小姓袴、蠟色鞆白欄の短か刀、恍惚となる美しさだが、その面差しの何処かに、何かしら普通でないもの、倒錯した一種の淫靡な蔭を持つている。

「紫近、その女子を責めて見や。馳侍の嫦娥月太郎が、釣瓶責めにかけても泥を吐かなかつたしぶとい女だよ。そのつもりで……」

鏡小町は、年増盛りの、凝脂ののつた豊艶な軀を白絹鏡絞りの長襦袢に包んで、紅綸子の夜具の中から、鎌首をもたげて言う。「はい」

と答えて、美小姓は立ち上った。

そうして、きぬずれの音も惱ましく、さらさらと大振袖を、袴を、紅絹裏白絹の半襦袢を……脱ぎ捨てる。

ああ、白光の裸身、この美小姓も女であつ

た！

於縫も裸身。部屋の隅で、乳房を押さえて小さくなっている。逃げる事は出来ない。緋のしごきが、彼女の左の足首を緊縛して、それが床の間の柱に巻きつけられてあるのだ。

「於縫さん、鴛鴦の雌鏡を何処へやつたか、仰有る気はありませぬか？」

と、紫近小姓。

「ただ訊いたつて、無駄だよ」

と床の中から鏡小町。

「うれし泣きに泣いて、我れから白状したくなるまで、舐めておやり」

紅綸子の夜具から、身を乗り出すようにして鏡小町が重ねて言う。

その彼女の、異様に発達した、畸型じみてさえ見える大きな乳房の谷間に、キラリと光る丸い物。それは懐中鏡であつた。緋綾の房紐で護符のように首から下げているのだ。

裏に鴛鴦の彫りがある雄鏡……

さて——それからおこつた状景を、いつたい如何に描写したらいいのか。

……春信の、あられもない屏風の前で、もつれからみあう二つの白い肉塊？

紫近と呼ばれた女小姓は、その全身に、眼に見えざる吸盤でも持つているのか、於縫の

裸身にぴつたりと吸着して、何と、あかい、気味の悪いその舌で、ペロリ、ヌメリ、ぴちやつ、ぐいぐい、グイグイ……於縫の肌を舐め始めたのだ。

女は、全身これ色情帯だと言われる。

眼蓋、眼尻、鼻、耳朶、口、乳房、頸、首腋の下、臍の周囲、股、膝の背部……等々

彼女の舌は魔物の様に、於縫の急所をせめつける。それは、何と甘美な折檻であつたらう……！

しかし於縫は呻いている。必死にのがれようと、あがいていう。

「ううう、アアア……い、いや、ククク……ふつふつ……お許し、……あそばして……ふうつ、むうつ、いや……ククク……」

於縫が洩らす断片的な言葉。いくら書いてもきりが無い。しかし、鏡小町の予期に反して、於縫は遂に、鴛鴦の雌鏡とやらの行方を吐かなかつた。そうして、全身の脂を舐めつくされるのと同時に、

ケケケケ……と狂つたような狂声を残して悶絶して仕舞つた。

「ちき生つ！ 何て強情な……紫近、そいつを裏の土蔵へ抛り込んでおやり！」

鏡小町の紅唇が火と燃えて、美しい眉間に



「はてね。
するとあの
女は、花房
紫近、つま
り寺侍三條
頼紀の娘千
絵……つて
訳か。於縫
の紅之巫と

青い
血管が
怒張する。
天井裏で

「

は事変つて、大変な女だな
あれや……」
嫦娥月太郎、天井裏に忍ん
で、事の始終を悠々御見物とあ
つた。

「——千絵、おいでな……」

於縫を土蔵に押込めて戻った女小
姓に、始めて女名前呼びかけて、淫
らな含み笑い、

フフフ……と、眼で夜具へ誘う。

そうして、女同志の倒錯した、いやらしい
色情に、肌も燃え、吐く息も切なく溺れ込ん
で行く二人……。

この機会を、天井裏の嫦娥月太郎は狙つて
いたのだ。どんな怪物でも、情痴のさなかで
は隙だらけだ。

ふツと行燈の灯が消える。

ぐえつ！ と異様な呻き声。

さつ、と窓外に抜け出す白い裸身……。
それを追つて、ピュン、ピュン、二本の半
弓の矢。だがその矢はそれたようだ。

三、畸型侍と蛆虫蔵

「ふーむ、これが、噂に聞く鏡屋敷か」
れいの廢屋の庭に立つて、こう言わたのは

今に残る『安政京波奈志』の作者鳴子善四郎である。名前は善四郎だが、この侍、何とも物凄く怪異な男だ。

先ず、左の耳が無い。左手が手首から先が無い。背丈は四尺五六寸。ひどい侏儒だ。その上足がくの字形に曲つたきりで、しやんとびない。ガニ股だ。獅子鼻だ。鰐口だ。

ただ、その眼だけが、叡智をたたえて恐ろしく澄んでいる。天才の眼だ。こう云う極端に肉体的畸型の者には、往々にして、大天才があるものだ。

事実、この鳴子善四郎、京都東町奉行岡部備後守の腹心で、名与力と言われている。こんな変ちくりんな躰で京流居合抜の名手で、かつ文筆が巧緻だ。缺點が一つ。こんな化け者の癖に病的な女好きだった。が、それはともかく、同行の鏡師伊馬鞠鷹は、「さよう御座います」

と善四郎の質問を受けて、ぺろつと唇にしみりてくから、咄々と語り出した。

「この屋敷の主は、俗に鏡翁とも鏡聖とも呼ばれておりました従五位下侍従由良上総介でござります。鏡師としては最高の名譽の者、事実、鏡づくりのわざに就いて、古今に絶する名人と申せましょう。それが一年前に……」

一年前に鏡翁は発狂したのだ。明けても暮れても、鏡、鏡、鏡の生活。鏡が彼の生命であり、鏡に憑かれた人間だった。彼のつくつた鏡には魂があると云われていた。五十年の長い年月、鏡を磨き鏡と一緒に生活して来たそうして、鏡に映る彼の虚像が、実在の人間としての翁の魂を吸いとつて仕舞つたのだ。かくて彼は発狂し、失踪した。

鏡翁には一人の弟子があつた。奥丹波の透破郷士の出で嫦娥月太郎——甲賀者と同じく透破特有の隠密術に長じた男である。

鏡翁には一人の妾があつた。三十幾つも年が違ふ紀州木魔ノ里出身の不思議な眠術（今日の催眠術）を使う妖麗な美女である。

この二人とも、鏡聖の莫大な財寶を狙つて一人は弟子に一人は妾に、強引に座り込んだのだという。

ニヤオ、と近くで猫が啼いた。

「あ、これは、翁の愛猫で、タマという猫です。主人がいなくなつても、この幽霊屋敷を離れず住みついていると見える」

鞠鷹が言つた。

「猫は生来恩知らずさ。主人の失せた荒れ屋敷に執着する訳わねえ」

と善四郎侏儒。が、一寸考える眼になつた。

骸骨の部屋に、れいの藤色の大振袖や曙ばかりの袴……

「おつ、本願寺女郎、草笛紅之巫の消跡が掴めたぜ。はて、裸で、女の身を何処へ行つた？」

「ええつ、女……女ですつて？」

「そうさ、管領法主も、とんだ助平よ。寵愛の御小姓、実は胸のふくらんだ女郎なのさ。この善四郎の眼は節穴じゃねえ。ところで、あの猫だが……」

二人は鏡の間へ入る。

朽ち腐れた鏡の間。かつての翁の仕事場。銅の鏡、真鍮の鏡、鉄の鏡、南蠻渡りの硝子の鏡。丸いの、扇形の、大きい、小さいの、青い錆、赤い錆、光っているの、曇っているの、磨いてあるやつ無いやつ……無数の鏡、鏡、鏡、そしてそくそく迫る荒廢の章氣。

「人間臭せえぜ。変だな。地下部屋が……」

鼻をピコつかせ、馬鹿らしいといった顔をしている鞠鷹に、

「あの骸骨……猫……いや、それよりも紅之巫の於縫は何処にいるのだらう……？」

その於縫は蔵の中だ。素つ裸で後手に括られて、彼女は今、狂気の寸前にある。

おぞましい蔵だった。怖ろしい蔵である。

これは、蔵というより、大きな墓穴かも知れぬ。臭い！ ゲエーッとなる凄惨な臭気。腐臭だ。人間の、死臭腐臭……？

蔵の中には三つの死体があつた。殆んど白骨化したもの、なかば腐れて、眼や鼻や股間の粘膜部位がドロドロになつてゐるもの、

ひんやりと冷たい死肌の新しい屍。

みんな前髪の美？ 小姓だ。たしかにこれは男だつたが……

それだけなら未だよい。

虫……！ 夥しい蛆虫だ。何千……何万……

……何十万……。うちやうちや、蠢き、転げ、於縫の肌の上に、ヌメラヌメラ……

「ヒイッ」

叫んで夢中で転げ逃げる。その体重で、プツン、プツンと潰される、小さな、おぞましい妖虫！「ヒイッ。救けてっ！」

腐臭。蛆虫がホロホロと於縫の顔の上へ。

「ゲエッ！ べつべつ、プツプツ」

足首へ、胴へ、腹の上へ、乱れ崩れた髪の中へ、おぞましく這いづり込んで来る腐肉の虫……。

その一匹が、コロコロと彼女の口へ。

「ゲオーッ」

於縫は遂に胃の物を吐いた。あとからあと

から、黄色い水のえづき。

全身が冷汗脂汗に濡れ、吐瀉物と、無数の蛆と、白骨と腐屍と死人の蔵の中を、彼女は無意味に転げ廻る。

腫の色が妖しい。発狂の寸前なのだ。救いの手はないのか。

今ならもう、鴛鴦の雌鏡とやらの行方を、もし知つてゐるのならしやべるに違いない。

鏡小町はどうした。

——嫦娥月太郎の丹州流透破礫を、天井裏から食わされて悶絶し、彼の隠れ家へ連れ去られた。

花房紫近のお千絵はどうした。

——とつさに、鏡小町の首から、鴛鴦の雄鏡を引つたくつて、裸のまゝ外へ逃げた。そうして何処へ行つたのか。本願寺へ逃げ戻つたのか！

いいや、鏡小町の小房の鏡幻術（眠術）に引つかかつて、五條の坂から誘拐されて以来日毎夜毎の飽くなき倒錯色情の嵐にもまれて今や、自からも眠つていた変態的な感覚を呼び起し、淫鬼となり果ててゐるお千絵だ。

今さら本願寺へ戻つて、線香臭い法主の夜伽を勤める気なぞさらさらなからう。

裸は、お千絵は平氣だつた。彼女は露出症

で、裸身甜舌症で、そうして加虐色情狂の傾向がある……それにしても……。

「……これ、娘御！」

裸の千絵女は、はつと立ち止つた。嫦娥月太郎の矢を避けて、一旦は逃げたが、もうそろそろよからうと、鏡小町の隠れ家へ戻る道だ。深夜で全く人通りはない。

呼び止めたのは、白髪白髯の老人だ。

ちろちろ千絵女の裸身を、舐めるように見る——。「ほほ、助平爺いさん……」

「——でもないぞ、わしは……」

ぐいと近寄つてぐいんと激しい当て身業！「うん」と悶絶する千絵。

「ふおっほっほっ……ふおっふおっ……」

変てこな妖しい含み笑いを笑う怪老だ。

悶絶したお千絵を小脇に抱いて、よたよたよろよろ……何処へ行く。いやさ、彼女はいつたいどうなるのだ。この爺いはい体何もんだい？

雨が降つて来た。黝々と冷たく。陰雨だ。どう狂つたのか、向うの寺の森で、カアアとひと声鳥が泣いた。

いや泣くのは鳥ばかりじゃない。今にお千絵も、鏡小町の小房も……於縫はしかし、狂気の寸前にあるのだが……。 (次号完結)

★

読者交歓室

そとみあ通信

藤井 晃

僕は数え年で廿五歳の会社員です。中学二年の時、学校のキャンプへ行つた頃から上級生に可愛がられはじめ、次々に何人もの人からペデラスティされました。それがためかどうか分りませんが、受動的なウールニングで、また三〇％、四〇％位のマゾ傾向があります。最初体の肉的交渉の時、まだ無智でもあり内気な僕の性質を知っていた上級生の〇は、僕の両手を縛つてから、半ば無理強いに僕をペデラスティしてしまつ

たのです。

尤も僕は、その時いやだくと逃げながらも、決して彼を嫌いではなく、自由をうばわれたことによつて、自分自身の心理的な申譯と、彼に対するはずかしさのカバーとすることができたのです。その後も僕はペデラスティされる場合、自分の方から挑発的に仕向けていながら、最後には、自分の意志でなく厭や／＼ながら相手に自由にされてしまつた」という安心感を得るため、相手をじらしては何とかして後手に縛らせるように仕向けて来ました。それによつてマゾ

的快感も得られますし、この心理を細かく分解したら、實に複雑なフアクターを含んでることでしょう。

勿論まだ結婚はしていず、おそらく結婚したら困るだろうと心配しています。というのは、いままでずっと受身でのみペデラスティされてきたため（だろうと思うのですが如何でしょう？ こういう変化が肉体的に起るものですかしら？）僕は肉体的にも精神的にも女性化してしまつたのです。

シムボルも小さく（十四、五歳のまま）そして包莖で、能動的にはまして女

性には——役に立ちそうもありません。皮膚は女性のようにキメが細かく色白で、体格はまあ中肉中背（やや高め）、ウエーブのある幾分茶色の髪、あなたにひやかされそうですけど（十月号の「そとみあ通信」欄から考えると）、マスクはまづ／＼どこえ出してもハンサムといわれることはマチガイなしと、自他共に許しています。又、年令よりはるかに若く見えます。

勿論ナルシズムで、派手なVシャツや派手な服をきて、鏡を見てウットリしてしまいます。但し決して女装はしません。派手なチェックの柄や美しい服装はしても、かならずスツキリした、とろけるようなボーイ・スタイルです。

ソドミアの会合をもちたいですね。誌上に広告してください。又、美少年の被縛画や写真を出して下さい。

（ハインリッヒより）

（答） いままで通信を寄せられた人々の中には見られなかった、非常に明るいタイプのウールニングですね、あなたは。

自分自身のホモセクシュアリティをきわめて

リベラルな気持で、伸び／＼と楽しんでいられる。いや、「享楽している」といった方がふさわしいかも知れません。

しかし、あなたはそれに盲濁はしていない。享楽はしていながらも、自分自身の心理に相当分析眼をはたらかしているようです。

たとえば、上級生のOから、生れて初めてのペデラスティーをうけたとき「自由をうばわれたことによつて、自分えの心理的な申譯と彼に対するはずかしさのカバーとすることができた」云々と、そのときの自身の心理を

解剖していることです。

このような心理は、男性にはあまり見られず、女性にのみ多いところのもので、それはとりもなおさず、あなたが、自分でも云つていられるように、精神的にも女性化しているからにほかなりません。

あなたはOの自由になりたいと内心で願っているが自ら進んでそうなたように身を任せるには、あなたの女性的な羞恥性が許さない。そこで、そうなるための自分自身の何かの言い譯がほしい——それがOの暴行的態度によつて、羞恥えのカバーもでき、自分えの言い譯もできたというのが、そのときのあなたの心理らしい。すなはち、あなたの云われている「自分の意志でなく、いやいやながら相手に自由にされてしまったという安心感」を、あなたは得られたわけです。

御存知かも知れませんが、ラクロの「危険な関係」の中に、中年をすぎた侯爵夫人の言葉をして、あなたと同じような心理態度が説明されてあります。

次に、あなたが質問していられるところの度々ペデラスティーされてきたことによつて心身共に女性化してしまつたと



いうことの説明は、前号の本欄でも記しておきましたので、すでに讀まれたことと思ひます。

★

ふとした機会に、電車内で隣席の人が読んでいた「風俗草紙」十月号を覗き見て、ハッといたしました。それは私自身が訴えたいことが、チラッと目に入つたからです。早速書店でもとめて「そとみあ通信」欄にお便りする次第であります。

私は三十二歳の大学出の技術者で、二十八歳の時一度結婚をいたしました。妻は人並以上の美貌でしたが、昨年一月胸部疾患が原因で死去して以来、再婚もせず、独り身の呑気さで学問の探究に精力を傾けています。とは実は世間体をごまかす口実なのかも知れません。

実は最近、女性には全く何らの魅力も感じなくなつてしまつたのです。結婚当時からも、妻との肉体交渉では、陶醉するような満たされた性感を得ることもできず、二年近くも過してしまつたということは、自分が多分にソドミアの傾向が

あつたからで、妻の死後、それが一層強くなつたような気がするのです。

私は、中学を出るまでは、普通の男性の性心理と少しも変つたところがありませんでした。たとえば女学生と文通したり、美しい女性を見てうつとりしたり、或は頬が紅くなつたり、世の若い男学生の辿る道を順調に歩いていたのです。

そのような私が、どうして男色を好むようになったか、そして又女性を嫌悪したかについて申し上げますと、それは戦争も酣の昭和十九年、大学を出て某大紡績会社の兵器工場に入り、その研究室におりましたころ、学徒動員で五名ばかりの中学生が助手代りとして働いており、その中のTが特に私を兄のごとく慕つておりました。

ところが空襲の激しい昭和二十年三月のある日、燈火管制下の暗い壕の中で、Tと唇をふれて以来、肉体的交渉にまで進んでしまいました。これが最初の経験であります。

彼は数え年十八歳、つややかな頬と、しつとりと脂ののつたあごの線の美しい眉の濃い美少年で、そのキリつとしまつ

た横顔と白い歯並は、清潔そのもので、特に彼のかたい弾力のある肉体のすべては、どんな美しい女よりも私には魅惑的だつたものです。

美しい女と言いましたが、私は女の肉体を知っているから、特にそう言うのです。私にとつては、女の肉体は、ただ不潔な、ブヨ／＼した肉塊にすぎないのです。というのは、私の実家は産婦人科医院であるところから、中学三年のころ好奇心から、ふと診察台上の婦人の股間を盗視したとき、その不潔さは、少年の潔癖心と、いままで抱いていた女性への夢と憧れをひどく傷つけてしまつたからです。

それ以来、高校及び大学在学中、数人の女性と関係をもつ機会がありました。が、中学生時代に垣間見た女性の股間をおもいだすと、もうどんな美しい女性に對しても、リビードが失せてしまい、やつとのことですすすといつた状態でした。それがTを知つて以来始めて性の歡喜を味つたのです。しかしこうした愛の交りも、終戦後二年にして果敢なくも別れ／＼となり、私は世間えの体裁から結婚

生活に入つたのでしたが、それも勿論、あの当時のTとの交渉ほど心から満足できる愛情は覚えませんでした。

妻を失つた三ヶ月ほど経つた昨年三月四国から甥が大学受験のため上京、私のアパートに十日ばかり泊つていた時に、或夜どちらからともなく愛撫の手を差出してしまいました。

彼は十八歳の美少年で、私とは十二年ぶりの対面ですから、甥のような気がしなかつたのです。私は久しぶりの同性との交情に、心身共に酔わされてしまいました。

しかし、二人の関係がこのまま更に発展することをおそれていましたが、さいわい彼は京都の大学も受かりましたので、極力その方に入ることをすすめて、彼と別離しました。彼が東京を去つた後四、五日は、狂ほしいまでの戀しさと寂寥に、呆然としてしまつたほどです。

私は今、教養と理性でできるかぎり心の淋しさを忘れようと努力しています。私が最もリビドを感じる対象は、十七、八歳から二十歳位までの、清潔そのものの肉体をもつ美少年か、又二十四、

五歳のサッパリとした、どこか童顔の残つてゐる清潔な青年です。この好みはまったく厳しいまでに判然としており、それ以外の同性には全然関心がないといつてもいいようです。ですから、年配の人などは、てんで嫌です。

身長五尺五寸七分、体重十五貫、容貌は十人並以上でしょう。清潔好きで、傾向は能動です。

(東京S・K生)

(答) あなたは本来両性愛的な人なのですが、あなたの中の異性愛的なものは、あなたの厳格なまでの、或いは偏執的なまでの潔癖感のために、行途を鎖ざされている形のようなのです。

少年時代に盗み視た、あなたのいわゆる「不潔な」女性の股間のすがたが、いつまでも脳裡から忘失しない悪夢のように、あなたの頭蓋にこびりつき、それが脅迫観念となつて、あなたを女性嫌悪へと驅り立ててゐるのです。

あなたの同性への愛と情熱も、勿論それはあなたが本来両性愛的だからではありませんがその誘因は、女性に抱いてゐる不潔感・嫌悪感からにはかなりません。

なぜならば、あなたがリビドを感じるという

同性が、清潔感を覚えさせる、少青年にかざられてゐることによつて明確に立證されます。いわゆる年配者というものは、少青年のようには清潔感を感じさせるものではありませんから、それはあなたの好みの対象とならぬのみか、むしろ嫌いであることは当然でありましょう。

少青年の清潔を心身に愛を感じる——あなたの同性愛は非常に健康であり、ノーマルであるといつていいでしょう。

又、掲載の文中には省略してありますが、あなたは現在「女性の美をも理解しよう」と努めているがダメだ」とありました。それは、あなたの厳しい潔癖をこそ矯正すれば、おのずから女性の美しさも解り、異性の方面も展けて来るのではないでしょう。

★

本誌十月号における先生のお言葉は、僕にとつて大きなショックでした。おそらく僕には自分の同性愛を、これについて全然無知な周囲に宣言する勇氣はないでしょう。しかしながら、自分の、他とちがつた傾向を知られたくないばかりに、友人達の間に男色の話題がのぼつた

時、いままでのように、友人たちの冷笑に調子を合わせるような卑屈さはすてようと思えます。

「風俗草紙」誌上において、夢にも考えなかつたような大勢の人たちの同じような苦しみを知つて、いい知れぬ慰めを感じながら、またその人たちが社会生活の上において経験するであろう悩みの深さが、身にしみて思われてならないのです。

先生のお言葉はあまりにも大膽です。けれどもなんとなく自信がわいてきますやはり一步步々困難をのりこえてゆかなければならないと思えます。

ただ一つ気になることは、同性愛というものが、自然の方則をなしているのではないかということです。男が女を愛するということが人間の本能であるとすれば、男が男を愛するということは、なんとしても弱味とならざるを得ないのです。この点をどうわりきればいいのでしょうか？

とにかく今の時代はあまりにも女性ばかりに美をもとめすぎます。古代ギリシヤの男性讃美の文化に、深いあこがれを感じます。

さて、僕は満二十三歳、職業は銀行員、勿論未婚です、身長一五八センチ、体重は四五キロ、背は低い方で痩せています。しかし実家が百姓のせいもあつて見かけよりはよほど頑丈なつもりです。容貌は近視のせいもあり、自信はありません。

僕の好みは徹底的に年下の人です。中学の上級生位から高校生くらいまで、つまり十五、六歳から十八、九歳までの少年に一番惹かれます。それも丸坊主頭の方が好きです。

夏になると、日曜日毎に海辺にでかけて、その年頃の少年の姿をさがしとめそのしなやかにのびた肢や、まだ子供っぽさをのこした体つきに、飽かず視線をまつわりつかすのが慣いす。しかし、ただそれだけのことで、あとはやるせない思いを、誰もいない草むらにかくれてOnanieにまぎらせるのです。

このような気弱な僕にとつて、「風俗草紙」を知つたことはどんなにうれしかつたか知れません。この上は御誌を通じて、同好の士のもとめる以外に、救われる道はありません。(兵庫Y・F生)

(答) あなたは同性愛とは自然に反したものでないかと疑われ、異性愛に対して弱味を覚えざるを得ぬと氣にかけていられるようですが、私が度々言うように、異性愛が人間の本能であるごとく、同性愛もまた何人ものもがつている、人間の本能なのです。われわれすべては、根本的に両性的なので、それは解剖的にもわれわれの身体に具現されており、心理的にも両性愛的なのだということを、シツカリと念頭におき、決して左のような懷疑におちいることのないよう、そして、自己の同性愛を恥じたり卑下することのなきよう望みます。

むしろ、同性愛の昇華されたものは、社会から徳性として尙ばれてはありませしか。社会はそれなくしては、存続し得ないものなのです。すべての友情の完成が、同性愛の昇華に負うていることを知るならばそれは充分に頷けるでありましょう。

十月号本欄における最後の解答が、ソドミア諸兄に非常に反響があつたらしく、その影響か、こんどは粒選りの内容をもつた通信が沢山集まりましたが、そのすべてをここに掲載するべく紙面がないので、残りは次号に廻す予定ですから、御諒承下さい。(藤井晃附記)



南無妙法蓮華經の題目につれて、焰の下の死體は、一種うべからざる凄惨な雰圍氣をあたりに繰りひろげた。……政吉は瞬間、女の水死人が笑ったように思つた……。

情痴犯罪に見る

グロテスク

三 谷 祥 介

大 橋 彌 生 畫

西向観音山は芝増上寺の北側にある。周囲は三百メートル高さ約百メートルの山で、その頂上に西を向いている観音堂があるから、こう呼ばれているが、杉の立木の生い繁つたこの附近は、逢引きする絶好の場所である。ここが全国的に有名になつた理由は、十人の女性を次ぎ次ぎに犯してこれをことごとく惨殺した強姦魔の小平義雄が、昭和二十一年八月七日行司・式守伊三郎の長女柳子さん(17)をなぶり殺しにしたからだ。しかしずつと前から変死者のある魔の区域で、警察が特に注意を払っている場所だつた。そこで深夜になると必ずパトロールの巡査が見廻りをしてゐる。

十月二十三の夜、桜井巡査が観音山の魔の区域を巡回していた。星一つない暗い夜だつたので、懐中電燈をともして足もとに氣をつけて歩いてしたが、ふと前方を見ると樹の幹にぶらさがつているものがある。

若い女の首吊りだ。

桜井巡査は駆け寄つた。

女は地から五寸ほど足をはなしていた。手の届くところだからとりあえず樹の幹にかけた細紐をはずして抱きおろした。それまでは無我夢中だつたが、桜井巡査は急に気がつい

て観音山を一散走りに駆けおりた。

飯倉の交番から本署へ電話をかけると、捜査主任が電話口へ出てきて、

「僕たちは医者をつれてすぐ駆けつける。死体を犬なんかにはいたずらされては大変だ。君は嚴重に見張りをやつておれ」

「承知いたしました」と元氣よく答えたが、桜井巡査は嫌な気がした。しかし職務だから仕方がない。再び観音山へ引きかえして女の死体を懐中電燈で照して見て、異状のないことをたしかめた。そして彼は冀度胸をすえてそこの石に腰をおろしたのであつた。

真ッ暗いところでぽつんと死体を見張っていることは、いかにも気味が悪い。懐中電燈をともし、光芒をあらへやつたりこちらへやつたり、なんということもなく気持をまぎらわしていた。すると今まで横になつていた女がふらふらと立ちあがり、懐中電燈の光りを追つてきて、けわしい眼つきであたりをにらみつけると、

「あッ！」と叫んで桜井巡査にへなへたと仆れかゝつた。

巡査は氣が遠くなつたのだ。氣絶したのである。

「どこだどこだ」と捜査主任等の一行が観音

山へ駆けつけてきた。ところが首吊りの女はぽかんとして地べたへすわりこみ、見張りしている筈の桜井巡査が氣絶しているの、思ひがけない出来ごとに大騒ぎとなつた。

この女性桂木愛子というもので、栃木県安蘇郡葛生町の生れであつた。彼女は林善坊町の身分のある園部のお屋敷で女中奉公をしていたがご子息の真一と肉体関係が出来た。

親たちはうすうすこのことを知つて、まだ大學へ通つてゐる真一の将来を考え、女中の愛子に暇を出した。彼女は妊娠して六ヶ月の身重だつたので、まつたく途方にくれてしまい東京都内を歩いて死場所をさがすうち、何者かに誘われでもするかのように、西向観音山へきてしまつたと、涙ながらに供述するのであつた。

愛子が樹の幹へぶらさがつたところへ、ちょうど折よくパトロール中の桜井巡査が通りかゝつたワケだが、彼女の陳述したところによると、首を吊つて桜井巡査に発見されるまで、だいたい三時間ほど経過している勘定になる。ことに不審なのは首吊りの現場に愛子の履物がないことだ。捜査主任はこのことについて追求したが、愛子の答弁は曖昧で要領を得ない。

「では、どうして氣がついたか」という捜査主任の質問に対して、

「お腹の子供がはねまわつたんですもの……ふと氣がついて生氣にかえりました」と供述したのであつた。

縊れてから三時間以上も経過したものが、蘇生したという例はほとんどないことだ。きつと時間的に食い違がある。のみならず死場所をさがして歩いた女が死んだものと思ひ込めない。そこで真一が愛子と心中するつもりで首を絞めたが、死におくれたものに相違なからう——彼は愛子が死んだものと思ひ込んで、死体を西向観音山へかつぎあげ、首吊りと見せかけ擬装したものではないか？ いわゆる刑事らしい立場から推理をすゝめて、真一に片割れ心中の嫌疑をかけた。けれども肝心の愛子は、

「若旦那さまはなににもごぞんじないことでございます」と、どこまでもいい張つた。

相手は身分のある園部家であり、愛子はさういふ生命が助かつてゐるので、刑事は罪人をつくるために狂奔しなかつた。もし愛子が死んでいたら、刑事の捜査が活潑になり、真

相が掴めたかも知れないが、生きているものの真相はなかなかつわめないものだ。しかしよく考えて見ると、私刑刑事たちが惨劇のあった現場へのぞんだときの経験によれば、妊娠している女はたといどんなヒドイ手負になつても容易に死に切れないものである。生に対する執着は驚くべきものだ。愛子が首吊りをやつた現場に、履物がなかつたというだけの理由で、情人だつた真一に嫌疑をかけるのはどうかと思う——深夜の出来ごとだから履物はどこかへ紛れこんだものであり、愛子が供述するように、首を吊つて三時間も経過したが、万に一ッ蘇生した実例として、私刑刑事は素直に受取るべきであつたかも知れない。

小田急の沿線に、千歳船橋という小駅がある。その踏切番のちよつとした不注意のために、江ノ島へ急行する下り電車が、自動車を木ッ葉微塵にはね飛ばした。乗客は四人——もちろん運転手も即死した。線路には血が流れて足の踏み場もない無残な光景であつたが、乗客の一人が女で、彼女は両腕を肩からもぎ取られたばかりか、右の足首が切断されて無かつた。しかも全身は血だらけという有

様である。とうてい助かる生命ではないが、死に切れているのではない。とりあえず附近の有隣病院へかつぎ込んだ。ところが妊娠九ヶ月の身重だつたので彼女は重態の手当をうけつゝあるときに産気がつき、女子を分娩してから息を引き取つたのである。出生した子供それから間もなく母親の後を追つたが、現場に立会つていた警察官も胆を潰した。この子を産まなければ死んでも死に切れないという母親の慈愛に頭がさがつたというより、酸鼻をきわめた出産の光景にたゞガタガタふるえたということである。



東京の水上警察署に寺坂藤馬という署長がいた。この署長は、よぎなく水上の生活をすする子供たちのために、大きなダルマ船を改造

して、百五十人の学童を収容する小学校を創つたり、病院船を仕立て、巡航させたりして多くの功績をのこした人だ。

陸と同じように水上生活者の中にも手のつけられないヤクザがいる。中曾根政吉もその一人で水上警察署もほとほと手にあました。政吉はどこのつまり悪質な梅毒にかゝつて苦しんだが、寺坂署長は誰も振りかえつてみないようなヤクザの政吉を憐れに思い、身を柄官舎へ引きとつて手厚い治療をうけさせた。やがて政吉が生れかわつたような健康体になると、巡視船の水夫に採用したのでつた。この男が水夫の生活を三十二年間も真面目にとめあげて、東京都長官や警視總監から破格の賞状をもらい、ついさきごろ表彰された『お題目の政吉』である。

政吉は巡查や刑事が嫌がる水死人を、嫌な顔ひとつみせず、たゞ一心に『南無妙法蓮華經』と声高らかに唱えつゝ、心をこめて洗い浄めた。腐爛した死体は、水コケに汚れて手がつけられないし、中には悪臭を放つて暈する（めまい）ようなものもある。しかし政吉は、いたわりといつくしきをもつて短艇へ引きあげるのであつた。

立冬といえは十一月の中旬だが、陸とちがつて深夜の水上はなかなか寒い。政吉は水上を巡視船『カモメ』号をあやつつて舵をとつていた。竹田巡查は艇燈を右手に持つて舳先に立ち、浜離宮から竹芝の沖合を一巡するとそこから第七台場へ出て防波堤に沿ひ、越中島へ乗りあげてきた。政吉のカモメ号はここで若い女の死体を見つけたのである。

「汚れているかい」

竹田巡查はこう言つて灯を見せたが、船べりへからだを突き出して、右手にしつかり死体を掴んだ政吉は、

「コケのつかねえ、美しい仏さまでございます」

彼は髪の毛をゆさゆさ流れて洗つて、お題目を唱えながら、いつものコツで短艇へ引きあげようとしたが、どうしてもあがらない。竹田巡查は気味悪がつて手を貸そうともしないので、短艇を流して埋立地の岸へ横づけにした。

ともかくこうして死体を陸へ引きあげ、本署連絡する考えたつた。

「ご覧なさいましこの死体は新しいですよ」「なんだか……ひどい面をしてやがる」

竹田巡查はまるで気のない返事をした。いずれにしても巡查の役目は、水夫に命じて土左衛門を引きあげ、死体の検視を刑事に引き渡せばよかつたからだ。しかし政吉は、腹のふくらみを見て水を吐かせてやりたかつた。死体は古くなるとガスが溜つて化物のようにふくれるが、新しいので水を吐かせれば助かるかも知れないと思つた。

彼は死体を真ッ裸にしてマッサージをはじめたのであつた。竹田巡查も手を空しゆうして見てばかりはいられなくなり、そこから薪になるものを拾い集めて火を燃した。

政吉の唱える『南無妙法蓮華經』の題目につれて、焰の下に死体は、一種いうべからざる凄惨な雰囲気にあたりにくりひろげた。

政吉はその瞬間、女の水死人が笑つたように思つた。しかしそれを裏づけてやる医学上の根拠はない。

ところが事実、死体の局部から夥しいオリモノが流れ出して、異様なものが陰部へ突き出してきことだ。

「おゝッ！」と政吉は仰天して叫んだ。
奇蹟ではない。

女の水死人が子供を産む世にも悲壯な光景であつた。

政吉はたゞ懸命にお題目を唱えつゝ産婆の役をつとめて、男の子をとりあげたのであつた。

彼は上衣をぬいで赤子を包んだ。まだそれでもたりなくて、シャツを脱ぎズボンも脱いで包んだ。

「どうか安心して成仏なさいませ。この子供は生命にかけて私が育てます」

ようやく東の空が白らみかけたころ、新佃島から小舟を突き出して、仕込みの鉄砲を引き揚げるために、竹筒の中へ餌を入れて、それを数百本も綱で結び、沈めにかけて鰻をとる仕込みのことである。漁師の益子善次がちようど埋立地の岸近くやつてきた。

「おい、水上警察の政吉さんじゃねえか。どうしたえ」

「どうしたもこうしたもあるもんけえ」

実はこれこれの次第だと、一部始終を話したので、ぶッ魂消したのは益子善次——やがて

小舟を越中島へ乗りつけてくれたので、水上の派出所へ連絡がついた。時をうつつさず本署から快速艇の『ハヤブサ』号が、捜査主任以下で刑事を引きつれて乗りこんできた。

「この水死女はどこかしら見おぼえがある。

丸瀬組のダルマで酒巻の女房らしい」と渡辺刑事がいい出した。

「ランチを出せ。丸瀬組のダルマだったら枝川の埋立地にもやつている筈だ」

渡辺、宮寺、関口等の腕利きの刑事が、しぶきをあげて短艇をいそがせ、枝川の岸壁へ来て見ると、酒巻のダルマ船は岸につないでいるが、船頭の竜吉はいなかった。

刑事が丸瀬組の親方をたずねると、

「仕様のねえ野郎だ。パチンコのような一文バクチでござんすからね……源吉よ酒巻の竜吉をよんでこい」

親方は店の若い者を走らせた。やがて若い者は戻つてきたが、竜吉はどこにも見あたらないと言う返事だつた。いよいよ怪しい。

「親方、ダルマに酒巻の世帯があるでしょ」

「ありますよ。婢のヤツ、どうかしたんですかい」

「水で死んでおりますよ」

「えッ！」と親方はのけぞつた。

「この月に子供が産れると聞いておりやしたが、いつたいまあどうして水なんかで死んだのかい」

もやいのダルマへ駈けつけて、丸瀬組は上を下への大騒ぎとなつた。

刑事は八方に飛んで、友達や知人は申すに及ばず、酒巻竜吉の行方を風漬に捜査しはじめた。だが杳として行方がわからない。

その年もあわただしく過ぎて、松飾りする正月になつた。

政吉はもと警察の小使をしていた松波辰治の末亡人を茶飲み友達にした。二人は六十を過ぎていたので、色恋の沙汰ではなかつた。明けても暮れてもお題目を唱えて、水死人が産んだ子供を引きとつて、掌のうちの玉として育てゝいたのであつた。

子供の名づけ親は水上警察の署長で、吾一とつけたのは、われ世にたゞ一人という意味だそうである。

「父親の竜吉がひよッこり出てこない方が、この子のためには仕合だ」と政吉は思つた。

殺人の容疑者として捜査をつゞけている竜吉を逮捕しなければ、事件の真相はつかめな

いが、彼はほんのささいなことから夫婦喧嘩をはじめ、まづたく思いがけないハズミで、竜吉の女房は船の上から水中へおッこちたのに相違ない。

ちようどあの時刻が上潮で、水かさがあつて深いばかりか、人間が水中へ落ち込むと、いつたん必ず沈んでしまう。

竜吉はあわてゝ女房を探したものと思われ、が、深夜のことでもうにもならず、とうとう、あきらめて姿をくらましたものに相違ない。

水夫の政吉が引きあげて水を吐かせようとしたが、一滴の水も吐かなかつたところを見ると、落ちる際に女は気絶していたものと考ええる。

これが水上警察署の意見であつた。

人間は一個のマツチに似ている。

重大に扱うことはバカバカしいが、重大に扱わないと危険だ。

水に濡れたマツチは発火しないが、水死女が子供を産んだという実例があることを紹介しておく。

(完)

代

理

部

目録

伊藤晴雨著

價五百圓千共

凄艶女體 拷問私刑秘畫集

艶麗・爛熟に酔いしれた江戸にくりひろげられた凄艶女體繪

手梳和紙台紙付豪華艶麗彩色特型映入限定會員頒布版 第一集 (五枚一組)

晴雨隨筆 第一冊 小型和裝美幀 價一三〇圓 千共

繪物語血血郷談 第二冊 小型和裝二色刷 價一三〇圓 千共

晴雨隨筆 第三冊 小型和裝美幀 價一三〇圓 千共

與力同心岡ツ引 第四冊 小型和裝美幀 價一三〇圓 千共

性犯罪と私刑 第五冊 小型和裝美幀 價一三〇圓 千共

紅夢樓主人著縮刷凸版刷和裝(同性色情史) 美少年論 價一〇〇圓 千共

右の書籍御希望の方は代理部宛現金書留又は小爲替にて御申込み下さいませ尙書留御送附御希望の方は書留料加算御送金下さいませ

株式會社

伊藤晴雨著

上製巻物

豪華繪巻物 價五〇〇圓 千五〇圓

美人十二支責め繪卷

十二支にちなむ責場を古事逸話傳説等により世につたえられたものを先生独特の麗筆でものした力作繪巻は先生快心の作、蒐集者垂涎のもの。

喜多玲子筆コロタイプ八枚一組三百圓千共

玲子悦虐姿態素描集 (2)

凄艶の姿態を描く喜多玲子の傑作豪華秘帖

峰岸義一著 千零夜 B六判 二五〇餘頁 價二五〇圓千三二圓

伊藤晴雨著 黒繩記 A五判 和裝美本百餘頁 價三〇〇圓千二四圓

伊藤晴雨著 實のこれくしょん A五判 和裝更紗表紙 價三〇〇圓 千三二圓

伊藤竹醉編 小説に 實の代表名作選 菊判和裝美本 價三〇〇圓 千三二圓

伊藤晴雨著 十二ヵ月行事奇態刑罰圖譜 價五〇〇圓 千三二圓

キドロド・シエトック著 被虐の家 B六判 二二六頁 定價三二〇圓 千三二圓

日本特集出版社代理部

東京千代田神樂町一ノ三 振替口座東京 二四二五一番

レスポス通信

女性だけの秘密な愛のサロン——

あのひと、スゴイのよ、つて、英雄みたいに
云はれるのが得意なのよ。だから、学校のレ
スポスなんて、そういう女獨特の、色んなも
のが、いっぱいまじり合ってるのじゃあ……

園村

恵子



★

暮も近い小春日和のある一日。

自由ヶ丘の住宅街にあるN夫人のお宅に集まったのは、今年の春、高校を卒業して、ある洋裁学校に通っている敏美さんと私でした。敏美さんは、最近、私たちと仲良しになったお嬢さん。黒のワンピースが、かえって華やかな感じを与えるような美貌なのです。

N夫人は、映画関係のお仕事をしていたりつしやる御主人をおもちなのですが、それでいて、レスポスも忘れられないと云う不良奥さま。私とは、しばらく前からのおつき合いです。

★
あたたかな陽の入る窓ぎわでは、御自慢のペルシャ猫が、日なたぼっこしていて、思い思いに腰かけたソファの前の、卓子には、紅茶が、白い湯気をあげてる応接間のひととき。女が三人よれば、何とかと云う、そのおしやべりも、いつの間にかレスポスのお話しになつて。……

皆んなの顔が、ほんのり上気したように見えるのは、サンルーム風の、お部屋のあたたかさばかりではないようですわ。

「ねえ、敏美さん。私、一度ききたいききた
 と思うていたんですけど、あなた、どうし
 て、アレに興味おもちになつたの。その、は
 じめの、……きかせてよ」

と、これは、N夫人。

「まア、いやア……恥かしいわ」

と敏美さんは、お嬢さんらしく、急にもじ
 もじします。

「やつぱり女学校の時きだつたのでしょ」

と私が助け舟を出しました。

「えゝ。……とても仲の良いお友達がありま
 したのよ。二人でいつも一緒に遊んだりなん
 かしてたんですけど、何でもなかったの。そ
 れが、『ガミアニ』つて御本あるでしょ。あ
 れをその方が、本屋で買つてきて、よんで、
 びつくりして、私にもよませたの。あ、つて
 思つちやつた。こんな世界があるのかつて、
 ……それからなんですの」

「『ガミアニ』で目覚めさせられたのね」

「えゝ」

「どうだつた？ はじめてのとき」

「そのお友達の家へとまつたのよ。そしたら
 夜中に私のお寝床へ入つてきて、抱いて、抱
 いてつて云うの。ドキドキしやつ
 ちて夢中で抱いてたら手エ入れて

レスポス通信

から上京してきて、寄宿舎に
 入つていたでしょ。まわりが

くるんでしょ。私、今まで、だれにも、さわ
 らしたことなくない所だから、いくらお友
 達でも、ぴくんとして、ダメよ、ダメよ、つ
 て云つたんですけど、よんだ御本のことが頭
 にあるもんですから……」

「軀の方はどうだつたの。期待に一杯になつ
 ていたんじゃないの」

「えゝ……恥かしかったわ」

と敏美さんは頬を両掌でおさえます。

「こういう事あるわね。自分だけ、そういう
 気持もつていると思うと人に打あける勇気も
 出ないけど、他にも、あると分ると、急に安
 心しちやつて、我慢が出来なくなるというこ
 と、……」

「えゝ、そうよ。私もきつと、あの御本よま
 なかつたらあんな事する勇氣出なかつたと思
 うわ」

「罪つくりな本ね。そんなに良かったの？」

「はじめてだつたから……」

「それからこういう事もあるんじゃない？」

「まわりで、いっぱい見せられると、競走意識
 みたいなもので、そんな事に入つて行くつて
 事、私なんかの場合は完全にそうだわ。地方

すごい。……だから、半分見栄みたいな気
 持で」

「そうね、寄宿舎なんかだつたら、少しキレ
 イな子は、うばい合いなのね」

「あのひと、スゴイのよ、つて英雄みたいに
 云われるのが得意なのよ。だから、学校のレ
 スポスなんて、そういう女独得の、色んなも
 のが、いっぱいまじり合っているんじゃない
 かしら」

「——私位になれば、純粋なレスポスだけど、
 つて云いたいんじゃない恵子さん」

と、N夫人がまぜつかえしたので、三人大
 笑い。

「だけど、私のアレも何だけど、一体、K子
 さんは、こうやつて、ちゃんと旦那様もいら
 つしやるのに、どうしてレスポスなんかに興
 味をおもちになつたの？」

「そうよ！ それが分らないわ」

と敏美さんも今度は、K夫人にホコ先を向
 けます。

「私？……そうね、何と云つたら良いかしら
 私の場合は一種の浮気なのよ。……」

「浮気つて？」

「つまり、……女つて結婚してしまつと、そ
 う自由に、男のひとと、附合えないでしょ。」

「だけど、アバンチュールを楽しみたい気持はいつもあるし、男に可愛がられたいばかりでなくつて、何か自分から愛玩したいのよ。そういう気持がレスボスに向わせるのじやないかしら。私なんか完全にそうだわ。……女の子を可愛がつている分には、目立たないし、家庭が破壊される心配もないし……」

「便利だつて訳ね。それじゃ、K子さんは、男のかたと浮気が出来れば、その方がいいの？ レスボスは代用品なの？」

「分らないわ。……だつて、そんな経験ないんですもの。だけど、若い男の子にも魅力を感じるわ。」

「それで、K子さんは、オトコノコ見たいな可愛がるのね。髪を短くからせたり、ズボンはかせたりして」

「そう云いながら、K子さんのデベンが、少年めいた美しさをもっている少女である事を思い出しました。」

「でも、若いオナナの子つて、またいいものね。こんなきれいなものないわ」

N子さんも眼をうつとりさせて、何か思い出しているようです。

「でも代用品じゃ可愛そうじやありません？ その子が可愛そうだわ」

と、敏美さんは、少しムキになつています。

「アラ、アラ。……敏美さんは正義派ネ。だけど、代用品つて訳じやないのよ。ただ、若い男の子を可愛がつて見たらどうだろうかしら、つて時々思うだけよ。男は、もう夫だけでタクサン！」

とK夫人は、あわてゝ取けします。

「とにかく、男つて、乱暴よ。それから、……何て云うのかしら、キレイなところ、夢みしたい所がないわ。たとえば、女のお乳一つにしたつて、とてもキレイで、ぶつくりして

いて、いかにも、手でいじられる爲につくられてあるようだわ。女だつて、思わず、先のつまみを、いたずらしたくなつちやうわね。

男の軀つて、そういう可愛い所が少しもないのよ。毛だらけで、ゴツゴツしていて、実用一点張りよ。……だから、あれは、自分から愛する爲の役に立つだけで、私たちが、愛

そうと思つてもダメなの。男の軀つて、そんな風に作られてないのよ。」

「たしかに、そうだわ。だから私たちがレスボスに熱あがるのね。……」

そんな事をはなして、大いに気焰をあげているところへ、女中さんが、ビスケットとあ

レスボス通信

「たらしい紅茶を運んできたので一時中止。女中さんの姿がドアのかけへ消えたので早速、また私が、口火を切りました。」

★

「K子さん、旦那さまは、あなたが、レスボスなやつていらつしやること、知らないの？」

「いゝえ。知つているのよ」

「何とも云つていらつしやらない？」

「どういふ風に？」

「だつて、アレ、一種の浮気でしょ。相手は女の子だつて、……本当なら、旦那様にかいじらせたり、見せたりしないところを、その子に何させるんでしようし、……旦那様だつて、あんまりいい気持なさらないでしょ？ そうじやないかしら……」

話は、段々きわどくなつて、私たち何だか、そこにKさんの旦那様がいらつしやるように頬をあからめます。

K子さんは、声をひそめて、

「うちのひとね。とてもレスボスに興味もつてね、どんな事したなんてきくのよ。夜、おね床のなかで……」

「まア、いやアね」



「私が、あの子可愛がつているのを知つてかえつて面白がつて、お話しさせるのよ。そして、話きくたんびに、すごく興奮して……」

「あなた、お話しなさるの」

「だって、無理に、きゝ出すんだもの。私だつて面白いから、あの子が、どんなポーズするとか、……どんなお声出すとか、皆んなお話しちやうの。すると、段々、私だつて、お話ししているうちに、軀が、とけてきちやつ

て……」

「キヤア」

ときいて居た私たちは悲鳴をあげました。

「じゃ、K子さんは、レスボスを御夫婦のい

ゝおさかなにしているのネ。ひどいわ」

「云いつけてあげるから！」

と、一ひきり、応酬があつて、

「だけど、……レスボスにあんまり親しむと

普通の男女のアレは興味がなくなつて、結婚

生活なんて出来

なくなるつて云

われているけれ

ど、K子さんの

場合は、そんな

事はないわけ

ね」

「そうね、少な

くとも私の場合

は。……でも、

レスボスも止め

られないのよ」

「それは、どう

いうのかしら、

男のかたの愛撫

の方が、強いで

しょうから、ちゃんと結婚したらレスボスのアレなんて忘れちやうんじやありませんの？」

「別なのよ。また。——男のは、強いけど、

なんだか、ほんとの満足は、得られないつて

感じなの……場所がちがうからかしら。たべ

ものに例えれば、かたつ方は、おせんべを喰

べてる感じで、片つ方は、洋菓子の感じネ。

おせんべを喰べたいときもあるし、無性に甘

いケーキが喰べたいときもあるでしょ。両方

いいのよ」

「まア、慾ばりネ」

「どつちが、おせんべですの？」

と、これはまた、敏美さんらしい質問に、

K夫人は、笑いながら、

「きまつているじやありませんか！こまつた

子ネ、そんな事が分らないなんて」

「あゝ、分つたわ。男のかたがおせんべなの

ネ」

「やつと分つたの」

「だけど、本当に結婚するのが、いやになる

子もいるわネ。私のお友達で、男のかたにし

たわれて困っているわ。結婚申込まれている

んだけど、気が進まないらしいのよ。レスボ

スの方がいゝんですつて、……レスボス同志

で結婚出来るものなら、したいなんて云うのよ……」

「でも困るわね、そんなになると」

「私は、やつぱり、男のかたがいけないのだと思うわ。男のかたが、自分勝手なので、女がレスボスに走るのよ」

「私は、男のかたが、どんなに、優しくしてくれても、テクニクが素敵でも、レスボスはなくならないと思うわ。……だつて全然別の味なんですもの。……レスボスを味わったものは、どんなに男に愛されても、忘れられないものだと思うわ」

「こわいようだわ。……」

と、一しきり、しんみりしたレスボス談議がつゞきます。それを打切るようにK夫人が、

「ねえ、一体、私たち、可愛い、子のどんなところにひかれるか、それを打合けましょうよ。——一体、どこに一番魅力を感じるかつて事よ。恵子さんどう？ あなた」

「K子さん、自分で云いだしたんだから、先へおつしやい！」

「フ、。そうね。じゃ云うわ。私ネ。おつ

ばい」

「まア、そのものズバリネ」

「そうなんです。でも、たゞのおつぱいじゃないのよ。大きい人のは、もう、にくたらしくていや。だつて、露骨に大きくて、張りきつ

つているんですものね」

と私もうなずいて、自分のお乳をおさえた。

「私が好きなのは、そうね、十五か六位の……ようやく、春をおぼえた年頃。……ネ、分



ていて、いかにも、さア、どうですつて云つてるようなんですもの。そう云うの、男のひとは魅力があるかも知れないけど……」

「そうね、私たちだつて、そんなのなら、も

てしまつても、いゝと思う位。それでいて、吸つてやると、もうお腰をもじもじさせて、恥かしがつたり、よろこんだりするの。……あれこそ、本当に宝ね」

るでしょ。ホラ、どこかの毛が、生毛から、ポヤポヤとした剛い毛にかわつて、それがはずかしくて、お風呂呂屋へも行けない位のとし頃、……その頃になると、お乳の先が、しこつたようになつて、プシツと、それこそ、桃かなにかのつぼみのように、ふくらんでくるでしょ。尖が、かすかに色ずいて、……まだ、半円にもならず、底のあさいお椀のように、なる頃のお乳。——あの可愛いさつて云つたら、ないわ。本当に喰べ

K子さんの、何やら、実感のこもったお乳
讚美に、二人とも、だまつて、うなづくばかり。
り。……

「恵子さん、あなた、どこが好きなの。ひま
ばかり、しゃべらしておかないで、御自分も、
キリキリ白状なさい」

「……仕方がないわ。白状しようかな。でも
私は平凡なのよ。短かく刈つた子のエリ足。
あの青いのが、タマラナイわ」

「ずるいわ。そんなお体裁のいゝこと云つ
て！もつと、本音を吐きなさい」

「困つちやうな。本当云うと、……あのネ、
脇の下の毛あるでしょ。あれよ。あの、ちぢ
れたのが、おっぱいのある胸と、腕の間から
芽のように、はみ出て、顔をのぞかしている
のを見ると、たまらなくなつて、無理に腕あ
げさせて、くすぐつたがるのもかまわずに、
ちゅつ、ちゅつ、キスしちやう」

「まア、すごい」

と、敏美さんはあてられた様子。

「電車ンなかなかでも、可愛い、何も知
らないような感じの女学生が、何かのひよう
子に、脇毛だけは、きちんと一人前に生やし
いるのを見つけると、あ、この子、
もう大人なんだな、と思つて、

レスポス通信

ゾクゾクとしちやうわ。ヘンタイなのかしら
私

「ヘンタイなんかじゃないわよ。私にだつて
そんな気持あるわ。……敏美さんは？」

「イヤ！」

「イヤなんて、あんたズルいわよ。人の話だ
け、じつときいて。さア、話さない」

「カンニンして」

「いゝえ。カンニンしません。話さないなら
もうお友達にして上げないわよ」

「じゃ話すわ。……私の場合は、一般的にど
うつて云えないわ。だつて数少ないんですも
の。知つてるのは」

敏美さんは、チラと、訴えるように、私の
方を見ました。

「個人の場合でもいゝわよ。おつしやいな、
そんなにもつたいぶらないで」

「声よ。私、その方の一番好きなの。——そ
れや、普段の声も好きだけど、……一緒にお
寝床にいるときは、普段とまるで、かわつて
しまうの。……」

「どういふ風になるの？」

と、白ばつて、K夫人。

「甘く、少しかすれた声にな
つて、濡れて……訴えるよう

な、ふるえるようなお声になるのよ。」

「随分、むづかしい声ネ」

「茶化しちやイヤ。その声きくと、ブルブル
つとして何でもして上げたくなつちやうの。
……どんなひどい事でも、どんな恥かしい事
でも、して上げようつて気になつちやうわ。

——だから、私の場合は、絶体にお声」

「御ちそうさま。ずいぶん情熱的なね」

とK夫人はニヤニヤしています。

「学校で、洋裁なんかしていても、ふつと、
お声が、耳によみがえつてくると、……もう、
軀がじーんと熱くなつてきて、手なんかしび
れちやつて、ぐたつとなつちやうの。恥かし
いつたら無いの。」

敏美さんの告白は、愛の囁きに似て……

「あゝあ。すっかりお熱に当てられてしまつ
たわ。こんなお話していると、何だか、きゅつ
と、だれかを抱きしめて、息の止るほど、可
愛がつてあげたくなつちやうな。電話かけち
やほうかしら」

と、K子さんは、早くもお目当ての算段を
めぐらしています。

遠くで、きこえる電車の音もものうい午後
のひととき。熱っぽいレスポスの打ちあけ話
に、思わす時のすぎるのを忘れる三人でした。

風俗草紙最近號主要目次

★七 月 號	★ 喜多玲子	男色喰茶店	賣められる女三態
根津明治	かびやかずひこ	私が拷問した女	新らしい責め古い責め
上田青柿郎	最上京子	のぞきの悦樂	家
須川夏枝	眞下光二	うゝるにんぐの嘆き	華麗な惨虐の回想
連藤江利子	天野鐵治	嗜虐放浪記	恍惚の白鳥
鳥羽瑛子	岩堀光	秘色大坂城繪卷	悦虐の部屋
喜多玲子	園村恵子	レスボス通信	そとみあ通信
藤井晃	大槻久良二	嗜虐俱樂部	★八 月 號
喜多玲子	北原環	いけにえ二題	妖蟲圖
正岡容	安野洋治	ぐろてすく藝談	少年監獄
★九 月 號	★ 喜多玲子	男色營倉	賣められる女の表情
松尾亮	伊藤晴雨	やわ肌を責めて	木馬責め滑車責め
喜多玲子	上田青柿郎	女切支丹拷問秘史	私が責めた六人の女
深田徹	林譲介	共同便所の秘密	まぞひすとの街
宗方綾子	吹岡清一郎	そとみあ通信	レスボス通信
藤井晃	園村恵子	みだらな指	まにや地獄
鳥羽瑛子	日夏由紀夫	★十 月 號	あなぐら
北原環	喜多玲子	奴隷祭	双生児の犬
喜多玲子	伊藤晴雨	女はこゝろ縛られたら	抵抗力を失う
伊藤晴雨	正岡容	新らしいスタイルの責め	責めにおける各種の小道具
武野藤介	日夏由紀夫	馬をみる夫人	歪んだ女
日夏由紀夫	相磯武雄	そとみあ放浪記	志摩雪夫
喜多玲子	三谷祥介	大槻久良二	増富次平
喜多玲子	金澤樹美子	和田夏枝	木暮陽子
喜多玲子	中川彩子	特寫々々	正岡容
喜多玲子	三宅一郎	此企狂一郎	伊藤晴雨
喜多玲子	喜多玲子	細谷満佐子	日夏由紀夫
喜多玲子	鳥羽瑛子	澁川徹夫	

臀部狂崇症
甘美なる糞尿

油井啓二
菅芳一郎

★十一月號★

美くしい獲物
翫ぶられるやわ肌

北原環畫
本誌特寫々眞

縄と刺青

喜多玲子畫

女装男

日夏由紀夫

夢

松井、籟子

奴隷祭

三宅一郎譯

閉された女體

鳥羽瑛子

秘密な淫蕩

赤澤澄子

執念日記

草葉容子

畜類人間

宮内二三夫

裸になりたがる淑女

武野藤介

浪花節と血

正岡容

レスボス通信

園村恵子

そとみあ通信

藤井晃

★十二月號★

力盡きた女

中川彩子畫

犠牲六態

喜多玲子畫

凌辱の構圖

本誌特寫々眞

縛る快感・縛られる快感

高橋鐵

汚物狂崇症の性慾

坂ノ上言夫

男色は治療出来るか

鹿火屋一彦

どんな男がマゾヒストか

西島實

臀部マニヤ

輦岡麻冬

刺刀男

伊庭英夫

獸の閨

島田悠次

そとみあ大座談會 司會

鹿火屋一彦

木馬責め研究記

島崎哲

變態性慾者はこんな殺人をする

三谷祥介

落語糞尿譚

正岡容

群狼

佐々木恭

催情指療師

日夏由紀夫

★一月號★

雪責め(五色刷)

喜多玲子畫

屈伏の涙

中川彩子畫

蛇

北原環畫

變態臀打ち大畫集

編集部編

華麗な無慘繪

本誌特寫々眞

まにや地獄・視姦の部屋

日夏由紀夫

臀部マニヤ「白い祭壇」

輦岡麻冬

便所マニヤ

島田政大

洗腸器に憑かれた男

久利須照雄

マゾ使徒行傳

坂ノ上言夫

奇態同性愛譚

高橋鐵

吊り責めさまたま

伊藤晴雨

續・男色喫茶店

鹿火屋一彦

現代怪猫傳

相磯秀雄

淫雨熄まず(連載アブ官能小説)

松井籟子

不具の妖精

香山滋

敗走會津城

岩堀光

血みどろの薇薔

松戸淳

レスボス通信

園村恵子

そとみあ通信

藤井晃

尾行日記

相良三郎

強姦願望

瀬木慧子

處女をいたぶる

鬼頭浩一郎

醒まされたマゾ

鬼山絢策

姦樂病院

佐々木恭

☆新年號に限り特別價格 百二十圓

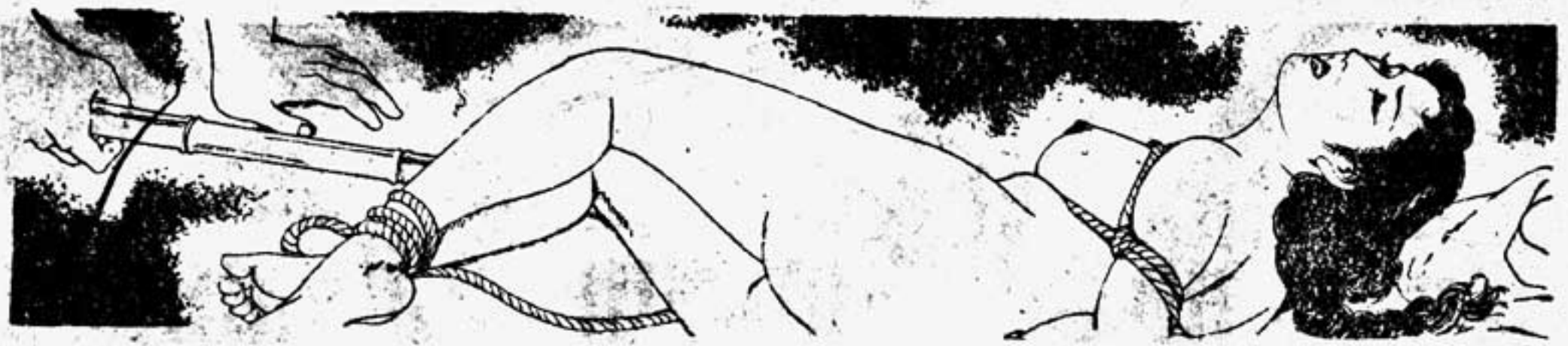
東京都千代田區神田猿樂町一ノ三 振替東京二四二五一番 電話(25)五九八二

株式會社

日本特集出版社

★その他華麗悦虐讀物滿載！ 御入手洩れの方は直接本社へ！

各號千共 定價百圓



サチズム・ストオリー

續處女をいたぶる

……木銃を乳房に當てたまま、グリ／＼とこじめるのだ。それから……そこを私は憑かれたように、何度も何度も突き上げては、グイ／＼と加減しながら……

鬼頭 浩一郎

(1)

私は日野妙子のさいごのヴェールに手をかけたまま、しばらく放心の状態におちいつた。もはや抵抗をうしなつた処女の、白い陶器のような、すんなりと伸びた両肢。なにしろ、この校売店の一室の薄ぼやけた電燈の明りに蒼い月の光が融けこんで、一種不可思議な幻想の趣さえあつたのだ。

ところで、そのときの私は、——ブルジョアの令嬢を幽霊屋敷に連れこんだ犯人が爪を立てて彼女の雪肌から着物を一枚々々はいで行く探偵小説の一齣を息もつかずに読みふけていた少年の日の私だつたのだ。——が、

やがて私はわれにかえつて、ゴクリ／＼となんども生つばをのみおろした。

処女の肉体を弄ぶなんて一生のうちそうなんでもできることじやない。まして私は火傷で頬のひきつれた醜い小男だ。私はちやうど美味しい御馳走を嚙み込むのが惜しいようにわざとのろくさ手をうごかした。私の目はふと彼女の臍に惹きつけられた。

「フツツ、こゝまでこんなに汗、かいてる！」

なんという可憐さだろう。私はもう我慢できずに彼女のその白桃の窪みに唇をちかづけた。処女の甘い体臭がむつと鼻をうつた。初めはそれでもそつと吸つた。が、一度味をしめると、私の醜いまくれた唇はつよくきゅーつと吸いつづけるのだつた。

「あ、あつ、駄目！ もうよして！」

瞬間、彼女の下半身をよじらせたものはまさに身も世もないふうな羞恥だつた。じつさい彼女もこんなに擦つたい思いをするの



と、まるで思いやりでもあるかのようにそう言つて、ローソクを近々と肌の方に傾けてやつた。

「う、うつ、うつッ」

彼女は苦悶の声をふりしぼつた。それが私にはたまらなく気持よかつた。彼女の顔から血の気がさつと引いたので、私はようやくローソクをとりつけた。

円い冴えた月はもう校庭の梧桐の梢にかゝつていた。私はやつと日野妙子に服を着ることを許した。私は扉をあけて彼女を廊下に送り出してやりながら、

「かできやしないんだからな」

と、どぎつい口調で因果を含めた。すると、彼女の面上をあらたな恐怖がつつ走り、

「まあ小父さん、それじゃまだこの上に……、あ、あたし、どうすればいいの……」

激しくすゝり上げながら、妙子は力つきたように、壁にもたれて泣いた。私はそんな彼女の姿にも、くすぐられるような喜びを覚えながら、しかしわざと冷やかにつゝ放しておいて、抑揚のない声で極めつけた。

「どんなにジタバタしたつて、もうどうなるもんでもないさ。これからはずっと、俺の云うとおりにするんだ。明後日の晩八時に、俺の家に来るんだ。いゝかい。若し来なかつたら、学校中に今日お前がされたことをバラしてやるからな。なあに、俺はお前のためなら、この商売がクビになつたつて、ちつとも構やしないんだからな。——明後日の晩、八時。いゝかい、待つてるぜ」

(2)

私はこの町の繁華街から、約二十分ほどかかる、とある空地に建てた十五坪ばかりの家に、こゝ五、六年住んでいる。逃げた第二の妻を縛りつけた、例の柿の木は、今でも秋

になると、たわやかな実をみのらせる。

私はその木を見ると、妻を縛りつけて、悪鬼のように暴れ廻つた夜のことが想出されるのだ。一人暮しの朝夕だから、自然に何時までも、逃げた妻たちのことばかり、想出すようになる。そうして、想出しては、私を捨て、逃げた妻たちへの呪詛を陰々と繰返えしていたのだ。

しかし、その夜は違つていた。逃げた妻どころか、まだ誰も手を触れぬ処女、それも校内随一と評判の美少女が、私を尋ねてくるのだ。私はもう有頂天で、ソワ／＼と夜がくるのを待った。

まつたく、巧い具合にいつたものだ——と、私は思い出す度に、ほくそ笑むのだ。あんなに万事好都合にゆくとは思わなかつた。しかも、引続き、いくらでも私が望むまゝに、彼女の美しさをいためることが出来るのだ。こんな醜いアザのある、小男の私が……。

私はこんなアザのある醜男であることに、日頃必要以上にひけ目を覚えて、徹底的にひねくれていたが、今は彼女があまりにも、美しく若い女性だけに、自分の老醜までが、何か心よく面白かつた。つまり、



若き美女と、醜男との
醸し出す奇妙な雰囲気
が、嬉しいのだ。妙子
の私に対する怖れ、嫌
悪、そんなものが強け
れば強いほど、私の復
讐心はふるい立つの
だ。

復讐！ そうなの
だ。私は私から逃けた
妻や、私を嫌悪した女
性などを含めた、すべ
ての女性に対する復讐
として、妙子の肉体を
いたぶつてやるのだ。

この家は隣家も遠
く、ポツンと離れてい
るから、少々あの娘が
声をあげても大丈夫だ
と思うと、私は又して
も、気味の悪い笑いが
こみ上げてくるのだ。

この間、学校で充分
機会があつたのに、遂
に最終的に日野妙子を

虐めなかつたのは、こんな風に、長く彼女を
たのしんでやりたかつたからなのだ。世間の
男は、処女を奪うことを、すぐ実行に移すが、
私は猫がネズミをいじくり廻すように、長い
間、ジワジワと虐めてやりたいのだ。それが
私の趣味なのだ。実際、のたうつ処女の躰を、
むりにいたぶる快楽に較べれば、直接行爲な
どは、なにかあつけないように、私には思わ
れるのだ。

時計が八時を打つて間もなく、チリンチリ
ンと、門の潜り戸の鈴が鳴った。私は青年の
ように胸をおどらせながら、玄関へ飛ぶよう
な足取りで出た。

格子戸をあけると、玄関の植込みの蔭に、
チラ／＼と女の姿が見えたが、なんだか二人
いるように見えるので、私はギクリとしなが
ら、暗い闇を透かして見た。

「いらつしやい。よく来たね！」

白く浮かんだ日野妙子の顔を見つけて、私
は思わずその声をかけたが、彼女は私をみつ
めたまゝ答えない。そして、その代りのよう
に、もう一人の女性がツカ／＼と、私の前に
すゝみ出て来た。

花模様のワンピースをスツキリと着こなし
た大柄な娘。まだ二十前後の初々しさにあふ

れて、匂うような若さを発散させる、好も
しいその娘を一目見て、私はトッサに、妙
子の姉だと悟つた。目も鼻も妙子そっくり、
と云うより、妙子をもう一段成熟させて、
色香をそえたような、私の好みに文句なし
にピッタリくる娘なのだ。

「あなたですね、校売店の方は……」
娘はもう昂奮したように声を上づらせ
て、私にその黒い瞳をヒタと向けた。

「私、日野妙子の姉の順子です。妹から聞
きましたけれど、あなたは卑劣なことをし
て、その上に妹を脅迫なさるそうですけれ
ど……」

「まあ、どんなお話かしりませんが、どう
ぞ、玄関までお入りなさい」

「いえ、此処でいゝんです！」
「いや、外では誰か通り合わせて聞くかも
しれませんからね。私の方は一向かまわな
いが、娘さんたちに悪い噂が立ちでもした
ら、それこそ一大事ですからな」

そう云つた一言が効いたらしく、順子と
妙子は相談するように顔を見合わせたが、
ちよつと肯き合うようにしてから、二人手
をつなぐように、玄関の中に入つた。

玄関までなら……、他人に話を聞かれる



よりは……、と娘心に
思案したものに違いな
い。私はニタ／＼と嬉
し笑いがこみ上げてく
るのを、押えるのに骨
が折れるくらいだつ
た。

「お話と云うのは？」
「妙子が可哀そうです
わ。あなたのワナにか
ゝつて……、もう妹に
つきまとつたり、脅迫
したりするのは、止し
て下さい！」

そう簡単には止され
ないんだよ……、と、
私は内心で呟きなが
ら、真剣な表情で立つ
ている順子を見た。小
男の私だから、見上げ
るほどの、見事な体格
の娘だ。よほど妹想い
の潔癖家らしく、私を
見る表情は、まるで蛇
でも見るように憎悪で

一杯だ。

なにかこう、生理的な嫌悪と云つたような
娘らしい順子の表情を見ていると、ク、と、
私は咽喉もとまで、嬉しさがこみ上げてく
る。セイ／＼俺を、そんな顔をして見ている
がい……、と思ひながら、私は口ではノラ
クラと、とりとめのないことを喋っていた。

「いや、なにを妹さんがおつしやつたか知り
ませんが、私は一向に——」

「しらつぱくれないで下さい！ この上、妹
をどうなさるつもりです！ とにかく、もう

絶対にヘンな真似をなさらないで下さい！」

勝気、妹思ひ、とは云つても、所詮私の眼
から見れば、二十の小娘だ。聰明なようでも
世間知らずの他愛ない処女なのだ。そうだ。
彼女が男と云うものゝ獸性を知っていたら、
いくら二人づれとは云つても、夜分に私の家
を訪れたりししなかつただろう。

強硬に私の非を鳴らしていた姉嬢は、一向
に手ごたえのない私の態度に拍子抜けしたら
しく、ちよつと相談するように妹の妙子に顔
をよせて、何か囁いた。

先刻から、何気ないようすで、二人の隙を
狙っていた私が、この時を逃す筈はなかつた。
私は飛鳥のように、サツと二人の後に廻つ

た。

娘二人が、アツと叫び声をあげた時には、
もう玄関の鍵に飛びついていていた。留守勝ち
の私だから、鍵は充分吟味して、嚴重なの
を取付けである。順子が私の手許にすぎり
ついて、阻止しようとする脇腹を、私は肘
でかなり強く、トンと突いた。

「ウツ！」と声をあげながら、彼女は後へ
ヨタ／＼と二、三步歩いて、ドツと倒れる。
妙子がヒイツと泣声をあげながら、順子に
すがりつく。すべて一瞬の出来事だ。

私は悠々と鍵をかけ終つて、二つの花の
ように崩れている、娘二人を見下した。愉
快で愉快でたまらなかつた。

「さあ、今夜はお客は一人かと思つていた
ら、わざわざ美人のお姉さんまで御同伴だ。
これから、小父さんがゆづくりおもてなし
をするからね、ヒヒ、ヒヒ、」

情けないとも、怒りとも、又恐怖ともつ
かないような、二人の表情を見ただけで、
私の笑いは止らなかつた。

(4)

この二人を、座敷に追い上げるのは大変
のようだが、しかし、玄関にあつたステッ



の俺が憎いのかね？」
妙子は、もう精根つきたように、グツタリと横たわっている。うつろな瞳だ。しかし、私は再び失敗を繰返えさぬように、手早く彼女を柱に縛りつけた。「ほら、精一杯、咬みついてくれた御礼をするからな。ちいとばかり、手荒いかもしれんけれどな」

私は用心のために、何時も廊下の隅に立掛けてある木銃を持ってきた。戦争中、誰でもさん／＼銃剣術に使った、あの木銃だ。先の方は丸いタンポになっている。妙子の眼の前でそれをしごとと、本人の妙子より、姉の順子の方が、キヤアと声をあげた。

まづ、白々と光っている乳房を目かけて狙いを定め、さつと木銃の先をくり出す。丸い乳房を突き上げる。そして、木銃の先を胸に当てたまゝ、グリ／＼とこじめるのだ。

小男で、しかも醜いアザのある私が、肌ぬぎになつて、木銃を構えながら、こんな美しい処女を突いている光景は、まづたく、鬼気迫るものがあつたに違いない。今度は姉の順子の方が、なんとか阻止しようと、私の足からみついたが、私は順子を蹴り飛ばしなから、木銃の手を休めなかつた。そんな風に、かばい合う姉妹を、交互にいたぶるのが、たまらなく素晴しかつた。

やがて突きに飽きると、私はガラリと木銃を投げ出して、順子を膝の上に乗せた。「お待遠様だつたね。さあ、今度はあんたの方を可愛がつてやるよ。えゝ、どうだい？」

「うゝッ！ 俊夫さん！」

「そう／＼、あんた、もうすぐ嫁に行くんだつたね。俊夫さんつて許嫁によつぽど惚れているようだが、いゝ男かね？」

そんなことを喋りながら、私の両手は、小止みなく、順子の額に、みる／＼大粒の汗が吹き出してくる。喰いしばつた唇の間から、今は呻き声だけが洩れた。

「その俊夫つて男、きつと、優男だろ、俺のような、ひどいアザはないだろうね」

私はワザと、醜い赤アザがひきつゝている、右半面の方を、順子の眼の前に、押しつけるようにした。すると、今更のように、順子の顔に嫌悪の色が走つて、サツと顔をそむける。それが、私の快感をゆさぶる。

「なあ娘さん、あんた、どんないゝ男の許嫁が待っているか知らんけどな、気毒だが、あんたは今、こんなチビの、ひどいアザのある、年よりの片端者にな……」

「や、やめて……」

「うフ、フ、遠慮せんで、もう一度、戀しい男の名前を呼んだらどうかね。まづたく、そんないゝ男と婚礼するのも近いと云うのに、こんな俺のような化け者に、ほら、まづたく御気毒なことだなあ」

そんな酷い言葉が、あとから／＼、私の口を溢れて出てくる。

それは順子に聞かせると云うより、むしろ私自身の、嗜虐の欣びを煽るためだつたのかもしれない。

部屋の中には私の哄笑と、美しい二人の姉妹の戯戯がひろがつて行くのだつた。

責め
の
体
験
記

風呂責め綺談

熱い！ やめてッ！ やめてッ！ 絶叫しながら早苗の上半身は苦痛に身もだえる。熱湯は彼女の柔肌をチリチリ責めさいなみ、太腿から下腹部にしみこんで、赤くく……

波 銅 銳 郎
古 庄 英 生 画

もう早苗がくる頃だと思つと、私はさすがに落着かなかつた。

戸外の様子に気を配りながら、私は先刻から、中ぶりの広口瓶の中を眺めつゞけているのだ。透明な瓶の中で、それは無気味にうごめきを繰返している。見るからに爬虫類のいやらしさを感じさせる、それは数匹のナメクジだつた。

「なあ、お前は俺の友達だ。待つてろ。も

うすぐ白い肌の上を這はせてやるぞ。温い絨のような娘つ子の肌の上をな」

独言を呟くと、我にもなく、薄気味悪い忍び笑ひがこみあげくるのだ。

「いつひつ、ひ……」

薄暗い台所には饅えた匂ひと湿気がたゞよひ、汚れた壁に私の影が大きく妖鬼のようにゆれた。

だが、私はその時、建付の悪い玄關の方に

人の気配を感じると、鼠のように敏捷に立ち上つた。早苗だ。狭い玄關のタ、キに、眼が覚めるように鮮かな和服姿の彼女が立つていた。

「お嬢さん。どうぞ上つて下さい。先刻から首を長くして、待つていました」

「政さん、用つて何なの。あたし、今日お花の御稽古の途中を、コッソリ抜け出して来たのよ」

彼女は頬をホンノリと染めながら、ちよつとまぶしそうに私を見上げた。私は黙つたまゝ、今日は一層あでやかに見える早苗の肩を抱いた。眼にしみるような白い足袋が、ジクジク湿つた汚い畳の上に爪立つ。

「誰か、家の人がいるんぢやない？」

「いや、今日はみんな親類に行つてね。明日まで帰らないんです」

そう云ひながら、私はガラリと破れた襖を開ける。薄暗い四畳半の部屋には、綿のはみ出た、垢だらけの布団が敷いてある。その上に、私はドンと彼女を突き飛ばした。

「まあ、政さん、なにをするの……」

「うふふふ、お嬢さん、一度は俺にまかせた跡じやないか、生かそうと殺そうと俺の自由だ。今夜は観念して、大人しく云うことを聞くんだな」

早苗は急に乱暴になつた私の態度に、あつけにとられて大きな眼をみはつた。それはまるで、泥の上にこぼれた紅椿の一輪のようであつた。

彼女は私にとつて、実は主筋にあたる。私が勤めている袋物問屋の一人娘なのだ。二十一になつたばかりだが、評判の小町娘で、我儘で華美で勝気な、まるでダリヤのように人

目につく美貌だつた。

私は中学を出てすぐこの店に雇はれたのだが、徹底的に封建的な機構の中で、まるで馬車馬のように追ひ使はれた。因業な主人は、雇人などまるで人間とは考えて居らず、毎日苛酷な圧迫が加えられ、わけても読書好きの私は、主人から眼の敵にされていたのだ。

若い私は、この酷薄な主人に対して、何時か烈しい反抗心を抱くようになり、その後復讐の対象として、私は主人の一人娘、早苗を選んだのだ。それが復讐心だけなのか、或は彼女の美しさに眩惑されたことも含まれているのか、私には判らない。

とにかく我儘な彼女が、どうしたとか私に好意を示し「政さん、政さん」と呼びつけては、身辺の用事をさせるのが、私にとつては、お誂え向きのチャンスだつた。家中誰も知らぬ或夜、私は巧みに早苗の処女を奪つたのだ。

一度征服してからは、更に私の復讐淫虐の血が猛り狂つた。もつとく彼女を汚し、虐げてやらねば、気がすまない。もう、鹹の心配などどうでもよかつた。私はひそかに彼女の裸体を思ひ浮べては、さまざまの工夫をこらした。そして、巧に今日早苗を、この軒の

傾いた露路奥の家に誘つたのだ。

私は早苗の抵抗を気にもとめず、その着物を剥ぎにかゝつた。沢山の紅紐やしごきなどが、投げ出される。破れ布団からはみ出したホコリ色の綿が彼女の白い肌にからみつく。そのみじめに汚れた部屋と、投げ出された華かな衣類との奇妙なコントラストが、ますます私の残忍な復讐心をそゝるのだ。

太い荒縄が、美しい犠牲の手足を縛つた。

「お嬢さん、もう少しの辛棒だ。今に、いゝ思ひをさせてやるからね」

「私を、どうするの？」

勝気な女の哀願の瞳、まるで蜘蛛の巣にかゝつた、驕慢な揚羽の蝶だ。私は思はず舌なめずりした。

「あッ、嫌ッ！ そんなものを、どうするの？」

「うふふふ、さあお嬢さんの大好きなものだ。此奴もお嬢さんのような、白い柔かな肌が恋しいだらうて……」

私は瓶の中のナメクジを彼女に見せながらその一匹を彼女の豊かな乳房の谷に落した。

「ひいッ！ 嫌ッ！」

嫌悪に喘ぐ肉体の魅惑的な躍動が、私を恍惚とさせる。早苗が大のナメクジ嫌ひのこと

私は薄笑ひをしながら、彼女を押した。よほどナメクジに跳梁された跡が気持が悪かつたらしい。早苗はためらひながらも、案外に素直に湯桶に入つた。

それでも、小さな湯桶だから、上半身、丁度乳から上は湯につかつてはいない。それを見ますと、私は壁に立てかけておいた、二枚の板切れを持つて、近よつた。

「お嬢さん、湯がゆるいらしいから、蓋をしようね」

「……………」

「いゝんだよ、そのまゝで、蓋が出来る仕組みになつてゐるんだ」

私は手早く、二枚の板を湯桶にかぶせる。その板の蓋はくり抜かれていて、丁度彼女の胸がスッポリはまる。

まるで板の上に上半身の石膏像を置いたように……。

「あッ！」

その声と一緒に、私は右手の金槌をトンと打ち落した。蓋にはあらかじめ、沢山の釘を植えておいたのだ。

「止めてッ！ 私、出られなくなるわ！」

それには頓着なしに私は蓋を湯桶にドンドン釘づけにしていた。あゝ、その時の金槌

の音が、どんなに心よく私の頭悩にひびいたことだろう。

私は相好をくずして笑つた。

「さあよし。お嬢さんあんたがどんなに藻掻いたつて、もう出られつこないよ」

「私をどうするの……お願い！ こゝから出して頂だい！」

もの凄く恐怖に捉はれたらしく、早苗は、バタバタと両手で蓋を叩きながら、必死の顔色で叫んだ。

「いひゝゝゝ、まあ、ゆつくり入つてゐるんだね。どうやらお湯がぬるいようだ。大事なお嬢さんに風邪でもひかしたら大変だ。どれ少しく熱くして上げようかな」

私は笑ひが止らなかつた。竈の前にしやがみこむと、乾いた薪木をつかんで、どんどん放りこんでは、火勢を煽り立てる。

「熱い！ やめてッ！ やめてッ！」

絶叫しながら、早苗の上半身は、苦痛に身もたえる。黒髪をふり乱して、その額も、上半身も紅色に上気して、油汗の玉が、見る見るうちにブツブツ吹き出しては、その肌をつたわつて流れ落ちる。

熱湯は彼女の柔肌をチクチク責めさいなみ太腿から下腹部にしみ込んで、赤くく、ま

るで熱れ切つた果物のように変貌してゆく。「やめてッ！ あゝ私、死んぢやう！ 勘忍してッ！」

彼女は知らない。しかし、彼女の背後の汚れた壁にその狂気の舞踊の影が、乱舞する。

電気の下、蒙々と立ちこめる湯気と熱気の中で、その半裸身は髪をつかみ、振り乱し、腕をふり、バタバタと蓋を叩く。その動きにつれて、ふくよかなその乳房はえも云えず揺れ動き再び私の官能を烈しく刺戟するのだ。

「どうだね、お嬢さん湯加減は？ チクチク熱いだろ？ もつともつと熱くしてやるよ。踊れ！ 踊れ！」

私はたまらなく嬉しくて、生れて始めての上気嫌だつた。あまりの快感に黙つてはいられない。絶えず喋りつゞけながら、まだ薪を燃しつゞける。

メラメラと吸き出る焰は、或は私の躰の中に燃え上る淫火だつたかもしれない。私は欣びに我を忘れた。

「熱い、熱い、あゝ熱い、政さん許して、死んじやう！」

「まだまだ、これつぽつちや出して上げられないね。ほれ、そんなに蓋を叩くと、蓋がこわれてしまうよ」



「あゝッ、鬼！ 悪魔！」
「うつつムムム、ひつひムムム」
上下左右に躰をふりながら、しかし、その
早苗の動きが、だんだん鈍くなつてゆくよう
だつた。肌は紅で染めたような真紅。そして
まるで上半身も湯につかつたように、ビシヨ
濡れの油汗だつた。

顔だけが、真紅から
サツと草の葉のように
蒼ざめた。蓋をつかん
でいた細い指が、力な
くのびて、小さな魚の
ように痙攣する。
「ウーン」と一声、早
苗は断末魔のように呻
いた。
「うふムムム、とうと
う気絶してしまいやが
つたな、小町娘さん」
私は未練たらしく彼
女の肌を眺めながら、
釘抜きで湯桶の蓋をは
がしていった。
すつかり蓋を取つて
しまうと、早苗は軟体
動物のように、クニヤクニヤと湯桶の淵にし
なだれてしまった。下半身はまるでゆで蛸だ
これが〇〇の秘蔵娘の躰だと、一体誰れが思
うだろう。あの因業者の父親がこの下半身を
見たら、きつと禿頭から湯氣を立て、この
娘と同じように、氣を失つてしまふだろう！
グツタリと正体のない早苗を抱き上げると

今更のように復讐の快感がこみ上げてくるの
だ。私はすつかり有頂天で、まるでその快感
に酔うのだつた。

「おゝ、よしよしお嬢さん、そのかわりに、
これから俺が、今度は本当に、とつくりとお
前さんを可愛がつてやるからな……」

元の四畳半に戻ると、私は破れ布団の上に彼
女を寝かせた。そして、一仕事完全にやり遂
げた満足を味ひながら、ゆつくり煙草に火を
つけた。早苗が氣がつくまで、そうしてのん
びり待つつもりだ。

私を馬車馬のように罵倒してコキ使つたあ
の主人の娘は、今、私の前に一糸まとわぬ姿
で横たわっている。その下半身は、まだ湯氣
が立ちそうに赤い。

やがて、彼女は意識を回復したようだつた
口の中で、なにかブツブツと呟いている。痴
呆したように、ぼんやり私を見上げるのだ。

私は煙草を捨てた。

「いひムムム、どうした、お嬢さん。俺の趣
味は御氣に召したかね……」

彼女が正氣に戻つたのを知ると、再び私の
活動が始つた。みだらに、みだらに私の手が
動く。もつとみじめに、もつともつと残忍に
私は早苗を汚す権利があるのだ。



——妄執の愉悅——

汚れたパンティ

……あつたのです。待望の、夢にまで見た麻理ちゃんの、汚れたパンティ！……薄汚れたパンティ。震える手で裏返すと、ああ！……黄つぼく色のついた、やわらかな感觸の布地……

北 辻 一 郎
瀧 川 共 画

アパートの部屋を出ると、すぐ右側が洗濯場になつていたので、す。だから、何時通つても誰か洗濯している。

殊に朝の十時、十一時頃だと、四人も五人ものアパートの女の人

たちが、一列に、私の方にお尻を向けて、洗濯しています。さかんにお喋りしながら、ゴシゴシ洗っているから、自然にはづみがつくらしくお尻が調子をとるように揺れるのだ。それが五人も並んで、五つのお尻が一心に動いている様子は、見る度に生睡が出るような気持です。

私は此処を通る度に、女と云うのは、なんて洗濯好きだろうと思うのです。私は一人暮らしで、不精者だから洗濯が億劫で、あまりやらないので……。垢染みたシャツなんぞ着て平気にいるが、女はよく洗濯する。一体、なにをあんなに何時も洗っているのだらうと、

考えるようになりました。

それから時々、自分もシャツや靴下などを持出して、肩身の狭い想ひだが、女の人の隅の方で洗濯することにしました。そして、洗うふりをしながら、ソツと様子を見ると、いろいろ洗っているが、丁度その時は、隣りに十一号室の紙間屋に勤めている人の若い奥さんがいて、洗っているのが、うすいクリーム色の、女物のパンティです。

「あゝ女のパンティだ！」と思うと、ドキリとして、私は顔が赤くなつたようでした。

それから、折がある度によく気をつけて見ていると、誰でも、よくパンティを洗っている。屋上の洗濯乾場に行つて見ても、何時でも四枚や五枚のパンティが、風に吹かれてない日はないのです。

私はピンクやクリームや白や、それからレイスの入つたものなど、沢山のパンティが乾してあるのを見ながら、どうしてこんなにしょつ中洗うのか、女のパンティは、そんなに汚れるものかと、ぼんやり考えました。

私たち男でも、すぐパンツの前が黄色く色がつき易いが、女の人の躰のその個所のことを考えると、汚れるのも、無理はないかと、考えられてくるのです。

「そうだとすれば女の人のあの部分に当るのは、パンティの、あの辺りだな、と、そんなことまで気になつてくる。だが、そんなことを考えるのは、とてもたのしいような、慥ぐつたような気持がして、私は何時もそんなことばかり想うようになりました。」

考えてみると、私にもともと、女のパンティが気になるわけがあつたのです。私の左隣の部屋にいる麻理ちゃん。この人は二十になつたばかりだが、もう大分前から、新宿の喫茶店につとめている。瘦せた私より目方があるほど大柄で、眼がとても大きくて、アメリカ式の派手な容顔です。服装もとても華美で、娘のくせに、時々外泊することもあるらしい様子でした。

麻理ちゃんはまだ三十に近い姉さんの恵理さんと二人暮らしで、この姉さんは大人しうに見えるが、やはりパトロンがあると云う噂もあるのです。アパートの人たちは、そう云つていました。

ところで、この麻理ちゃんは隣室だし、私も朝遅い商売なので（遠縁に当るある料理屋で、板前の見習をしています）時々話すこともあるし、正直に云えば好きだつたのです。姉さんの恵理さんの方は歳も上だし、ちよつ

とよりつき憎い冷めたい感じで、殆ど口をきいたことがありません。

だが、私が憧れていた麻理ちゃんは、とても近代的で明るい娘だが、性質がルーズで、悪く云えば、だらしがなかつた。例えば夏など、アパートにいる時は、シュミーズも着ていないのです。どうして判るか云えば、ふだんのワンピースの脇にあるスナップ、あれをちゃんとはめていない。その恰好で、平気でゴミ捨てに出たり、洗面場で歯を磨いたりする。

おそらく、暑いのと、ものぐさなのと、両方だつたのでせう。時には脇のスナップがみんな明いて、白い脇腹が見え、又ピンク色のパンティのゴムが、ギョツと肌にくひこむように、締つているのが見える。私は麻理ちゃんが好きなのですから、そんな様子を見るとどうにも妙な気持でした。

気が小さいからジロジロ見るわけにもゆかないし、それでもとても気になつて、困つてしまふのです。

「あゝ、あれがパンティだな。麻理ちゃんがパンティをはいているな」

そう思つて、時々ソツと盗見しました。女のパンティは、やはり優しいものだな。と、感

心したりしたのです。

それから、これもやはり真夏のこと、夜遅くなつて何かの用事で隣室をノックすると、もう寝支度の麻理ちゃん、平気で立話するのです。私はもう胸がゾクゾクして、まともに麻理ちゃんの方を、見られないのでした。

なんと云う布地か知りませんでした、薄色のそのドレス(?)が、光線に加減か、とてもよく透けて見えるのです。やはり、麻理ちゃん、ショーツを着ていません。だからその肌にピッタリ貼ったようなショーツパンツが、まざまざと見えるのです。

いくら麻理ちゃんでも、

まさかそんなに透けて見えるとは思はなかつたのでせう。やはり、電気の光線のせいもあつたのです。しかし、ギョツとゴムがウエストに締つた具合から、ピッタリとなまめかしい腰の線、それから太腿につづくV字形

の線まで、私にはハッキリ見えるのだから、とても叶ひません。

話してみても、シドロモドロになつて、頭から湯気が出そうな気持ちになつて、自分の部屋に戻つて来たのです。

一人で床に入つても、そんなことを考え、しかし、あんな風にピッタリしていて、内股の辺りに、も喰込むようになっていたのだから、そうだとすれば、柔かな辺りがズレて痛むようなことはないだろうか、などと考え

ると、キリがないのです。

そんな時になつて女の人たちが、よくパンティの洗濯をすること、気がついたのです。

やはり、運動の、激しい部位によく当つて、スレるから汚れるのだと、私は思ひました。それなら女のパンティは、一体どんな風に汚れるのだろうか？ 男と

それから、とかくパンティのことが気になつて「女のパンティは、あんな風に、肌に喰ひこむように、ピッタリしているのか、男のパンツより、本当に美しいものだ」と考え始めたわけでした。

は汚れが違うのだろうかといういろいろ空想したがよく判りません。あゝ、一度でいいから、女の洗濯前の、汚れたパンティを見たいものだ。と、そんなことばかり思うようになりま



それから二ヶ月ばかりの裡に、その念願の洗濯前のパンツを、二度ほど見たことがあります。一度はアパートの洗濯場で、三十過ぎた奥さんのを、もう一度は勤先の料理屋の井戸端で。だが、二度ともすぐ近くに人がいたし、こちらもソワソワしていたから、ロクロク眼に入らないで、とても残念でした。もちろん、手に取って見ることも出来なかつたのです。

しかし、それで一層気持がそゝられて、どうしても、女の汚れたパンティが欲しくて、たまらなくなつたのです。チラと見ただけでも、なんだか凄じい吸引力があつて、ボーツとした気持だつたからです。

どうしても欲しい。それも、麻理ちゃんのパンティが——と、朝昼晩考えているのです。やはり、好きな女の人を欲しいのは、人情と云うのでせうか。私は決心して、その方法を考えました。それから、その用意にもと

りかゝりました。

用意と云うのは合鍵を手に入れるのです。隣室の鍵は預つたこともあるし、私の部屋の鍵と、少し違うだけなので、勤先近くの錠前屋で、簡単に手に入りました。あまり、悪事と云う気持はありませんでした。

或る日、私は惠理、麻理の姉妹が出かける気配を、牀中を耳にして待ちました。それから三十分ほど我慢して、廊下に人通りがないのを見澄してから、ソツと忍び出たのです。

鍵穴に鍵を差込んだ時には、やはり手がガチガチ震えました。こんなところを、人に見られたら、百年目です。やつと部屋に忍びこむと、内部から鍵を下しました。ホツとして見廻すと、私のガランとした部屋とは違つて女二人の部屋ですから、やたらに色つぼく飾り立てゝあつて、一体何処に汚れ物があるのやら、見当が付きません。

暫く部屋の真中につゝ立つてから、私は恐る、押入れに首をつゝこみました。

こゝは行季の蓋が明いていて、いろいろのものが突込んであります。そつととり上げてみると薄い織模様になつ

たシャツ。レースがついたシューミズ。それから刺繍入りのブラジャア。その他、いろいろな女の下着類が、一杯あるのです。

私は嬉しくなつて、ブラジャアを胸につけそれから薄色のパンツをはいて見ました。鏡に写して見ると、何しろズボンやワイシャツの上につけているのですが、とても可笑しな恰好です。それでも私は悦に入つて、一人でクツクツ笑ひ出しました。女の下着はいろいろあつて、みんなレースや刺繍で綺麗だからとてもいゝと思つたのです。

だが、一番目的の、汚れたパンティは、何処にも見当りません。最近、ちつとも麻理ちゃん洗濯しなかつた筈だから、必ず何処かにある筈だと思つて、ずい分方々捜したのですが、どうにも判らないのです。私はがっかりして、一体どうしたのだらうと考えていると、フトガス台の下、大きなバケツに気がつきました。

大して当にせずに覗き込むと、なんとそれには、ギッシリと汚れ物がつめ込んであるのです。私はゾクゾクするほど嬉しくなつて、部屋の中に、その汚れ物をブチまけました。麻理は前に述べたように、大変な不精者ですから、ウンと汚れ物が溜っているのです。私





は咽喉を鳴らしながら、その汚れた下着類を掻きわけました。プーンと汚れ物独特の匂ひが鼻をつきました。

あつたのです。

待望の、夢にまで見た麻理ちゃんの、汚れたパンティ！ 薄汚れたパンティ。震える手で裏返えすとあゝ！……黄つぼく色のついたや

わらかな感

触の布

地。

それはまったく、不思議な汚れ具合です。私はたまらなくなつて、其処を鼻に押し当てると、なんとも云えない、女の秘密の匂ひに頭の芯がジーンとしびれるようでした。麻理ちゃんはあんな愛くるしい顔をしているのにどうしてパンティが、こんなに汚れるのだろう。だが、あんなにピッタリ肌に密着しているのだから……。女の躰はそんな風になつて

いるのだ。と、考えながら、私は麻理ちゃんのパンティを嗅いだり、ちよつと舌で舐めてみたりしたのです。

麻理ちゃんはルーズだから、そんな風にとつても汚れたパンティが、三枚もあつたのです。私は暫く汚れ物の中にゴロリと寝て、パンティを顔や胸の上に乗せていました。それから、始めは見るだけでよいと思つたのだが見ると我慢が出来ずに、三枚のうち、汚れのひどいのを二枚、持出してしまつたのです。

これではまるで空巢だが、我慢が出来なかつたのです。それから開さえあればそれを出して見ます。そして、暫くすると、又留守中に忍びこんで、持出しました。何しろ合鍵があるので、とうとう合計六枚も溜りました。そして、見るだけでは我慢が出来ないようになつて、汚れたところをペロ

ペロ舐めます。次に井の中にパンティの汚れた部分を置き、上から熱湯をそそいで、暫くひたしてから、その湯を吞みます。

その時、麻理ちやんの、その軀を空想しながら吞むと、とても美味しいからです。又、汚れた部分を火鉢の上にかざして、鼻を近づけると、プーンと、とてもとてもよい匂ひが立ち上るのです。こんな風に私は盗み出した麻理ちやんのパンティで、飽きずにいろいろ遊びを繰返えしました。

そして、今から一ヶ月ばかり前、又私は隣室に忍びこんだのです。もう馴れていますから、すぐ汚れ物を出して、ゴソゴソやつていると、不急にドアが明くではありませんか！私は不意を喰らつて、棒立ちになりました。麻理ちやんが、立っているのです。

「ンまあ！ あんただつたのねッ、パンティ泥棒は……」

麻理ちやんは大きな目を一層大きくして、如何にも呆れた表情なのです。

「この間から、パンティばかり、何度もくしく失くなつて、ヘンだヘンだと思つてたのよッ あんた、何の怨みがあつて、そんないやらしいことをするの！」

麻理ちやんは男のように腕組みして、私を

睨みつけるのですが、なんと云われても、私は一言の返事も出来ないのです。オロオロして声が出ません。

「よオ、なんだつて、私のパンティ盗つたのよ！ いやらしいつたらありやしない。警察に届けるわよッ！」

警察と云われて、私は困つた！ と思ひ、ヘタヘタと坐りこんで、思はず麻理ちやんの足もとに両手をつきました。

「すみません。許して下さい。汚れたパンティを見ると、夢中になつちやつて……。どんなことでもしますから、警察に届けるのは、勘弁して下さい……」

こんなに、ハッキリ云つたのではなくて、オロオロと、そんな意味のことを、私は何度も頭を下げながら、口走つたのです。泣きそうな氣持でした。

麻理ちやんは立つたまゝ、バツタのように頭を下げる私を見て、

「フーン、あんた、女の汚れたパンティが好きなの？ 男のくせに……。なんていやらしい奴なの、ゾオツとするわ、変態ねえ」

と、さもさも輕蔑したような顔で、いろいろ、私に聞くので、私も一生懸命に全部話しました。

そして、汚れた処を舐めたり、お湯でとかして飲む話をすると、麻理ちやんはゲラゲラと、大きな声で何時迄も笑つて、

「馬鹿！ 聞くだけでもあたし、ゲロが出そうだ。お前なんぞ犬より汚いぢやないか」と云つた。そうして、キラキラ光る眼で私を見て、

「いゝ、お前みたいないやらしい奴、もうあたしの奴隷にするからね。あたしの命令をきかなかつたら、警察につき出してやるから……いゝかい！ 判つたね」

私は「ハイ、どんな命令でも、守ります」と、云ひました。そのほかに、返事のしようがなかつたのです。麻理ちやんは、

「いゝね、ズルしたら承知しないよ！」
そう云つてから暫くジツと私の顔をみつめていましたが、イキナリくるりと後を向いたと思うと、サツとパンティを脱いでしまったのです。

「さあ、盗人の罰に、これからずうつと、私のパンティを洗濯するのよ。胡麻化したあ、承知しないからねッ！」

同時に、柔かくてかすかに匂がするものが飛んで来て、私の顔にパツと当りました。見ると、麻理ちやんが脱いだばかりのパンティ

なのです。吃驚して思はず拾ひ上げて見ると私はアッーと、叫び声をあげてしまひました。白いスミース織のパンティ。そして、その一部には、まるで今染つたような赤い××。ドキリとしましたが、すぐに、それが麻理ちやんの、毎月のMだと云うことが頭にひらめくと、それから後のことはもうよく判りません。私は、ノボセ上つて、とても恥しいことをしてしまつたのです。

麻理ちやんもノボセたように上氣して、なんだかゲラゲラ笑ひこけていたようでした。

こうして、私は麻理ちやんの召使になつたのです。麻理ちやんは時々、汚れ物を沢山抱えて来て、私の前に放り出しては、

「ちやんと、綺麗に洗うのよ。アイロンもかけなきや駄目よ、怠けたらひどいから……」と、云うのです。

私は、怠けるどころか嬉しくつてたまりません。その洗濯物の中には、汚れたパンティが必ず入っているからです。一、二日、ゆつくりそのパンティをたのしんでから、夜遅く、アパートの人達にみつからないように、皆が寝静まつた、深夜に洗うのです。

それが、とてもたのしくて、私は小声で歌を唄ひながら洗います。自分の物の洗濯は嫌

で、今でも垢染んだ物を着ているのに、女の下着を洗うのは、どうしてこんなにいい氣持なのか、自分でも判りません。

だから、こうして麻理ちやんの召使の役目をするのが、一生続けばいいと思ひます。

それに、最近、又、たのしみが増えたのです。ある時、麻理ちやんが、

「これ姉さんのパンティよ。姉さんたら、冷え症だから、とてもコシケが多いのよ。あんな、これから姉さんの分も洗ひな」

クスンと笑つて、そう云つたのです。

本当に姉さんの惠理さんのパンティは、麻理ちやんとは又違つた汚れ方なのです。大分黄色いシミがついていて……、私にとつてそれがどんなに嬉しいか、御想像の外です。

私はこうして姉妹の汚れ物を一手に引受けて本当に張り合ひのある生活を送つています

惠理さんは、このこと、勿論知つていますが、私にはツーンと冷めたい態度で、一口も口をききません。それでも私は満足なのです。あの人の一番恥しい、汚れ物を私は全部知つていのですから。

惠理さんがどんなに冷めたくとも、私はこの頃、麻理ちやんと同じように、姉さんの惠理さんも好きなのです。

愛読者通信

前略、僕は「風俗草紙」を十月号から買求めたのですが、その後バックナンバーも取寄せ何度も繰返し読んでは楽しんでをります。当年二十四歳のマゾヒストです。

二年前、姉の女学校友達の家へ姉と一緒に遊びに行き、所用で姉が外出した二時間程の間に彼女と結びつきました。彼女は一度結婚に失敗した過去があり、当時商社会社のタイピストをしていました。大柄な美人で、僕がそれ迄見たこともないような綺麗な下着を着ていました。僕はそれ迄自分のマゾ性をハッキリ自覚していなかつたのですが、彼女によつて目醒めさせられた訳です。

ナイロンのコルセットやパンティ、ブラジャーなどをつけた彼女の重い軀を乗せて馬になつた僕がヨチヨチ這い廻る時の歡喜！彼女の脚や太腿をペロペロ舐め、その下着を顔に押当てたり、身にまとつたりして、彼女から散々いじめられた楽しい記憶も今では夢です。どなたか僕を哀れと思はれる女王様、救いの手を差し伸べて下さい。

(静岡市 T・M生)



翻譯變態小説

奇妙な情熱

業を煮やしたのでしょう。いきなり男は、あたくしの、腰と両ももを抑えこむように抱きかかえ、片方のお尻に噛みついたのです。ああその瞬間でした……。

解題

R・デヴェイラ作の『奇妙な情熱』は六つの短篇から成りたっている。それぞれ独立した話で、どれも異常性欲を取扱っている。作

デヴェイラ作

三宅 一朗 譯

者の正体は不明だが、おそらく何人かのペンネームにちがいない。従来の鞭打小説や常套的サヂズム小説と異り、一種の心理サヂズム小説ともいふべき部類に属する。

以下は、その第一話「エリザ・シヨタール夫人」だが、各章の小

見出しは訳者が付けたものである。原書は、パリ・アス書店に申込めば取次いでくれる。

(一) 地下鐵の出口

たしか、シヨタール夫人と初めて会つたのは、もうすっかり春らしくなつた五月の初めごろだつた。エリザ・シヨタール。この名が今は何と奇妙な想い出を浮かばすことか！ ふと彼女に眼をとめたのも偶然だつた。地下鐵の出口を上りきつたところだつた。私の左前を登つていた女が階段を上りきると、ちよつと横に寄つて靴下をなおした。

男なら誰でも見る。きつとスカートから現われた太ももに、通るすがりの私の視線が灼きついた。立ち止まりこそしなかつたが、私は思わず後をふりかえつていたのだ。なぜなら、小かがみになつた彼女が半身を伸ばしたとき顔が会つてしまつたからだ。

女はべつに私をさげすむような表情も、そうかと言つて顔を赤らめもしないで、さつさと大腿に歩いて私の左を通り抜け、どんどん前方へ行つてしまつた。私は、無意識的に足を早めていた。どうとある理由もなかつた。ただ、たつた今しがた眼の底に映つた彼女の恰好のよい右脚が、ちよつとばかり私を刺戟したにちがいない。

——三十五、六の女だ。商売女でもないらしい。インバイどもはちよいちよいあの手を使つて男を誘うが、いかにも自然だつた。こんなことを心のうちで呟きながら、私は、彼女の後姿を追つか

けた。

——つまらない。よそうかな？ あんな年増を追つかけてみたところで、それが何になるというんだ？ ちやんとした良人と子供たちの世界にいる貞淑な主婦にちがいない。

私は、すこし羞しくなつて、もすこしで立止るところだつた。が、そのときは、もう彼女から五メートルくらいのところへ来ていた。薄茶のツーピースを着た中背の婦人だつた。よく肥つていると見えてたくましいお尻が交互に強く揺れている。

私は立止らなかつた。自分では痴漢でも色事師でもないつもりだが、男という者は、たまには、はつきりした意図はなくても漫然と女のあとをつけることくらいある。

リラエ街の角を曲ると、女は、ゆつくりと角から二軒目の店に入り、街路に面したテーブルについて白い手袋を脱ぐのが見えた。私は、いつたん店の前を通りすぎたが、意を決して引返し、思いきつて彼女の真正面に腰をかけた。

「失礼します」

彼女は軽くなずいた。

彼女はアイスクリームを注文した。私も同じ物をたのんだ。おそろく、そのときの私の態度がきこちなかつたのだらう、彼女が、くすりと笑つた。

「じつは」と私は吃りながらいつた。「ぼくは地下鐵の出口から貴女をつけてきたのです。が、けつして不良じやありませんから」



女は、ちよつとびつくりしたらしかつた。

しかし、すぐに平靜に戻つた。

「お間違ひですわ。あたしくし、ふつうの女ですの」

「いや／＼、と私は慌てて手をふつた。「ある種の女だと思つて従いてきたわけじやありません。ただ、なんとはなしにです」

「まア」と彼女は蒼い眼を丸くした。「あたしくし、靴下をなおしましたから。あ、あのと、いらした方でしたわね」

私は頭を掻いた。

「あなたの率直さが気に入りましたわ。あなたが善良な方だということも解りましたわ。男の方つて面白いクセがありますね」

「いや、どうも、私は恐縮した。「申訳ありません。ぼくは、ピエール・ボアセノンという電気技師です」

あるとき、どうして、ああ即座に嘘がつけたのか、今だに自分で了解に苦しむ。私は、ピエール・ボアセノンでも電気技師でもない。それより、もつと可笑しいのは、生れつきの嘘付きでもない。それなのに、まるで女蕩し

のように突進に嘘を言つてしまつた。

彼女は、ヴァンサンヌ街五番地のアパートマンに居るエリザ・シヨタールだと名乗つた。

良人が戦死して、二十になる娘と二人きりの生活をしている。娘は、シャンゼリゼの帽子店に勤めている、その収入と良人の残してくれた金で生活している、など、その他いろいろな身上話を聞かしてくれた。

こうして、私は彼女と近づきになつた。後でわかつたのだが、エリザは、ほんとうは四十歳になつていた。しかし、未亡人生活を八年もしているせいか、どう見ても三十五くらいの若さに見えた。日曜以外は、晝間は一人でいることもわかつた。

「近いうちにお訪ねしてもよろしゅうございますか？」

「どうぞ」

私は、一ぱしの色事師になつたような氣になつて、その場は綺麗に彼女と別れた。

(二) エリザ・シヨタール夫人

そんなバカなことがあるものか、と物語や

小説に出てくる男と女の結びつき、なれそめを世間の人は一談に否定するが、案外に世の中の出来事は、小説以上に偶然なもので、また見方によつては、それが自然でもあるのだ。私と夫人との近づきもそうであり、二人がしぜんに親しくなつたのも不思議でも何でもないのだが、じつは、いよ／＼となつてから私は、生れて初めての驚くべきことにぶつた。今から想うと悪夢であり、世にも奇怪な体験であつた。

エリザは、血色のよい、美しいブロンドの女で、もう一歩で肥りすぎになるくらい堅肥りなからだをしていた。

「そろ／＼お婆ちゃんになるものですから、こんなに肥つてきて」

彼女は恥しそうに顔を赤らめた。

「立派でいいですよ。独りしていると、女のひとつて肥つてくるもんですよ」

「あら、では貴女は、あたしくしを瘦せさせることができるとおつしやるの？」

これが、私たちを一気に結びつけた彼女の最後の言葉で、私たちは、だまつて抱きあい、

だまつて、しかし熱狂的に唇を合わせ

た。





彼女は、小娘のように身をふるわせて私の抱擁の中で有頂天になった。

——決勝点にきた。

と思つたのは大間違いで、じつは出発点だつたのだ。私は、どんな男でもする女にたいする愛撫を一通り、いや三辺も繰りかえしたのち、ゆつくりと相手を長椅子に寝かし、彼女の待つてゐる男の貞操を捧げようとした。

そのときである。エリザは、苦しそうな顔をして強く私を押しつける、必死になつて起き上り、スカートの乱れもそのまま、はげしく私にキッスして抱きつき、次のような意外なことを言ひだしたのだ。

「だめ／＼、かんにんして。今はだめ。ねえかわいいひと、あたくしの言うことを聞いて。あたくしダメなの」

「すみません。ああ、あたくし早く貴方が欲しいわ。いら／＼して、こんな待つてゐるのに、あたくしの身体は、このままじゃダメなの」

「なにが？」

「あたくしね、良人がなくなつてから一年ばかり辛抱しましたの。ずうと独りで、もちろん再婚などはおろか、男と遊ぶまいと決心しました。娘も大きくなるし、一生、女の楽しみを諦めて通うそうと固く／＼誓いました。べつに死んだ良人に操をたてるとか何とか言う気持ではなく、あんなことしなくともいいような気がしましたし、当然

は何だか嫌らしいようにも思えたのです。けれども、半年もたつと、どうやら決心がぐらつきだし、いら／＼してきて、わけもなく泣きだしたり娘を叱つたりだし、それと気がついたときはヒステリー症の入口まで来ていました。それでも十カ月たちました。考えてみると、そのころ、誰か男のひとが眼の前に現われなかつたので、仕方なくそうしていた



のだったのです。約一年目に、ある若い、少年といつてよいくらいな男のひとが現われしました。すぐに、恋でもなんでもなく、じつに簡単に彼と肌を交えました。ところが、ああどうしたことでしょう。あれほど望んでいた男なのに、あたくしの身体には何の感激も起らなかったのです。良人と味わつた女のようにこびなどは丸つきり感じなかつたのでした。あたくしは慌てました。次に怒りました。それから絶望しました。ながいこと、あまり抑えつづけたので、きつと、からだも神経もゆがんでしまつたのだ、と思ひました。その少年とは、それつきり二度と会いませんでした」

私は、すつかり情熱が冷えて、真剣に語る彼女の顔をじいツと眺めていた。

「それからのあたくしは氣ちがい地味な女になりました。じぶんという者が終つたような氣持になり、なんとかして一人前の女に戻ろうとあせりました。あのときは相手が子供だったのであつたのだ、ちゃんとした男なら大丈夫にちがいない、と独りで定め、まるで色狂いのように相手を物色しました。表面は、なるたけ冷靜をよそおつていましたが、急にお化粧を濃くしたり派手なものを引っぱりだして身につけたりしだしたので、娘にひ



やかされたときも何度かあります」

「それで？」

「二カ月目にやつと見つかりました。今でもこの建物の一室にいる人ですが、いつも病身の奥さんのことをこぼしている劇場のヴァイオリン弾きです。四十あまりの強そうな人で前々からあたくしに意味ありげな流し眼を送つていました。氣が小さい善人なので、思ひきつて言い寄れないでいたのです。この人を、こんどは、あたくしのほうから誘惑しました」

「靴下を引き上げて？」

「にくらしい」、エリザは私の下唇を噛んだ。「ま、どんなきつかけだつたかどうでもいいわ。とにかく、あたくしは、その人をこの部屋に入れて、ええ、この長椅子よ、とうとう、思いをとげたんですが——」

「こんどは巧くいった」

「だめだつたんです。少年とちがい、びつくりするくらい色々と愛撫して良人と経験した以上、のところまで持つていつてくれたんですけい、いよくとなつたら、ぜんぜんだめなの」

「かわいそうに」

「完全に絶望したあたくしは、

それでもそれから後は二人ばかり恋をしてみました。そして、そのたびに、自分に根本的に何か缺けてしまったことがわかるだけでした。ところが、その缺けたところを補つてくれた男が現われました。いえ、補うというよりは底のほうに隠れていたスイツチをひねつてくれたといったほうがいいかも知れないわ」「どんなふうにしてひねつたんです？」

と私は笑いながら訊ねた。

「つまりね、強姦されたんです。それで、自分自身の秘密がわかつたんですの」

「強姦？」

「ええ、そうよ。忘れもしないわ、今から四年ほど前の夏、娘を連れてリヴェイラへ行つたの。良人の旧友が別荘をもつていて、夏になると呼んでくれるの。ある夕方、たつた一人で海岸を散歩して、知らず／＼のうちに遠くまで行つてしまった。誰もいなくて淋しい。これは早く引返そうと小さな屈曲が多い砂浜を急いで帰つてくると、ひよいと腕をつかまれた。それこそドキンとして心臓がとまったかと思つた。まるで地から湧いたように、そ

の男は、ふいに、あたくしの腕をつかまえ、うしろから胸を貫けるほど強く抱きしめ、肩のところに痛いくらいキツスしました。

あたくしは、あまり突然だつたので咽喉がひツついて声がでません。

「おとなしくしろ。小娘じやあるめえし。生命をとろうというんじやねえや」

その男は、こういつて、いきなり、あたくしの片腕を逆に背中に捻じあげ、その痛さで前へ歩かせました。丘へ登らせました。薄暗くなつた丘の上には、もちろん人つ子一人の姿もなく、砂地の間に雑草が夕方の風にそよいでいるばかりでした。あたくしは、そこへばうと突き飛ばされました。助けてッ、と叫んで起き上ろうとしたときには、もう男の身体が圧しかぶさつていました。鬚むくじやらの漁師のような荒くれ男で、見るからに恐ろしい顔をしていました。あたくしは、無中で彼の顔を引つ掻き、腕に食いつきました。

「こいつ、婆のくせに！」

男は唸つて、あたくしをそこに捻じ伏せると、泥靴であたくしの頸を踏まえつけ、力ま

かせにワンピースの胸のところを引き千切り、むりやりに上衣を奪つてしまいました。そして、その引き裂いたワンピースで、手を首のところに縛りつけ、乱暴に下着を脱がしてしまいました。こちらがあまり暴れるので思うようになりません。こうして、じたばた争つていきますと、業をにやしたのでしよう、いきなり、男は、あたくしの腰と両ももを、抑こむように抱きかかえ、片方のお尻に噛みついたのです。ああ、その瞬間でした。あたくしは、まるで強い電池の極にさわつたように全身にビリ／＼と戦慄が走り、これまで感じたことのない、生れてはじめての奇妙な言語に絶した歡びを覺えたのです。男の齒は益々強く肉に食い入ります。獵犬が猛獸に咬みついたように死んでも放すまいととしているのです。痛い。痛ければ痛いほど、あたくしは気分が変つて行きました。あたしは怪しくお尻をうごめかし、みだらに両足を躍らしめました。必死になつて手をふりほどき、垢と塩水くさい男に抱きつきますと、急に彼はお尻から口を放してあたくしを抱きよせ、ヒゲだ



らけの汚い口で息で息がつまるほどあたくしの口を吸いあげました。あたくしは、すつかりおとなしくなつて、もつとそこら、とくにお尻を噛んでくれるように呻きながら頼み、けつきよく、どんなにか歡喜の渦の底に我を忘れたか、気がついてみると、もうすつかり暗くなつていました。

その男とは二度と会いませんでしたが、そのとき以来、あたくしは、男にいじめられなと恋ができない女になつてしまい、いえ、いじめられ、叩かれ、蹴られ、縛られ、噛みつかれ、踏んづけられることによつて女の本来的歡び以上の歡びが引き出される身体だという秘密を自覚しました。ですから、あなたのように、ふつうのキツスだけくらいではダメなのです。うんと思いきつていじめ抜いて頂戴。そうして下さらないと、あたくしは、冷い死骸と同じです。いやでしたら、このままお別れしましょう。」

(三) 不滅の殘虐

「なるほど」

私は、深い溜息をついて夫人の顔を見下した。とんだ興ざめであつた。元來、私は、サヂズムの話は聞いていたが、生れつき、そう

いつた方面には興味がないほうで、女と抱きあうのは、なるだけ甘つたるく、ロマンチックな気分にはひたるほうが好きなタチだつた。

「なるほど」もう一ど私はうなずいた。

「いやになつて？」

「どうもね」

「さあ、あたくしを真ッ裸にして、縛るなり撲るなり勝手にして頂戴。少しぐらいなら傷をつけていただいたほうが嬉しいわ。斬つてもいいわ。血が出たつていいのよ」

「にが手だ」

「あそこのベットに縛りつけて、血が出るまでお尻をぶつて」

「ぼくは出来ない」

「できるわよ。あたくしの髪をつかんで部屋じゆうを引摺りまわして」

「できないな」

エリザは、じいツと私を見つめ、急に、がっかりした様子になつて一言つぶやいた。

「いくじなし！」

私は、思わずかツとなつた。この牝豚め！

色狂いの淫乱女め！

「なんだと？」

「もういいわ。歸つて」

「ばかにするなッ！」

私は大喝した。と同時に、無意識に、びしやツと女の頬に平手打をくわせていた。ひいッと、彼女は、長椅子から滑り落ちて、怒つたような泣きだしそうな顔をひん曲げて私の足にしがみついた。

「きちがい！」

私は足を振り放つて蹴飛ばした。エリザは仰向けにひっくり返つた。ももの付根までスカートがまくれて、滑稽なような淫らな惱ましさをあたえた。

「嘘つき！」彼女は喚いた。

私は、跳りあがつて行つて彼女の肩をおさえ、続けざまに二つ三つぶん撲つた。

「あなた」彼女は低く呻くと、私にぶら下つて哀願するように見上げた。その眼は喜びにかがやいていた。そして、私は、それこそ生れて初めて女を踏みこむ快さに酔つた。滅茶々々にして亡ぼしてやりたい。ひいッ、泣かせて完全に我物にしてやりたい。私は異様な感激を覚えた。いきなり、美しい金髪をムズとつかむと、ずる／＼とベッドのほうへ引ずつた。そして片手を咽喉にかけて立ち上らせながら、がぶと二の腕に噛みついた。

「ああ！」

エリザは、低いが鋭い悲鳴を發した。

「脱げ」私は命令した。彼女は、そろ／＼と脱ぎはじめた。「早く脱ぐんだ」

やがて、彼女は、あらゆる身につけた物をとった。

彼女の裸身は、どんなに虐んでも何ら遠慮はいらぬように肥っていた。

とても四十の女とは思えないように張りきつた乳房だった。おなかも、年に似合わず張つて、たるみなどは見かけられなかった。すこし贅肉が付いてはいたが、腰のあたりの線も素晴らしかった。今こそ、私は、あの地下鉄の出口でチラと見た脚を心ゆくまで観賞することができた。

私は、彼女をベッドの脚に縛りつけた。縛るといつても、もと／＼そんなことに慣れていなかつたので、彼女のバンドを使つただけだ。ただし、力いっぱい、おなか／＼びれるほど締めつけてやつた。

私は、ところ／＼わす／＼噛みついてやつた。とくにお乳と脇腹、両ももの内側をひどく歯型が残るくらい噛んでやつた。ながいことダニが食い入るようにお尻の肉に食いついた。

エリザは歡喜に呻きながら身をよじらせた。そのときである、さつとドアが開いて、一人の若い女が一步部屋の中に入ってきた。「アンリエット！」

夫人が叫んだ、私は、とつさにドアのほうへ駆けて行つて彼女をつかまえた。彼女は、いきなり眼の前に展開した光景に度を失つて声を出せなかつたらしかった。

私は、片手をのばしてドアの鍵をまわして漁師がエリザにした話を脳裡に想い浮べながら、娘の片腕を背中に捻じあげた。

「さわぐと殺すぞ」

娘は、なかば氣を失つて長椅子に倒れた。

「ゆるして。ねえ、アンリエットは許してやつて」夫人は必死になつて叫んだ。

「ははははは」、私はせせら笑つた。「ぼくは、女を縛つたり撲つたりはしないさ。だが、これまで誰もしたことのない方法で貴女をいじめてやる。喜ばせてやる」

「かんにんして。それだけは」と夫人は哀願した。「娘は処女です。あたくし、どんなことでもしますから、娘だけはかんにんして」

「まあ、ゆつくり、たつた一どしかなんし楽しみを味わうがいい」

アンリエットは失神していたので雑作はなかつた。まず彼女の着ている物を剥ぎとり、靴下だけの裸にした。ちよつと眼を開けて氣をとり直しかけたので、平手打を一つくらわしたら又ぞろ氣絶してしまつた。綺麗なかんだつた。夫人ほど肥つていないがすべてが緊つて美しい立体的な曲線の交叉だつた。

「おねがい、助けて、娘だけは」

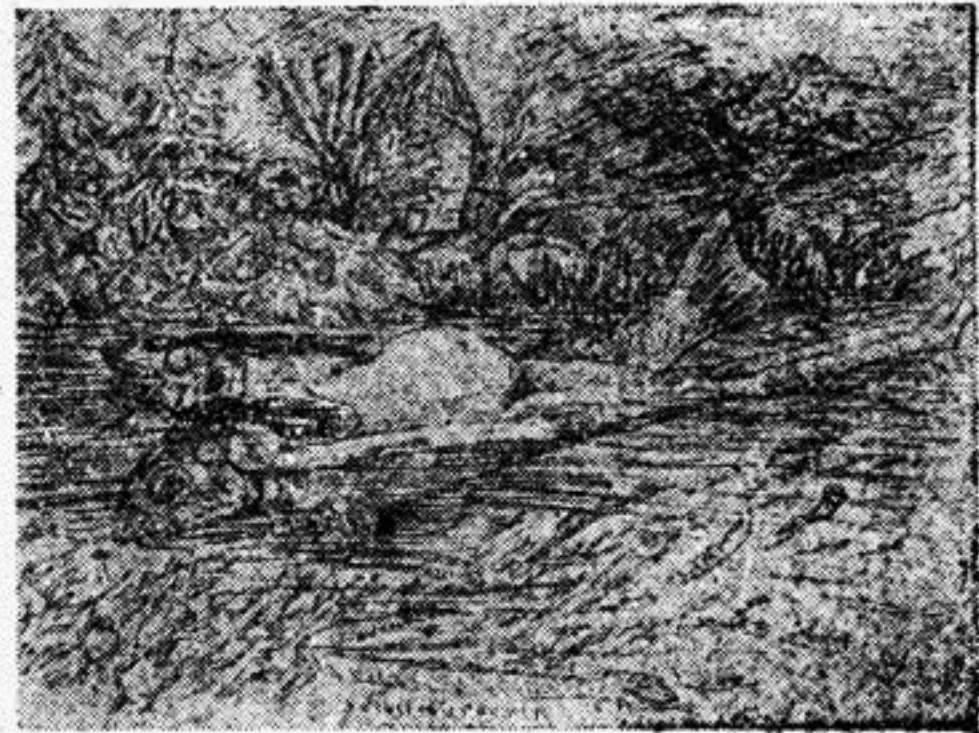
もう私は何も言わなかつた。ゆつくり／＼いやらしく、処女の誇りと母性愛を踏みにじつてやつた。それこそエリザが望んでいた最大の苦痛の一つでなくてはなんであろう。

見るも無残な姿になつた娘から離れて、私は、きつと睨みつけているエリザをベッドの上／＼にねじ伏せた。彼女は熱にうかされたように何か呟きながら私に抱きついてきた。

やがて、もう二度とこの部屋に來まいと心のうちで誓いながら、私は失神している二人の裸の女を残して外へ逃げだした。(了)



室 歡 交 者 讀



さ ち す と

★男奴隷を求めます。但し少なく共一年契約の出来る二十五歳より三十五歳迄の美男子。当方三人の女奴隷を有する三十三歳のバリのマダム。

最初の三日間、私の命を奉ずる女奴隷の手により、拷問が加えられます。この間は水のみが与えられます。この試験に合格

して、始めて貴女

は私の奴隷として認められます。貴女は私の命令には絶対服従です。

あなたの許されるのは呼吸のみであとは総て女王たる私の命令を受けます。そして一年間全裸で生活しなければなりません。

無論、私の欲する時は、貴女の肉体は私によつて征服されます。

拷問室はバリの地下室で、周囲はコンクリートと赤い垂幕で螢光燈に輝き、片側に私の玉座があります。三日に一回、貴女を虫の息になる迄責めてあげます。その他の日は軽く鞭つてあげます。生活費は全部当方持ち、十分秘密は保ちます。

(マダム K)

★十二月号愛読者欄の海樹氏及び岡山の皆様、直接御手紙をさしあげてもよいのですが、返事を下さらない方もあるらしいので、誌上で連絡致します。

岡山市郊外の西大寺では、毎年二月に裸祭りが行われております。随分ものらしく有名なので行こうと思いますが、一夜の宿をして下さる会友はないものでしょうか。元来がサチストの三十歳の男子です。徴兵検査で、丸裸で十人程並ばされた時でも、お前は大きいなあ、と、ほめられた栄譽を持つております。当夜は、自由にして下さい。縛り、鞭打ちを、お互いにするのも面白いと思います。とに角スリルに満ちた一夜を過したいのです。
(兵庫T O 生)

★久利須照雄君

東京の方でしたらお会いしたく存じます。

双方とも住所もあかさず、意

気投合したならばお互ひにうちあけたいと存じます。あなたの御返事ののりました月の第四日曜の何時と云う様に御指定下さい。場所は東京の新宿に御願致します。御婦人の方以外には第一回は御同道なさらないで下さい。

私も下剤や食塩水をのましたりする事はよくありますが、洗腸が、この様に用いられないのが不思議でならないと思つて居ります一人です。

当方四十歳の会社役員で、小さい時腸が弱くて洗腸されたのが原因の様です。よろしかつたら御投書下さい。

(東京 浅野生)

★偶然の機会から貴誌を知り、孤独な私の唯一の友となりました。

自分よりは年長の男性的な同性を責めて見たい欲望に、日夜

駆られ続けて居ります。

喜多、北原、中川の諸先生、男性の責め面をお描き下さい。これは単に私一人だけの希望ではないと信じます。臨時増刊の男性ヌードが待たれてなりません。(T N 生)

★貴誌の愛読者です。御発展御喜び申し上げます。

小生読者交歓室を見て、同じ思いに悩む人の多いのを知り、意を強く致しました。私もマゾヒスト傾向の女性と、十九年頃交際し、始めはいやいや彼女の注文通りにしてやりましたが、その内私もサチストになり、此の世に生をうけた事をどんなに喜こんだ事でしょう。快樂、快感は何者にも替えられませんでした。それ以来魅惑的な淫慾の生活を送りましたが、不幸な戦争となり出征しました。

二十五年の暮、復員、彼女をさがしましたが、空襲の爲、も

うこの世には無い人でした。

それ以来、苦しみ続けて今日に至つて居ります。喜多先生の面を拜見して一晩中、寝もやらず苦しんだり致します。マゾ傾向の女性の方、御同情下さいまして是非御連絡下さい。大阪T・O様御連絡頂きたいのですが

(大阪 清水)

まぞひすと

★私は常に露出した臀部を鞭打又は凌辱されたいと願したり女性の排泄物を飲食したいと願う三十六歳のマゾヒストです。実際にはもつと若く見られてゐる様です。身長五尺四寸足らず体重は十三貫二百といふ、極めて劣弱な体です。

年頃の女性と真剣に争つても、しばしば組伏せられる有様です。病気はなく、容貌は人に好感を持たれる方と自負しています。

多数の女性達の共同慰み者と

なつて、奴隷教育を受

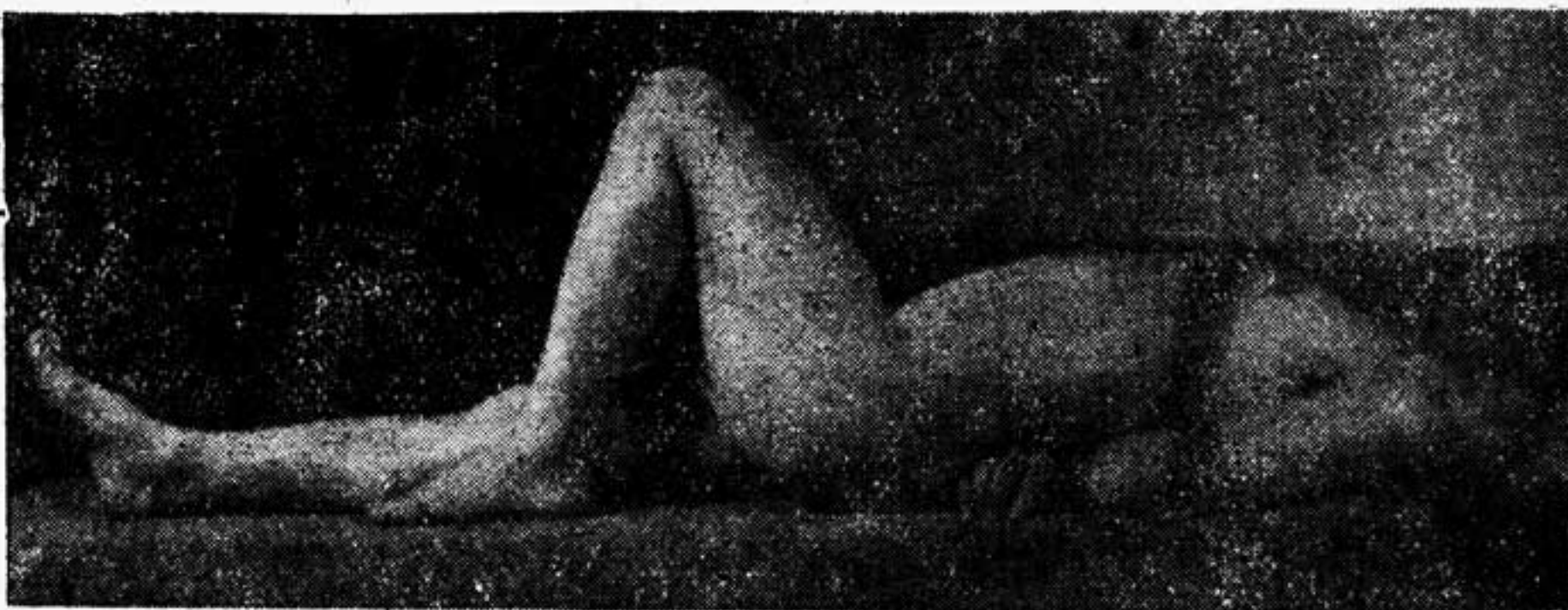
けたいと熱望しています。女学生寮や看護婦寮のような所で飼育される夢を見ている男です。勿論、特定の女性の専有もさしつかえありません。徹底的に汚され、もてあばれたいと念願して居ます。四十歳以下何歳でも。何の條件も求めません。一度呼びつけて下さる女性はないでしょうか

(京都 孤独生)

★四年前夫を亡くした三十八歳の未亡人です。はからずも知人より御誌を見せて頂き、内心喜びました。

人に言えない性の悩みを、解決出来るんです。したら是非御紹介して頂き度く思います。

横濱
T T氏



亡夫はす

ばらしいテクニクで私を愛撫してくれました。なるべく年長者の方がいいかと思ひます。先月号にヌード或は着衣でモデルになつて下さる方々と云う東京H・T生の記事がありました。東京と大阪では遠くて話にもなりません。御さめて何等かの御返信でも頂けますならと

心待ちに致して居ります。

(大阪 K Y子)

★拜啓、御繁栄を御喜び申し上げます。

私は二十九歳の男性マゾの上に露出的傾向があるのではないかと思います。自分の緊縛マゾを人に見せたいと云う衝動に悩むものです。全裸にされて、手足を縛られた儘逆づりにされたり、両脚を大きく開いて別々の枝に逆づりにされたりするのを願っている変態男です。

この写真は私が若い頃に撮ったものですが、あまり筋骨たくましくありませんのではずかしいのですが、もし御誌のモデルにでもして頂けたら、などと思つて居ります。身長一米六〇センチ、体重五〇キロです。顔は十人並と云うところです。骨が折れたり、刃物で傷をつけたり等しない限り、我慢します。何卒、よろしく御願ひ致します。

ます。

(横浜 T T生)

★私も御社発行の風俗草紙の愛読者の一人です。毎日手にして感ずる事なのですが、一方はマニアでも、片方は普通の人のいう事が多いのですが、両方ともマニアでしたら今より、もつと楽しく過ごせると存じます。

十二月号木馬責めの記事、楽しく興味深く拜見しました。このような記事を、多くのせて下さい。猶、同好者紹介、趣味の享楽交歓と云う様なページを作つてのせて下さい。御待ちして居ります。(静岡 M T子)

★独身のマゾヒストです。社員や工員を使つて毎日、忙しく生活して居りますが、子供の頃より、綺麗な女性にいじめられ苦しめられる事を妄想し、快感を感じて居りました。そんな風なので普通の性格の女性を妻にしようと思つた事ありません

★HOMOSEXUALTAT★
TECHNIK

鹿火屋一彦著 袖珍判美装本

同性愛技法に
就いての一考察

定価 二百円 送料 二十円

ソドミア性愛秘典

ソドミアの性愛技法について未発表のものを続々発表の秘典!

東京都千代田区神田猿樂町1の3
日本特集出版社代理部

本社特選傑作責寫眞集〔好評〕

1集 泣むせび悦虐秘圖 写真 三枚 キヤビネ判 印刷紙焼付 五百円

2集 岩風呂の被虐 写真 三枚 キヤビネ判 印刷紙焼付 五百円

3集 制服の女學生 写真 三枚 キヤビネ判 印刷紙焼付 五百円

4集 危機一髪處女責 写真 三枚 キヤビネ判 印刷紙焼付 五百円

5集 エプロン責め姿 写真 三枚 キヤビネ判 印刷紙焼付 五百円

6集 ガンヂガラメ 写真 三枚 キヤビネ判 印刷紙焼付 三百円

どんな方法でも良い、責めて苦しめてくれる女性（可成美人）を是非妻に御世話願いたいと存じます。小生は本年二十九歳です。すから年下のサチ的女性がありましたら御連絡下さい。

写真代、或は交通費、文通費その他手数料、御一報次第送金致します。当方容貌十人並で財産二百五十万円位、希望者は店員、又は女中さんとして住込、通勤にて御来店下さるのも宜しいと存じます。面接交際の上結婚まで進んでも良いと存じます。身上調査の場合も、当市市役所にて詳しく分ります。酒タバコは飲みません。

突然最初からこんな御願いをして軽率だなどと思わないで下さい。当方の要求はなるべく血統正しく悪性の遺伝病のない方で、出来得れば父母兄弟が健在の、中等教育以上の方を望みます。但しこれは一応の希望です。

同好の者同志人生を楽しく送りたいと存じます。

（和歌山 A 生）

そとみあ

★先月始めて貴社に読者連絡を依頼した者ですが、今日先方の方からの手紙が着きました。半信半疑でいたのですが、あまり迅速な御連絡振りに驚嘆するばかりです。誠にありがとうございます。ありがとうございました。

これから楽しいデイトが始められると思うと、感謝の言葉も知らない位です。あと週余に迫った新年号を心待ちにして居ります。

（H・H）

★編集部の御盡力により大阪K N君、大阪M Y君、奈良M Y君と親しく語り逢い共に楽しい日々を過し慰めをお互が見出す事が出来ました。しかも、センスの新しい、レベルの高い純粋のそとみあが集ひが出来つつあ

7集	淫風淫ら責	写真 五枚 キヤビネ判 印刷面紙焼付
8集	やわ肌責五態	写真 三枚 キヤビネ判 印刷面紙焼付
9集	マニヤ地獄の女	写真 三枚 キヤビネ判 印刷面紙焼付
10集	白衣の看護婦	写真 三枚 キヤビネ判 印刷面紙焼付
11集	セーラーの女學生	写真 三枚 キヤビネ判 印刷面紙焼付
12集	晴雨好み凄艶責	写真 三枚 キヤビネ判 印刷面紙焼付
13集	責られる高島田	写真 三枚 キヤビネ判 印刷面紙焼付
14集	力つきた處女	写真 三枚 キヤビネ判 印刷面紙焼付
15集	ソドミアの愛撫	写真 三枚 キヤビネ判 印刷面紙焼付
16集	男性ヌードの緊縛美	写真 三枚 キヤビネ判 印刷面紙焼付
17集	サービス責寫眞	写真 五枚 キヤビネ判 印刷面紙焼付
18集	縛られたお姫様	写真 五枚 キヤビネ判 印刷面紙焼付
19集	股間縛りの魅惑	写真 三枚 キヤビネ判 印刷面紙焼付
20集	連縛の非處女	写真 五枚 キヤビネ判 印刷面紙焼付

東京都千代田区三丁目一丁目
神田猿樂町一丁目
振替東京二四二五一番
日本特集出版社代理部

るのです。大阪市内、並に近郊のソドミア諸兄よ、編集部を通じて文通されたい。

(大阪・T O 生)

★御誌もだんだん立派な内容になつて行くのでうれいすわ。一月号の鹿火屋さんの男色喫茶店すばらしいですわね。でももつともつと隠れた店ものせて下さるとうれいすけど、とも角こう云うものは一軒でも多く知りたいものなのです。久利須さんの浣腸器につかれた男もすばらしいですね。男色の小説や告白がないのはちよつと淋しかつたわ。御願ひしてよ。

僕は勿論、ウールニングの少年よ、会社の重役さんのオンリーみたいになつてアパートに、一人で飼はれてるんだけど、一人は淋しいわ。

ソドミの専門雑誌出して下さらないかしら、ソドミ草紙とか何とか名前つけて、考へて

見て頂けません。(P H I L O)

★私は永らく劇団生活を続けて少しの不満もなく毎日嬉しく其の日其の日を暮らしています。

他の人々はふしぎに思つて居るのです。いえ、皆知つて居るのです。十六歳の頃(当時は歌舞伎全盛の時代でした)筑後久留米歌舞伎に若女形として入座しました。舞台女形は身も心も女にならねばならぬ、とおしへられました。思つたよりむずかしい修業でしたが、私に取つては何の苦もありませんでした。舞台の嬉しさよりも他に、もう一つ嬉しい事がありました。それは年の少ない美少年を(劇団の人でなく)愛する事でした。一座の廻つて行く土地土地の、主に中学生が対照でした、それから三十年、随分長い舞台生活でした。今でも座員の女形仲間児童専門の万年娘と言われて居ます。気持の上では、二十歳位

の時と、五十に手のとどく今の頃まで少しも変わりありません。今も二十歳以下の青少年を相手に童貞テストを行つたり、して居るからです。

鹿兒島の或る町の呉服商の息子の美少年を、月のない星の美くしい晩、童貞テストをした事は今だに忘れられません。

青蚊帳を透してうす紅い唇からやさしい寝息がもれて、女のような顔に長いまつ毛をふせて寝て居る美少年を見ると逸る心をどうする事も出来ませんでした。やつと二時になつて、私も青蚊帳の内の人となりました。

その夜以来、その人と親しくなりました。私共の親しくなるのも旅がらすの哀しさ、ほんの二三日の間でした。

それから十幾年、文通をかわして居りましたが、それも途絶へ、今では思い返すのが、只一つのよすがとなつてしまひまし

た。

つまらぬ事のみ書き過した様に思います。よろしく御判読下さい。(福岡にて、利黄万留)

★小生本年二十三歳、最近まで洋舞をやつて居ました。独身者です。身長五尺七寸、体重十五貫、性格は潤達明朗です。体格の良い人に愛撫され、抱きしめられた時の事を考へると今の自分が一層淋しくなりま

す。十一月号大阪T O 生の近郊の諸兄を動かしてクラブを作りたいと思われて居ると云う記事を見出し、出来れば御文通なり、御交際なり致したいと存じます。御連絡下さい。

(大阪 R N)

れすばす

★前略御免下さい。

私は此の十一月号を貸本屋で始めて拜見致しまして本当に勇

気づけられました。誰にも打明
けられなかつた悩みを、こうし
て誰方かに話せるというだけで
も、ほのかな喜びを感じて居り
ます。

まだ十代の昔、同僚のK子が
結婚に失敗して、その間の事情
を私に相談してくれた時、それ
程迄に私を信用して呉れている
のかと思つた私は、それ以来、
知らぬ間に深い同情をよせるよ
うになり、間もなく、K子との
外泊が続く様になりました。

でも、二人共同性愛を一種の
罪惡の様に感じて居りましたの
で、胸に秘めたまま特殊な関係
にも入らずそれぞれ他郷の人と
なつてしまいました。

其の後縁あつて嫁ぎました
が、性格の相違で一年余りで別
れ、それ以来異性には魅力も感
じません。それどころか嫌悪さ
へ感じます。同時に孤独感を感じ
同性の人に心から愛され、愛

したいと思うようになり、今日
に至りました。

誠に勝手な御願いと存じます
が、もし同性の、私と同じ想ひ
の方がありましたら御紹介下さ
い。申しおくれましたが、私は
本年二十五歳独身の女です。
編集の方、れすぼすに關した
記事、小説を多くのせて頂けな
いでしょうか。何卒よろしく。

(S・Y子)

★突然男の方ばかりの中に御た
より御許し下さいませね。

園村先生が本誌で活躍なさつ
て居られますが、私達も、グル
ープを作つて、楽しく青春の一
ときを過そうではありませんか
どうぞ、お姉様方、妹たち、こ
の欄へ御たより下さいおまちし
て居ります。

(T子)

編集部より

一月号、秘蔵版とやつぎ早に
発行して、昨年度も終りました

が、お蔭様で驚異的な絶賛を博
し、毎日引きもきらぬ電話や、
ドサリドサリと大きく束ねて投
げ込まれる投書の山に、労苦も
報はれる思いで、深く感謝致し
てをります。

この交歓室の御投書も月を追
つて増大し、この欄を通じて、
交際や文通を楽しんでをられる
方も多いので、編集部の歡びも
ひとしおです。

また本号から新たに「レスポ
ス欄」を設けましたので、今迄
は回送や、園村恵子氏との文通
のみにとどまつていた女性愛読
者も多数登場致します。女性に
限らず、レスポスに興味を有す
る男性の方もドシドシこの欄を
御利用になり、御交際や文通に
おすゝみ下さい。

★

マゾヒスト渴望のサチ女性が
愛読者の中から勇敢に名乗り出
てくれましたので、次号に御紹

介致します。御期待下さい。

★

次号三月号は断然たる本誌の
力働を発揮して、無類の充実号
と致します。山積する愛読者の
投書、告白の中から優秀なもの
を二十篇近くピックアップし凄
まじいマニヤ官能悦楽号と致し
ます。今から御刮目下さいま
せ。

★

本誌の目的は、あく迄も『読
者の雑誌』であることです。何
卒気軽に、御自身の体験、記録
告白、小説など、ドシドシお寄
せ下さい。保官、返信、その他
の事務も責任持つて処理してを
ります。「懸賞原稿」とは別な
フリーの投稿も大歓迎です。

大家や著名人と肩を並べて発
表される歡び、これこそ本誌の
大きな特徴と申せませう。

(編集部 氏家 記)

×

×

連載切
まにや地獄

汚された白鳥

日夏 由紀夫

水沢 深雪 画

なんと云う姿であらう！ 白鳥の衣裳をつけたまゝの幸子が、後手に縛られ、肩紐を落され、乳房が、ぶつくり顔を出したまゝ……それより、何とあられもない肢のひろげ様だろうか……

一

ルノーの新車が、ククッ……と停ると、扉があいて、これはまた、思いきつて、鮮やかなオレンジ色の豪華な外套が、パアッとあたりへ明るさをこぼしながら現れた。

「ダンクエン。……じゃ、それだけは、きつと頼んでよ、パパに……」

なかの若い男に手をふつて、扉をしめると、カッカッと、高いハイヒールで、いくつかある石段をあがる。うす栗色の靴下につままれた、ふくらはぎの、肉のコリコリした動き。

「西村展也バレエ研究所」

石段の上の門柱に、そんな看板がかゝつて、山茶花が一杯にさいている庭の向うに、ピンクにぬつた小ぎれいな校舎風の建物が見えた。いかにも少女のよろこびそうなたゞづまいだ。

由美は、何となく、胸がおどるような気持をおさえながら、玄

関へ、入つて行つた。

パンプスやら、サドルシューズやらが、あまりびろくなく玄関一杯にぬぎちらされて、練習場の方から、

「一二三……一二三」

レッスンを付けている西村展也の声がきこえ、床をける足音が、していた。

由美は、思わず、頬を少しそめながら、スリッパにはきかえて、名札をひつくりかえすと、おどるような軽い足どりで、脱衣室へ入つて行つた。

脱衣室のドアをあけると、内に一人居たが、

「ア、ちよつと、だれだか知らないけど、うしろのボタン外してよ」ぬぎかけたセーターのなかゝら声をかけた。

「バカね。あわてものさん。……」

由美は、笑いながら、うしろへまわつて、頸のボタンをはずしてやつた。セーターのなかゝら、くしやくしやに乱れた髪と、真赤な



顔があらわれ、

「何だ、由美子？ 今日、レッスンなの？」

「ええ。ホラ、公演の……特別レッスンよ。……幸子さんも？」

「ええ、おわつたら一緒にかえりましょう」

それから、二人共だまつて、服をぬいで行つた。

温かそうな生地の水色のスーツを頭からぬぐと、シャレたナイロンのスリッパにつままれた半裸の肉体があらわれた。それは、

十分に成熟して、つまれるのを待っている果物のようなだった。十九という年齢にしては、ブラジャからはみ出たお乳も、お腹を支えて、ぐうと盛上るふと腿も、発達しすぎているように見えるのは、パレエなどをやっているからだだろうか。

コルセットはしてなくても、胸はぴつちりとしまつて、それが、蜂のように急に腰へもりあがつて行くのも若さだった。ブラジャをするのも、中年女は、垂れたお乳をつりあげる爲だが、由美の場合



は、恥かしいお乳を押えるため、ブラジャーをとれば、赤いアトをつけたお乳は、ブルンとふるえて、たちまち尖るように上向くのだった。

由美も、幸子も、パンティ一枚の、あられもない裸になつて、ロッカーから、黒の練習着を出した。そのパンティも、普通のメリヤスではなく、まるでストリップパーがつけるような、股ぐりの思い切り深い、ほんの大事な部分をおほうだけの、小さな白いパンティだった。大きなパンティを、はく事は許されていなかった。も、のつけ根のくぼみが、下腹部のふくらみにうつるあたり微妙な盛り上がり、目にしみるように白いパンティのはじから、はみ出して、その奥の魅力を教えていた。どうかすると、もう、その辺の、濃くかわつて行く生毛さ

え、のぞくことがあるのだった。

二人は、無意識に、掌で、なぞるようにして、パンティをきつちり、し直しながら、その上から黒い練習着をつけた。その練習着も、この研究所独特のもので、恥かしい程、みじかい、タイトなものだった。お乳のふくらみは、半分完全に出てしまう。(ブラジャーを下につけることは許されなかった) 下も、その、寸ずまりのパンツも、かくすどころではなく、股下は殆んど、ヒモ位の幅しかない。その、その両脇から、それでなくても巾のせまいパンティがハミ出る位で、——しかも、練習着がきゆつと、つれているので、踊っているうちに股に喰い込んで、思いがけない、あらわなシワをつくることがあった。

「先生、こんな練習着イヤ。だつて、気になつて、よく踊れないんですもの」

と、由美は、一度、たまりかねて、抗議した事があつたが、西村は、

「いかん。……気になるのは、バレリーナとし

ての覚悟が出来てないからだ。そんな事気にしては、踊りなんか出来ないよ」

と、表情もかえなかった。

「だつて、先生。私、まだ、恥かしいわ。……

：外の研究所じゃ、もつと、軀をかくす練習着させているんじゃないでしょうか？」

「君は、『赤い靴』見なかったかね。あのと、き、モイラ・シャラーが、どんな練習着つけていたか、分らなかったか？ ヨーロッパじゃ、みんな、こういう練習着をつけるんだ。とにかく、僕の研究所は、僕の思い通りにやる！ それでいやだつたら、やめろ」

由美は、くちびるを噛んだが、……

そう云えば、あのとき、モイラ・シャラーは、お尻の山が、半分以上出るようなタイトをつけていたつけ。私のも、うしろからみると、あんな風に、お尻の小山が、半分以上出て、黒い布が、股へ喰い込んでいるのかしら、——そう思うと、今更のように頬がそまつた。それでも、トウ・シューズにはきかえ、汗をふくタオルを頸に巻くと、

「さア、行きましょう！」

由美は、弾んで、くるくると、爪立って廻つて、幸子の手を、とると、練習場へ入つて行つた。



二

「ハイ、そこで、グリサアド・シヤッセ……滑つて、滑るパ、ドミ、ブリエ……そう、両膝を少し曲げて……左足は、ドミ・ポアントで立つんだ。……そんなに曲げちゃいかん……分らんか」

西村は、やつてくると、いきなり、由美のはだかのもゝをつかんで、股をさくように、ぎゅつと、片つ方の肢をあげさせた。あぶない姿勢のまゝ、先生とは云え、異性

に、うち股のつけ根を、おさえられて、その掌が、やけつくように感じられ、

「あ……」

股の筋肉が、ひとりでにきゅんと、しぼるようになって、肉へ喰込む男の指の、かたさに、血が集まるのだ。

「……このまゝ、アラベスク！……こつちの足を、ぎゅつとのぼして、手をもつと、そらして、……顔は、ぐつと上げて、上を見る」

アラベスクというのは、バレエで一番美しいポーズだ。片つ方の足で、軀全体を支え、片つ方の足は、水平にのぼして、手は、前と、うしろへ、そして、顔をあげて、……バレリーナの写真はたいいてい、このポーズでとつてある。

このむづかしいポーズのとき、由美は、大抵、西村先生に足をさゝえてもらう。まだ、ひとりでは出来ないのだ。

足が、ガクガクして、トウで、立てない。

こんな時は、先生の手が、ぐつと、のぼした足を支えてくれるのが、うれしくて、怖ろしい気持や、いやだな、と思う感情も忘れて先生にすつきり、まかせるといふような気持になつてしまうのだ。それにつけ込むように、

「もつと胸をぐつと張つて、ほら、ここん所

を……」

いくらバレエの教師でも、礼儀から云つて、お乳や、股の内側など、若い娘の急所にふれてならない事は、常識と云つて良いが、彼は、そんな事、無視して、由美のお乳のふくらみを、いきなり、大きい掌でぎゅつと、もつと、それをぐつと、前へおし出すようにした。

「はア……」

思わず、ぬれた唇から、息を吐くようになつてしまつて、それでも、夢中で、顔をあげてポーズをきめたが、その途端、つやつやとぬれた髪の間から、つるつると汗が、すべつて、軽くお白粉ののつている頬に、すじをつけて、頸の方へ流れて行つた。

汗にぬれた髪が匂う。体温をはげしく発散させている肌が匂う。……そして、軀が動くにつれて、軀にしみ込んでいる香料の匂いが、……

西村は、お乳にあてた手は、とらずに、「もつと、ぎゅつと、思い切り足をあげて……」

と、云いながら、お尻のふくらみに手をあて、その辺を、もむようにしたり、今度は下腹の方へ手をのばしたりする。指導す

るだけにしては、しつこすぎる手だつたが、由美でも、誰でも、バレエのお稽古というものは、そういうものかと思つていた。

それが、当たり前になれば、軀も、それに馴れて、暗黙のうちに、許すだけではなく、それを期待さえするようになり、手で軀をかゝえられたり、足をもたれたりしなければなんだから、十分に指導されないような気さえするのだつた。

若い娘達の軀は、名目さえ立てば、さわられたり、いぢられたりするのが好きなのだ。

練習場のすみでは、二三人の娘達が、横木につかまつて、思い切り足をあげたり、軀をそらしたりしていた。みんな、黒い練習着。下を向けば、お乳首が見え、アラベスクなとしたあとでは、パンティが、肉に入つてしまつて、男が見たら、ハツとするような、姿態だつたが、男と云つたら西村一人の気安さで、娘たちは、それに気がつきもしないのだつた。

窓からさし込む、やわらかい午後うす陽が、練習場の中央で、くるくる独楽のようにまわつてゐる由美の黒いタイツと、そこからみ出ている、肉色の四肢を、スポットライトのように、てらし出して、その反射を、部

屋のすみずみに、かえしていた。

時々、キラと、光るのは、由美の指輪であろう。彼女の練習着は、さつきからのほげしい運動に、ベッタリ汗にぬれていて、まるで、はだかそのもののように、彼女の軀の微細な起伏を見せていた。ゆれるお乳のふくらみや、息のたびにへこむ、おへそのあたりの円み、それが、一度、低くまつてまた、可愛ゆく、もりあがつて、その包んでいる實を知らせる下腹部の高み……由美は、時々、その辺を気にして、踊りながら木綿の練習着をはなすようにするのだが、ダメだつた。

「よし、じゃ、……これから、コスチュームをつけて、今度の公演の練習をする。オイ、山田と峰村、俺の衣裳もつてこい」

「ハイ」

二人の娘共、家へかえれば、下婢にかしづかれるお嬢さんなのだが、こゝでは、彼の絶対的な権力の下にある下僕だつた。先をあらそつて、金色のパンツを、向うの部屋からとつてくると、西村のうしろへまわつて、彼の汗くさいワイシャツを、ぬがせ、一人は、前へまわると、ズボンのベルトを、白魚のような手で解き、敬虔な態度で、彼のズボンをぬがして、うすいメリヤスのさる又一つにさせ

ると、それでもさすがに、ポツと頬をそめながら、彼の前に、ひざまずいて、その金色のパンツを、毛むくじやらかな彼のたくましい足にはかせて、股までずり上げて行つた。彼は、その間、両手を遊ばしたまふたつた。

「先生、これで、宜しいでしょうか」

「まがつてないか」

娘たちは、手で、パンツの中心を直すと、直りました」

「しわは、出てないな。前も、うしろも」

そのたンびに、娘の手は、繊細に、彼のパンツの上を動いた。

レコードが、かゝつた。チャイコフスキの「白鳥の湖」だ。

由美と、幸子が、ひだの多い、オーガンディの白鳥の衣裳をつけて出てきた。それを一目見て、西村は、いきなり、

「敏島、(由美の姓) お前、下にパンティはいてるな。いかん、すぐ、ぬいでこい」

「でも、先生……」

由美は、口ごもりながら、訴えるように西村を見た。髪に、白い造花をかざつて、それが清楚だった。

「でも、も何もない。腰の美しい線が、こ

われたら、バレエの生命はなくなるぞ。そんな覚悟がまだ、お前は出来ないのか」

「ハイ」

由美は泣きそうになりながら、更衣室の方へ、ひき返して行つた。この衣裳は、ことに股下の布が短かくて、オーガンディのすき通る布が、一寸巾ぐらいしかないのだつた。娘にとつて、それが、どの位、羞かしい事か。……その一寸巾位のうすい布一枚で、大事な、柔かい部分の肌をおほわなくてはならぬのだと云う。……

もし、彼女達が、もつと、世智にたけていたら、皆んな、そろいも、そろつて、お嬢さんたちばかりでなかつたら、この衣裳一つで、西村のやりかたが、あやしいと気がついて、いた筈である。いくら、芸術の名においても、そんな事が、非常識だ位は。……

壯大な、絃の和音が、高まると、そのなかから、バイオリンの甘い旋律が、ぬけ出て、湖上に舞う白鳥を表現して行つた。

三

この今度の「白鳥の湖」は、不思議な振下けだった。パンツ一枚の西村をかこんで、由美と幸子がデュエットを踊り、それに、数人

の群舞がつくのだが、西村の新らしい振つけをきいたときは、一体、そんなバレエがあるだろうか、内心めいめいで、うたがいをいだいた位のものだつた。

たとえば、西村が、たおれている。それを見つけた白鳥が、彼の上へまたがつて、腰をふり、彼を誘惑するという、とても娘には出来ないような踊りもあつた。

また、西村に抱きついて、足をまわし、彼にまつわりついたまゝ、彼にふり廻されるといふ場面も、いくつかあつた。

ぴつたりと、抱きあつて、踊るところなんかでも、腰の動きや、軀のくねらしかたが、とても口へは出せないほど、煽情的で、夢中になつて踊つていても、いつか先生の肌を、うすい布一枚をへだて、直接のように感じてしまい、何故か知らないけど、目くるめくようになつて、たゞ夢のような感じのなかで、ふれてくる異性のかたい筋肉だけ、……はつきりと知る時があつた。幸子も、由美子それは、心の秘密だった。……

由美は、何故か、その踊りを止めたいと思つて、先生に、申出た事があつたが、西村に「君でなくては、僕のイメージに合わないんだ。君こそ、僕のこの踊りのプリ・バレリ」

ナなんだ。たのむ」

と強く云われると、もう何も云えなかつた。このバレエがはじまると、教場のなかには、異様な熱気が、一杯にこもるのが常だった。

皆んな、沈黙がちになり、興奮に、眼をうるませて、お互いに顔を見合わさいような、不思議な、状態になる。そのなかで、からんだり、廻ったり、離れたりする西村を中心とする、はげしい白鳥の精たちの踊りだけが生きているのだった。

西村の軀は、男性そのものののように、たくましかった。上海がえりという説もあつたが、本当の彼の前身はだれも知らなかつた。時々英語の発音を間違えたりしたが、それでも押しの強い、タフな彼の性格は、一流の政治力で、この教場を経営していた。彼の踊りは荒つぽく、指導の方法も、暴君のようだったが、それが、また、若い娘たちにとつて、不思議な魅力となるらしく、陰では悪口を云つても、彼の前へ出ると、娘たちは、まるで自我を失つたように、彼の云う通りに従い、彼の周囲に、若い、華やかな弟子は、たえなかつた。

しんとした教場のなかに、また一きわ音楽だけが、哀しいほどの美しさで高くなつて行つた。

四

それから、しばらく練習してから、やつと解放され、シャワーをあびて汗をおとした由美たちは、帰途についた。幸子と一緒にかえる約束だったが、幸子は、出来が悪いと、西村に云われて、特別練習のため、ひとりだけ、とのこされた。

時々、ひとりづつ、特別練習にのこされる習慣があるので、由美は、別にうたがわず、帰りかけたのだが、——途中で、ふと、ロッカーに、さいふを忘れた事を思い出して、とりにかえつた。

門は、あいていたが、玄関は鍵がかゝつていた。それでも、教場の窓からは、ぼんやり

あかりがもれていた。由美は、先生に、あけてもらおうと思つて、教場の窓の下へ行つたが、カーテンのすきまから、なかをのぞいた彼女は、ハッと息をのんだ。そこでは、驚ろくべき光景が、ひろげられていた。

はじめに見えたのは、向うむきになつた西村の大きな肩だった。彼は、不自然な姿勢で、ソファの前にかゝんでいた。まだ、さつきのまゝの金色のパンツ一枚だった。

しかし、それだけなら、由美は、声をのみはしなかつた。彼の肩の上の方に、一本の足……トウ・シューズをはいた一本の足が、天井をむいて、のばされているのを同時に見たのだ。

白い、すんなりとしたその足は、ソファの向うから、延ばされたひもに、ふくらはぎのあたりを、ゆわかれていた。そのひもは、ソファのうしろの椅子の背かなにかに、むすば



れているらしい。

彼は、かきこんで、しきりに、何か、その足の主に云っているようだった。態度からからかっているような様子が見えた。

由美は、それを見て、全身が、ひえて行くのを感じた。そのトウ・シェーズに見おぼえがあつたからだ。……それは、まぎれもなく幸子のものではな
いか。

……彼が、ちよつと身をづらした。すると、あゝ、白鳥の、オーガンディの華やかな衣裳が、彼のかたの向うにのぞけたのだ。そして、次に、全身が！やつぱりそれは幸子だった。——由美は、ごくりと生つばを呑み込み、異状なショックに、あやうく倒れそうになつた。

なんと云う姿であろう！ 白鳥の衣裳をつけたまゝの、幸子が、両手をうしろでしばられ、片つ方の、肩紐を落され、乳房が、ぶつくり顔を出したまゝ、……それより、何より、何とあられもない、肢のひろげ様だろうか。もともと、巾一寸ほどの股の布が、

